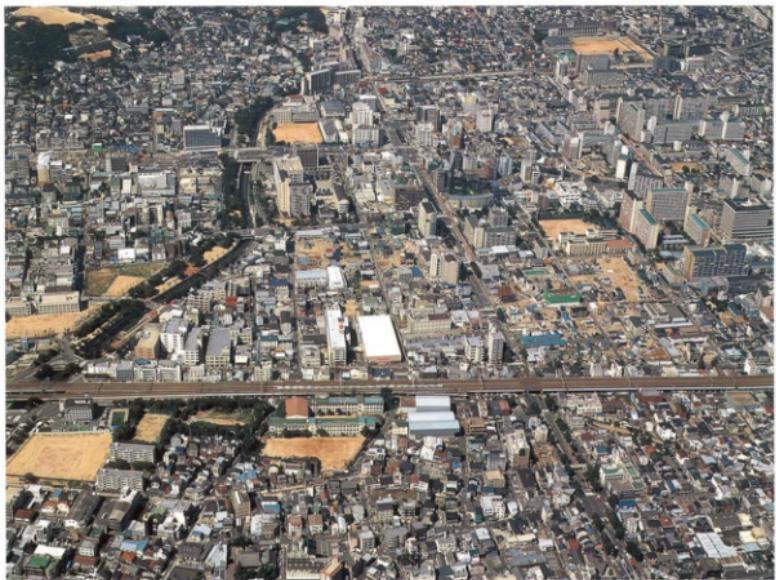


御 蔵 遺 跡

第5・7・11~13・18~22・24・28・29・
31・33~36・39・41・43次発掘調査報告書

御菅西地区震災復興土地区画整理事業地内における
民間事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003年3月
神戸市教育委員会



御藏造跡遠景（航空写真南から）



調査地遠景（航空写真垂直・上が西）

カラー図版2



第7次調査出土遺物集合写真



第21次調査土器満まり出土遺物集合写真

御 蔵 遺 跡

第5・7・11~13・18~22・24・28・29・
31・33~36・39・41・43次発掘調査報告書

御菅西地区震災復興土地区画整理事業地内における
民間事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003年3月
神戸市教育委員会

序

阪神・淡路大震災の発生から、早くも 8 年という歳月が過ぎました。被災地の街並みもその美しい景観を取り戻しつつありますが、被災された人々の苦しみや悲しみは、いまだに消えることはありません。御蔵遺跡の所在する長田区御蔵通一帯も、甚大な被害を受けた地域の一つです。このような事態にもかかわらず、地元の方々のご協力とご理解をいただき、発掘調査を無事遂行し、その成果を本書にまとめることができました。

本書が復興の記録として、また、地域の歴史的遺産の資料として広く活用され、復興事業ならびに埋蔵文化財保護へのご理解を深めていただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および本書の刊行にご協力いただいた方々ならびに関係諸機関に深く感謝いたします。

平成 15 年 3 月
神戸市教育委員会
教育長 西川和機

例　　言

1. 本書は神戸市長田区御蔵通5・6丁目において、神戸国際港都建設事業御苔西地区震災復興土地区画整理事業に伴い、国庫補助金を受けて平成10年度から平成12年度にかけて実施した御蔵遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 本書に記載されている各調査の調査次数は、調査時には別の次数で呼称していたが、本報告によって訂正したものである。調査時の旧次数と本書の新次数の対照については、第1章第2節を参照されたい。なお、遺物・図面・写真等は、旧次数を記載して保管している。
3. 調査は阪神・淡路大震災の復興事業に伴う事前調査で、神戸市教育委員会が実施したものである。また、発掘調査事業の円滑な進捗を図るため、平成10年度の調査事業については、兵庫県教育委員会より復興支援職員（復興調査班）の派遣を受けた。なお、支援を受けた調査（第8～10次）については既に報告書刊行済である。
4. 調査の組織体制および各調査の期間、面積等の詳細については、第1章第2節、第3節に記した。
5. 本書の作成は、各調査の担当者が分担執筆し、富山直人・川上厚志が編集した。また、木製品、金属製品、獸骨（動物遺体）に関する項目については、千種 浩、中村大介が執筆した。
6. 本調査で出土した墨書のある木製品については奈良文化財研究所 山中敏史 氏にご教示いただいた。また、動物遺体については、同研究所 松井 章 氏、藤田正勝 氏にご教示いただいた。
7. 各調査の遺構写真は、各調査担当者が撮影した。出土遺物写真の撮影については、奈良文化財研究所 牛嶋 茂 氏のご指導を得た。また、撮影は 西大寺フォト 杉本和樹氏が行った。
8. 第5章の自然科学分析については、（株）パリノ・サーヴェイに委託した。
9. 本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の25,000分の1の地形図「神戸首部」・「神戸南部」を、詳細位置図は、神戸市発行の2,500分の1の地形図「大橋」の一部を使用した。
10. 本書で使用した標高は、東京湾平均海水準（T.P.）で表示した。また、方位は座標北を示す。
11. 本書に掲載した資料は、神戸市教育委員会の管理のもと、神戸市埋蔵文化財センターにて保管している。今後において広く活用されたい。
12. 現地での発掘調査の実施にあたっては、地元の方々をはじめ、神戸市都市計画局や関係諸機関に多大なるご協力いただいた。末筆ながら感謝の意を表します。

目 次

第1章 御藏遺跡	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の実施状況	2
第3節 調査組織	4
第4節 御藏遺跡の立地	6
第5節 御藏遺跡の歴史的環境と周辺の遺跡	7
第2章 5丁目北地区の調査	11
第1節 調査区の設定	11
第2節 調査の概要	11
第3節 第5・7次調査	12
第4節 第12次調査	22
第5節 第19次調査	34
第6節 第22次調査	40
第7節 第24次調査	42
第8節 第43次調査	43
第3章 5丁目南地区の調査	45
第1節 調査区の設定	45
第2節 調査の概要	45
第3節 第21次調査	46
第4節 第29次調査	56
第5節 第34・35・36-1・36-2・41次調査	57
第6節 第14-9次調査出土の墨書きのある曲物について	83
第4章 6丁目北地区の調査	85
第1節 調査区の設定	85
第2節 調査の概要	85
第3節 第13次調査	87
第4節 第18・20次調査	93
第5節 第31・33次調査	107
第6節 第39次調査	113
第5章 6丁目南区の調査	119
第1節 調査区の設定	119
第2節 調査の概要	120
第3節 第11次調査	121
第4節 第28次調査	125
第6章 御藏遺跡から出土した木製品等の樹種	127
第7章 まとめ	137
第1節 六甲山南麓地域西部における弥生時代後期～古墳時代前期の集落形態と動向	135
第2節 御藏遺跡出土の弥生時代後期～古墳時代前期の土器について	136

挿 図

第1図	御賀遺跡位置図	1	第47図	第21次調査土器窪まり遺物出土状況	47
第2図	調査地位図	2	第48図	第21次調査土器窪まり山土遺物実測図(1)	48
第3図	調査地区配置図	3	第49図	第21次調査土器窪まり出土遺物実測図(2)	49
第4図	地形分類図	6	第50図	第21次調査土器窪まり出土遺物実測図(3)	50
第5図	周辺の主要道路	8	第51図	第21次調査包含層出土遺物実測図	53
第6図	5丁目北地区測量区位置図	11	第52図	第21次調査出土鉄製品実測図	54
第7図	第5・7・7次調査区位置図	12	第53図	第29次調査E平面・土層断面図	56
第8図	調査区断面図	12	第54図	調査区配置図	57
第9図	第5・7・7次遺構平面図	13	第55図	第2遺構面平面図	57
第10図	第7次調査土器窪まり出土遺物実測図(1)	14	第56図	SX34202出土遺物実測図(1)	59
第11図	第7次調査土器窪まり出土遺物実測図(2)	15	第57図	SX34202出土遺物実測図(2)	60
第12図	第7次調査土器窪まり出土遺物実測図(3)	16	第58図	SX34202出土遺物実測図(3)	61
第13図	第7次調査土器窪まり出土遺物実測図(4)	17	第59図	第1遺構面平面図	62
第14図	第5次調査平安時代包含層出土遺物実測図	21	第60図	SB34201出土遺物実測図	63
第15図	調査対象地区的配置	22	第61図	SB34202平面及び断面図	63
第16図	調査区E層断面図	22	第62図	SB34203平面及び断面図	64
第17図	第2遺構面平面図	23	第63図	SD34204平面及び断面図	65
第18図	SX12301出土遺物実測図	23	第64図	SB34205平面及び断面図	65
第19図	SX12302遺物検出状況平面図	24	第65図	SB34206平面及び断面図	66
第20図	SX12302出土遺物実測図(1)	25	第66図	SB34202～34205出土遺物実測図	67
第21図	SX12302出土遺物実測図(2)	26	第67図	SP34201平面及び断面図	67
第22図	SX12201出土遺物実測図	28	第68図	SP34201出土遺物実測図	68
第23図	第2遺構面の遺構に付かない遺物実測図	29	第69図	SP34202出土遺物実測図	68
第24図	第1遺構面平面図	29	第70図	SP34203出土遺物実測図	68
第25図	SP12202・12211	30	第71図	ピット出土遺物実測図	69
第26図	SP12201	30	第72図	SB34207平面及び断面図	69
第27図	SD12204・12208・12211・12213出土遺物実測図	30	第73図	SB34208平面及び断面図	70
第28図	SX12202・12203出土遺物実測図	30	第74図	SP34208出土遺物実測図	70
第29図	SB12201	31	第75図	SB34209平面及び断面図	71
第30図	SB12201出土遺物実測図	32	第76図	SK34201出土遺物実測図	71
第31図	SB12201-P5出土木製品実測図	32	第77図	SK34202出土遺物実測図	71
第32図	第1遺構面の遺構に付かない遺物実測図	33	第78図	SE34101平面及び断面図	72
第33図	第19次調査位貫図	34	第79図	井戸枠平面及び断面図	74
第34図	第19次調査地土層断面図	34	第80図	井戸枠材実測図(1)	74
第35図	第19次調査地遺構平面図	35	第81図	井戸枠材実測図(2)	75
第36図	土器群遺物実測図(1)	36	第82図	井戸枠材実測図(3)	76
第37図	土器群遺物実測図(2)	37	第83図	井戸枠材実測図(4)	77
第38図	SD19002及び洪水砂層出土遺物実測図	39	第84図	SE34101出土遺物実測図(1)	79
第39図	調査区十肩柱状断面図	40	第85図	SE34101出土遺物実測図(2)	80
第40図	調査区平面図	41	第86図	SE34101出土木製品実測図	80
第41図	遺構平面図	42	第87図	SP34101出土遺物実測図	80
第42図	調査区平面図	43	第88図	34次～36次調査出土金属性製品実測図	81
第43図	西壁上層断面図	43	第89図	14・9次出土物実測図	83
第44図	第43次測量出土遺物実測図	44	第90図	6丁目北地区測量区位置図	85
第45図	5丁目南地区調査区位置図	45	第91図	6丁目北地区遺構集成図	86
第46図	第21次調査平面図及び断面図	46	第92図	第13次調査上層断面図	87

第93図	第13次調査遺構平面図	87	第121図	南西壁上層断面図	108
第94図	SK13201土層断面図	88	第122図	北西壁上層断面図	108
第95図	SK13201出土遺物実測図	88	第123図	第5遺構面平面図	109
第96図	古墳時代から奈良時代の包含層出土遺物実測図	88	第124図	第5遺構面自然流路出土遺物実測図	109
第97図	奈良時代～平安時代の包含層出土遺物実測図	89	第125図	第4遺構面平面図	109
第98図	SE13101平面及び断面図	90	第126図	7a層遺物出土状況	110
第99図	SE13101出土遺物実測図	90	第127図	7a層出土遺物実測図	110
第100図	SE13101井戸棒材及び出土木製品実測図	91	第128図	第3遺構面出土遺物実測図	110
第101図	中世包含層出土遺物実測図	92	第129図	第3遺構面出土火打ち石実測図	111
第102図	調査対象地区的配置図	93	第130図	第1遺構面平面図	111
第103図	調査区西壁上層断面図	93	第131図	鉄製品実測図	112
第104図	第4遺構面平面図	94	第132図	遺構平面及び断面図	113
第105図	第4遺構面出土遺物実測図	95	第133図	奈良～平安時代遺構平面図	115
第106図	第3遺構面平面図	96	第134図	第2遺構面包含層出土遺物実測図	116
第107図	第3遺構面遺構構造図	97	第135図	第1遺構面出土遺物実測図	118
第108図	SK18201出土遺物実測図	98	第136図	6丁目南地区土層模式図	119
第109図	SK18203出土遺物実測図	98	第137図	6丁目南地区土層模式図	119
第110図	SK18209井戸有孔土錠実測図	99	第138図	6丁目南地区遺構集成図	120
第111図	第3遺構面ピット出土遺物実測図	99	第139図	第11次調査区位置図	121
第112図	第3遺構面包含層出土遺物実測図	99	第140図	第11次調査区平面図	122
第113図	第2遺構面平面図	100	第141図	調査区土層堆積状況模式図	123
第114図	SD18202出土遺物実測図	101	第142図	第11次調査区出土遺物実測図	124
第115図	第2遺構面ピット出土遺物実測図	101	第143図	第28次調査土層断面図	125
第116図	第2遺構面包含層出土遺物実測図	103	第144図	包含層出土遺物実測図	125
第117図	第1遺構面平面図	104	第145図	遺構平面図	126
第118図	第1遺構面包含層出土遺物実測図	105	第146図	漆川～妙法寺川流域の古墳時代初頭の集落遺跡	135
第119図	鉄製品実測図	106	第147図	漆川～妙法寺川流域の古墳時代前葉の集落の動向	137
第120図	第6遺構面平面図	107			

表

表 1	本報告の調査一覧表	3	表 9	第21次調査上器部より出土遺物観察表(1)	51
表 2	第7次調査土器満まり出土遺物観察表(1)	18	表10	第21次調査土器満まり出土遺物観察表(2)	52
表 3	第7次調査土器満まり出土遺物観察表(2)	19	表11	御城遺跡の樹種同定結果	128
表 4	第7次調査土器満まり出土遺物観察表(3)	20	表12	時代別・用途別種類構成	129
表 5	SX12302出土上器観察表(1)	27	表13	漆川～妙法寺川流域の集落変遷	136
表 6	SX12302出土上器観察表(2)	28			
表 7	第19次調査出土遺物観察表	38			
表 8	第19次調査出土遺物観察表	39			

挿 図 写 真

挿図写真 1	調査前の状況	40	挿図写真 4	第1遺構面調査作業風景	111
挿図写真 2	調査区北壁の土層堆積状況	41	挿図写真 5	木材(1)	133
挿図写真 3	第6遺構面調査作業風景	107	挿図写真 6	木材(2)	134

カラ一図版

カラー図版1 御蔵遺跡遠景（航空写真南から）
調査地遠景（航空写真垂直・上が西）

カラー図版2 第7次調査出土遺物集合写真
第21次調査土器溜まり出土遺物集合写真

図版目次

国版1	調査地周辺状況（平成10年撮影）東から	国版21	SD12204・12208・12211・12213 SX12202・12203・SB12201出土の遺物
	調査地周辺状況（平成10年撮影）西から	国版22	土器群遺物
国版2	第5・7次調査	国版23	土器群遺物
	第5次調査区全景（南東から）	国版24	SD19302及び洪水砂層出土遺物 第21・29次調査
	SB06201・05202全景（南から）		第21次調査遺物出土状況（南から）
	第7次調査区全景（南東から）		第21次調査土器溜まり（南から）
国版3	第12次調査		第29次調査区全景（北東から）
	1区全景（南西から）	国版25	第34次調査
	2区第2造構面全景（西から）		第1造構面北側全景（西から）
国版4	SX12301遺物出土状況（東から）		第1造構面南側全景（東から）
	SX12302近景（北から）		第2造構面南側全景（西から）
国版5	2区第1造構面全景（西から）	国版26	SB34202全景（東から） SB34202-P3上層断面（南から） SP34201遺物出土状況（南から）
国版6	SB12201近景（南から）	国版27	SB34203全景（北から） SB34203-P2土層断面（東から） SB34203-P5上層断面（南から）
	SB12201-P1断面	国版28	SE34101井戸枠検出状況（西から） SE34101断面状況〔上層〕（西から） SE34101井戸枠全景〔上層〕（西から）
	SB12201-P2断面	国版29	第21次調査 上器溜まり出土遺物
	SB12201-P3断面	国版30	土器溜まり出土遺物
	SB12201-P4断面	国版31	土器溜まり出土遺物
国版7	SB12201-P5断面	国版32	土器溜まり出土遺物・包含層出土遺物
	SB12201-P5壁際	国版33	第34次調査 SX34202出土遺物
	SB12201-P6断面	国版34	SX34202出土遺物
	SB12201-P7断面	国版35	井戸枠材
	SB12201-P8断面	国版36	井戸枠材
	SB12201-P9断面	国版37	井戸枠材
国版8	第22・24・43次調査	国版38	井戸枠材・SE34101出土遺物
	第22次調査地全景（北東から）	国版39	SE34101出土遺物
	第24次調査地全景（南から）	国版40	SE34101出土遺物
	第43次調査地全景（南西から）	国版41	SE34101出土遺物・動物遺体
	第43次調査出土遺物	国版42	SX34202出土遺物・出土獸骨
国版9	第7次調査 土器溜まり出土遺物	国版43	動物遺体
国版10	土器溜まり出土遺物	国版44	第13次調査 調査地全景（北東から）
国版11	土器溜まり出土遺物		SE13101遺物出土状況（南東から）
国版12	土器溜まり出土遺物		SE13101完掘状況（東から）
国版13	土器溜まり出土遺物		
国版14	土器溜まり出土遺物		
国版15	第5・7次調査 土器溜まり出土遺物		
	第5次調査包含層出土遺物		
国版16	SX12301出土の土器		
国版17	SX12302出土の上器(1)		
国版18	SX12302出土の土器(2)		
国版19	SX12302出土の土器(3)		
国版20	SX12302出土の土器(4)		

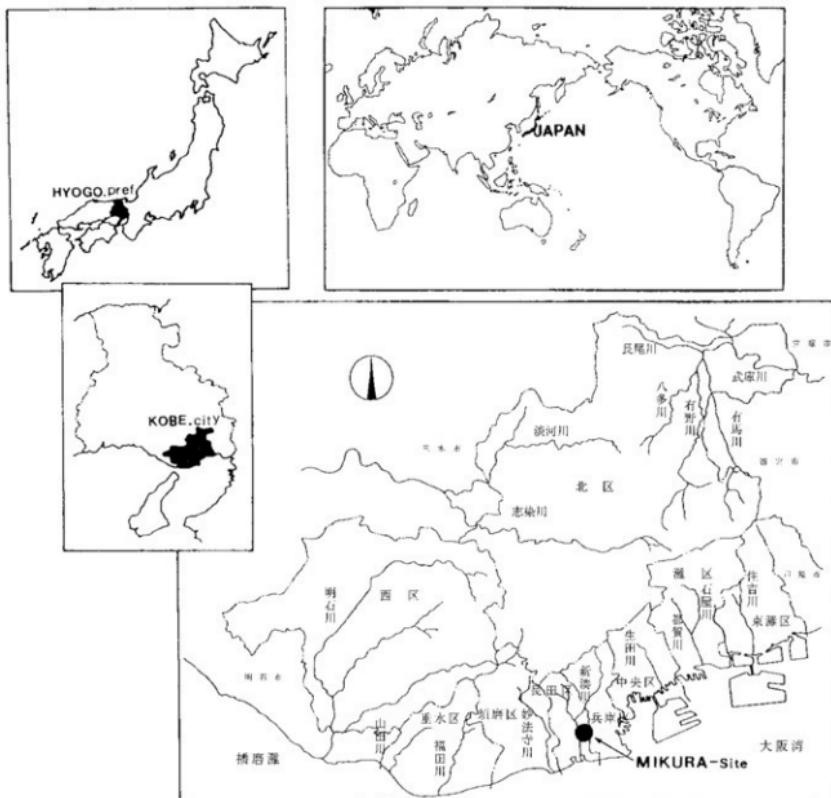
- 図版45 第18・20次調査
第18次調査第3 道構面全景（北西から）
第18次調査第2 道構面全景（北西から）
第20次調査第4 道構面SB18201（東から）
- 図版46 第3 道構面（東から）・第2 道構面（西から）
- 図版47 第31・33次調査
第4 道構面（北西から）
第4 道構面遺物出土状況（北東から）
第5 道構面（北西から）
7c層遺物出土状況（北から）
- 図版48 第31・33次調査
第6 道構面（北西から）
第6 道構面（東から）
南西壁土壌断面（東から）
- 図版49 第39次調査
第3 道構面西半全景（南東から）
第3 道構面東半全景（南東から）
- 図版50 第2 道構面西半全景（南から）
遺物包含層出土遺物
- 図版51 第13次調査
古墳時代から奈良時代遺物包含層出土遺物
奈良時代から平安時代遺物包含層出土遺物
- 図版52 SK13201出土馬齒・SE13101出土木材・本製品
中世包含層出土遺物
- 図版53 第4 道構面被出時出土遺物・SD18209出土土馬
溝・ピット出土遺物（第4・3 道構面）
- 図版54 第18・20次調査
第3 道構面道構内出土遺物
SK18203出土遺物
- 図版55 第4・3 道構面出土遺物
第3 道構面包含層出土遺物
第2 道構面包含層出土遺物
- 図版56 第2 道構面包含層出土遺物・SD18202出土遺物
第1 道構面包含層出土遺物・動物遺体
- 図版57 第31・33次調査
第5 道構面自然流路出土遺物・7a 層出土遺物
第3 道構面出土遺物・火打ち石
- 図版58 第3 道構面出土遺物
- 図版59 第28次調査 調査区全景（北西から）
包含層出土遺物
- 図版60 金属遺物
- 図版61 金属遺物X線写真
- 図版62 出土袋及び参考資料写真・X線写真

第1章 御藏遺跡

第1節 調査の経緯

御蔵遺跡の所在する長田区御蔵通一帯は、神戸港の原点と考えられる「大輪田泊」（現在の兵庫津遺跡）に程近く、古来より人々が行き交い、生活が営まれ、現在の神戸の礎とも言える地域の一つである。歴史の深いこの地域に、「御苔西地区震災復興土地区画整理事業」が計画され、早期の復興および安全で快適な市街地づくりを目指してのプロジェクトが始まった。区画整理事業では、区画道路および歩行者専用道路が設置された後に、区画道路内の家屋の建築が行われ、整然とした街並みに生まれ変わろうとしている。

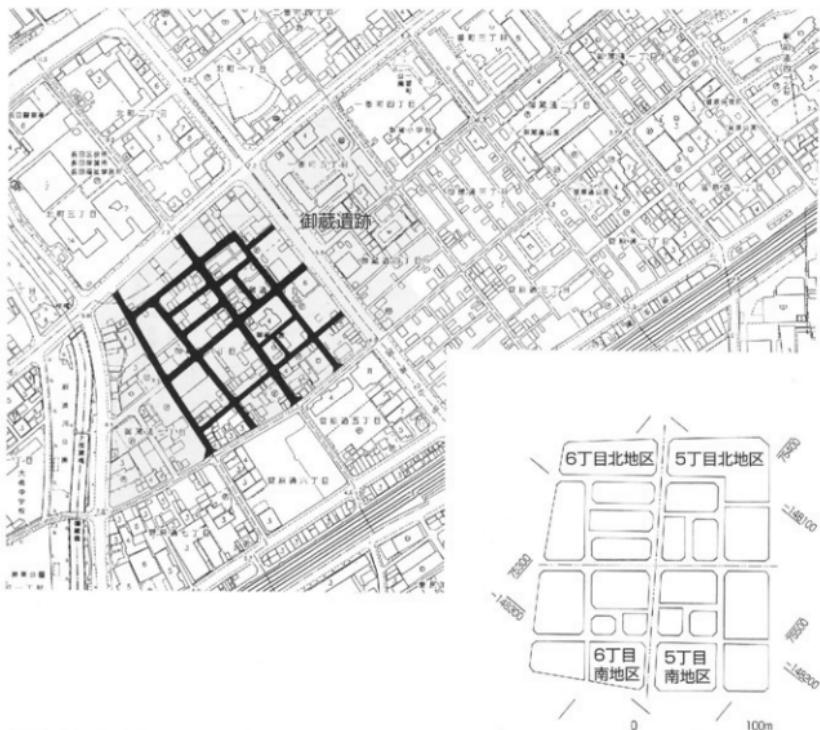
本書は区画街路内（御蔵通5・6丁目街区内）における家屋または社屋の建築予定地のうち、工事が埋蔵文化財に影響を及ぼす箇所について実施した発掘調査に関する報告書である。



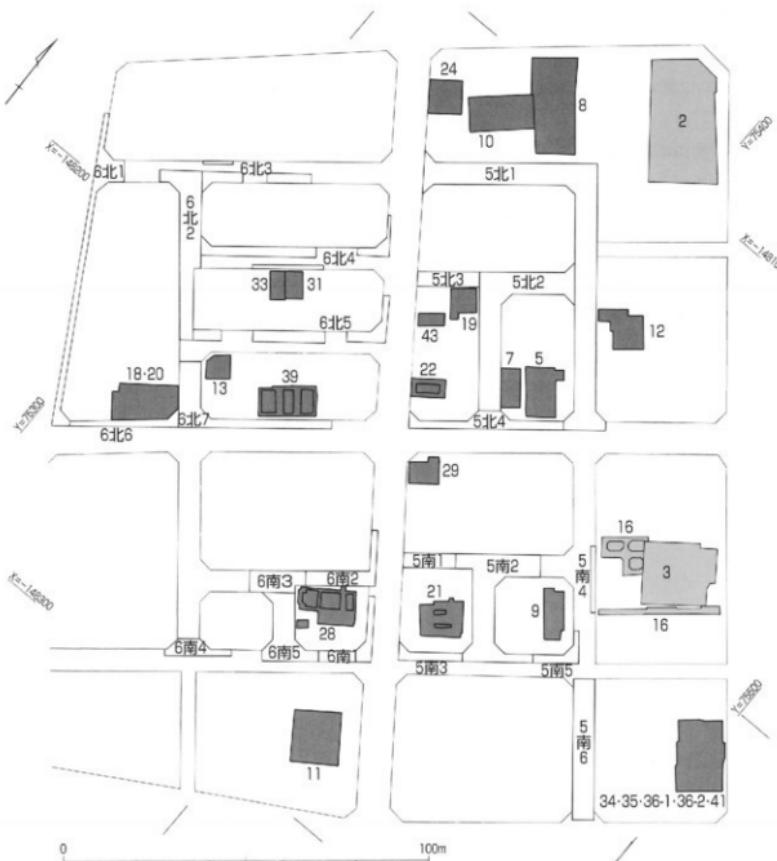
第1図 御蔵遺跡位置図

第2節 調査の実施状況

御薗西地区震災復興土地区画整理事業に伴う発掘調査は、平成10年7月から開始し、現在も継続中である。これまで土地区画整理事業の進捗に併せて調査を実施してきたが、年々調査件数（調査地点）の増大によって、各調査地点の詳細なデータがかなり錯綜しているようである。本書では既往の調査のものを含めた成果をできるかぎり整理した上で、基本データ化に努めた。また、調査次数については、先述の整理作業の一環から新次数を用いてその概要の報告を行うこととする。調査次数等の詳細は表1に示すとおりである。本書中の「地区」、「調査区」については、すでに刊行されている「御蔵遺跡第4・6・14・32次発掘調査報告書」（2001神戸市教育委員会）⁽¹⁾に準ずるものとし、現地の行政区画にそって、「5丁目北地区」、「5丁目南地区」、「6丁目北地区」、「6丁目南地区」の4つの地区に分けて報告する。なお、各調査地の位置については、第3図に新次数（数字のみ）で示している。ただし、区画街路部分の調査地については、「6北5」あるいは「5南3」などの略称を用いており、「6北5」は「6丁目北地区第5調査区」を、「5南3」は「5丁目南地区第3調査区」をそれぞれ表し、先述の既刊報告書に準じた地区割表示である。



第2図 調査地位置図



第3図 調査地区配置図

調査次数	旧田数	地区名	調査年度	調査担当者	調査終了日	調査面積	調査担当者
5	5	5丁目南	98(H10)	19980728	19980809	140m ²	童山
7	7	5丁目北	98(H10)	19980902	19980911	60m ²	西園
11	14	6丁目北	98(H10)	19981109	19981124	170m ²	石島
12	16	5丁目北	98(H10)	19990125	19990320	95m ²	山本
13	18	6丁目北	98(H10)	19990303	19990319	70m ²	童山
18	24	6丁目北	99(H11)	19990706	19990726	18m ²	阿部
19	25	5丁目北	99(H11)	19990810	19990830	55m ²	池田
20	24-2	6丁目北	99(H11)	19990811	19990906	120m ²	川上
21	26	5丁目南	99(H11)	19990903	19990930	100m ²	川上
22	27	5丁目北	99(H11)	19990908	19990913	24m ²	谷
24	29	5丁目北	99(H11)	19991004	19991007	72m ²	川上

表1 本報告の調査一覧表

調査次数	旧田数	地区名	調査年度	調査担当者	調査開始日	調査終了日	調査面積	調査担当者
28	33	6丁目南	99(H11)	19991102	19991119	100m ²	童山	
29	34	5丁目南	99(H11)	19991116	19991118	64m ²	佐伯	
31	36	6丁目北	99(H11)	20000218	20000229	42m ²	黒田	
33	33	6丁目北	00(H12)	20000406	20000421	30m ²	須藤	
34	34	5丁目南	00(H12)	20000410	20000516	62m ²	内藤	
35	35	5丁目南	00(H12)	20000410	20000516	68m ²	内藤	
36-1	36-1	5丁目南	00(H12)	20000410	20000516	40m ²	内藤	
36-2	36-2	5丁目南	00(H12)	20000529	20001019	28m ²	井尻	
39	39	6丁目北	00(H12)	20000801	20000810	70m ²	阿部	
41	41	5丁目南	00(H12)	20000929	20001019	50m ²	井尻	
43	43	5丁目北	00(H12)	20010326	20010329	30m ²	阿部	

第3節 調査組織

発掘調査は神戸市文化財保護審議会の指導を得て、下記の調査組織によって実施した。

なお、平成12年度の発掘調査業務については、(財)神戸市体育協会に委託した。

・平成10年度 (第5・7・8・9・10・11・12・13次調査)

神戸市文化財保護審議会委員 史跡・考古担当

榎上 重光 前神戸女子短期大学教授

工業 普通 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長

和田 晴吾 立命館大学文学部教授

教育委員会事務局

教育長	鞍本 昌男	調査担当学芸員	西岡 誠司
-----	-------	---------	-------

社会教育部長	矢野 栄一郎	同	山本 雅和
--------	--------	---	-------

文化財課長	大勝 俊一	同	富山 直人
-------	-------	---	-------

社会教育部主幹	奥田 哲通	同	石鳥 三和
---------	-------	---	-------

埋蔵文化財係長	渡辺 伸行	兵庫県復興支援	山田 清朝
---------	-------	---------	-------

文化財課主査	丹治 康明	同	山上 雅弘
--------	-------	---	-------

同	丸山 潔	同	岡本 一秀
---	------	---	-------

同	菅本 宏明	同	高木 芳史
---	-------	---	-------

事務担当学芸員	安田 澄	遺物整理担当学芸員	黒田 勝正
---------	------	-----------	-------

同	東 喜代秀	保存科学担当学芸員	千種 浩
---	-------	-----------	------

同	井尻 格		
---	------	--	--

・平成11年度 (第18・19・20・21・22・24・28・29・31次調査)

神戸市文化財保護審議会委員 史跡・考古担当

榎上 重光 前神戸女子短期大学教授

工業 普通 ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長

和田 晴吾 立命館大学文学部教授

教育委員会事務局

教育長	鞍本 昌男	調査担当学芸員	黒田 勝正
-----	-------	---------	-------

社会教育部長	水田 裕次	同	谷 正俊
--------	-------	---	------

文化財課長	大勝 俊一	同	富山 直人
-------	-------	---	-------

埋蔵文化財係長	渡辺 伸行	同	佐伯 二郎
---------	-------	---	-------

文化財課主査	丹治 康明	同	池田 肇
--------	-------	---	------

同	丸山 潔	同	川上 厚志
---	------	---	-------

同	菅本 宏明	同	阿部 功
---	-------	---	------

事務担当学芸員	東 喜代秀	遺物整理担当学芸員	平田 朋子
---------	-------	-----------	-------

同	井尻 格	保存科学担当学芸員	千種 浩
---	------	-----------	------

同	藤井 太郎	同	中村 大介
---	-------	---	-------

・平成12年度 (第33・34・35・36-1・36-2・39・41・43次調査)

神戸市文化財保護審議会委員 史跡・考古担当

榎上 重光 前神戸女子短期大学教授

工渠 善通 ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長

和田 晴吾 立命館大学文学部教授

教育委員会事務局

教育長 木村 良一 保存科学担当学芸員 千種 浩

社会教育部長 水田 裕次 同 中村 大介

文化財課長 大勝 俊一

社会教育部主幹 渡辺 伸行 (財)神戸市体育協会

(埋蔵文化財指導係長事務取扱) 総務課長 前田 豊春

埋蔵文化財調査係長 丹治 康明 事業係長 瀬田 吉則

文化財課主査 宮本 郁雄 事業係主査(兼務) 丸山 潔

同 丸山 潔 同(兼務) 菅本 宏明

同 菅本 宏明 事務担当学芸員 斎木 巍

事務担当学芸員 西岡 誠司 調査担当学芸員 須藤 宏

同 山口 英正 同 内藤 俊哉

同 東 嘉代秀 同 井尻 格

同 橋詰 清孝 同 阿部 功

遺物整理担当学芸員 谷 正俊

・平成13年度 (遺物整理、報告書作成)

神戸市文化財保護審議会委員 史跡・考古担当

榎上 重光 前神戸女子短期大学教授

工渠 善通 ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長

和田 晴吾 立命館大学文学部教授

教育委員会事務局

教育長 木村 良一

社会教育部長 岩畔 法夫

文化財課長 桑原 泰豊

社会教育部主幹(埋蔵文化財指導係長事務取扱) 渡辺 伸行

埋蔵文化財調査係長 丹治 康明

文化財課主査 宮本 郁雄 丸山 潔 菅本 宏明 千種 浩

事務担当学芸員 口野 博史 西岡 誠司 斎木 巍 橋詰 清孝

遺物整理担当学芸員 黒田 恭正 保存科学担当学芸員 中村 大介

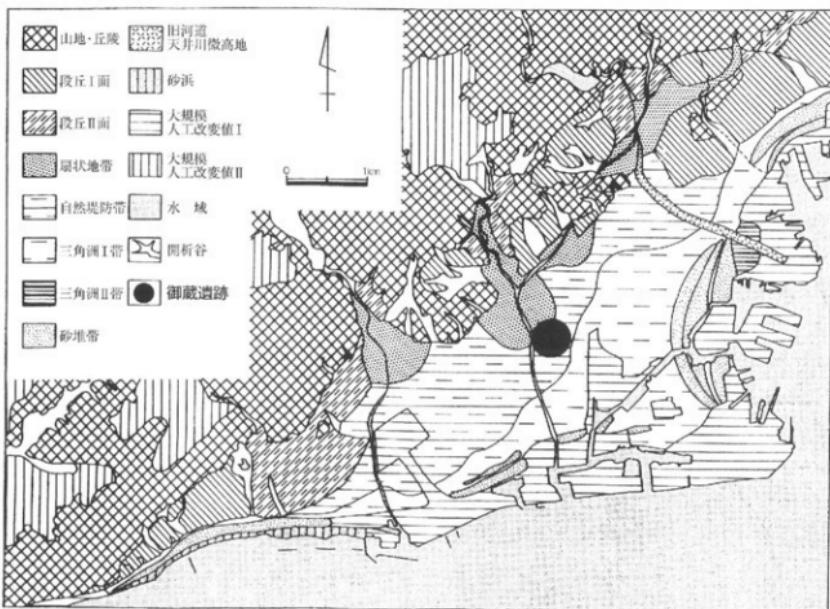
報告書作成担当学芸員 黒田 恭正 西岡 誠司 谷 正俊 山本 雅和 須藤 宏

富山 直人 佐伯 二郎 池田 稔 内藤 俊哉 井尻 格

川上 厚志 石島 三和 阿部 功

第4節 御藏遺跡の立地

遺跡の所在する御藏通付近は、地理学的には西方を流れる新湊川（旧蘿藻川）の堆積作用によって形成された自然堤防の微高地および後背湿地に位置すると考えられている。神戸市域の沿海部にあたる六甲山南麓地域は、土地と海面との落差が大きく、しかも六甲山系が土砂の流出しやすい土壤であるため、山麓部においての扇状地の発達が顕著であるが、湊川流域から妙法寺川流域にかけての平野部では、これとは逆条件を示しており、扇状地の発達が悪く、相対的に低湿な土壤を呈するようである。⁽²⁾ 第4図によれば、図の右上あたり（中央区付近）と左下あたり（須磨区西部付近）では、扇状地あるいは段丘の発達が見られ、低湿地部分が少ないのでに対し、湊川流域から妙法寺川流域にかけての地域（兵庫区から須磨区東部あたり）の平野部では、低湿な沖積地の範囲がかなり広いことがうかがえる。御藏遺跡はこのような低湿地帯の縁辺部に位置し、また、河川に近接するため、土砂の堆積作用もこの地域においては比較的顕著な場所であったことがうかがえる。今回の調査区域内にも沖積微高地と低湿地とが存在していたことが層序によって確認されており、このような地勢が集落形成や土地利用などに大きな影響を及ぼしていたことが明らかになっている。



第4図 地形分類図

〔高橋学「戎町遺跡の地形環境」「戎町遺跡第1次発掘調査概報」所収を一部改変〕

第5節 御蔵遺跡の歴史的環境と周辺の遺跡

御蔵遺跡は縄文時代の終り頃に人々が住みはじめ、その後、弥生時代、古墳時代、飛鳥時代、奈良時代、平安時代から中世にかけて連続と営まれた集落遺跡であることが、今までの数次にわたる調査で明らかになっている。以下、周辺の主要な遺跡とともに歴史的環境について略述する。

旧石器・	兵庫区の会下山遺跡で、旧石器時代のナイフ形石器が採集されているものの、同時代の遺構が検出された事例は、周辺地域では見当たらない。
縄文時代	縄文時代の遺物は、この御蔵遺跡をはじめ、長田区とその周辺地域でも、堆積層や自然流路中より頻繁に出上するものの、遺構が検出された事例は楠・荒田町遺跡、長田神社境内遺跡、大手町遺跡のみで、楠・荒田町遺跡が後期、長田神社境内遺跡と大手町遺跡が晚期にそれぞれ属すると考えられている。
弥生時代	縄文時代晩期末から弥生時代前期にかけての時期に、この地域にも大規模な集落が出現していく。環濠をもつ集落として名高い大開遺跡がその代表例である。その他、戎町遺跡や楠・荒田町遺跡などが挙げられる。
前・中期	弥生時代中期になると、集落の数が増大する。先述した戎町遺跡や楠・荒田町遺跡においても、集落として最も盛行する時期である。その他、大手町遺跡、大田町遺跡、千歳遺跡、長田南遺跡など、近年の発掘調査等で同時代の遺構・遺物が確認された事例が見られる。神戸市域の東灘区から須磨区にかけての六甲山南麓地帯と呼称されている地域では、同時期の集落遺跡は多くみられるものの、御蔵遺跡の所在する新湊川（旧刈薙川）流域では比較的少ないのが特徴である。
弥生時代後期～	新湊川（旧刈薙川）流域で集落の増加が顕著にみられるのは、弥生時代後期以降のことである。今回報告する御蔵遺跡においても最初の盛行期にあたる時期である。北側に所在する長田神社境内遺跡、御船遺跡、上沢遺跡、五番町遺跡、三番町遺跡、長田南遺跡、新湊川を挟んだ西側に所在する神楽遺跡などが挙げられる。さらに、西方の妙法寺川流域では、松野遺跡、戎町遺跡、大手町遺跡、鷹取町遺跡、若松町遺跡、千歳遺跡、大田町遺跡などが、また、東方の湊川流域では、近年発見された兵庫松本遺跡などが挙げられる。御蔵遺跡をはじめとするこれらの遺跡は、概ね弥生時代後期後半から古墳時代初頭（庄内式併行期）に属するものがほとんどである。同時期に続く布留式併行期（古墳時代前期）に入るとこの地域においても古墳が築造されるようになる。平野部を見下ろす丘陵上には首長墓と考えられる夢野丸山古墳、会下山二木松古墳、得能山古墳などが築造される。この布留式併行期（古墳時代前期）に属する集落遺跡としては、三番町遺跡、五番町遺跡、若松町遺跡、千歳遺跡、大田町遺跡などが挙げられるが、古墳時代初頭（庄内式併行期）のものに比べると、検出された遺構も少なく、出土遺物も少ない。また、御蔵遺跡においても同時期に属する遺構・遺物は極めて少ない。
古墳時代	古墳時代中期以降、この地域では再び集落が増大し、新湊川（旧刈薙川）の河口付近に、念仏山古墳が築造されるのも中期である。集落遺跡としては、「豪族居館」あるいは「神殿」とも考えられている建物群が検出された松野遺跡をはじめ、韓式系土器が多く出土した神楽遺跡、大壁造り建物が検出された上沢遺跡などが挙げられる。その他、中期か
中・後期	



第5図 周辺の主要遺跡

ら後期にかけての集落遺跡としては、新湊川（旧刈藻川）流域では三番町遺跡、湊川流域では柿・荒田町遺跡、湊川遺跡、妙法寺川流域では大田町遺跡、鷹取町遺跡などが挙げることができ、この地域が非常に盛行化する時期と言えよう。

飛鳥時代～

この地域における飛鳥時代に該当する遺跡は、他地域に比べて密度が高く、交通網が発達しはじめる同時期においては、交通の要衝であった可能性が考えられる。御藏遺跡においても掘立柱建物など、飛鳥時代に属する遺構・遺物が多い。その他、上沢遺跡、大田町遺跡などでも掘立柱建物等の遺構・遺物が確認されている。奈良時代前期、いわゆる白鳳期に該当する遺構・遺物は、発掘調査中に断片的には確認されているが、集落あるいは遺跡として明確に捉えられているものは、現在のところ存在しない。しかしながら上沢遺跡の北側に所在する室内遺跡は、白鳳期の寺院跡である「房王寺」の推定地と考えられており、今後の資料の蓄積によって諸相が明らかになるものと考えられる。

- 奈良時代後期～平安時代前期 陸上、海上の交通路がより充実する同時期においては、この地域の遺跡が増大するのと同時に様相も一変する。御藏遺跡においても再び盛行するのがこの時期で、検出造構、出土遺物とともに豊富である。その他、この時期の遺跡としては、上沢遺跡⁽³⁹⁾、神楽遺跡、水笠遺跡⁽⁴⁰⁾、大山町遺跡⁽⁴¹⁾、長田野田遺跡などが挙げられる。そして、古代官道の一つである山陽道がこの地域を通っていたと推定されており、大田町遺跡が古代山陽道の駅家の一つである「須磨駅家」の可能性が高く、また、上沢遺跡で検出された井戸の中から、正倉院御物に近似する銅鏡が出土することなど、官衙色の濃い遺跡が集中するのも大きな特徴である。
- 平安時代中期～中世 この時期に入るとさらに変化がみられる。土地の耕地化が進み、集落規模も拡大する的同时に、平安時代末期には平氏政権によって「大輪田泊」（現在の兵庫区和田岬付近・兵庫津遺跡）が修築されることにも伴って、同時期以降の遺跡数は増加する。御藏遺跡においても平安時代中期以降の造構、遺物は数多く確認されているが、平安時代末期から鎌倉時代初頭のものが量的には多い。その他、平安時代末期から鎌倉時代にかけての集落遺跡としては、福・荒田町遺跡、大間遺跡、上沢遺跡、五番町遺跡⁽⁴²⁾、長田神社境内遺跡、御船遺跡、二葉町遺跡、松野遺跡、長田野田遺跡、若松町遺跡などが挙げられる。

註

- (1) 安田 淳・富山直人・石島三和 2001「御藏遺跡第1・6・14・32次発掘調査報告書」神戸市教育委員会
- (2) 高橋 学 1989「戎町遺跡の地形環境－漆川・妙法寺川流域の地形環境T-」『戎町遺跡第1次調査概報』神戸市教育委員会
- (3) 山口英正 2000「御藏遺跡第3次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
自然流路から縄文時代晚期の土器片が数点出土している。
- (4) 神戸市立考古館 1979「縄文人のくらし」
- (5) 黒田恭正・阿部敬生 1995「福・荒田町遺跡第11次調査」『平成4年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- (6) 黒田恭正 1990「長田神社境内遺跡発掘調査概報」神戸市教育委員会
- (7) 山本雅和 1998「大手町遺跡第1次調査」『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- (8) 前田佳久 1993「大間遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会
- (9) 山本雅和 1989「戎町遺跡第1次調査概報」神戸市教育委員会
- (10) (5)に同じ 丸山 謙 1980「福・荒田町遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会
- (11) 山口英正・東宮代秀 1997「大田町遺跡第5次調査」『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
藤井太郎 2001「大田町遺跡第12次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- (12) 山口英正 2000「千歳遺跡第1次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
関野 豊 2001「千歳遺跡第3次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- (13) 池田 究 2000「長田南遺跡第1次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- (14) 池田 究 2000「御船遺跡第2次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
西岡誠司・藤井太郎 2001「御船遺跡第4次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- (15) 阿部敬生 1995「上沢遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会
斎木 巍・三輪晃三 2000「上沢遺跡第8次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- (16) 阿部敬生 2002「五番町遺跡第7次調査」『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- (17) 黒田恭正 1994「三番町遺跡第3次調査」『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会

- (18) 富山寅人 2002「長田南遺跡第3次調査」『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- (19) 菅本宏明 1981「神楽遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会
前田佳久・川上厚志 1994「神楽遺跡第7次調査」『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- (20) 千種 浩 1983「松野遺跡発掘調査概報」神戸市教育委員会
- (21) (6)に同じ
山本雅和・阿部敬生 1992「我町遺跡第4次調査」「我町遺跡第5次調査」「平成元年度神戸市埋蔵文化財年報」
神戸市教育委員会
- (22) (7)に同じ ・ 中谷 正 2002「大手町遺跡第5次調査」『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- (23) 大平 茂 1991「鷹取町遺跡」兵庫県教育委員会
- (24) 山山清朝 2000「若松町遺跡」神戸市教育委員会
II野博史 2001「若松町遺跡第2次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- (25) 松林宏典 2001「兵庫松本遺跡第1次調査」「平成10年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
神戸市教育委員会による平成12、13年度の調査において、庄内併行期の資料が増加している。詳細については、中谷 正氏にご教示いただいた。
- (26) 梅原未治 1925「神戸市夢野丸山古墳」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第二輯
- (27) 黒島恭正 1987「会下山二本松古墳」『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- (28) 梅原未治 1925「神戸市板宿得能山古墳」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第二輯
- (29) 喜谷美宣 1989「市街地に消えた古墳—念仏山古墳—」『神戸市立博物館研究紀要』第6号
- (30) (20)に同じ ・ 口野博史 2001「松野遺跡発掘調査報告書第3～7次調査」神戸市教育委員会
- (31) (19)に同じ ・ 渡辺伸行・西園誠司 1987「神楽遺跡」『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- (32) 石島三希 2000「上沢遺跡発掘調査報告書第35次調査」神戸市教育委員会
池田 翁・井尻 格 2000「上沢遺跡第9次調査」「平成9年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
- (33) 東喜代秀・井尻 格 2000「三番町遺跡第8次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- (34) 神戸市教育委員会による平成13年度の調査において、5世紀末～6世紀初頭頃の竖穴住居を検出している。詳細については、阿部 功氏にご教示いただいた。
- (35) 西園巧次 1989「塗川遺跡」『昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- (36) 森内秀造・山上雅弘 1994「大田町遺跡発掘調査報告書」兵庫県教育委員会
- (37) (1)(3)に同じ ・ 安田 滋 2001「御蔭遺跡第17・38次発掘調査報告書」神戸市教育委員会
- (38) 水口富太・平田博幸 1998「室内遺跡」『平成9年度年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- (39) (15)に同じ
II野博史・閑野 豊 2002「上沢遺跡第33次調査」『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- (40) 平成11年に周知された遺跡であるため、資料は多くないが、神戸市教育委員会による数次にわたる調査で、施釉陶器などが数点出土している。詳細については、閑野 豊氏にご教示いただいた。
- (41) 兼康保明・小林龍二 1998「長出野田遺跡第1次調査」「平成7年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
- (42) 内藤俊哉 1994「五番町遺跡」『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- (43) 川上厚志 2001「二葉町遺跡発掘調査報告書第3・5・7・8・9・12次調査」神戸市教育委員会

第2章 5丁目北地区の調査

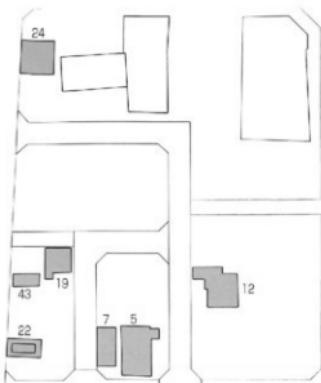
第1節 調査区の設定

5丁目北地区については、区画整理の進展とともに、3ヵ年の間に、調査の申請順に7件の調査を実施している。この調査において、調査の事業主体ごとに調査次数を設定している。今回の報告では、基本的に隣接している調査に関しては、1調査区として掲載することとし、地区名には、調査次数を列挙することとした。

なお、土地区画整理事業とともに発掘調査報告書において、調査次数の変更が行われており、これと整合性を持たすために、今回も調査次数の変更作業を行っている。

以下に調査次数の変更について、対応を示す。

本報告調査次数	旧調査次数	年報告掲載次数
5次	5次	5次
7次	7次	7次
12次	16次	16次
19次	25次	25次
22次	27次	27次
24次	29次	29次
43次	43次	43次



第6図 5丁目北地区調査区位置図

第2節 調査の概要

御蔵5丁目地区は、沖積地に形成された微高地と後背湿地が混在する範囲に位置する。地勢は北から南に緩やかに下がる斜面地であり、御蔵6丁目との境付近において、1mほどの急激な段差が生じている。御蔵5丁目北地区における主な遺構としては、掘立柱建物がある。この他に、遺物としては、庄内期末から布留期初頭に相当する時期の土器が、土器満まり内から多量に出土しており、良好な資料を提供している。

なお、大別すると下記のような基本層序となる。

1. 近現代の盛土層
2. 淡黄灰色細砂層（中世後期～近世の旧耕土層）
3. 灰色シルト層（奈良時代～平安時代の遺物包含層）
4. 黒褐色シルト層（奈良時代～平安時代の遺構面・弥生時代後期末の遺物包含層）
5. 乳褐色粘土～暗褐色粗砂層（第2遺構面）

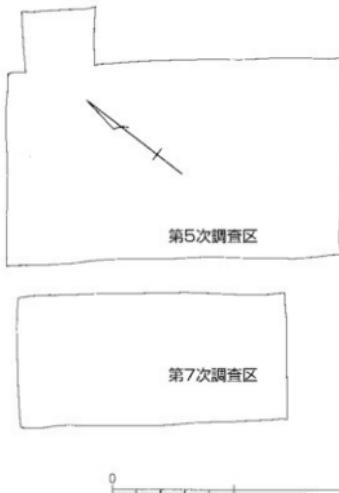
第3節 第5・7次調査

はじめに

今回の調査対象地は、上地区画整理事業後の宅地となる場所で、区画街路部分の第6-1次調査地点（5丁目北地×第4調査区）の北に隣接する。

東側の5次調査では、当初から強い削平を受けており、ほとんどが庄内期の遺構面より下がった面で、盛土直下にて遺構検出をおこなった。

7次調査では、良好な包含層が存しておらず、浅い落込みから多量の土器の出土が認められた。しかし、奈良時代の遺構遺物に関してはほとんど確認できなかった。

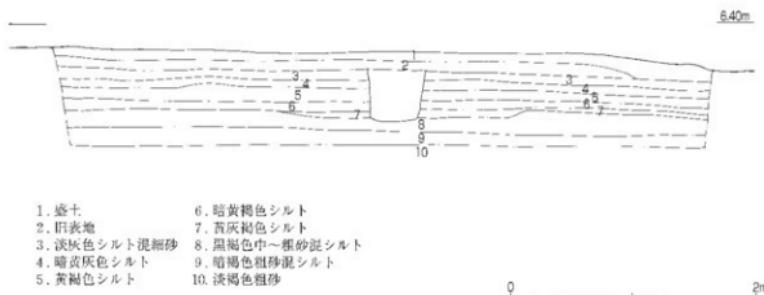


第7図 第5・7次調査区位置図

層序

調査における基本層序は、上から、盛土・旧表土・淡灰色シルト混細砂・暗黄灰色シルト・黄褐色シルト・暗黄褐色シルトとなり、地表下約0.5m～0.6m（標高約5.90m～6.10m）で、黒褐色中～粗砂混シルト層（庄内期の遺構検出面）その下層に暗褐色粗砂混シルト層である。黒褐色中～粗砂混シルト層上面には、浅い落込みがあり、そこに弥生時代後期末から古墳時代初頭の遺物を多量に含む黄灰褐色シルトが堆積している。

本来ならば、暗黄褐色シルト層上面で奈良時代の遺構が検出されるのであるが、第5次調査の方では削平により、7次調査では、遺構が希薄なためこの面では、遺構が検出できなかった。



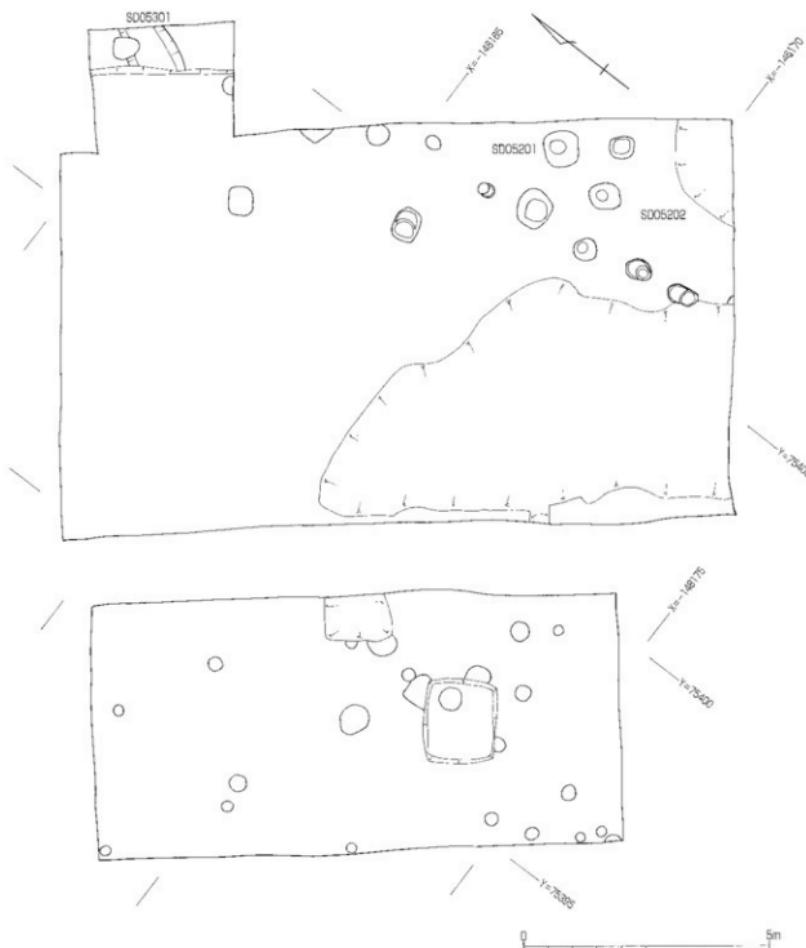
第8図 調査区断面図

庄内期

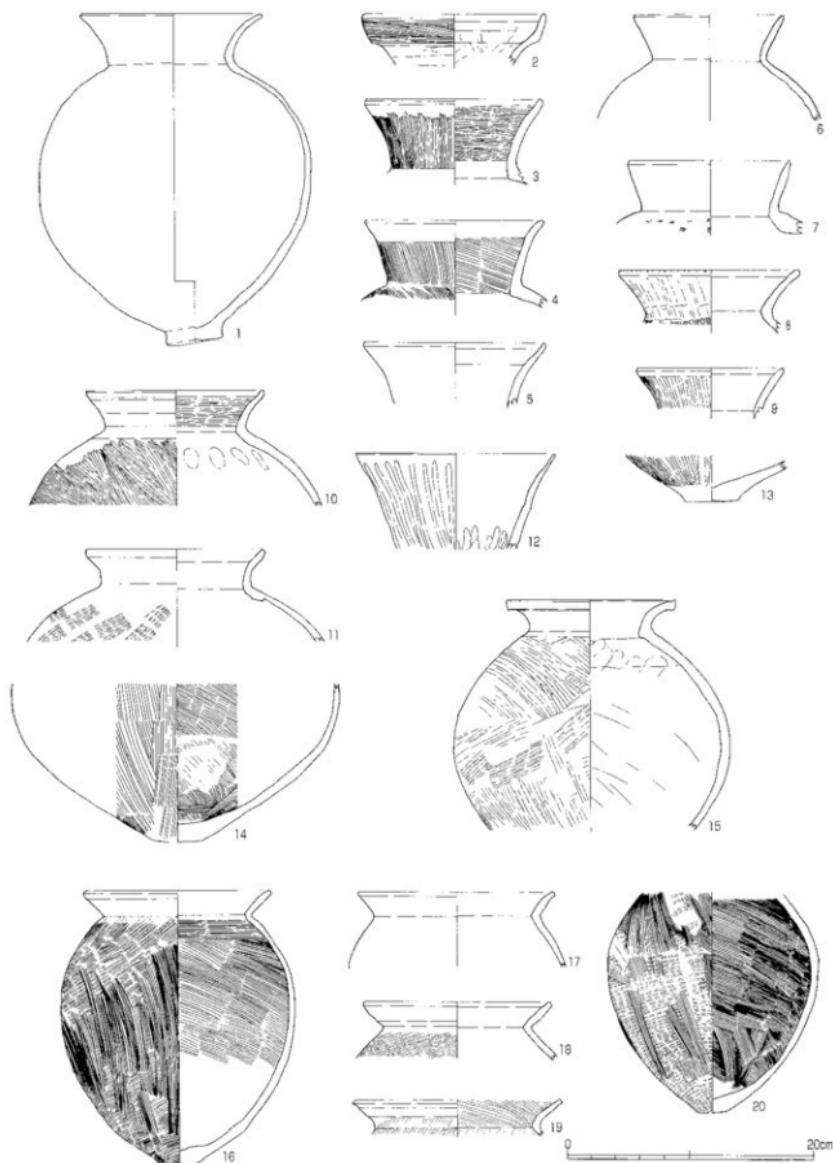
SD05301

庄内期の包含層の下層でピット等を検出したが、建物としてはまとまらなかった。

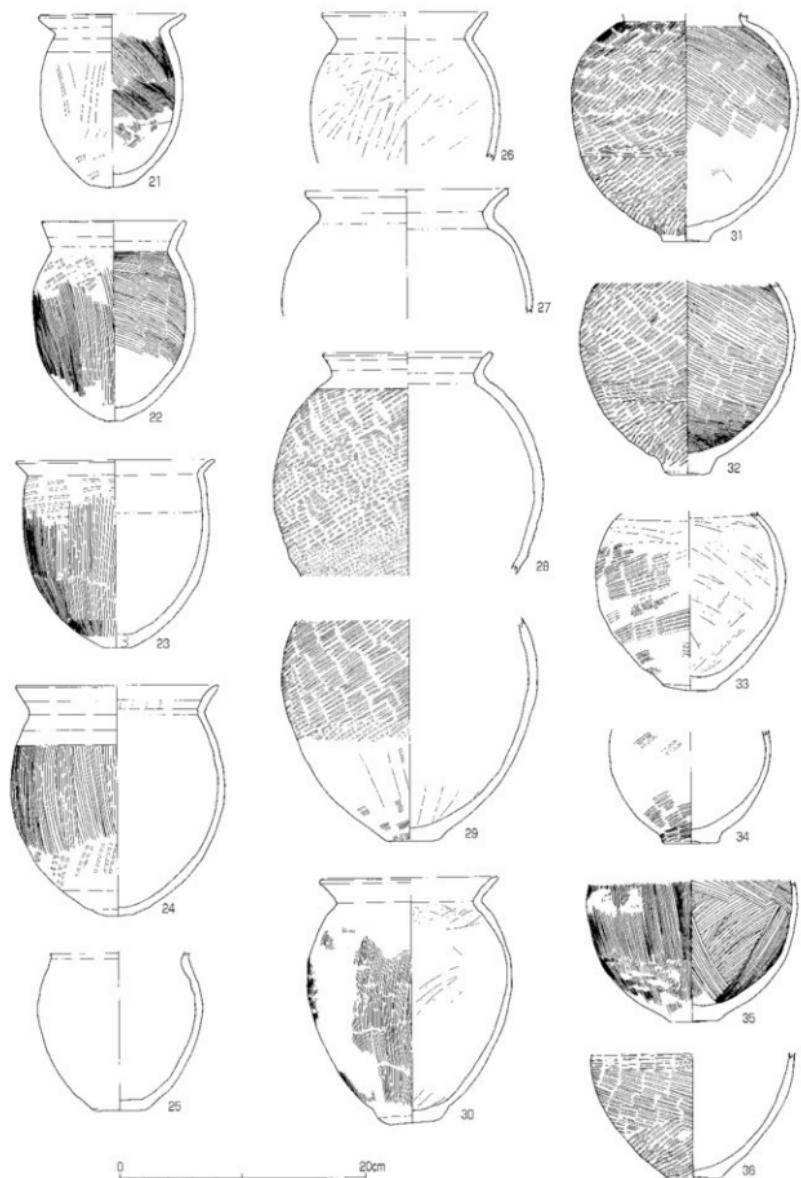
調査区北端で検出した幅1.0m、深さ0.18mを測る溝状の遺構である。ほとんどが削平を受けしており、全体をつかむに至っていない。時期としては庄内期のものと考えられる。



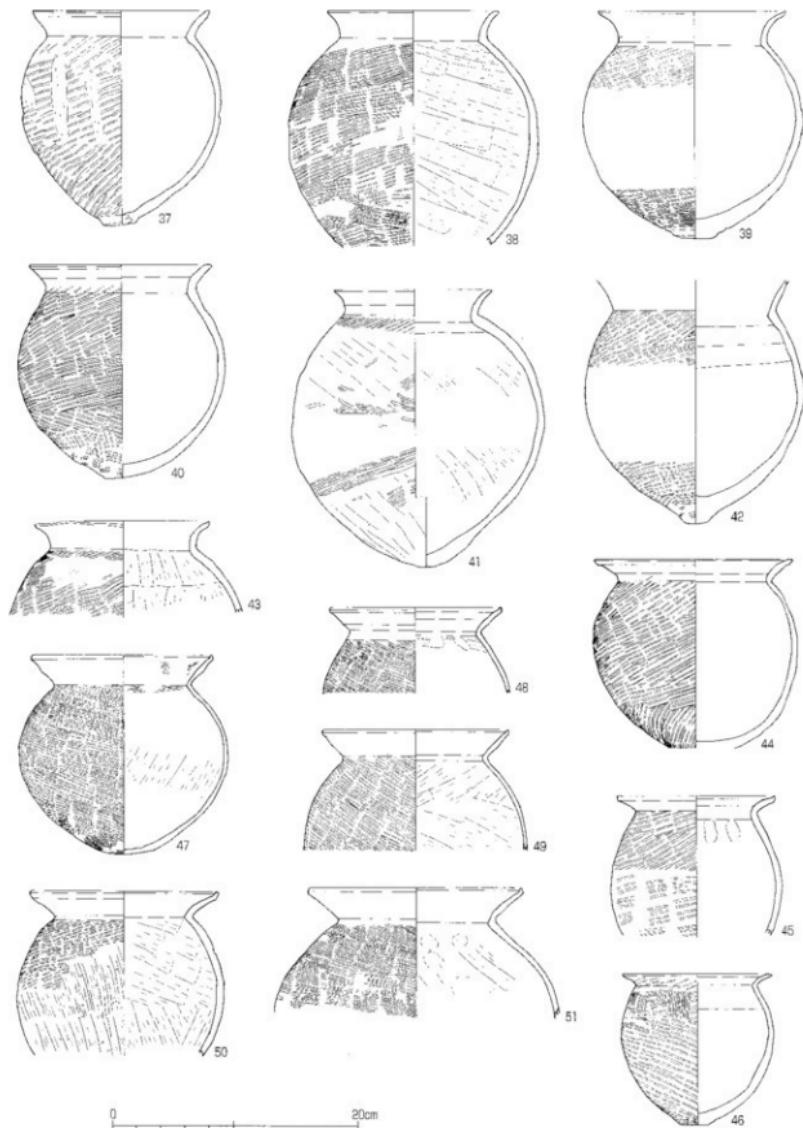
第9図 第5・7次遺構平面図



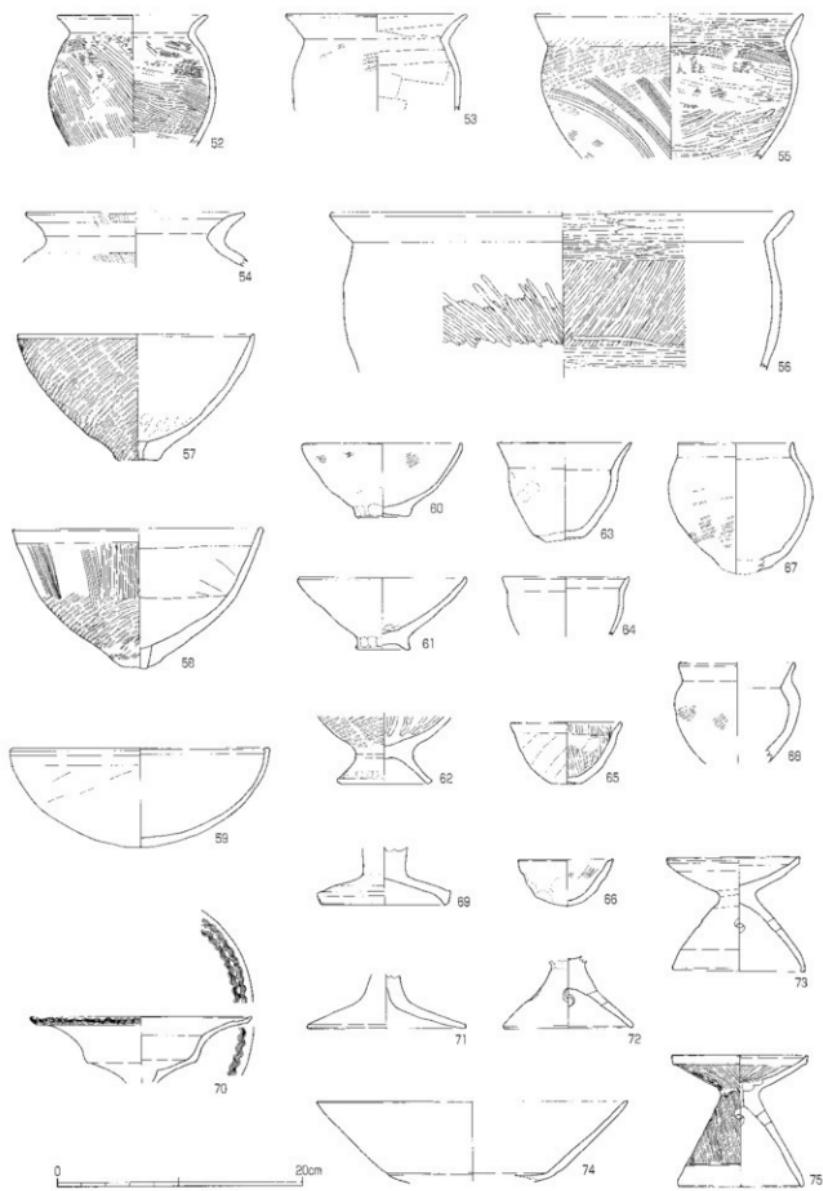
第10図 第7次調査土器溜まり出土遺物実測図(1)



第11図 第7次調査土器満まり出土遺物実測図（2）



第12図 第7次調査土器つまり出土遺物実測図（3）



第13図 第7次調査土器底まり出土遺物実測図 (4)

No.	器種	口径 底径	体部径 底径	器高	残存	調整などの特徴	粘土	焼成	色調
1	壺	14.9	22.4	28.2	50	内外面共に摩耗、底部外縁の崩壊痕	1~3 mmの石英・長石・クサリ織合む	やや良	洪赤褐色
		4.7							
2	壺	14.8	-	-	7	口縁部外側8本/cmのハケメ、内面ナデ	0.5~1 mmの石英・長石・クサリ織合む	良	淡褐色
		-							
3	壺	14.6	-	-	2	口縁部内外面ミガキ	1~6 mmの石英・長石・クサリ織合む	良	褐色
		-							
4	壺	14.6	-	-	10	体部外側刷毛目、口縁部5本/cmの刷毛目、端部はヨコナデ	1~4 mmの石英・長石・チャート・角閃石含む	良	褐色
		-							
5	壺	15.0	-	-	3	内外面共に摩耗	1~3 mmの石英・長石・クサリ織合む	良	褐色
		-							
6	壺	12.3	-	-	10	体部内外面ナデ、口縁部ヨコナデ	1~3 mmの石英・長石・クサリ織合む	良	褐色
		-							
7	壺	13.4	-	-	4	体部外側ナデ、一部刷毛目あり、口縁部ヨコナデ	1~4 mmの石英・長石・チャート・角閃石含む	良	褐色
		-							
8	壺	14.6	-	-	10	口縁部ヨコナデの後、瓶内方に板ナデ	1~3 mmの石英・長石・クサリ織合む	良	淡褐色
		-							
9	壺	12.0	-	-	3	口縁部外側ミガキ、内面ナデ	1~3 mmの石英・長石・クサリ織合む	良	褐色
		-							
10	壺	14.6	-	-	10	体部外側ナデの後部分ミガキ、口縁部ヨコナデ	1~3 mmの石英・長石・クサリ織合む	良	褐色
		-							
11	壺	14.8	-	-	5	体部外側2.5条/cmの平行叩き半スリ潤し、口縁部ヨコナデ	1~4 mmの石英・長石・クサリ織合む	あまり	褐色
		-							
12	壺	16.6	-	-	-	口縁部外側ヘラミガキ	1 mm前後の石英・長石・クサリ織合む	良	淡褐色
		-							
13	壺	--	4.3	-	-	体部外側ミガキ	1~3 mmの石英・長石・クサリ織合む	良	褐色
		-							
14	壺	--	4.0	-	5	体部外側6本/cmのハケメ、内面7本/cmのハケメ	1~2 mmの石英・長石・クサリ織合む	良	褐色
		-							
15	壺	13.8	23.3	-	75	体部外側ヘラミガキ、内面ヘラ削り(部分)口縁部ヨコナデ	1~4 mmの石英・長石・クサリ織合む	良	淡褐色
		-							
16	壺	15.6	3.4	19.4	224	体部外側2.5条/cmの平行叩きの後中央部分12本/cmハケメ、内面10本/cmのハケメ	1~3 mmの石英・長石・チャート・クサリ織合む	良	褐色
		-							
17	壺	16.0	-	-	10	内外面共に摩耗	2~7 mmの石英・長石・クサリ織合む	やや良	褐色
		-							
18	壺	15.4	-	-	5	体部外側5条/cmの平行叩き	1 mm前後の石英・角閃石含む	良	淡褐色
		-							
19	壺	17.2	-	-	5	体部外側5本/cmのハケメ、内面ケズリ、口縁部外側ハケメの後ヨコナデ、内面ハケメ	1 mm前後の石英・角閃石含む	良	明褐色
		-							
20	壺	-	1.1	17.2	50	体部外側2.5条/cmの平行叩き半スリ潤しの後ハケメ、内面11本/cmのハケメ	1~2 mmの石英・長石・チャート・クサリ織合む	良	褐色
		-							
21	壺	12.0	3.6	11.8	14.3	体部外側平行叩きの後スリ潤し(板状)体部内面9本/cmハケメ、口縁部ヨコナデ	1~3 mmの石英・長石・チャート・クサリ織合む	良	褐色
		-							
22	壺	11.8	1.8	13.2	15.4	体部外側2.5条/cmの平行叩きの後5本/cmハケメ、内面5本/cmのハケメ、口縁部ヨコナデ	1~4 mmの石英・長石・チャート・クサリ織合む	良	褐色
		-							
23	壺	16.4	2.4	15.2	15.4	体部外側2.5条/cmの平行叩きの後5本/cmのハケメ、口縁部ヨコナデ	1~4 mmの石英・長石・チャート・クサリ織合む	良	褐色
		-							
24	壺	16.6	2.8	17.8	18.9	体部外側2.5条/cmの平行叩きの後中央部分12本/cmハケメ、口縁部ヨコナデ	1~4 mmの石英・長石・チャート・クサリ織合む	良	褐色
		-							
25	壺	-	4.0	13.6	-	内外面共に摩擦	2~4 mmの石英・長石・クサリ織合む	やや良	褐色
		-							

表2 第7次調査土器満より出土遺物観察表(1)

No.	器種	口径 底径	体部径	器高	残存	調整などの特徴	胎土	焼成	色調
26	甕	13.5 —	15.6	—	33	体部外面平行印きの後、板ナデ、内面ヘラ削り、口縁部ヨコナデ	1~3mmの石英・長石・クサリ混含む	良	淡褐色
27	甕	16.6 —	20.6	—	20	体部内外面ナデ	2~6mmの石英・長石・クサリ混含む	やや良	黄褐色
28	甕	14.0 —	22.2	—	25	体部外周2.5条/cmの平行印き、口縁部ヨコナデ	1~4mmの石英・長石・チャート・クサリ混含む	良	褐色
29	甕	— 42	21.0	—	25	体部外周2.5条/cmの平行印き、下部は平スリ消し	1~4mmの石英・長石・チャート・クサリ混含む	良	淡褐色
30	甕	14.6 4.0	16.6	20.7	70	体部外周8cm/cmのハケメ、内面摩耗、口縁部強いナデ	2~3mmの石英・長石・クサリ混含む、わずかに雲母含む	良	淡褐色
31	甕	— 4.0	18.6	—	80	体部外周2.5条/cmの平行印き、内面6本/cmのハケメ	1~2mmの石英・長石・クサリ混含む	良	褐色
32	甕	— 3.6	17.6	—	50	体部外周2.5条/cmの平行印き、内面6本/cmのハケメ	1~3mmの石英・長石・クサリ混含む	良	褐色
33	甕	— 4.2	13.4	—	66	体部外周4条/cmの平行印き半スリ消し、内面ヘラ削り	1~2mmの石英・長石・クサリ混含む	良	淡褐色
34	甕	— 4.4	—	—	20	体部外周2.5条/cmの平行印き半スリ消し、底部木座压痕	2~6mmの石英・長石・クサリ混含む	良	褐色
35	甕	— 4.0	17.2	—	25	体部外周9本/cmのハケメ、内面5本/cmのハケメ	1~2mmの石英・長石・クサリ混含む	良	褐色
36	甕	— 4.2	—	—	13	体部外周2.5条/cmの平行印き、内面摩耗	1~2mmの石英・長石・クサリ混含む	良	褐色
37	甕	14.5 2.6	16.4	17.8	65	体部外周2.5条/cmの平行印き、口縁部ヨコナデ	1~2mmの石英・長石・チャート・クサリ混含む	良	明褐色
38	甕	— —	20.4	—	40	体部外周3条/cmの平行印き半スリ消し、内面ヘラ削り、口縁部ヨコナデ	1~3mmの石英・長石・クサリ混含む	良	淡褐色
39	甕	15.6 3.2	20.0	18.7	75	体部外周2.5条/cmの平行印き半スリ消しの後内面部分板ナデ、口縁部ヨコナデ	1~3mmの石英・長石・チャート・クサリ混含む	良	淡褐色
40	甕	15.0 3.0	— 17.0	17.5	50	体部外周2.5条/cmの平行印き、口縁部ヨコナデ	1~3mmの石英・長石・チャート・クサリ混含む	良	褐色
41	甕	12.9 1.4	20.8	22.8	75	体部外周3条/cmの平行印き半スリ消しおよびミガキ、内面ヘラ削り、口縁部ヨコナデ	1~2mmの石英・長石・クサリ混含む	良	淡褐色
42	甕	— 1.8	18.0	—	30	体部外周2.5条/cmの平行印き半スリ消し、内面摩耗	1~2mmの石英・長石・チャート・クサリ混含む	良	褐色
43	甕	14.4 —	—	—	20	体部外周2.5条/cmの平行印き半スリ消し、内面摩耗、口縁部強いナデ	1~2mmの石英・長石・クサリ混含む	良	淡褐色
44	甕	18.4 2.6	16.8	16.4	90	体部外周3条/cmの平行印き半スリ消し、口縁部ヨコナデ	1~2mmの石英・長石・チャート・雲母・クサリ混含む	良	褐色
45	甕	13.0 —	— 14.0	—	20	体部外周2.5条/cmの平行印き、下部は半スリ消し、口縁部ヨコナデ	1~3mmの石英・長石・クサリ混含む	良	褐色
46	甕	12.2 2.1	12.4	12.5	35	体部外周2.5条/cmの平行印き半スリ消し、口縁部ヨコナデ	1~2mmの石英・長石・チャート・クサリ混含む	良	淡褐色
47	甕	14.6 —	17.2	16.5	70	体部外周5.5条/cmの平行印き半スリ消し、内面ヘラ削り、口縁部ヨコナデ	1mm前後の石英・角閃石含む	良	褐色
48	甕	14.2 —	—	—	10	体部外周6条/cmの平行印き半スリ消し、内面ヘラ削り、口縁部ヨコナデ	1mm前後の石英・角閃石含む	良	淡褐色
49	甕	15.0 —	— 23.4	—	60	体部外周4条/cmの平行印き半スリ消し、内面ヘラ削り、口縁部ヨコナデ	1mm前後の石英・角閃石含む	良	淡褐色
50	甕	15.6 —	— 17.6	—	33	体部外周5.5条/cmの平行印き後に部分で刷毛状工具によるナデ、内面ヘラ削り口縁部ヨコナデ	1mm前後の石英・角閃石含む	良	褐色

表3 第7次調査土器溜まり出土遺物観察表(2)

No.	器種	口径 底径	体深径	器高	残存	溝轍などの特徴	胎土	焼成	色調
51	甕	17.5 -	-	-	30	体部外面5条/cmの平行叩き、内面ヘラ削り、口縁部ヨコナデ	1~2mmの石英・長石・角閃石含む	良	乳白色
52	甕	12.4 -	13.8	-	35	体部外面平行叩きの後、5本/cmのハケメ、内面5本/cmのハケメ、口縁部ヨコナデ	1~2mmの石英・長石・クサリ織合む	良	淡褐色
53	甕	11.8 -	13.7	-	26	体部外面平行叩き岸長いため詳細不明口縁部ヨコナデ	1~3mmの石英・長石・クサリ織合む	良	淡褐色
54	甕	18.0 -	-	-	5	口縁部ヨコナデ	1~3mmの石英・長石・クサリ織合む	良	褐色
55	盆	21.9 -	26.2	-	21	体部外面25条/cmの平行叩きの後ハケメ、内面ヘラミガキ、口縁部外側ナデ、内面ミガキ	1~2mmの石英・長石・クサリ織合む	良	淡褐色
56	鉢	38.2 29.2	-	-	3	体部外面ナデの後部分ミガキ、内面ミガキ、口縁部外側ヨコナデ、内面ミガキ	1~2mmの石英・長石・チャート・クサリ織合む	良	黄褐色
57	鉢 (瓶)	19.4 36	-	10.3	20	体部外面25条/cmの平行叩き、口縁部ヨコナデ	1~3mmの石英・長石・チャート・クサリ織合む	良	褐色
58	鉢 (瓶)	20.6 3.6	-	11.5	100	体部外面25条/cmの平行叩きの上部ナデの後5本/cmのハケメ、口縁部ヨコナデ、底部穿孔	1~3mmの石英・長石・チャート・クサリ織合む	良	浅黄褐色
59	鉢	11.4 -	-	8.1	60	体部外面叩きの後ナデ消し、内面なで、口縁部ヨコナデ	1~5mmの石英・長石・チャート・クサリ織合む	良	褐色
60	小型鉢	13.2 4.2	-	6.1	40	内外面共に摩耗	1~2mmの石英・長石・クサリ織合む	良	淡褐色
61	小型鉢	13.4 4.2	-	5.9	80	内外面共に摩耗	1mm以下の石英・クサリ織多く含む	良	明褐色
62	小型鉢	- 7.2	-	-	20	体部外面3条/cmの平行叩きナスリ消し、内面ヘラミガキ、底部ヨコナデ	1~3mmの石英・長石・クサリ織合む	良	淡褐色
63	小型鉢	11.0 3.0	9.0	8.2	60	内外面共に摩耗	1~2mmの石英・長石・クサリ織合む	良	淡褐色
64	小型鉢	10.4 -	-	-	5	内外面共に摩耗	1~2mmの石英・長石・クサリ織合む	やや良	褐色
65	小型鉢	9.0 2.2	-	5.0	55	体部外面板ナデ、内面ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ	1~2mmの石英・長石・クサリ織合む	良	淡灰褐色
66	小型鉢	7.8 -	-	3.8	80	てづくね、ミニチュア?	1~2mmの石英・長石・クサリ織合む	良	淡灰褐色
67	小型鉢	9.6 2.0	11.8	6.4	45	体部外面4条/cmの平行叩きナスリ消し、口縁部内面	1~2mmの石英・長石・クサリ織合む	良	淡褐色
68	小型鉢	9.2 -	10.2	-	40	内外面共に摩耗	1~3mmの石英・長石・クサリ織合む	良	淡赤褐色
69	高环	- 11.0	-	-	10	脚部内外面ヨコナデ	1~4mmの石英・長石・チャート含む	良	黄褐色
70	高环	- 18.4	-	-	15	内外面共に摩耗	1~2mmの石英・長石・クサリ織合む	良	明褐色
71	高环	- 13.0	-	-	30	底部ヨコナデ	1~2mmの石英・長石・クサリ織合む	良	褐色
72	高环	- 10.6	-	-	35	内外面共に摩耗	1~2mmの石英・長石・雲母・クサリ織合む	良	淡褐色
73	高环	10.9 11.0	-	9.4	100	内外面ヨコナデ、脚部4方向スカシ	1~3mmの石英・長石・チャート・雲母・クサリ織合む	良	褐色
74	高环	25.4 -	-	-	15	内外面共に摩耗	1~2mmの石英・長石・クサリ織合む	やや良	明褐色
75	小型 器台	11.2 10.2	-	10.9	100	外面ヘラミガキ、杯部内面ヘラミガキ、円孔スカシ4方向、杯部穿孔	1~2mmの石英・クサリ織合む	良	淡褐色

表4 第7次調査土器溜まり出土遺物観察表(3)

土器溜まり	第7次調査区の中に浅い窪地状の落ち込みが有り、底に堆積している黄灰褐色シルト層内から土器溜まりのような状態で多量の土器が出土している。埋土の観察から湿地的な状態であったと考えられ、土器は、ほぼ完形に近い状態のものが多いことから、周辺からの投棄による可能性高いものと考えられる。
上層遺構	本来ならば暗黄褐色シルト層上面で検出可能な遺構である。主に検出した遺構は、掘立柱建物2棟である。
SB05201	調査区南東位置する掘立柱建物である。ほとんどが調査区外に延びるため、規模等は不明である。現状で、2間×1間以上の建物である。柱掘方は、直径80cm位の大きさのものである。埋土は、暗黒褐色シルトで、埋土内からは遺物の出土は認められない。
SB05202	調査区南東位置する掘立柱建物である。ほとんどが調査区外に延びるため、規模等は不明である。現状で、3間×2間以上の建物である。柱掘方は、直径60cm位の大きさである。埋土は、暗黒褐色シルトで、埋土内からは遺物の出土は認められない。
	SB05201に南接しており、同時期と考えられることから、相互に関連する建物であった可能性がある。
	直接遺物の出土ではなく、盛土直下での遺構検出であるため、時期の特定は困難であるが、周辺の調査（御歳遺跡5丁目北地区第1調査区のSB201）などから、奈良時代後半～平安時代前半の時期の建物と考えられる。
	なお、暗黄褐色シルト層内から、わずかではあるが遺物が出土している。この包含層から出土した須恵器は、底径11.2cmを測り、底部外面をハラケズリの後にナデを、行うものである。高台は、逆三角形に近い台形で、貼り付け高台である。
まとめ	当該地域では、5次調査で確認された建物の西側では、包含層中に僅かに認められただけであり、奈良時代の遺構の広がりが限定出来そうな資料と考えられる。周辺の調査でも、西側では、奈良時代から平安時代にかけての時期には水田であったと考えられている。
	また、弥生時代後期末～古墳時代初頭頃のピットが検出され、掘立柱建物としての繰りは確認できなかったが、当該地にも、弥生時代後期末～古墳時代初頭頃の集落跡が残っている可能性が窺われる。
	また、遺物包含層である暗黄褐色シルト層内より、庄内期末頃の土器が多量に出土した。特に第10図の（18・19）は、胎土の状況から搬入品である可能性があり、第12図の（47～51）は、胎土は在地の可能性が残るが、播磨型庄内甕に属すると考えられるものである。これらの土器の諸特徴から、他地域の上器との時期的な対比が可能であり、その結果、庄内式期V～布留式期Iに位置付けられる上器群と考えられる。土器溜まりという出土状況からその一括性については、考慮しなければならず、型式幅がある程度含まれることは否めないが、当該地域における庄内期から布留期への移行段階における土器群としてひとつの指標となりうるものと考えられる。



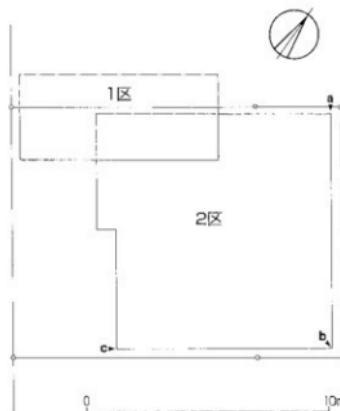
第14図 第5次調査平安時代包含層出土遺物実測図

第4節 第12次調査

はじめに 今回の調査対象地は土地区画整理事業の換地後の宅地となる場所で、区画街路部分の第20-2次調査地点（5丁目北地区第1調査区）の東側に隣接する。

まず、北側に隣接した既存金融機関建物の大規模な地下構造基礎の解体工事に伴って、工事の安全を期した掘削を行ったため余掘工事部分についての先行調査を約25mについて実施した（1区）。この建物基礎の解体工事完了後、個人住宅建設に伴う地下構造物の予定部分約70mについて改めて調査を実施した（2区）。

調査の結果、2区では遺構面が2面確認でき、調査面積は延べ165m²となった。



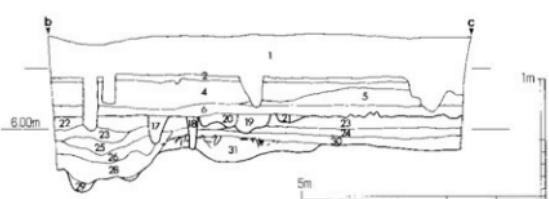
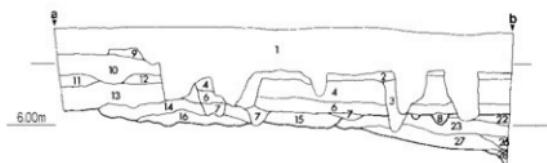
第15図 調査対象地区的配置

基本層序

基本層序は一様ではなく、盛土・攪乱・耕土に統いて旧耕土が何枚か確認できる。これらの旧耕土層直下が第1遺構面となるが、削平のため基盤層である黄色シルト質細砂層を遺構面とする範囲と、さらに下層の弥生時代後期の遺物包含層である暗褐色系細砂質シルトの上面を遺構面とする部分がある。そして、暗褐色系細砂質シルトを除去した、黄色シルト質細砂層上面が第2遺構面となり、さらに下層には厚く砂層が堆積している。2面の遺構面ともに基本的に北から南への緩やかな傾斜面となっている。

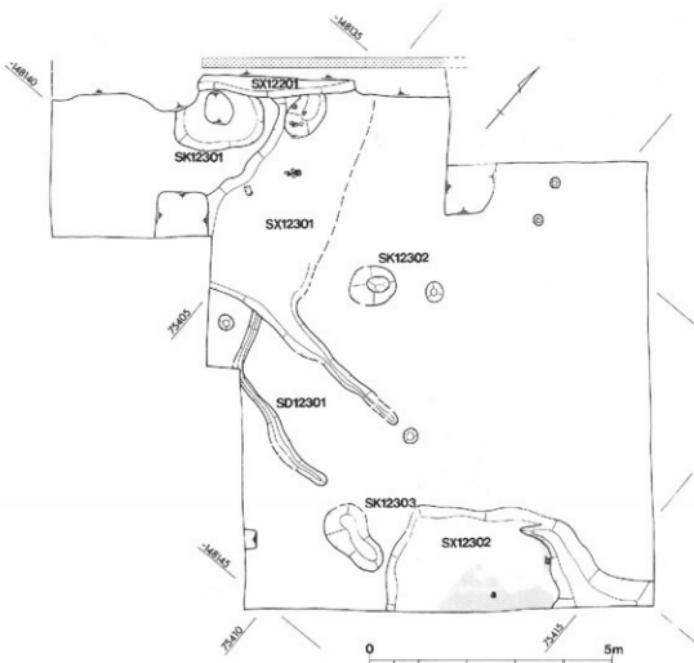
図10 調査区地層断面図

- 1 盛上・攪乱
- 2 耕上
- 3 灰色シルト質細砂（暗褐色）
- 4 明灰褐色シルト混じり細砂
- 5 深灰色シルト質細砂
- 6 乳白色シルト質細砂
- 7 灰色シルト混じり細砂～粗砂
- 8 灰色シルト質細砂
- 9 灰色中砂混じり粘土
- 10 乳黃灰色シルト質細砂～中砂
- 11 暗黃灰色シルト質細砂
- 12 明黄色シルト混じり細砂
- 13 淡褐色シルト質細砂
- 14 淡褐色シルト質細砂（SX104）
- 15 淡褐色シルト質細砂（SX103）
- 16 細色細粒質シルト
- 17 暗灰色細粒質シルト
- 18 細粒細砂質シルト
- 19 淡褐色細砂質シルト
- 20 淡乳白色シルト質細砂
- 21 乳灰色シルト混じり粗砂～細砂
- 22 暗褐色細砂質シルト
- 23 暗褐色細砂質シルト
- 24 淡乳黄色わらびに雜種混じりシルト
- 25 白色シルト混じり粗砂
- 26 暗褐色シルト質細砂
- 27 淡乳白色シルト質細砂
- 28 暗灰色シルト
- 29 灰色細砂～中砂+暗灰色シルト
- 30 淡乳褐色細砂質シルト
- 31 淡乳色細砂質シルト



第16図 調査区土層断面図

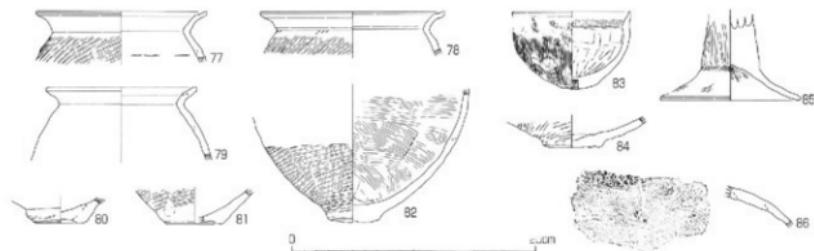
第2遺構面 確認できた遺構には、弥生時代後期末のものと古墳時代後期末のものがあり、溝、ピット、落ち込みがある。



第17図 第2遺構面平面図

SX12301 北半部で確認した幅2m以上、深さ0.1~0.15mの落ち込みで、緩やかに湾曲する溝状遺構として終息する。北端部の土坑状の落ち込みからは弥生時代後期末の土器がまとまって出土している。埋土は乳灰褐色シルト質粘細砂である。

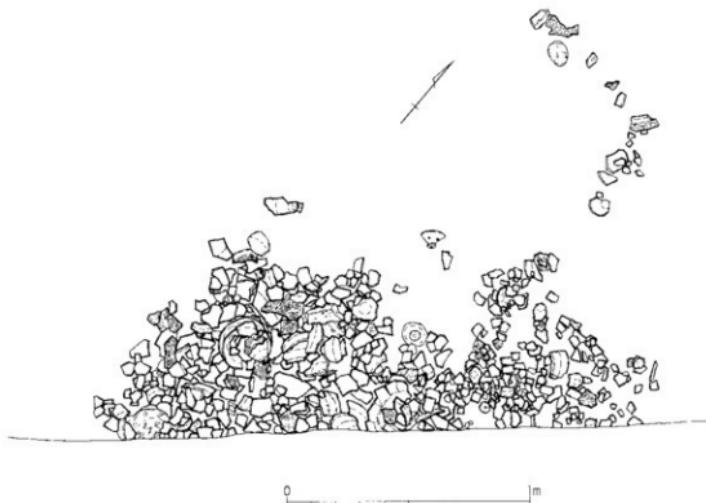
(77・78・79)は甕で、「く」字形に外反する口縁部の端部内面に強いヨコナデが施され、



第18図 SX12301出土遺物実測図

ややくばむものである。外面の調整はいずれも平行叩き仕上げである。(82)は底径4.0cm、残存高11.0cmの壺下半部で、中位は平行叩きがナデによってスリ消されている。(83)は口径9.6cm、器高6.4cmの完形の鉢で、口縁部は斜め上方につまみ上げられる。外面は刷毛調整、内面は板ナデ調整である。(86)は壺肩部の破片で、円形竹管文が3列で配される。

- SX12302 調査区南半部で確認した東西 3.55m以上、南北 2.2m以上、最大深さ 0.25mの不整形の落ち込みで、埋土は暗乳色極細砂質シルトである。上層部で完形に近いものを含む弦生土器がまとまって出土している(土器群a)。庄内式併行期でも新しい段階の遺構と考えられる。

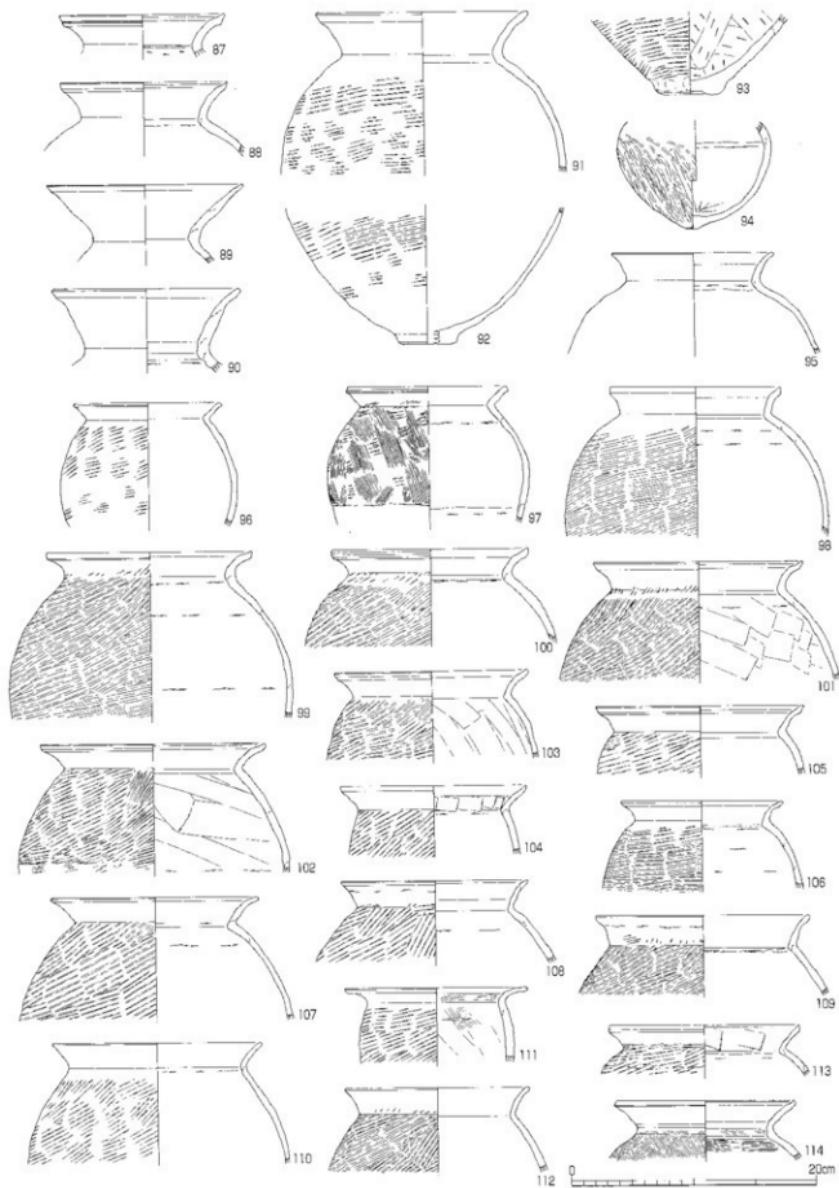


第19図
SX12302遺物
検出状況平面図

(87~95)は壺で、短く外反する口縁部をもつものと斜め上方にまっすぐ延びる口縁部と球形に近い体部をもつものがある。また、長い直口の口縁部をもつと考えられる(94)のような丸い体部と小さな底部をもつ小型品もある。

(96~123)は体部外面が平行叩き仕上げのV様式系の壺で、口縁部が外方へわずかに拡張し、端面に擬凹線の巡るもの(A類)、口縁部内面に強いヨコナデを施すもの(B類)、口縁端部を丸く仕上げるもの(C類)、口縁端部をやや上方へつまみ上げるもの(D類)などの形態がある。また、底部の形態にも特徴があり、底部と接する体部外面最下部に強いヨコナデ調整の施されるものが含まれている。

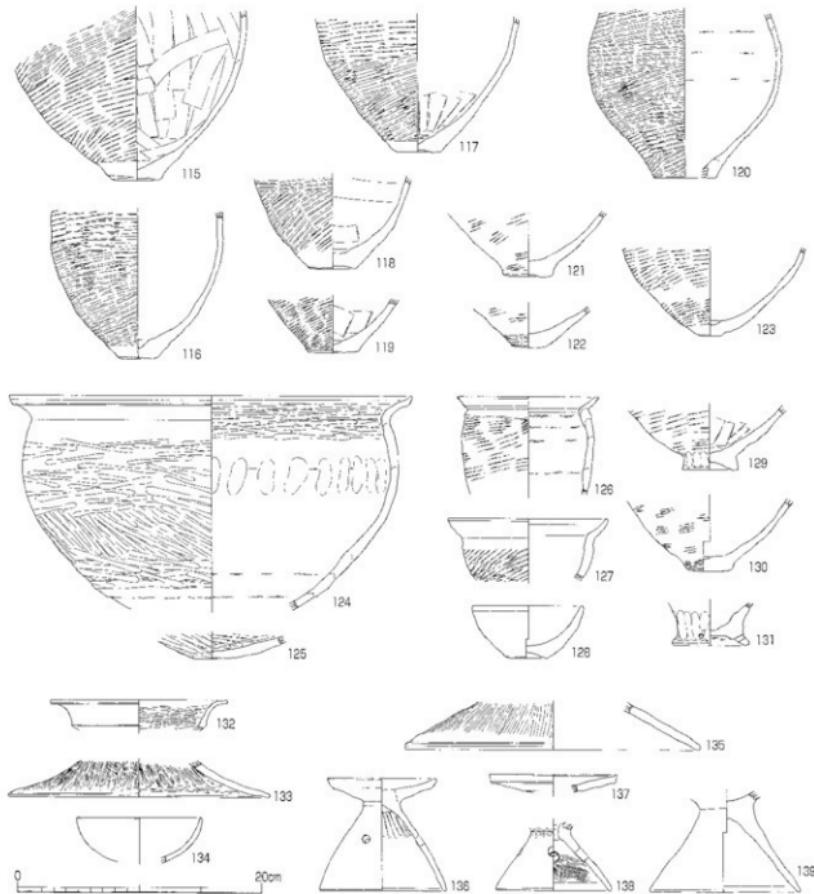
以上のように、SX12302出土の土器群は壺では体部が球形となるものが含まれ、壺では口縁端部をつまみあげる意識が顕著に現れている点などが新しい傾向として認識できる。しかし、一方で個別の観察では壺の口縁部が短く外反するものや鉢に大型品が残る点など古い様相も看取できる。時期幅がやや見受けられるものの、壺(95)・甕(114)・小型器台などの存在から、庄内期併行期でも新しい時期で、布留式に限りなく近い時期を与えるこ



第20図 SX12302出土遺物実測図（1）

とができるものと考えている。

なお、暗灰色系のシルト層を埋土とする東端部の落ち込みは、当初SX12302と同一遺構と考えていたが、土層断面の観察から第2面に伴う遺物包含層を切る点や土器の出土状況の違いからみてSX12302を切る別の遺構と考えている。大型の弥生土器片が出土しているものの、図化できる資料はない。明確に時期決定できる遺物に恵まれないが、古墳時代頃の流路状の遺構の可能性が高い。



第21図 SX12302出土遺物実測図(2)

No.	器種	口径 体部径 底径	体部高	器高	残存	調査などの特徴	胎土	焼成	色調	
87	壺	13.8	-	4.2	16	体部外周2.5条/cmの平行印き半スリ消し、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	1mm前後チャート・長石・石英 擦粒のクサリレキを含む	良	淡乳褐色	
88	壺	13.6	-	6.2	20	内外面ともに摩滅	2~3mmのチャート・石英・長石、 クサリレキを含む	良	淡乳褐色	
89	壺	16.0	-	6.5	25	内外面ともに摩滅	1~5mmのチャート・石英、 クサリレキを多く含む	良	淡乳褐色	
90	壺	15.0	-	6.9	33	内外面ともにヨコナデ? 内面下平6条/cmのハケ	1~3mmのチャート・石英、 クサリレキを含む	良	明乳色	
91	壺	17.0	23.4	13.3	25	体部外周3条/cmの平行印き半スリ消し、 内面ナデ、口縁部ヨコナデ	1~2mmのチャート・石英・ クサリレキを多く含む	良	乳色	
92	壺	4.6	-	11.3	25	体部外周2.5cmの平行印き半スリ消し、 内面摩滅	1~2mmのチャート・石英、 クサリレキを含む	良	暗赤褐色	
93	壺	5.0	-	6.6	33	体部外周3条/cmの平行印き半スリ消し、 内面ナデに近い側ナデ	1~2mmの石英、チャートを含む 1~3mmのクサリレキを多く含む	良	暗乳褐色	
94	細腹壺	1.1	12.7	8.8	80	瓶体形の直筒壺で底を削き、 底部内面被ナデ	0.5~5mmのクサリレキわずか 1~3mmのチャート・石英を含む	良	乳色	
95	壺?	13.0	-	8.4	20	内外面ともに摩滅	1~2mmのチャート・石英、 クサリレキを含む	良	暗褐色	
96	壺A	11.8	14.6	10.2	25	体部外周1.5cmの平行印き、 その他は摩滅	2~3mmのチャート・石英、 クサリレキを含む	良	淡乳色	
97	壺A	12.8	-	11.3	25	外周3条/cmの平行印き後8条/cmの粗刷毛、 内面ナデ? ?口縁部ヨコナデ	1~2mmのチャート・石英、 クサリレキを含む	良	乳色	
98	壺B	13.8	21.6	12.3	20	体部外周3条/cmの平行印き、内面ナデ、 口縁部ヨコナデ	2mm前のチャート・石英、 クサリレキを含む	良	暗乳褐色	
99	壺B	16.7	23.2	13.7	33	体部外周3条/cmの平行印き、内面ナデ、 口縁部ヨコナデ	2~3mmのチャート・石英、 クサリレキを多く含む	良	淡赤褐色	
100	壺B	16.0	-	7.9	20	体部外周2.5cmの平行印き、内面ナデ、 口縁部ヨコナデ	2~5mmのチャート・クサリレキ を含む	良	暗赤褐色	
101	壺B	15.0	-	9.7	33	体部外周3条/cmの平行印き、内面被ナデ、 口縁部ヨコナデ	1~2mmのチャート・長石・石英、 クサリレキを含む	良	乳色 暗乳褐色	
102	壺B	18.2	22.2	10.6	15	体部外周3条/cmの平行印き半スリ消し、 内面被ナデ、口縁部ヨコナデ	1mm前のチャート・石英、 クサリレキを含む	良	暗乳褐色	
103	壺B	15.7	-	7.3	12	体部外周3条/cmの平行印き半スリ消し、 内面被ナデ、口縁部ヨコナデ	1~2mmのチャート・石英、 クサリレキを含む	良	暗乳色	
104	壺B	15.2	-	5.7	17	体部外周3条/cm平行印き半スリ消し、内面ナデ、 底部内面被ナデ、口縁部ヨコナデ	1~2mmのチャート・石英、 クサリレキを含む	良	暗乳褐色	
105	壺B	16.6	-	5.7	17	体部外周2.5cmの平行印き半スリ消し、 内面被ナデ、口縁部ヨコナデ	1~2mmのチャート・石英、 クサリレキを含む	良	暗乳色	
106	壺B	13.0	-	16.4	7.3	体部外周1.5cmの平行印き、内面ナデ、 口縁部ヨコナデ	1mm前のチャート・クサリレキ を含む	良	暗乳褐色	
107	壺B	16.8	-	10.2	17	体部外周2.5cmの平行印き、 その他の摩滅	1~2mmのチャート・石英、 クサリレキを含む	良	暗赤褐色	
108	壺C	13.2	-	6.8	33	体部外周3条/cmの平行印き、 その他の摩滅	1~3mmのチャート・石英、 クサリレキを含む	良	淡乳褐色	
109	壺C	17.2	-	6.6	20	体部外周2.5cmの平行印き、内面ナデ、 口縁部ヨコナデ	1~2mmのチャート・石英、 クサリレキを含む	良	淡乳褐色	
110	壺C	17.0	-	9.9	75	体部外周3条/cmの平行印き、 その他の摩滅	1~3mmのチャートを多く含む 1~2mmのクサリレキを含む	不良	暗褐色	
111	壺C	14.8	12.8	6.2	12	体部外周4条/cmの平行印き半スリ消し、 内面6条/cmの刷毛、口縁部ヨコナデ	2mm前のチャート・石英、 クサリレキを含む	良	淡乳褐色	
112	壺C	14.9	-	7.0	20	体部外周2.5cmの平行印き その他の摩滅	1~2mmのチャート・石英、 クサリレキを含む	良	暗乳色	
113	壺D	15.1	-	4.3	20	体部外周3条/cmの平行印き半スリ消し、内面ナデ、 口縁部ヨコナデ、根ナデ	2mm前のチャート・クサリレキ を含む	良	暗乳色	
114	壺D	14.4	-	4.9	20	体部外周6cmの刷毛、内面ケズリを含む刷毛、 口縁部ヨコナデ	1mm前のチャート・クサリレキ ・石英・ランモを含む	良	暗乳色	
115	壺	4.1	-	14.0	70	体部外周2条/cmの平行印き半スリ消し、 内面被ナデ、口縁部ヨコナデ	1~2mmのチャート・石英、 クサリレキを多く含む	良	淡乳色	
116	壺	3.4	-	14.1	11.1	33	体部外周2条/cmの平行印き、最下位ヨコナデ	1~3mmのチャート・石英、 クサリレキを含む	良	暗乳褐色
117	壺	3.6	-	11.2	33	体部外周2条/cmの平行印き、下位2条/cm平行印き、 内面半スリ削り、内面ドボナデ	1~3mmのチャート・石英、 クサリレキを含む	良	淡乳褐色	
118	壺	4.2	-	7.7	50	体部外周4条/cmの平行印き半スリ消し、 内面被ナデ、底部外面本業灰	1~2mmのチャート・クサリレキ を含む	良	淡褐色	
119	壺	4.4	-	4.5	67	体部外周4条/cmの平行印き半スリ消し、 内面被ナデ、底部外面本業灰	1~10mmのチャート・2~3mm のクサリレキを含む	良	淡乳色	

表5 SK1202出土土器観察表(1)

No.	器種	口径 底径	体部径	器高	残存	調整などの特徴	胎土	焼成	色調
120	甕	-	5.2	16.0	13.6	33 体部外側2条/cmの平行叩き、内面ナデ	1~5mmのチャート・長石・クサリレキを含む	良	暗乳色
121	甕	-	4.2	-	5.4	90 2条/cmの平行叩き・摩滅調者	1~2mmのチャート・長石・石英を多く含む	良	淡褐色
122	甕	-	2.8	-	3.4	90 2条/cmの平行叩き、ナデによるスリ消し	1mm前後のチャート・石英・クサリレキを含む	良	暗乳橙色
123	甕	-	2.0	-	7.3	25 3条/cmの平行叩きスリ消し、内面ナデ	1~2mmのチャート・長石・石英を含む	良	暗乳橙色
124	鉢	-	3.0	31.0	17.5	25 底部外側ナデ、体部外側ヘラ磨き、内面ナデ、口縁部内面ヘラ磨き、外面ヨコナデ	1~3mmのチャート・石英・クサリレキを含む	良	乳色
125	鉢	-	3.0	-	1.9	85 内外面ともヘラ磨き、底部外側ヘラ削り?	2mm前後のチャート・石英、1mm前後のクサリレキわずかに含む	良	暗乳色
126	鉢	-	11.4	-	10.9	7.1 体部外側3条/cmの平行叩き半スリ消し	1~2mmのチャート・クサリレキをわずかに含む	良	暗乳色
127	鉢	-	12.9	-	5.1	12 体部外側25条/cmの平行叩き半スリ消し、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	1~2mmのチャート・長石・クサリレキを含む	良	暗乳色
128	鉢	-	9.0	-	4.3	20 内外面とも摩滅	1~2mmのチャート・石英を多く含む	良	暗乳色
129	鉢	-	4.4	-	5.4	80 外側2条/cm平行叩き半スリ消し、内面板ナデ、底部外側木葉状	1~2mmのチャート・石英・クサリレキを含む	良	暗乳橙色
130	鉢	-	3.8	-	6.0	85 外側4条/cmの平行叩きスリ消し、内面摩滅、底部外側ヘラ磨き?	2mm前後のチャート・石英・クサリレキを含む	良	暗乳色
131	鉢	-	5.6	-	3.3	90 外側指鋼压痕、内面ナデ、底部外側ヘラ削り、3方向の直径3mmの円孔あり	1~3mmのチャート・石英・クサリレキを含む	良	暗乳橙色
132	高杯	-	14.3	-	2.5	12 外側摩滅、内面横方向のヘラ磨き	1mm前後のチャートわずか 2mm前後のクサリレキ含む	良	暗乳橙色
133	高杯	-	21.2	-	3.0	10 内外面とも縱横方向のヘラ磨き 脚部ヨコナデ	1mm前後のチャート・クサリレキを含む	良	暗乳赤褐色
134	高杯	-	10.0	-	3.7	20 内外面ともに摩滅	1~2mmのチャート・長石・クサリレキを多く含む	良	暗褐色
135	器台	-	24.0	-	3.9	12 外側5条/cmの縱刷毛、内面ナデ 脚部ヨコナデ	1~2mmのチャート・石英・クサリレキを含む	良	暗乳橙色
136	小型 器台	-	8.8	-	9.3	40 全体的に摩滅、脚内面板ナデ	1~2mmのチャート・石英・クサリレキを含む	良	暗乳褐色
137	小型 器台	-	10.4	-	1.5	50 口縁端部ヨコナデ、その他のナデ?	1~2mmのチャート・石英・クサリレキを含む	良	暗乳橙色
138	小型 器台	-	9.4	-	5.6	75 外側刷毛の後ヘラ削り?、内面8条/cmの刷毛、内孔スカシ4方向、环部摩耗	1mm前後のチャート・石英・クサリレキを含む	良	褐色-暗乳褐色
139	小型 器台	-	12.1	-	8.3	50 内外面とも摩滅	2~3mmのチャート・クサリレキを多く含む	良	暗乳橙色

表6 SX12302出土土器観察表(2)

SX12302 直径0.85m、最大深さ0.27mで、2段に掘り込まれた円形の土坑で、暗褐色シルト質細砂を埋上とする。出土遺物には平行叩き仕上げの甕や外面刷毛調整、内面ヘラ削り調整で、器壁を薄く仕上げた甕などの弥生土器がある。

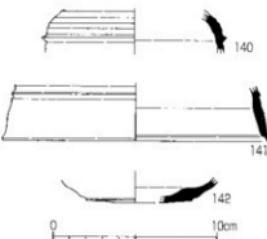
SX12201 SX12301・SX12301を切る検出長3m以上の

東西方向の落ち込みで、深さは約0.30mである。

古墳時代後期の須恵器片(140・141)や土師器片

が出土しているほか、7世紀に降る环身(142)

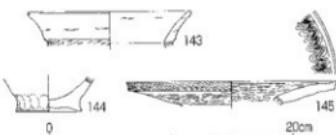
なども出土している。埋土は乳褐色シルト質細砂である。



第22図 SX12201出土遺物実測図

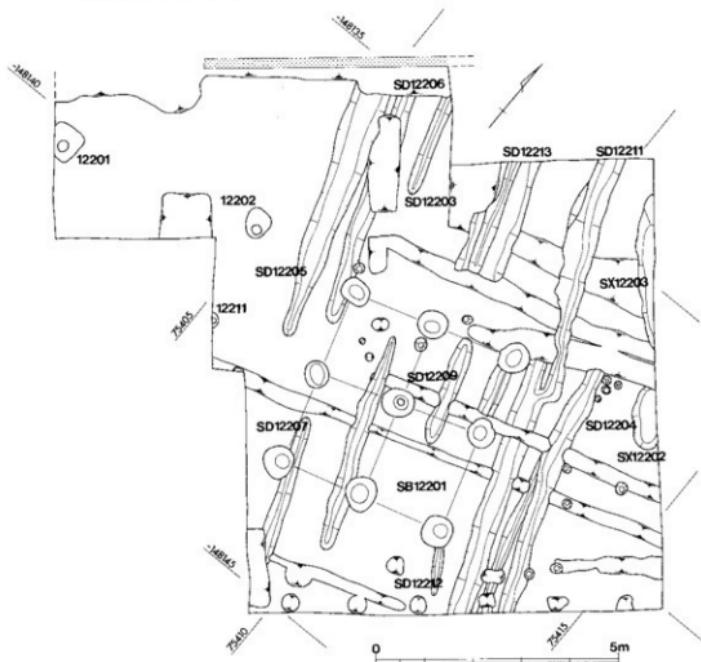
第2遺構面の遺構に伴わない遺物

いずれも庄内期併行と考えられる弥生土器。(143)は口径13.1cmの壺の口縁部、(144)は生駒西麓産の胎土をもつ壺の底部。底径5.2cm。(145)は口径17.0cmの器台の口縁部で、口縁端面と内面を櫛描波状文で飾る。また、図化できなかった外面5条/cmの平行叩き仕上げ、内面ヘラ削り調整の生駒西麓の胎土をもつ壺の肩部片もある。



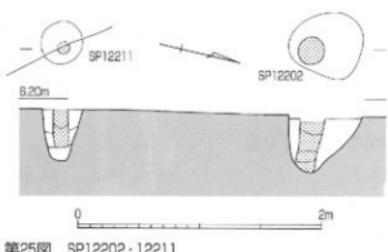
第23図 第2面の遺構に伴わない遺物実測図

第1遺構面 確認できた遺構には、奈良時代～平安時代のものと考えられる掘立柱建物・柱穴・溝・落ち込みなどがある。

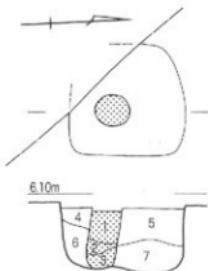


第24図 第1遺構面平面図

SP12202-12211 一辺約0.50m前後、深さ0.40mのやや不整形な隅円方形の掘形に、直径0.15m前後、深さ0.40mの柱痕をもつ柱穴である。掘形の形状が異なるものの、両者の柱間距離が1.8mで、構を構成していた可能性が指摘できる。出土遺物にはSP12211から出土した須恵器壺Aの体部の小片があり、8世紀代のものと考えられるが、詳細な時期は不明である。



第25図 SP12202・12211



第26図 SP12201

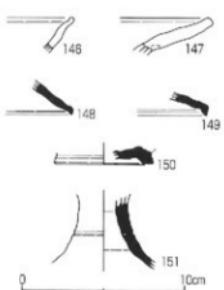
- 図00 SP12201実測図
 1 淡褐色シルト
 2 淡灰白色細砂質シルト
 3 暗褐色細砂質シルト
 4 淡灰褐色シルト質細砂
 5 黄褐色細砂+褐色灰色シルト質細砂
 6 暗褐色細砂質シルト
 7 暗褐色細砂質シルト+灰色細砂～中砂

SP12201 1区西端で確認した一辺約0.70m、深さ0.40mの開円方形の掘形に、直径0.20m、深さ0.40mの柱痕をもつ大型の柱穴である。出土遺物は弥生土器・土師器・須恵器の小片がある程度で、詳細な時期は不明である。

SD12201~12213 南北方向に延びる溝状遺構で、いずれも幅1m前後、深さ約0.10~0.20mである。溝間が1m前後で掘っており、それぞれの方向性も同じ点から鶴溝である可能性が高い。埋土は乳灰色粗砂混じり細砂質シルトである。

出土遺物には土師器片(146・147)・須恵器片(148~151)がある。いずれも8世紀代のものと考えられ、遺構の切り合い関係からも、SB12201より古い時期のものであることが判る。

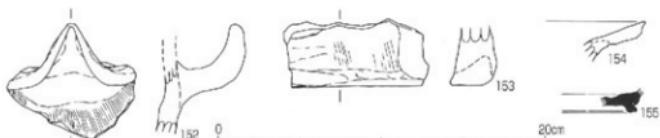
第27図 SD12204~12208・12211~12213出土遺物実測図



SX12202~12203 調査区外へ延びる浅い溝状の落ち込みで、もともと同一の遺構の可能性が高い。

SX12202は長径1.18m、短径0.50m以上、最大深さ0.10mで、淡褐色シルト質細砂を埋土とする。出土遺物には土師器竈の把手片(152)と基部片(153)がある。

SX12203は長径3.20m、短径0.35m以上、最大深さ0.17mで、乳灰色シルト質極細砂と灰色細砂質シルトを埋土とする。出土遺物には土師器竈の口縁部片(154)と須恵器壺Bの底部片(155)がある。いずれも8世紀後半のものと考えられる。

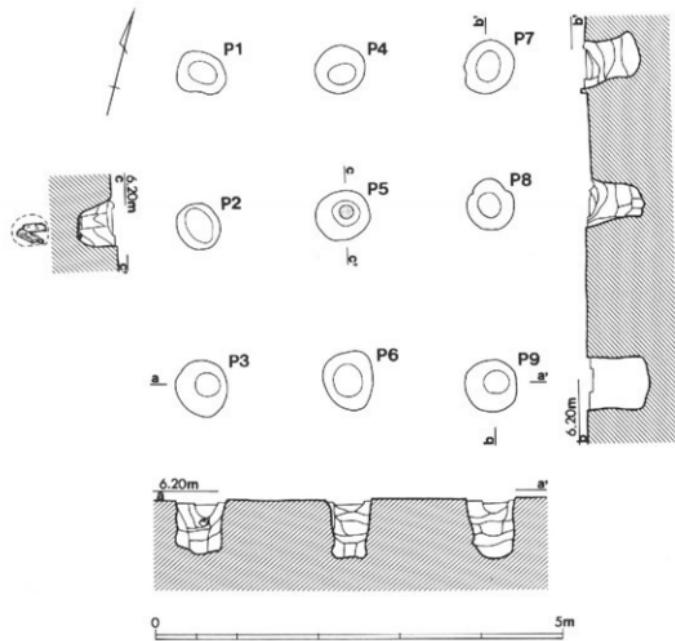


第28図 SX12202・12203出土遺物実測図

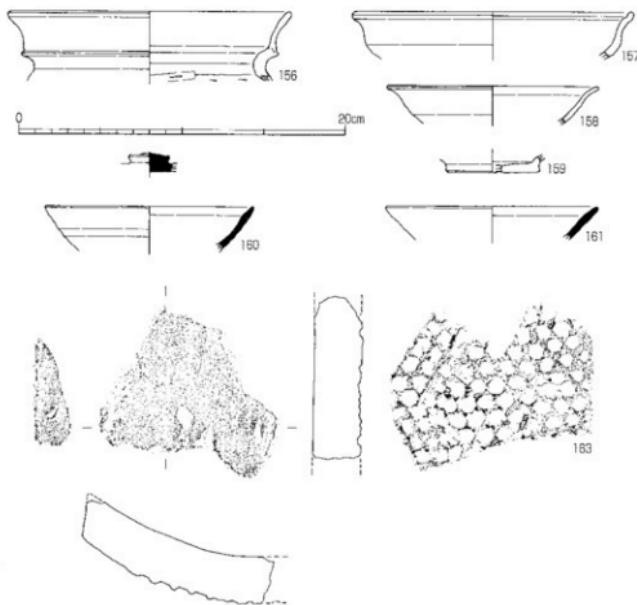
SB12201 2×2間(東西3.5m×南北3.8m)の縦柱の掘立柱建物で、倉庫と考えられる。柱間距離は1.7~2.2mで、主軸は座標北から約18°西へ振っている。柱痕をもつのは建物中央の東柱となるP5のみで、側柱はいずれも柱材が抜き取られており、遺構面近くまで達する柱痕は確認できていない。柱穴掘形はいずれもやや楕円形で、長径約0.60~0.70m、最大深さ0.70mである。また、P5では掘形底面に板材2点を使用した礎盤が遺存しており、P6では掘形下層からコウヤマキと同定された炭化木片1点が出土している。

出土遺物で図化できたものはいずれも掘形から出土したものである。(156)はP8出土の土師器甕の二重口縁で、山陰系の形態的な特徴をもつが、胎土も在地のものとは異なるため、搬入品と考えている。口径17.0cm。(157)はP1出土の土師器壺Aで、口縁端部内面を凹状に仕上げる。(158・159)はP7出土の土師器甕で、同一個体の可能性がある。口縁端部の外反が顕著である。(161)はP6出土の須恵器壺の口縁部で、(162)はP4出土の須恵器壺の口縁部。(163)はP9の掘形内下層から出土した平瓦片で、凹面は縦方向のナデ仕上げ、凸面は六角形を単位とする蜂の巣模様の叩きが施されている。側面は狭端面側から広端面側へのヘラ削り仕上げである。(164・165)はP5掘形底面から出土したコウヤマキと同定された(1)板材である。(164)は長さ29.0cm、幅9.0cm、厚さ4.9cmで、端部を切断した加工痕が明瞭に残る。(165)は長さ35.6cm、幅10.0cm、厚さ4.0cmである。

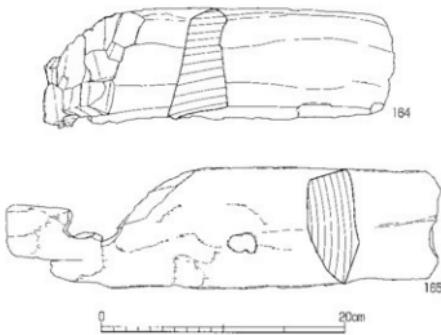
SB12201は(79・80・83)などから9世紀末を前後する時期のものと考えている。



第29図 SB12201



第30図 SB12201出土遺物実測図



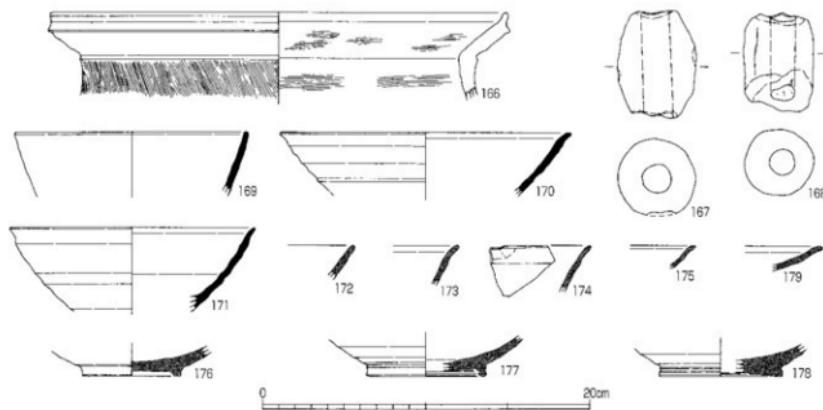
第31図 SB12201-P5出土木製品実測図

SD12204・12205 南北方向に延びる溝状遺構で、SB12201と同一時期のものと考えている。幅0.40m前後、深さ約0.10mで、検出長の中央付近から二股に分岐する。埋土は淡灰白色シルト質細砂である。出土遺物の大半は弥生土器片で、6世紀以降の土師器・須恵器が若干出土している。

第1遺構面の遺構に伴わない遺物

土師器・管状土錘・須恵器・綠釉陶器・灰釉陶器がある。

(166)は口径27.6cmの上師器甕で、体部外面に縦刷毛調整を施す。(167・168)は土師質の管状土錘で、(167)は重さ123.2g、(168)は重さ98.4gである。(169)は口径14.0cmの須恵器壺Bの口縁部。(170)は口径17.6cmの須恵器甕の口縁部で、体部外面下半に回転ヘラ削り調整が施される点が特徴的である。(171)も口径14.9cmの須恵器甕の口縁部で、口縁端部がわずかに外反する。(172～178)は綠釉陶器で、(174)には輪花がある。(176・177)の底部高台は削り出しによる。(178)の底部外面は削り出しによる蛇の目高台である。(179)は灰釉陶器甕の口縁部片。



第32図 第1面遺構に伴わない遺物実測図

小 結

以上のように、第12次調査では、第1遺構面で官衙関連の遺構と推定される平安時代前期の総柱の掘立柱建物1棟が調査区内で取まるように完掘でき、さらにこれを巡ると推定できる柱穴も確認できた。

また、第2遺構面では弥生時代後期末の土器が落ち込み内からまとまって確認できたことが成果として挙げられる。遺構の性格については明確な判断ができるものの、まとまった量の在地産を主体とする庄内式併行期の弥生土器群が確認できた。

註

- (1) 表2の第12次調査分 R52・65・66の資料が該当 パリノ・サーヴェイ株式会社「御蔵遺跡から出土した木製品等の樹種」『御蔵遺跡第4・6・14・32次発掘調査報告書—御荳西地区震災復興土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』 神戸市教育委員会 2001

第5節 第19次調査

はじめに

5丁目北地区第2調査区（第6-2次調査）の西側、第3調査区（第14-21次調査）の南側に隣接する調査区で、2面の遺構面が確認された。

調査は敷地内の建物の建設部分のみにおいて実施した。

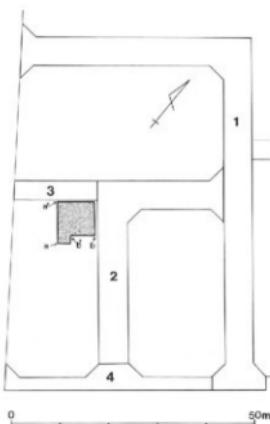
基本層序

詳細は第3回のとおりで、上層より現代盛土（擾乱土含む・図中F）、旧耕土層（図中1～5）、奈良～平安時代遺物包含層（図中A）、洪水砂状堆積層（第1遺構面ベース層・図中6～9）、古墳時代初頭遺物包含層（図中C）の順で、奈良～平安時代遺物包含層の下層上面が第1遺構面、古墳時代初頭遺物包含層の下層上面が第2遺構面となる。現GLからの深さは、第1遺構面が-50～70cm、第2遺構面が-90～-110cmを測る。

第2遺構面ベース層の以下層（図中10～16）については、砂層または砂質土層、あるいはシルト層で、遺構面になりうる層位、遺物を包含する層位は確認されなかった。

第1遺構面

調査区の西端で小規模な溝状遺構（SD19201）を検出したのみである。遺構面を覆う遺物包含層からの出土遺物も少なく、溝状遺構の埋土中からも土器の小片がSD19201より1点出土したのみで、時期、性格等は不明であるものの、過去の周辺調査のデータから、概ね奈良～平安時代に属すると推定される。



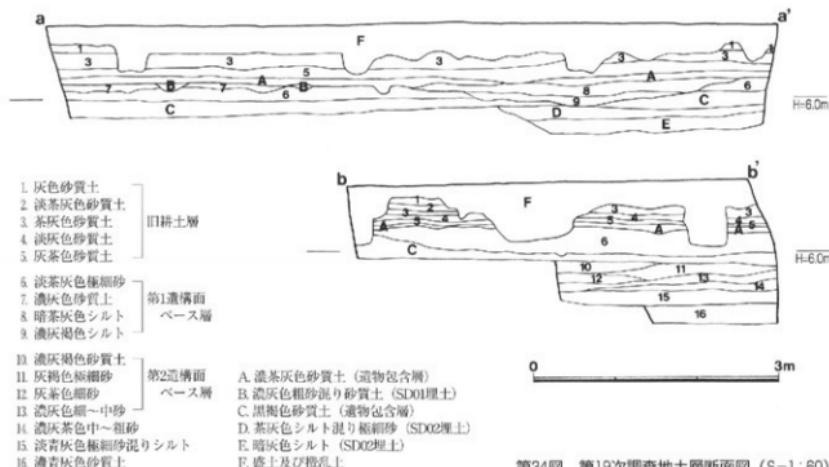
1. 第1調査区 (4-14-1-14-2-14-12次)

2. 第2調査区 (6-2-20-3次)

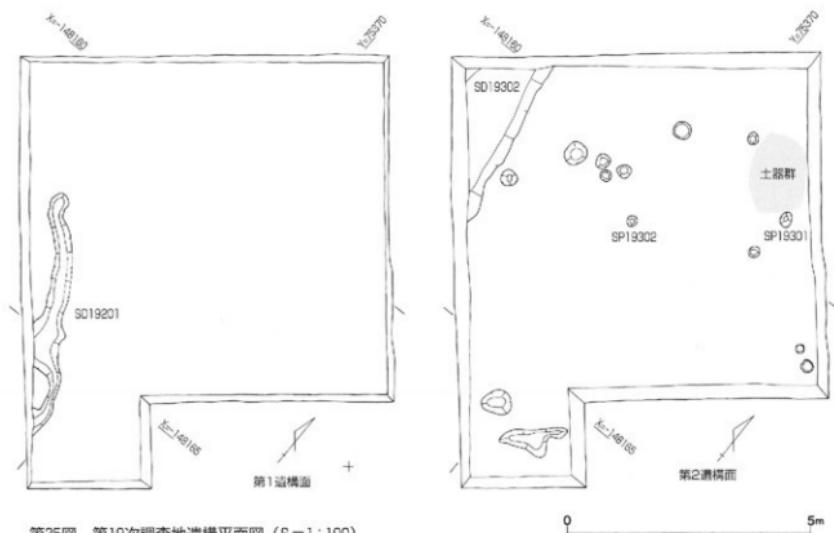
3. 第3調査区 (14-21次)

4. 第4調査区 (6-1-14-17次)

第33図 第19次調査位置図 (S=1:1,000)



第34図 第19次調査地土層断面図 (S=1:60)



第35図 第19次調査地遺構平面図 (S=1:100)

第2遺構面

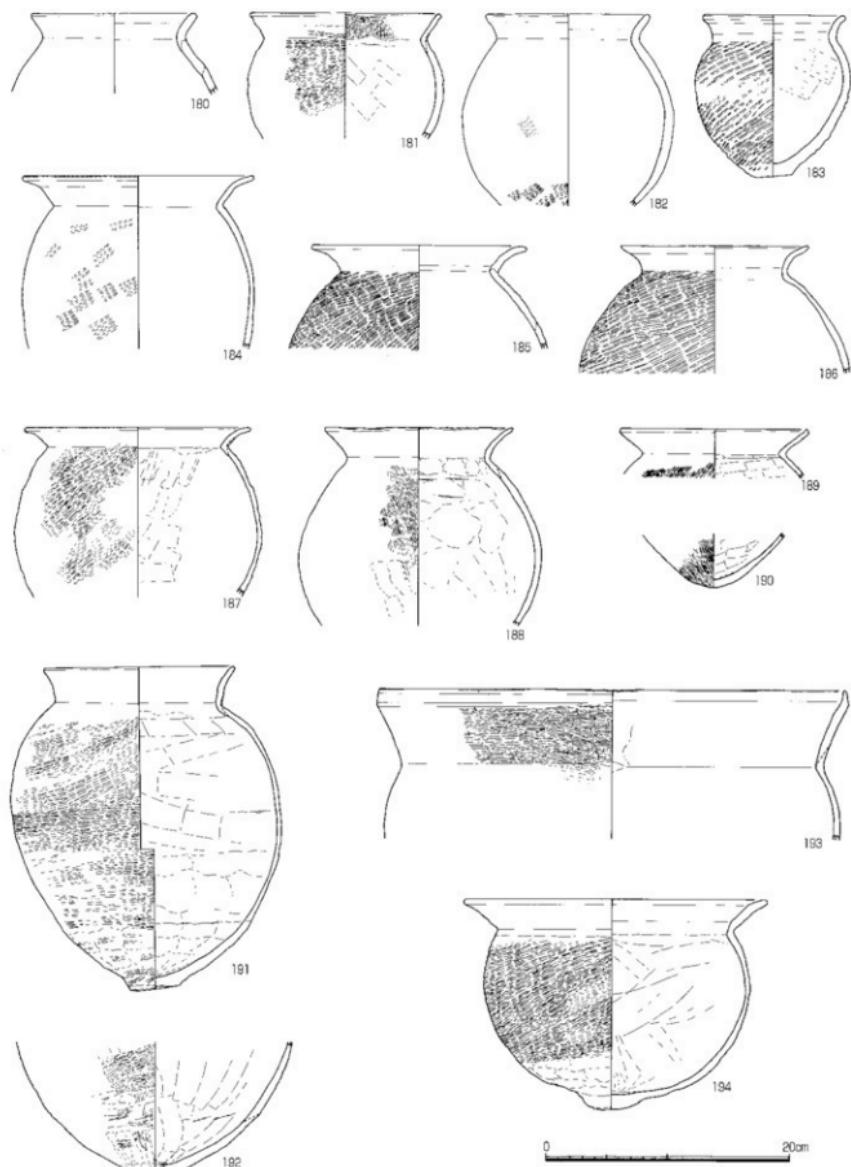
検出された遺構は少なく、溝（SD19302）と小規模なピット（SP19301、19302他）と落ち込みが存在する程度である。SD19302からは古墳時代初頭（庄内併行期）に属する遺物（土器片）が数点出土しているものの、他の遺構からは時期不詳の土器類の小片しか出土していない。

遺構面を覆う遺物包含層からは比較的多くの遺物が出土しており、調査区のやや東寄りの部分で、遺物包含層中において土器群状に上器片が集中する箇所が存在する。これらの土器類も古墳時代初頭（庄内併行期）に属すると考えられるが、しかしながら、遺構等に関わる土器群とは言い難く、遺物包含層中の土器集中部分として捉えておきたい。

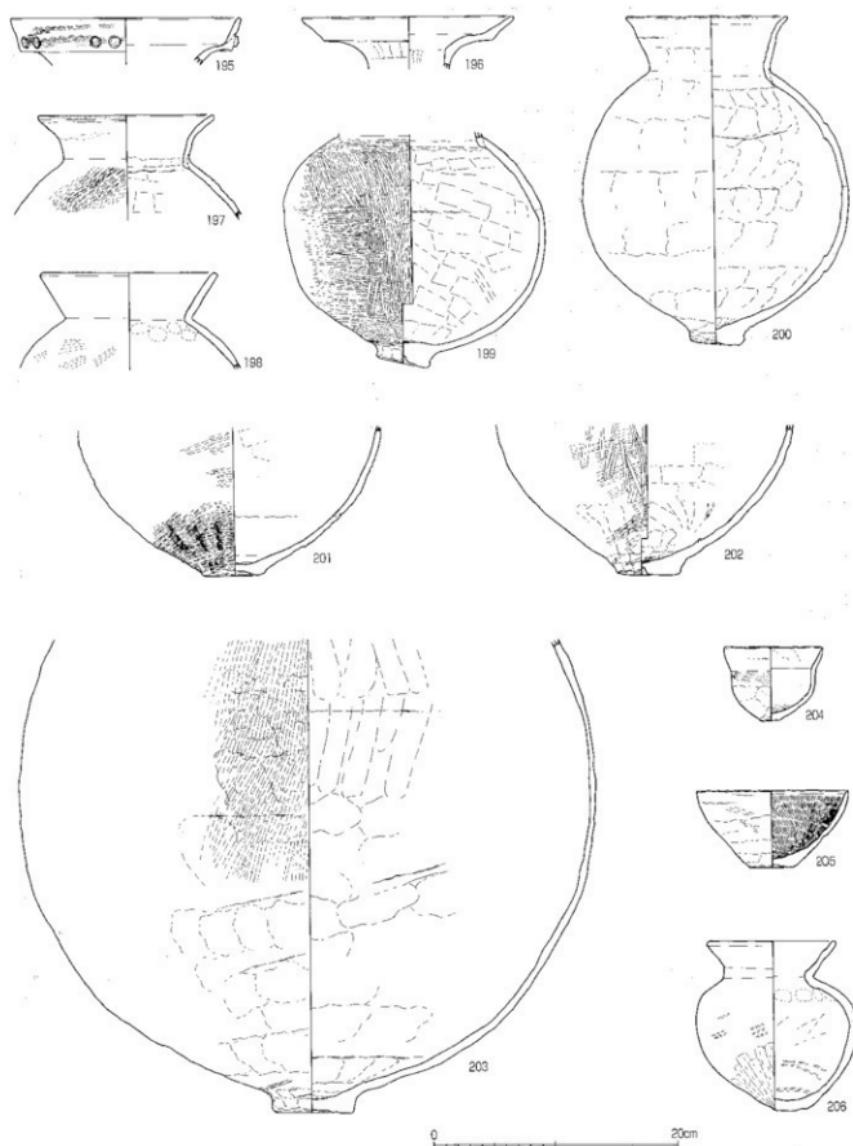
第2遺構面

の遺物 出土遺物の多くが先述の土器群のものである。（180～206）（第36・37図）が土器群出土遺物で、（207、208）（第38図）がそれぞれSD19302、洪沢砂層の出土遺物で、図示した遺物の詳細は、遺物観察表に示すとおりである。以下、概説を記しておく。

土器群出土遺物は、壺、鉢、二重口縁壺、広口壺、小型丸底壺、小型鉢などの器種が確認された。壺は形態的には外面にタタキを施し、口縁部が外反するタイプ（181・184～187）、調整がハケによってなされているタイプ（188）、器壁がやや厚く、口縁端部が丸いタイプ（180・182）、口縁部がやや直口なタイプ（191）、小型のタイプ（183）に概ね分類できるようである。また、（189、190）は胎土に角閃石を含み、色調もチョコレート色を呈することから、河内型庄内壺と考えられ、同地域からの搬入品と推定される。この2点は同一個体である可能性も多い。その他、（184）の口縁端部には、キザミ目が施される。鉢については、（194）は標準的なタイプであると言えるが、（193）は大型で、器面もミガキによって仕上げられており、やや特異なタイプと考えられる。（195、196）は二重口縁壺の口縁部である。（196）



第36図 土器群遺物実測図（1）



第37図 土器群遺物実測図（2）

No.	器種	口径 底径	体部往 來	器高	残存	調整などの特徴	胎土	焼成	色調		
180	甕	13.6 —	—	—	15%	口縁部内外面共ヨコナデ、体部は摩滅	1~3mmの長石・石英・チャート・ クサリ繊を含む	ほぼ良	淡赤茶色		
181	甕	13.6 —	—	—	15%	外面口縁部ヨコナデ、体部3.5条/cm平行タキキ、 内面口縁部12条/cmハケ、体部ナデ	1~3mmの長石・石英・チャート・ クサリ繊を含む	ほぼ良	赤茶色		
182	甕	13.6 —	—	17.4	—	20%	口縁部外面共ヨコナデ、外面体部2.5条/cm 平行タキキ後ナデ消し、内面体部ナデ	1~2mmの長石・石英・チャート・ クサリ繊を含む	やや軟	淡褐色	
183	甕	11.8 3.5	12.8	13.4	85%	口縁部内外面ヨコナデ、外面体部2.5条/cm平行 タキキ、内面体部上位ケズリ、下位ナデ	1~3mmの長石・石英・チャート・ クサリ繊を含む	良	赤色		
184	甕	19.0 —	—	19.0	—	20%	口縁部内外面ヨコナデ、外面体部2.5条/cm平行 タキキ後ナデ消し、内面体部ナデ(摩擦)	1~3mmの長石・石英・チャート・ クサリ繊を含む	やや軟	赤色	
185	甕	17.6 —	—	—	15%	口縁部外面共ヨコナデ、外面体部3条/cm平行 タキキ、内面体部ナデ	1~3mmの長石・石英・チャート・ クサリ繊を含む	良	赤色		
186	甕	15.4 —	—	—	15%	口縁部外面共ヨコナデ、外面体部2.5条/cm 平行タキキ、内面体部ナデ	1~3mmの長石・石英・チャート・ クサリ繊を含む	良	淡黄褐色		
187	甕	18.4 —	—	20.2	—	30%	口縁部外面ヨコナデ、外面体部3条/cm平行 タキキ、内面体部上位ケズリ後ナデ、下位ナデ	1~3mmの長石・石英・チャート・ クサリ繊を含む	ほぼ良	淡赤茶色	
188	甕	15.4 —	—	20.0	—	50%	口縁部内外面共ヨコナデ、外面体部8.5条/cmハケ、 下位ナデ消し、内面体部ナデ	1~3mmの長石・石英・チャート・ クサリ繊を含む	良	淡赤茶色	
189	甕	15.6 —	—	—	5%	口縁部外面共ヨコナデ、外面体部2.5条/cm 平行タキキ、内面体部ケズリ	1mmの長石・微粒の角閃石・雲母 を含む	良	淡褐色		
190	甕	— —	—	—	—	20%	外面5条/cm平行タキキ、内面ケズリ	1mmの長石・微粒の角閃石・雲母 を含む	良	淡褐色	
191	甕	15.4 4.1	—	22.2	26.5	85%	口縁部ヨコナデ、外面体部3.5条/cm平行タキキ 下位ナデ消し、内面体部ケズリ、下位ナデ	1~3mmの長石・石英・チャート・ クサリ繊を含む	やや軟	淡赤茶色	
192	底部	— 3.4	—	—	—	30%	外面2.5条/cm平行タキキ後ナデまたはヘラナデ またはケズリ、内面ケズリ	1~2mmの長石・石英・チャート・ クサリ繊を含む	良	褐色	
193	鉢	38.8 —	—	37.8	—	15%	外向口縁部ミガキ、体部摩滅、内面ナデ	1~2mmの長石・石英・チャート・ クサリ繊を含む	ほぼ良	淡赤茶色	
194	鉢	25.0 4.5	—	21.7	17.2	35%	口縁部外面共ヨコナデ、外面体部2.5条/cm平行 タキキ、下位ナデ、内面体部ナデ、ヘラナデ	1~3mmの長石・石英・チャート・ クサリ繊を含む	ほぼ良	淡赤茶色	
195	壺	19.0 —	—	—	—	5%	内外面共ヨコナデ、但し摩滅のため調整不明瞭	1~2mmの長石・石英・チャート・ クサリ繊を含む	ほぼ良	赤茶色	
196	壺	17.4 —	—	—	—	5%	内外面共ヨコナデ、外面額部上位はユビナデまたは はヘラナデ、摩滅のため調整不明瞭	1~5mmの長石・石英・チャート・ クサリ繊を含む	ほぼ良	淡赤茶色	
197	壺	14.4 —	—	—	—	10%	口縁部内外面共ヨコナデ、外面体部2.5条/cm 平行タキキ、内面体部ナデ	1~2mmの長石・石英・チャート・ クサリ繊、微粒の云母を含む	ほぼ良	淡赤茶色	
198	壺	12.6 —	—	—	—	15%	口縁部内外面共ヨコナデ、外面体部2.5条/cm 平行タキキ後ナデ消し、内面体部ナデ	1~3mmの長石・石英・チャート・ クサリ繊を含む	やや軟	—	
199	壺	— 4.6	—	—	21.5	—	55%	外面ミガキ、内面ケズリ、 但し摩滅のため調整不明瞭	1~3mmの長石・石英・チャート・ クサリ繊を含む	ほぼ良	淡赤茶色
200	壺	13.3 4.5	—	21.9	27.1	50%	口縁部外面共ヨコナデ、外面体部丁寧なナデ、 内面体部やや粗雑なナデ	1~3mmの長石・石英・チャート・ クサリ繊を含む	良	淡赤茶色	
201	壺部	— 5.0	—	24.9	—	30%	外面2.5条/cm平行タキキ中位ミガキ消し、内面体 部中位ケズリ、下位ナデ、摩滅で不明瞭	1~3mmの長石・石英・チャート・ クサリ繊を含む	ほぼ良	淡赤茶色	
202	底部	— 5.3	—	24.5	—	30%	外向2.5条/cm平行タキキ中位ミガキ消し、内面体 部中位ケズリ、下位ナデ、摩滅で不明瞭	1~3mmの長石・石英・チャート・ クサリ繊を含む	ほぼ良	淡赤茶色	
203	壺	— 6.8	—	47.3	—	35%	外面中位ミガキ、下位ミガキ?またはナデ、内面 ナデ、但し摩滅のため調整不明瞭	1~3mmの長石・石英・チャート・ クサリ繊、微粒の雲母を含む	ほぼ良	淡赤茶色	
204	小甕	8.3 1.5	—	7.0	6.1	90%	口縁部外面ナデ、外面体部上位2.5条/cm平行 タキキ、下位ナデまたはヘラナデ(摩滅)	1~3mmの長石・石英・チャート・ クサリ繊を含む	ほぼ良	淡赤褐色	

表7 第19次調査出土遺物観察表

No.	器種	口径 底径	体部仕	器高	残存	調査などの特徴	断土	焼成	色調
205	小鉢	12.5 3.6	-	6.3	100%	外面やや粗雑なナデ、内面8本/cmハケ	1~2mmの長石・石英・チャート・ クサリ繊維を含む	はは良	淡赤褐色
206	壺	10.8 3.2	13.2	14.0	95%	口縁部内外面ヨコナデ、外面部3.5条/cm平行 タタキ後上位ナデ、下位ケズリ、内面ナデ	1~4mmの石英・長石・チャート・ クサリ繊維を含む	良	褐色
207	鉢	18.3 2.8	-	9.0	70%	外面25条/cm平行タタキ一部ナデ消し、 内面ナデ	1~2mmの長石・石英・チャート・ クサリ繊維を含む	はは良	赤褐色
208	壺	13.4 -	20.0	-	20%	口縁部ヨコナデ、外面部7.5条/cm平行タタキ 部ナデ・ハケ消し、下位ハケ、内面ケズリ	微粒の長石・石英・チャート・クサ リ繊維・滑石を含む	はは良	淡灰色

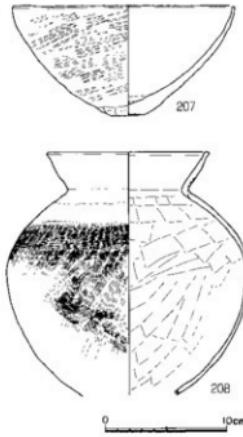
表8 第19次調査出土遺物観察表

は加筋のないシンプルなタイプであるが、(195)は口縁部上位に円形浮文と2段の波状文が施される。(197、198、200)は広口壺で、(197、200)は口縁部がやや外反するが、(198)はほぼ直線的に延びる。(197、198)はタタキを有するが、(200)は丁寧なナデにより仕上げられている。(199)は(200)と同タイプのものと推測されるが、内面にケズリ、外面にミガキが施される点で異なる。(203)は体部上位から口縁部にかけて欠損しているため断定は難しいが、壺形などによく利用される大型壺である可能性が高い。(208)は外面部に細かいタタキを施し、中位から下位にかけてはタタキ後にハケが施される。内面体部はケズリを駆使して器壁を薄く仕上げている。土器群出土遺物に比べると、時期的にやや下るものと考えられ、庄内壺系のタイプと認識できるが、布留期に近い時に比定されるものと推測される。

小 結

この調査区における遺構についての成果は、概して豊富なものとは言い難いが、土器群出土遺物をはじめとする庄内併行期の遺物資料は、大きな成果と言及できるものである。今回確認された土器群出土遺物は、庄内併行期のほぼ中葉（河内地域の編年の中葉Ⅱ後半期から庄内Ⅲの範囲内）に属するものと考えられ、過去の御藏遺跡の調査においても比較的多くみられる時期のものである。その中で特筆すべき遺物は、(189、190)の河内地域からの搬入品と考えられる壺（庄内壺）で、六甲山南麓地域西部（神戸市中央区から須磨区にかけての地域）では、比較的よくみられる遺物である。御藏遺跡やその周辺遺跡の庄内併行期のものと考えられる遺物の中には、他地域からの搬入品や影響を受けたものが比較的多くみられるが、庄内壺を含めた河内地域からの搬入品の割合は高いようである。

また、洪水砂中より出土した(208)は、口縁部等の特徴から布留期に近い時期（庄内併行期終末）に比定できるものと考えられるが、六甲山南麓地域においては同時期の遺構、遺物が少なくはないものの、このタイプの壺は数点しかみられず、遺跡の諸相を検討していく上で、貴重な出土例であると認識できる。その他、(184、197)のように、口縁端部にキザミ目（タタキ原体による調整の可能性もある）を施すものが、御藏遺跡をはじめ、六甲山南麓地域においてはしばしば見られるが、管見では新湊川（旧苅藻川）における比率がやや高いように見受けられる。

第38図 SD19302及び洪水砂層
出土遺物実測図

第6節 第22次調査

はじめに

この調査は、個人住宅の建築工事に伴うものである。

調査前の状況は、家屋が除却された更地になっており、現地表高は6.7m前後である。

基礎杭打設によって遺構が破壊される部分、約24mの発掘調査を行った。

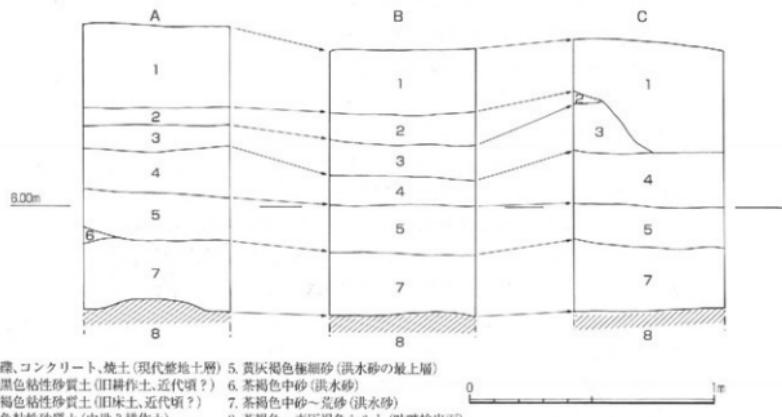


挿図写真1
調査前の状況

基本層序

整地土層の下に耕作土（淡黒色粘性砂質土）、床土（黄褐色粘性砂質土）、中世頃の耕作土と思われる灰色粘性砂質土の堆積層があり、その下に奈良時代の土器を含む暗褐色粘質土が局部的に薄く堆積するが、調査区のほとんどは黄灰褐色極細砂～茶褐色粗砂で構成される洪水砂（層厚約40cm）で覆われている。砂層下の茶褐色～青灰褐色シルト面で、遺構（畦畔）が検出される。

現況地表面から茶褐色～青灰褐色シルトまでは、約1.1mの深さがある。畦畔検出面の標高は約5.6mである。



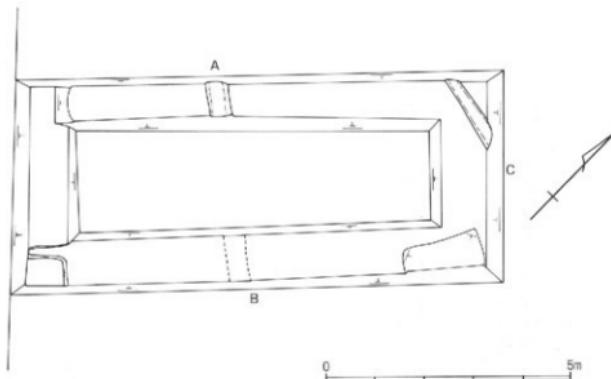
第39図 調査区土層柱状断面図



挿図写真2
調査区北壁の
土層堆積状況

検出遺構

畦畔状の高まりが、2条確認された。幅30~50cm、高さ約3~5cmほどで、遺存状態は悪い。あぜの方向は東西、北西~南東の2方向があるが、狭い範囲の調査のため、水田の区画、形状等は判らない。



第40図 調査区平面図

小 結

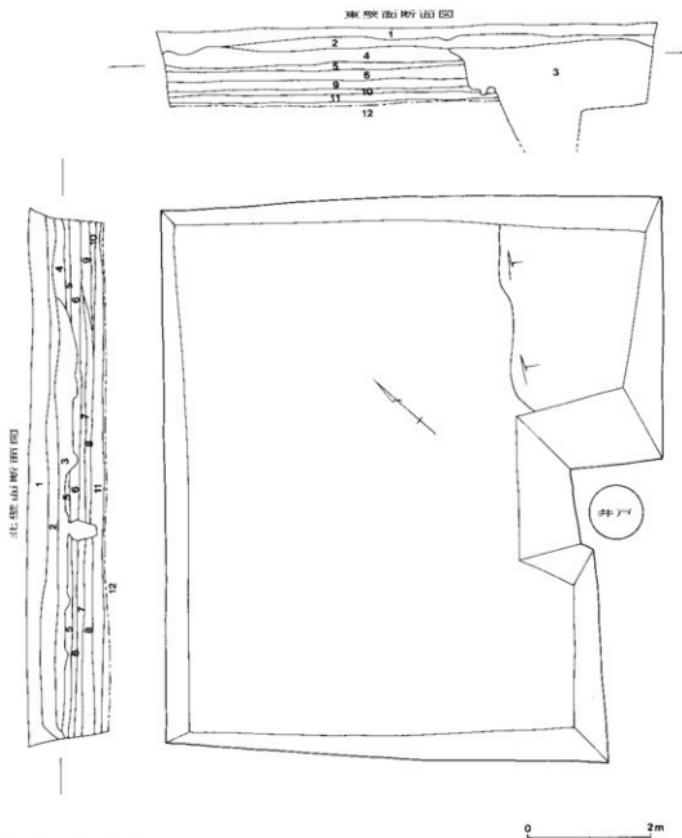
今回の調査では、水田畦畔とみられるあぜ状の高まりが2条確認された。当該層から遺物は出土しなかったが、周辺の調査成果からみて、弥生時代末期~古墳時代初頭頃の水田遺構と思われる。このことから、今回の調査地点は、茹藻川によって形成された後背湿地の部分にあたると判断される。

第7節 第24次調査

はじめに 店舗付住宅の内建工事に伴い工事により影響を及ぼす範囲を対象に発掘調査を実施した。

基本層序 現況GL-30~60cmまでは盛土及び旧耕土である。その下層GL-130cmまで淡墨灰色粘質土、淡黄灰色粘性砂質土、乳茶灰色粘性砂質土、濁灰褐色砂質土、乳黃白色粘質土、黒褐色粘性砂質土の層序となる。

調査内容 遺物は、乳茶灰色粘性砂質土で土師質の小破片3点と黒褐色粘性砂質土から上師質の小破片1点が出土したのみであった。遺構は確認されなかった。乳茶灰色粘性砂質土は、土質から耕作土と思われるが畦畔などは検出されなかった。当地域は、御藏遺跡の北端にあたり、集落域から後背湿地へとつながる場所にあたると考えられる。



第41図 遺構平面図

第8節 第43次調査

はじめに

第43次調査は個人住宅建設に伴い、工事掘削による影響を受ける範囲について、発掘調査を実施した。

基本層序

基本層序は近代から現代にかけての整地、盛土層の下層は旧耕土層及び床土層であり、その下層は砂層及びシルト層の交互堆積層であり、遺構面は存在しなかった。

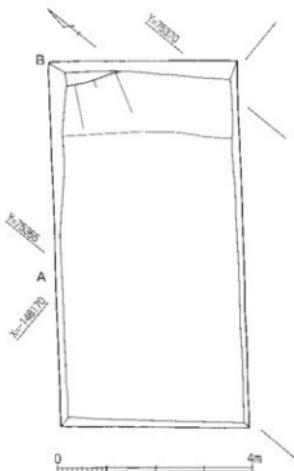
調査概要

調査区内のほぼ全域が、砂層及びシルト層の交互堆積層であったが、北端隅付近で、地山層の立ち上がりを確認した。この堆積状況から自然河道及び北側の片を検出したものと考えられる。

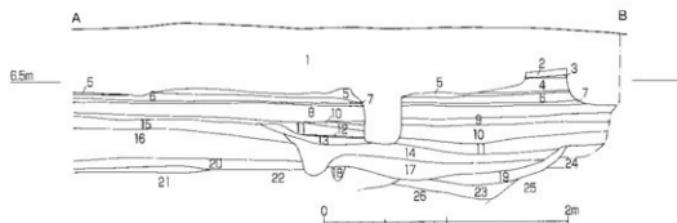
調査区の東側では、旧耕土層を除去後に、溝状にシルト層の広が

りが検出されたが、洪水により河道が埋没後に、低い部分が湿地状の様相を呈していたものと推定される。

東側から落ち込む地山層の付近では、上部から流入したものと推定される庄内期の遺物が比較的まとまって出土した。



第42図 調査区平面図



- | | | |
|------------|---------------|---------------|
| 1. 盛土 | 10. 暗灰褐色砂質シルト | 19. 暗灰褐色砂泥粘質土 |
| 2. 灰色砂質シルト | 11. 黒褐色シルト | 20. 明茶褐色細砂 |
| 3. 黄褐色シルト | 12. 灰褐色砂質シルト | 21. 明緑灰色砂質シルト |
| 4. 灰黄色シルト | 13. 淡灰褐色微纖砂 | 22. 暗灰褐色砂泥粘質土 |
| 5. 黄褐色シルト | 14. 暗灰褐色微纖砂 | 23. 灰色砂泥粘質土 |
| 6. 淡灰褐色シルト | 15. 黄灰褐色微纖砂 | 24. 淡灰黄色砂質シルト |
| 7. 灰黄色シルト | 16. 淡褐色微纖砂 | 25. 暗灰褐色砂泥粘質土 |
| 8. 灰黄色シルト | 17. 暗褐色砂泥粘質土 | 26. 暗灰黄色粘質土 |
| 9. 灰色シルト | 18. 淡灰褐色細砂 | |

第43図 西壁土層断面図

出土遺物

今回の調査における出土遺物は、すべて河道埋土内からの出土であつた。これら、出土遺物の大半は微細な小破片であった。その中で図示できたものが、(209～213)である。

(209)は黄灰褐色微細砂(15層)から出土した須恵器の坏蓋である。TK217並行期のものと考えられる。

小 結

(210～213)は、暗灰褐色砂混粘質土(19層)から出土した上師器である。

(210)は広口壺の口縁部である。

口縁は大きく水平近くまでひろがる。口縁外面には、弱い櫛描による波状文が施されている。(211)は壺の口縁部である。頸部から外反しながら立ち上がり、端部はわずかにつまみ上げている、(212)と(213)は、壺の底部である。(212)の底部外面は中央部がくぼむ。(213)の体部外面には、右上がりのタタキが施されている。

今回の調査では、調査区内は自然河道内に位置しており、遺構面は存在しなかつたが、御蔵遺跡全体を考える上で貴重なデータを提供した。平成10年から開始された区画街路部分の発掘調査では5丁目北地⁽¹⁾、6丁目北地区共、遺構の存在が確認されている。当調査地の西側に接する5丁目北地区第3調査区では河道は確認されておらず、わずかに第4調査区の西端で、河道の一部が検出されていることから、調査区の西側の道路にはほぼ並行する様に、蛇行しながら南流しているものと推定される。

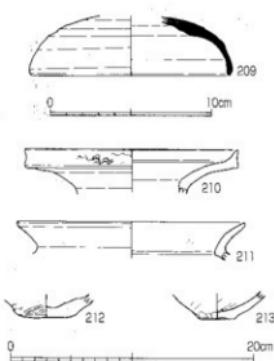
旧耕土層下の黄灰褐色微細砂層からは、中世の遺物も出土しており、洪水による埋没時期は中世以降であり、近世までには埋没し、以後水田化したものと考えられる。

註

- (1) 安田滋・富山直人・石島三和編『御蔵遺跡第4・6・14・32次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2001
- (2) 安田滋編「5丁目北地区の調査」前掲書 1
- (3) 前掲書 2

参考文献

- 田辺昭三『須恵器大成』角川書店1981
黒田恭正『長田神社境内遺跡発掘調査概報』神戸市教育委員会1990



第44図 第43次調査出土遺物実測図

第3章 5丁目南地区の調査

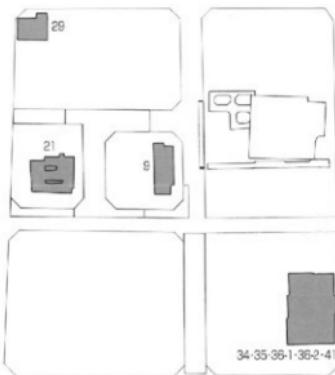
第1節 調査区の設定

5丁目北地区については、区画整理の進展とともに、3カ年の間に、調査の申請順に7件の調査を実施している。この調査において、調査の事業主体ごとに調査次数を設定している。今回の報告では、基本的に隣接している調査に関しては、1調査区として掲載することとし、地区名には、調査次数を列挙することとした。

なお、土地区画整理事業にともなう発掘調査報告書において、調査次数の変更が行われており、これと整合性を持たすために、今回も調査次数の変更作業を行っている。

以下に調査次数の変更について、対応を示す。

本報告調査次数	旧調査次数	年報告掲載次数
21次	26次	26次
29次	34次	34次
34次	34次	34次
35次	35次	35次
36-1次	36-1次	36-1次
36-2次	36-2次	36-2次
41次	41次	41次



第45図 5丁目南地区調査区位置図

第2節 調査の概要

御蔵5丁目地区は、沖積地に形成された微高地と後背湿地が混在する範囲に位置する。地勢は北から南に緩やかに下がる斜面地であり、御蔵6丁目との境付近において、1mほどの急激な段差が生じている。御蔵5丁目南地区における主な遺構としては、掘立柱建物がある。この他に、遺物としては布留期初頭に相当する時期の土器が、土器溜まり内から多量に出土しており、良好な資料を提供している。

なお、大別すると下記のような基本層序となる。

1. 近現代の盛土層
2. 淡黄灰色細砂層（中世後期～近世の旧耕上層）
3. 灰色シルト層（奈良時代～平安時代の遺物包含層）
4. 黒褐色シルト層（奈良時代～平安時代の遺構面・弥生時代後期末の遺物包含層）
5. 乳褐色粘土～暗褐色粗砂層（第2遺構面）

第3節 第21次調査

はじめに

店舗付住宅の再建工事に伴い工事により影響を及ぼす範囲を対象に発掘調査を実施した。

基本層序

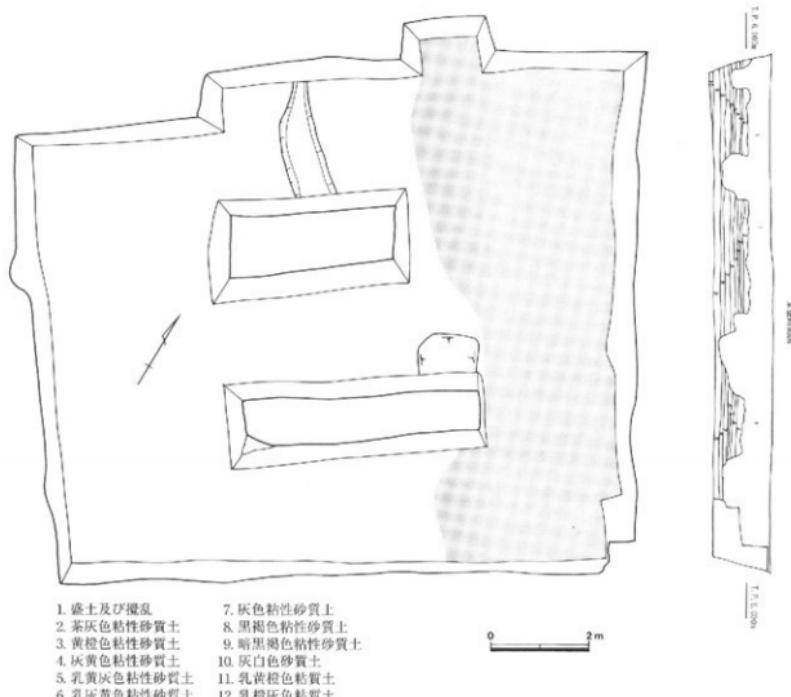
現況GL-80cm (T.P.6,000m) までは盛土及び旧耕土である。その下層に10cm幅で中世から飛鳥時代の遺物包含層である灰色粘性砂質土、第1遺構面のベースであり庄内～布留期の遺物包含層である黒褐色粘性砂質土、第2遺構面のベースとなる暗黒褐色粘性砂質土の層序となる。

第1遺構面

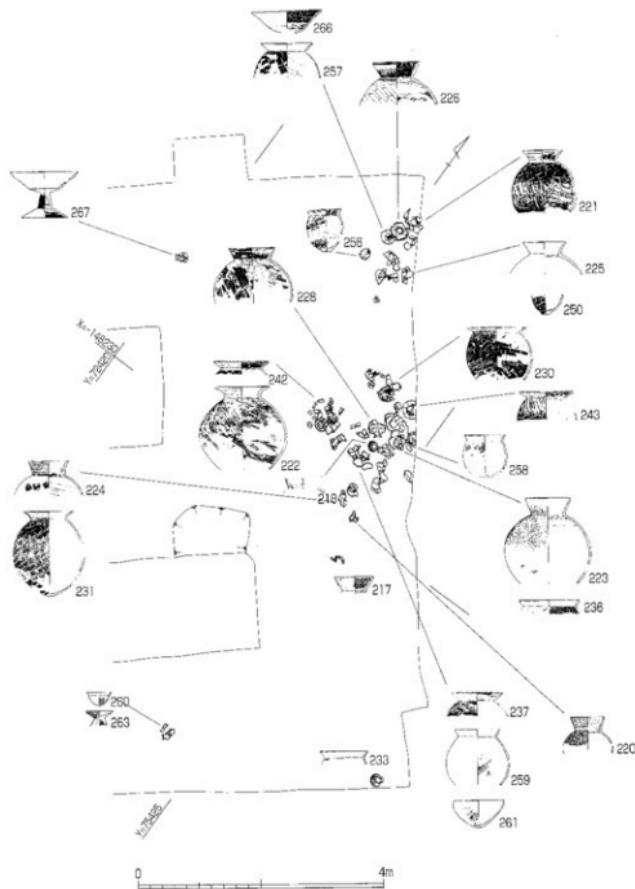
調査区の北半に北西方向にのびる幅80cm、深さ10cmの溝1条を検出した。上層観察から中世から飛鳥時代には耕作地として利用されていたと考えられる。

第2遺構面

調査区の東端に南北方向幅一面に庄内～布留期の土器溜まりを検出した。その他の遺構は検出されなかった。地形は西方への下る緩斜面地であり、当調査地西側の一段下がった水田域と北東方向に想定される集落域との中间地帯に当たると考えられる。



第46図 第21次調査平面図及び断面図



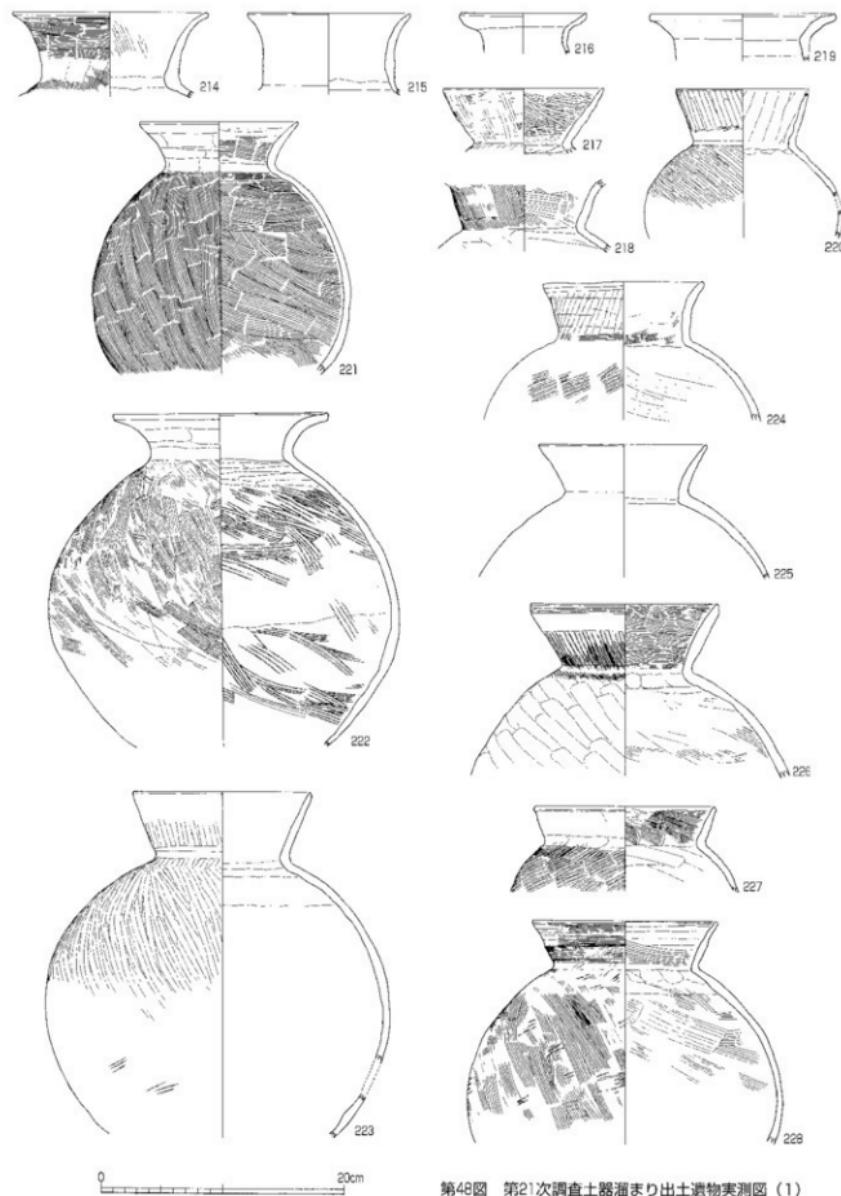
第47図 第21次調査土器溜まり遺物出土状況

土器溜まり 出土遺物

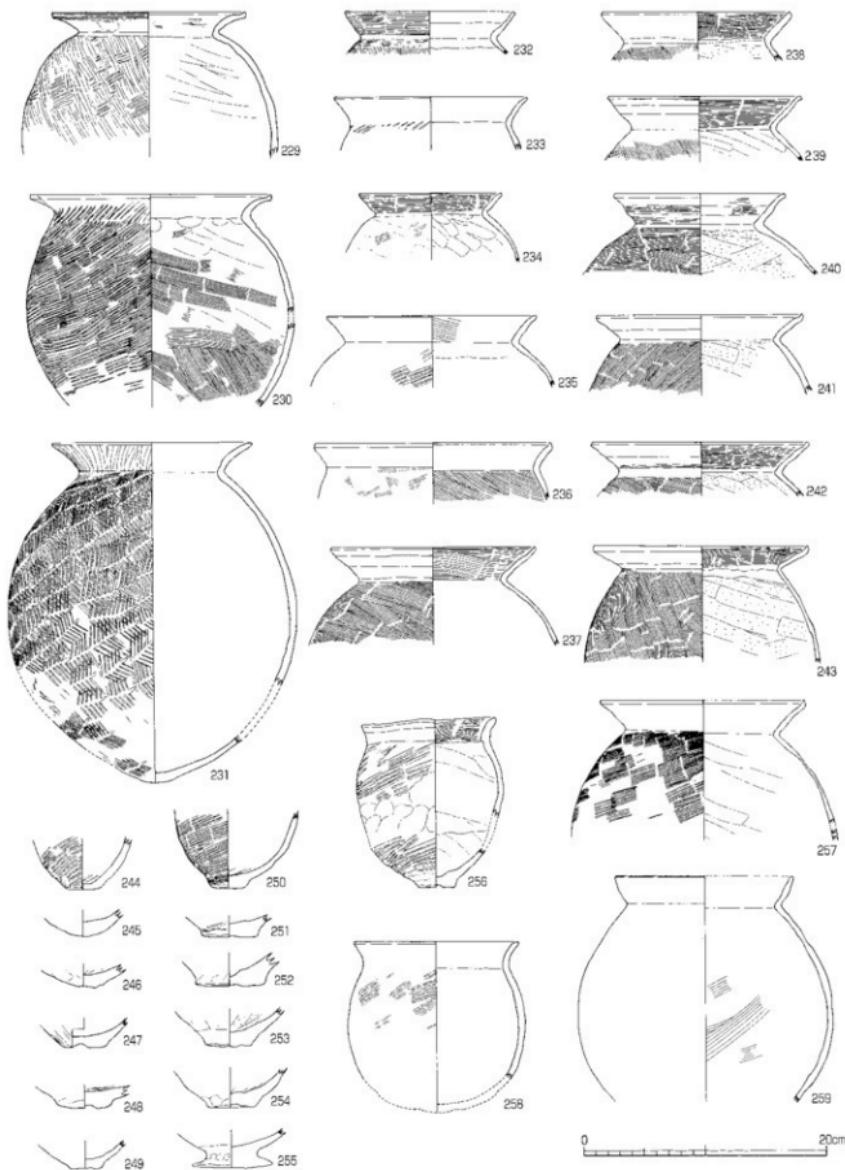
土器溜まりからの出土遺物は、良好な資料を得ることができた。

御蔵道跡では、震災復興区画整理事業に伴う発掘調査で、御苦西地区の5丁目北地区及び5丁目南地区、5丁目北地区における社屋建設に伴う発掘調査において、弥生時代末～古墳時代初頭にかけての遺構、遺物が確認されている。全体から見た様相については、まとめの項に譲るとして、ここでは隣接地である5丁目南地区第2調査区の出土遺物との関連について述べたいと思う。

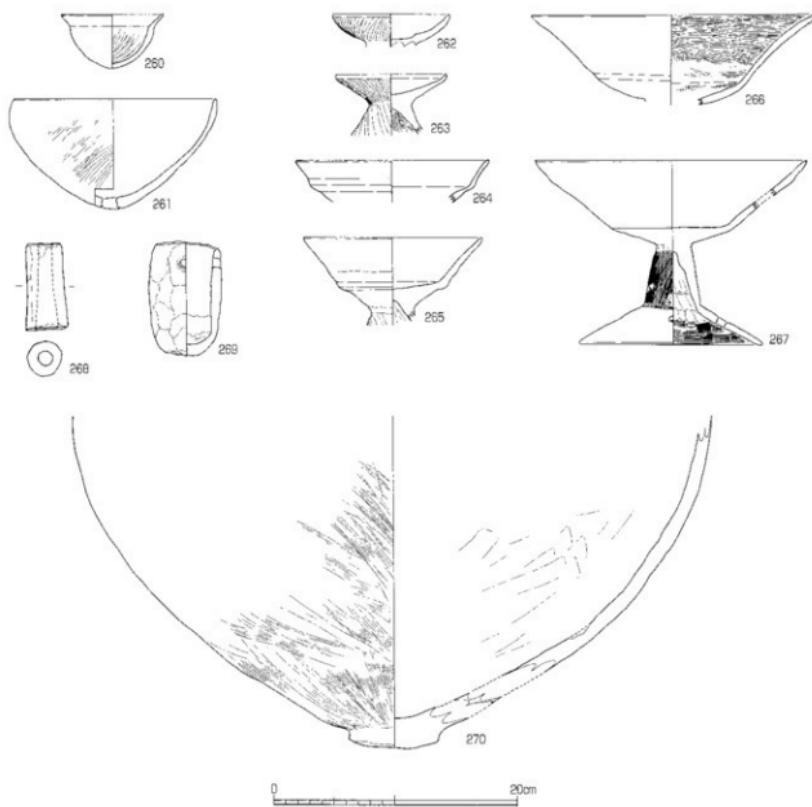
5丁目南地区的調査ではSK301から弥生時代最終末、土器溜まりから庄内並行期、



第48図 第21次調査土器満まり出土遺物実測図（1）



第49図 第21次調査土器類より出土遺物実測図(2)



第50図 第21次調査土器満まり出土遺物実測図(3)

SX301から布留式並行期の遺物が出土している。⁽³⁾土器満まり及びSX301の出土遺物と、今回調査の出土遺物を比較すると、甕の外面調整のタタキ後にハケを用いたり、球形化のすくんだ体部などの共通点から、両者はほぼ同時期の一群として捉えられるものと考えられる。

壺は(214、215、221)のような広口壺、(217、218、220、223、225、226)のような短頸の直口壺、(216)のような受口状の様相を呈する短頸壺などが存在する。外面調整は(224)のようにタタキを施すものも含まれる。

甕については、在地系の胎土のもの以外に、(232、238~244、245)のように胎土中に角閃石や雲母を含む、いわゆる「生駒西麓産」の河内系の甕も存在する、これらは(245)のように細かな右上がりタタキを外面調整に施す庄内式のものから、(238~242)のように、外面がハケメ調整で内面にヘラケズリを施し、口縁部が内消し、口縁部と体部の接点にナ

No.	器種	口径 底径	体部 器高	残存	調整などの著微	胎土	焼成	色調
214	壺	16.0	-	6.7	10	外面10条/cmのハケ、内面摩滅、わざかにヘラミガキが確認できる	1~2mmのチャート・石英・クサリ繩を含む	良 淡褐色
215	壺	13.4	-	6.7	10	内外面ともに摩滅	1~2mmのチャート・石英・クサリ繩を含む	良 暗褐色
216	壺	10.1	-	3.5	20	内外面ともに摩滅	1mm人のチャート・石英、1~2.5mm人のクサリ繩を含む	良 明黄褐色
217	壺	13.0	-	5.5	10	外面10条/cmハケ後、まばらなヘラミガキ、内面ハケ後、ヘラミガキ	1~2mmのチャート・石英・クサリ繩を含む	良 淡褐色
218	壺	-	-	6.0	15	外面7条/cmハケ、内面6条/cmハケ	1mm人のチャート・石英・長石・クサリ繩を含む	良 淡褐色
219	壺	15.2	-	3.8	10	内外面ともに摩滅	1~2mmのチャート・石英・クサリ繩を含む	良 乳褐色
220	壺	11.0	16.3	12.3	20	体部外面ヘラミガキ、内面摩滅、口縁部外面ヘラミガキ、内面板ナデ	1mmの石英・チャート・クサリ繩を含む	良 淡茶褐色
221	壺	13.0	21.3	20.8	40	外面9条/cmのハケ、内面7条/cmハケ	1~2mmのチャート・石英・クサリ繩を含む	良 淡黃褐色
222	壺	17.6	28.8	27.5	70	体部外面3条/cmのタキ後後、8条/cmのハケ、内面5条/cmのハケ、口縁部ヨコナデ	1~2mmのチャート・石英・クサリ繩を含む	良 乳褐色
223	壺	14.4	28.3	28.4	40	体部外面ヘラミガキ、下部にわざかにタキ内面は字痕、口縁部ヘラミガキ	0.5~1mmのチャート・石英・長石・クサリ繩を含む	良 淡褐色
224	壺	13.0	-	11.5	20	体部外面5条/cmのタキ後、内面ハラケリ、内面7条/cmハケ	1~2mmのチャート・石英・長石・クサリ繩を含む	良 淡褐色
225	壺	13.6	-	11.0	15	内外面ともに摩滅	2mm前後のチャート・石英・長石・クサリ繩を含む	良 淡褐色
226	壺	15.3	-	14.3	40	体部外面10条/cmのタキ後、内面ハケ、口縁部外面4条/cmハケ、内面8条/cmハケ	1~2mmのチャート・石英・長石・クサリ繩を含む	良 乳褐色
227	壺	14.6	-	7.0	10	体部外向3条/cmのタキ後、内面ハラケリ、口縁部外板ナデ、内面10条/cmハケ	1~2のチャート・石英・長石・クサリ繩を含む	良 乳褐色
228	壺	15.0	26.0	18.2	20	体部外面5条/cmのタキ後8条/cmハケ、内面6条/cm、口縁部外5条/cmハケ、内面7条/cmハケ	1~2mmのチャート・石英・長石・クサリ繩を含む	良 乳褐色
229	壺	16.0	21.0	11.7	10	体部外向5条/cmのタキ後、ヘラミガキ、内面ハラケリ、口縁部ヨコナデ	1mm前後のチャート・石英・クサリ繩を含む	良 淡褐色
230	壺	19.8	21.0	17.5	30	体部外面4条/cmのタキ後、内面9条/cmハケ	1~2mmのチャート・石英・長石・クサリ繩を含む	良 淡褐色
231	壺	16.4	23.7	28.0	80	体部外面失矢タキ後、内面摩滅、口縁部ハケ	2~3mmのチャート・石英・長石・クサリ繩を含む	良 淡黃褐色
232	壺	14.0	-	3.4	15	体部外面9条/cmのハケ、内面ナデ、口縁部外面9条/cmのハケ、内面ナデ	0.5~1mmのチャート・石英・角閃石・雲母をわずかに含む	良 淡暗褐色
233	壺	16.0	-	4.3	10	内外面ともに摩滅、外面にわざかにタキが確認できる	1mm前後のチャート・石英・クサリ繩を含む	良 淡黃褐色
234	壺	11.8	-	5.7	20	体部外面摩滅タキ後、ハラケリ、内面ハラケリ、口縁部外8条/cmハケ、内面7条/cmハケ	0.5~3mmのチャート・石英・クサリ繩を含む	良 淡茶褐色
235	壺	17.0	-	5.9	10	体部外面9条/cmのタキ後、内面摩滅、口縁部外9条/cmのハケ、内面ナデ	1~3mmのチャート・石英・長石・クサリ繩を含む	良 淡褐色
236	壺	20.4	-	4.5	10	体部外面3条/cm?のタキ後後、7条/cmハケ、内面7条/cmハケ、口縁部ナデ	1~3mmのチャート・石英・クサリ繩を含む	良 淡褐色
237	壺	16.8	-	8.0	15	体部外面9条/cmのハケ、内面摩滅、口縁部外9条/cmのハケ、内面ナデ/cmハケ	1~2mmのチャート・石英・長石・クサリ繩を含む	良 淡褐色
238	壺	15.6	-	3.9	15	体部外面11条/cmのハケ、内面ハラケリ、口縁部9条/cmハケ	0.5mmのチャート・石英・角閃石・雲母をわずかに含む	良 淡褐色
239	壺	17.0	-	5.2	10	体部外面8条/cmハケ、内面ハケ、口縁部外9条/cmナデ	1mmのチャート・石英・クサリ繩・わずかに雲母を含む	良 淡黒褐色
240	壺	14.2	-	6.6	10	体部外面タキ後後、1~2条/cmのハケ、内面ハラケリ	1~2mmのチャート・石英・長石・クサリ繩・わずかに雲母を含む	良 淡褐色
241	壺	17.0	-	6.2	15	体部外面10条/cmのハケ、内面ハラケリ、口縁部ハケ	1~2mmのチャート・石英・角閃石・雲母を含む	良 乳褐色
242	壺	17.8	-	4.5	5	体部外面8条/cmのハケ、内面ハラケリ、口縁部ハケ	1~2mmのチャート・石英・雲母を含む	良 淡褐色
243	壺	19.6	-	4.7	15	体部外面10条/cmのハケ、内面ハラケリ、口縁部外9条/cmナデ	1~2mmのチャート・石英・長石・クサリ繩・雲母を含む	良 淡褐色
244	壺	11.2	28	14.0	60	体部外面4条/cmのタキ後、内面ハケ、口縁部外9条/cmナデ	0.5~1mmのチャート・石英・クサリ繩・雲母を含む	良 淡褐色
245	壺	16.8	-	16.5	25	体部外面5条/cmタキ後、内面ハラケリ、口縁部ケズリ	1~3mmのチャート・石英・角閃石・雲母を含む	良 淡茶褐色
246	壺	3.1	-	4.2	15	体部外面4条/cmのタキ後、内面ハラケリ	1~2mmのチャート・石英・長石・クサリ繩を含む	良 淡褐色

表9 第21次調査土器溜まり出土土器観察表(1)

No.	器種	口径 底径	体部径	器高	残存	調整などの特徴	胎土	焼成 良	色調	
247	甕	-	2.2	10	内外面ともに摩滅	1~2 mmのチャート・石英・長石・ クサリ繊を含む	良	淡褐色		
248	甕	1.0	-	1.9	10	内外面ともにヘラケズリ	1 mm前後のチャート・石英・長石・ クサリ繊を含む	良	淡褐色	
249	甕	1.5	-	3.4	10	内外面ともにヘラミガキ	1~2 mmのチャート・石英・長石・ クサリ繊を含む	良	淡褐色	
250	甕	2.0	-	1.9	10	内外面ともにハケ	1~2 mmのチャート・石英・長石・ クサリ繊を含む	良	淡褐色	
251	甕	2.1	-	2.2	10	内外面ともに摩滅	1~2 mmのチャート・石英・タサ リ繊を含む	良	淡褐色	
252	甕	2.2	-	6.4	15	体部外面5条/cmのタタキ、内面ヘラケズリ	1~2 mmのチャート・石英・クサ リ繊を含む	良	淡褐色	
253	甕	4.4	-	1.6	10	外面タタキ、内面摩滅	1~3 mmのチャート・石英・長石・ クサリ繊を含む	良	淡褐色	
254	甕	5.5	-	2.7	10	内外面ともに摩滅	1~3 mmのチャート・石英・長石・ クサリ繊を含む	良	淡褐色	
255	甕	3.8	-	3.0	10	外面ハケ、内面ヘラケズリ	1~2 mmのチャート・石英・長石・ クサリ繊を含む	良	淡褐色	
256	甕	3.8	-	3.2	10	外面摩滅、内面ハケ	1~2 mmのチャート・石英・長石・ クサリ繊を含む	良	乳褐色	
257	甕	6.6	-	3.0	85	外面ハケ? 内面ヘラケズリ	1~2 mmのチャート・石英・長石・ クサリ繊を含む	良	淡褐色	
258	甕	13.6	14.6	13.8	30	外面4条/cmタタキ、内面摩滅	1~3 mmのチャート・石英・長石・ クサリ繊を含む	良	淡褐色	
259	甕	14.5	21.0	18.7	15	外面摩滅、内面ハケ	1~3 mmのチャート・石英・長石・ クサリ繊を含む	良	淡褐色	
260	小型甕	-	8.4	-	4.5	30	外面摩滅、内面ヘラミガキ	1~2 mmのチャート・石英を含む	良	淡褐色
261	鉢	16.5	16.8	9.1	90	内外面ともに摩滅、外面上にわずかにヘラミガキが 確認できる、底部穿孔	1~3 mmのチャート・石英・長石・ クサリ繊を多く含む	良	淡褐色	
262	小形 器台	9.6	-	2.5	15	外面ヘラミガキ、内面摩滅	1 mmのチャート・石英・長石・ク サリ繊を含む	良	淡褐色	
263	小形 器台	9.0	-	5.1	40	外面ヘラミガキ、内面摩滅、脚部内面ハケ	1~2 mmのチャート・石英・長石・ クサリ繊を含む	良	淡褐色	
264	器台	16.0	-	3.5	10	内外面ともに摩滅	1~2 mmのチャート・石英・タサ リ繊を含む	良	淡褐色	
265	器台	14.6	-	7.2	20	内外面ともに摩滅、脚部ヘラケズリ	1 mm前後のチャート・石英・クサ リ繊を含む	良	淡褐色	
266	壺	23.2	-	7.0	50	外面摩滅、内面ヘラミガキ	1~2 mmのチャート・石英・長石・ クサリ繊を含む	良	淡褐色	
267	高壺	22.5	-	15.2	40	体部摩滅、脚部外面ヘラケズリ後、13/cmハケ、 底部内面1/cmハケ、4ヶ所穿孔?	1 mmのチャート・石英・クサリ繊 をわずかに含む	良	淡褐色	
268	片状 土錐	15.1	-	3.4	7.2	90	棒状のものに粘土を巻きつけて成形、ナサによる 仕上げ	1 mm前後のチャート・石英・クサ リ繊を含む	良	淡褐色
269	瓶	4.9	-	6.0	9.4	完形	手づくね成形、ユビナデ	1~2 mmのチャート・石英・クサ リ繊を含む	良	淡赤茶色
270	甕	-	52.2	22.3	50	体部外面10条/cmのハケ、内面ヘラケズリ	1~2 mmのチャート・石英、0.5~ 2 mmのクサリ繊を含む	良	淡褐色	

表10 第21次調査土器溜まり出土土器観察表(2)

(5)
デにより成形される布留式影響の庄内甕として捉えられる一群や、(232)のように布留式に含まれる特徴をもつものまでが存在し、在地系のものと考えられる(244)のような右上がりタタキによる外面調整、ヘラケズリによる内面調整の庄内式併行期の特徴を示すものから、(245)のようにまばらなタタキを施した後、ハケメによりスリ消すもの、(259)のように布留式の特徴をもつものまで時期差がみられる。

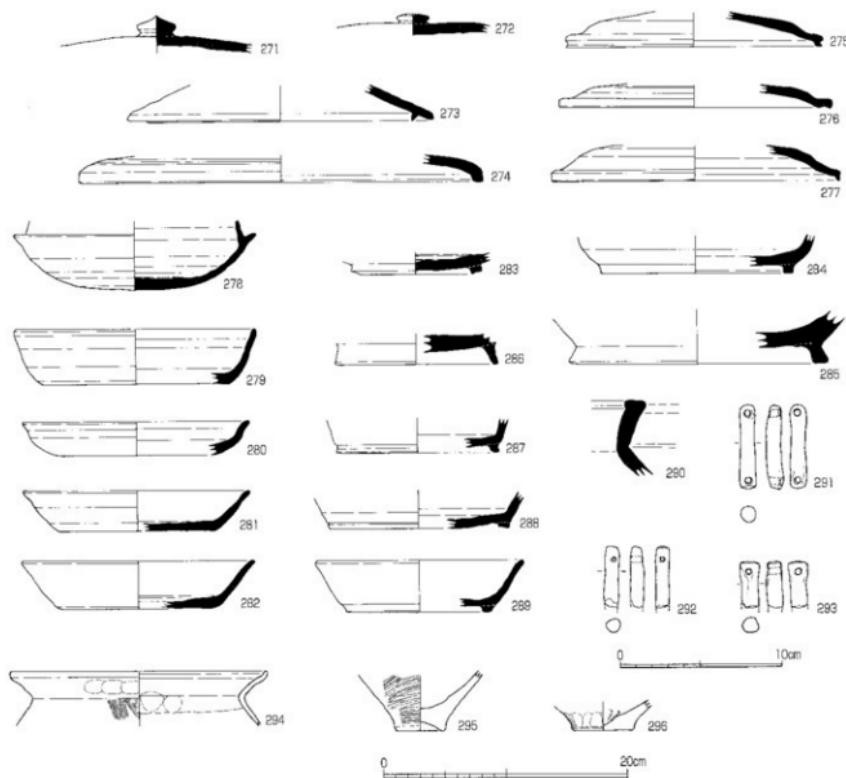
この他、特徴的なものとして、(231)は欠羽タタキを施したもので、綾杉文タタキなどとも呼称されるものである。神戸市内ではこれまでに兵庫区・長田区上沢遺跡、長田区長田神社境内遺跡、西区日輪寺遺跡において出土例があり、兵庫県内では芦屋市月若遺跡、姫路市长越遺跡、蘿野市北山遺跡などから類例がある。他の出土例でも全体からの割合が

非常に少ないものであるが、器形の分かる上沢、日輪寺、北山例と比較すると、前3例が平底で弥生型（V様式系）であるのに対して、今回の例は口縁部が「くの字」形で、体部はやや卵型であるが、底部は丸底化が進み、わずかに突出が認められる程度である。やや新しい傾向を示していると考えられる。

また、(270)は口縁部が小破片であるため図示はできなかったが、受口状の口縁部を持つもので、胎土は淡褐色（チョコレート色に近い）で四国からの搬入品と考えられる。

小型丸底鉢、鉢、小型器台はヘラミガキによる外面調整で、器台は複合口縁をなすものである。高坏は(266)のようにやや有稜の名残を残すものと、(267)のように直線的に広がる体部と脚部から、屈曲して広がる裾部を有するものが存在する。

これら出土遺物は庄内式併用期から布留式にかけての様相を示しており、隣接する5丁目南地区第2調査区の土器溜まりの前後からSX301とほぼ同時期頃の時期が考えられる。



第51図 第21次調査包含層出土遺物実測図

遺物包含層である灰褐色粘性砂質土からも、弥生時代末～平安時代にかけての遺物が出土した。これら出土遺物の中から、図化することができたのが(271～296)である。(271～291)は須恵器、(295～297)は土師器である。

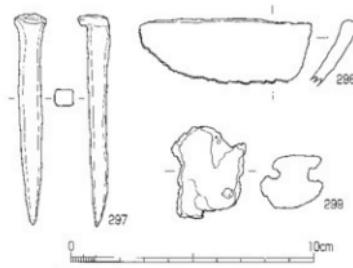
(271～277)は壺の蓋で、(271)と(272)は宝珠形のつまみがつく、(273)はかえりが付く。

(278)は壺で、TK10型式～TK43型式に併行するものと考えられる。

(279)と(281)、(282)は壺A、(280)は皿である。(284、286～290)は壺Bで高台は退化した形態で高さも低い。(283)と(285)は壺の底部と考えられる。(290)は壺の口縁部、(291～293)は上鍾で両端に穿孔があるが、(292、293)は半分を欠損する。(294)は壺で、体部外面は14/cmのハケ調整、内面にはユビオサエが確認できる。(295)は壺の底部で外向は4/cmの右上がりタタキ調整、(296)も壺の底部で内面にはクモの巣状ハケが認められる。

鉄製品

(297)は灰色砂質土出土の鉄釘である。全長8.5cm、頭幅1.5cm、重量12.1g、基部中央の横断面は $0.8 \times 0.7\text{cm}$ のやや扁平な四角形を呈する。頭部は薄く打ち延ばされ、打ち込む際に折れ曲がっている。(298)は鉄鍋の口縁部片である。小片のため、口径を正確に復元することは困難である。残存する器高は28cm、器壁の厚さ4～6mm、破片重量22.2gを測る。体部はやや内湾しつつ端部に至り、端部内面を断面三角形に肥厚させている。



第52図 第21次調査出土鉄製品実測図

鉄 淬

(299)は鉄淬である。実体顕微鏡による表面観察によると、全体的に多孔質であり、砂粒由来のガラス化した灰色洋とFe由来のヴィスタイル結晶組織を確認したオリーブ褐色を呈する淬が纏着している、比重は3.0cmである。

小 結

今回の調査では、飛鳥時代～中世の顯著な遺構は検出されなかったが、庄内～布留式併行期の上器溜まりを検出し、多量の遺物が出土した。これにより、隣接する区画街路部分の発掘調査で出土した遺構の広がりが大きくなることが確認された。

庄内～布留式併行期の遺物は、前述のように、これまでの調査においても5丁目北・南地区で確認されていたが、今回の調査における出土遺物は、器種、出土量とも豊富である。また、在地系の遺物以外にも河内系の壺などの搬入品や、調整に矢羽タタキを施す壺を含むなど、御歳遺跡における庄内～布留式併行期の上器様相を補足するものとなったと言えよう。

註

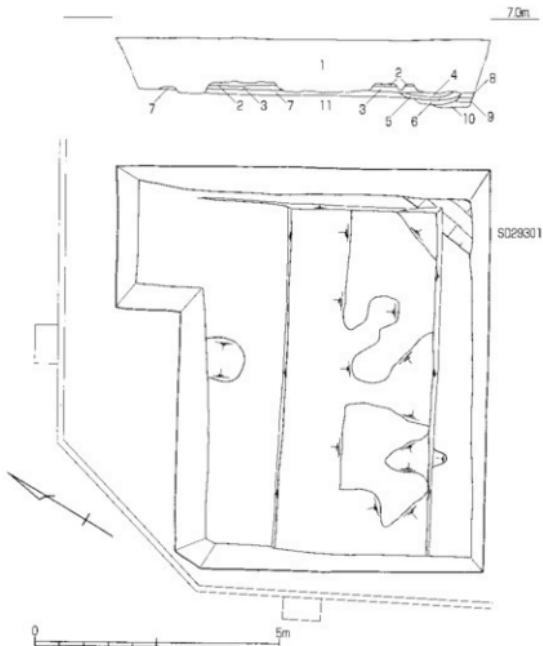
- (1) 安田滋・富山直人・石島三和編『御藏遺跡第4・6・14・32次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2001
 - (2) 山田清朝・高木芳史・山上雅弘・岡本一秀『御藏遺跡—第8・9・10次調査—』神戸市教育委員会 2000
 - (3) 石島三和編「5丁目南地区的調査」前掲書1)
 - (4) 河内系の土器については財團法人大阪府文化財調査研究センター市村慎太郎氏の御教示を得た。
 - (5) 寺沢蒸編『矢部遺跡』奈良県教育委員会 1986
- 綱向遺跡分類表C（石野博信・関川尚功『綱向』桜井市教育委員会1976）、布留式綱向甕（酒井健一「古墳造営労働力の出現と煮沸用甕－造営キャンプの検証に向けて－」『考古学研究』第24巻第2号 考古学研究会 1977)、布留系甕（米田敏幸『土師器の編年－1近畿』『土師器と須恵器』古墳時代の研究6 雄山園1991)、布留式粗形甕（西村歩「和泉北部の古式は時期と地域社会」『下田遺跡』財團法人大阪府文化財調査研究センター 1996）などとも呼称される一群である。
- (6) 阿部敏生編『上沢遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 1995
 - (7) 黒田恭正編『長田神社境内遺跡発掘調査概報』神戸市教育委員会 1990
 - (8) 日輪寺遺跡では、比較的まとまった量の矢羽タタキの甕が出土している。
- 山田清朝編『日輪寺遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2002
- (9) 浅岡俊夫編『芦屋市・月若遺跡—第10地点・第13地点』六甲山麓遺跡調査会 1993
 - (10) 松下勝編『播磨・長越遺跡』兵庫県教育委員会 1978
 - (11) 岸本道昭『北山遺跡』龍野市教育委員会 2001

参考文献

- 森岡秀人・中井秀樹・濱野俊一「庄内式併行土器の様相をめぐる攝津地域の動向」
『庄内式土器研究』XII 庄内式土器研究会 1996
- 多賀茂治「弥生時代後期～古墳時代前期の土器」『玉津田中遺跡 第6分冊』兵庫県教育委員会 1996
- 吉本勘時「特異な叩き目に關する覚え書」『東大阪市文化財協会ニュースVol.2 No.2
- 財團法人東大阪市文化財協会 1986
- 山本三郎・田井恭一編『播磨大中遺跡の研究』播磨町教育委員会 1990
- 古代の土器研究会編『古代の土器Ⅰ 都城の土器集成』古代の土器研究会 1992
- 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981

第4節 第29次調査

- はじめに この調査は、作業場付個人住宅の建築に伴うもので、工事により埋蔵文化財に影響を及ぼす範囲について発掘調査を実施した。
- 基本層序 調査作業は、遺物包含層と思われる黒褐色粘質土上面までを機械で掘削し、以下の掘削や精査などは人力で行った。掘削土はすべて残土処分を行った。
- 基本層序は、盛土・搅乱、暗灰色粘質土（旧耕土）、緑灰色粘質土、青灰色砂、青灰色細砂質シルト、黄褐色細砂、にぶい黄褐色粗砂、黒褐色～暗褐色粘質土、灰黄褐色粘質土の層序となっている。
- 検出遺構 遺構は、調査区東隅において南北方向の溝を検出した。溝の規模は、幅85cm、深さ25cmで、黒褐色粘質土上面から切り込む。埋土は黄褐色砂である。溝の中には遺物は出土しなかった。その他には調査範囲が狭小なことと搅乱が著しいため遺構は確認されなかった。褐色砂と黒褐色粘質土から土師器の小片が少量出土した。
- 小 結 今回の調査では、工事掘削深度までしか調査は完了していない。なおかつ、調査範囲は以前に建っていた建物の基礎による搅乱が著しく、工事影響深度まではほとんどが搅乱・盛土であった。そのため、遺物出土量もわずかで、遺構も東隅で検出した溝だけに限られる。ただし最終検出面以下は搅乱の影響が少なく、検出した溝の存在から、周辺や下層に遺跡が存在する可能性は残される。



第53図 第29次調査区平面・土層断面図

第5節 第34・35・36-1・36-2・41次調査

はじめに

調査地は5丁目の南東隅に位置する。平成12年度に第34次・第35次・第36-1次、第36-2次・第41次調査として報告した調査分をまとめて今回第34次調査として報告する。区画整理事業の換地に伴う個人住宅建設による調査で、面積約250m²を測る南北に長い調査地である。

基本層序

調査地は北から南に向かって緩やかに傾斜している地形であるが、全域にわたって上層から削平を受けており、現地表下10~15cmで飛鳥時代~平安時代の土器を含む遺物包含層となるが、数cmの堆積しかなく黄褐色粘質上の地山面となる。

遺構

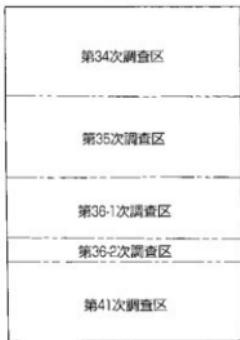
遺構面は、基本的には一面であるが、調査地の南で飛鳥時代~奈良時代の遺構を検出したことから、遺構面を二時期捉えている。

第2遺構面

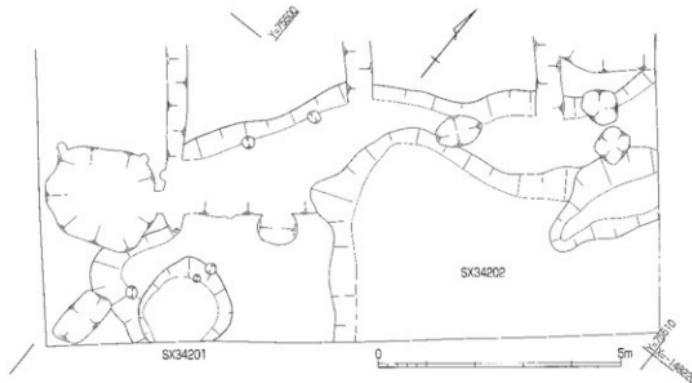
今回、調査区北側~中央にかけて確認されていない、調査区の南端で確認された飛鳥時代~奈良時代の遺構面である。検出遺構は、(土坑状遺構)落ち込み状遺構2基である。

SX34201

調査区南端で検出した東西長1.7m、南北長2m以上、深さ約15cmの隅丸方形の土坑状遺構である。暗灰褐色小礫混じり砂質土の埋土からは、奈良時代頃の須恵器・土師器が少量出土している。この遺構の性格については判らない。



第54図 調査区配置図



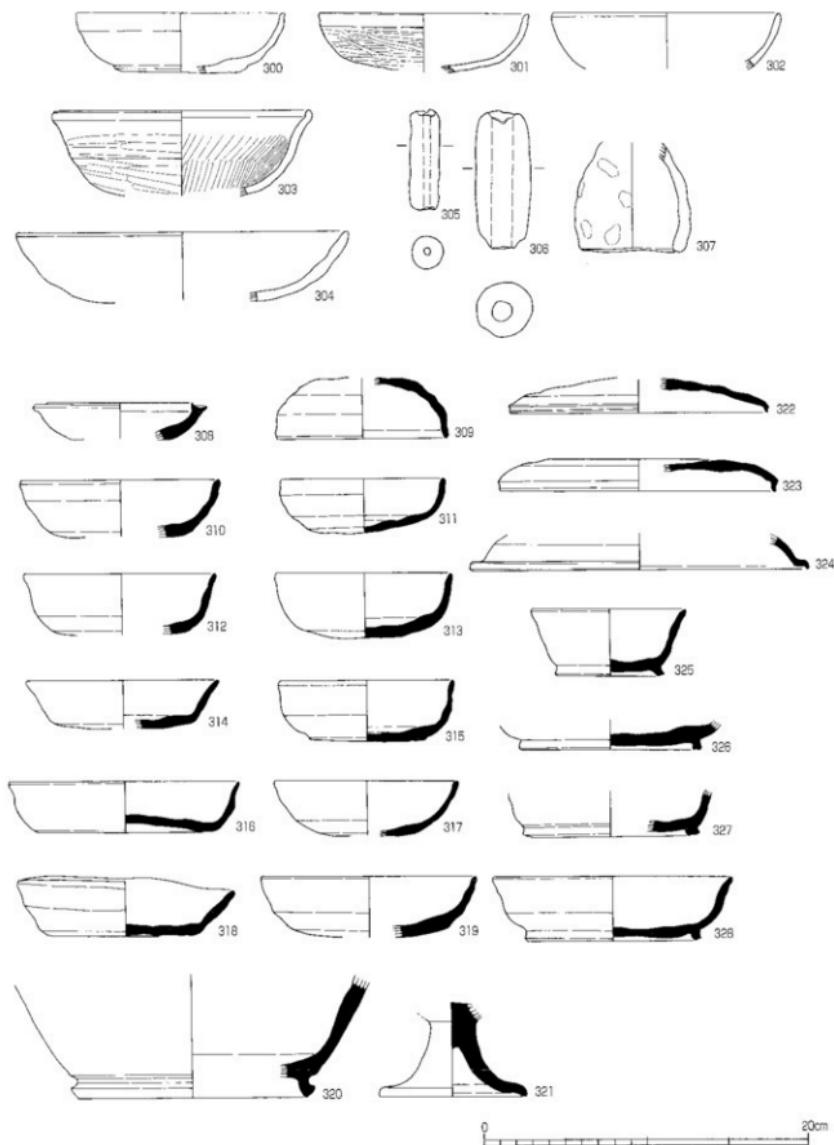
第55図 第2遺構面平図

SX34202

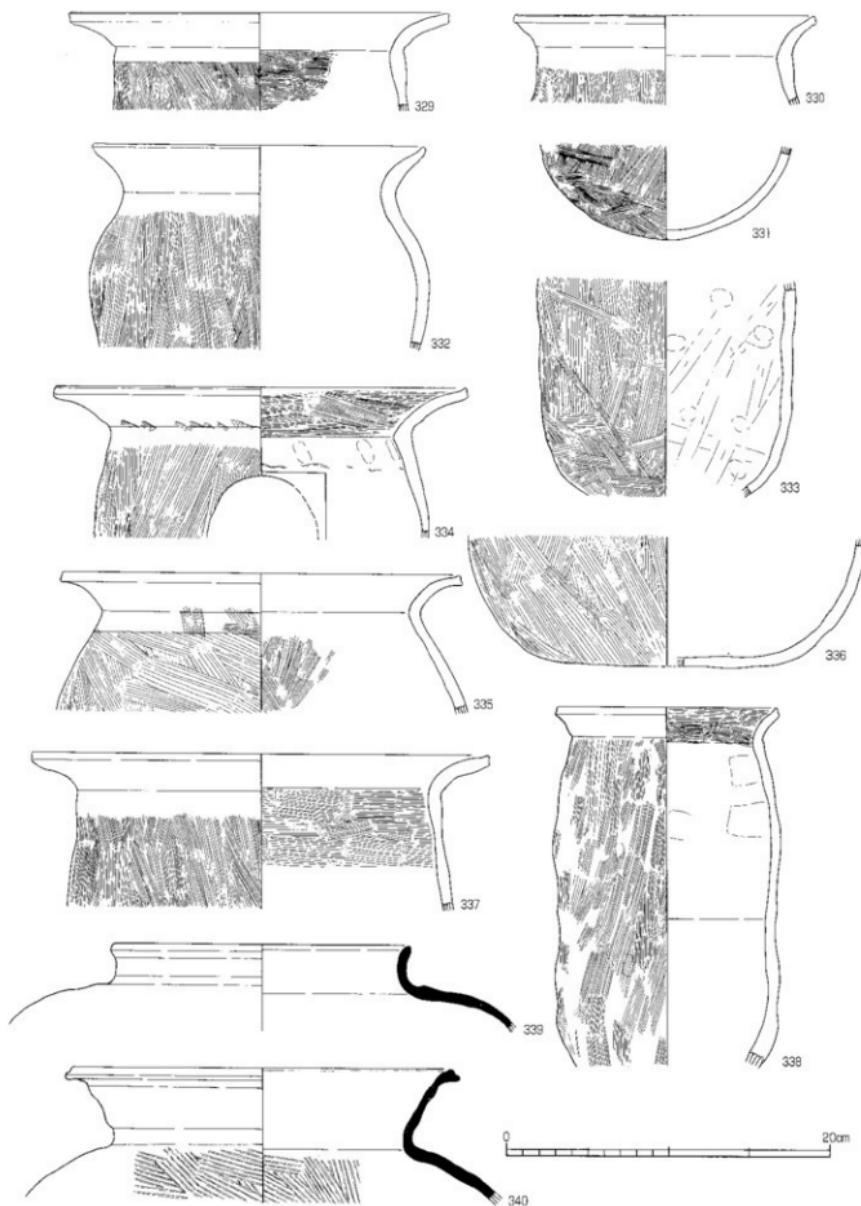
この落ち込み状遺構は第1遺構面と同じ高さで検出され、東西長7m以上、南北長7m以上、検出範囲の東側が周りより更に一段深くなり、最深部は検出面から約50cmを測り、南側に落ち込んでいく大きな遺構である。全体規模については調査区外に広がるために判らない。この遺構からは比較的多く遺物が出土し、飛鳥時代～奈良時代の須恵器・土師器に混じって獸骨も出土している。

出土遺物

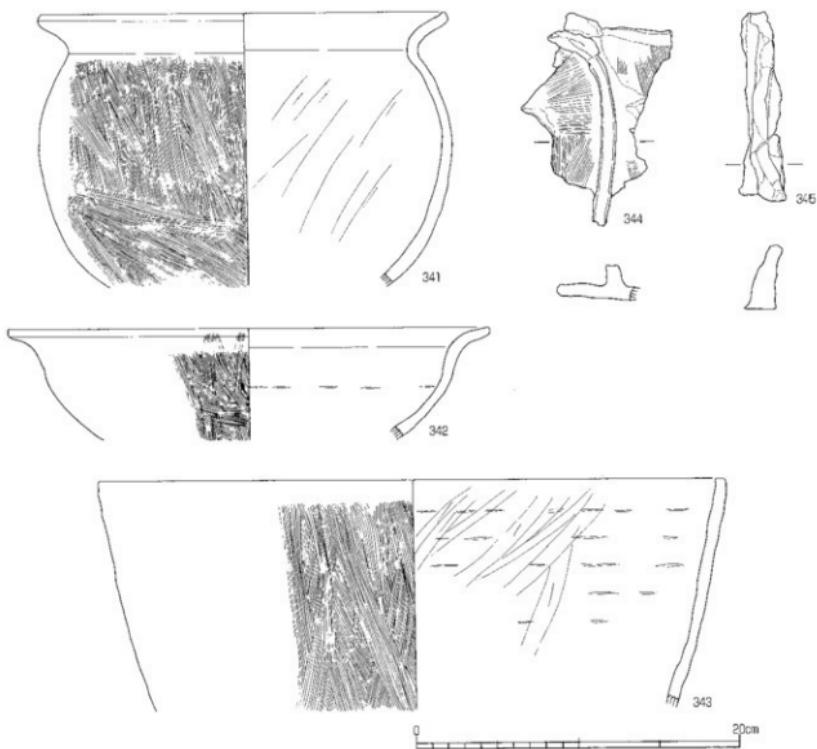
出土遺物は、須恵器壺身・坏蓋・高坏・壺・甕、土師器壺・甕・瓶、黒色土器、製塩土器、土鍤、蛸壺、瓦などが多量出土した。遺構内からの完形の土器はなく、破片が散在した状況で出土している。図示可能な遺物は以下である。(300～304)は土師器である。(300)は口径12.8cmの坏で、底部に高台が僅かに残る。(302)は口径13.8cmの坏で、体部外面はナデ調整が施されている。(301・304)は高坏の体部と考えられ、(301)は外面にミガキが施されている。(303)の外面はミガキ、内面には暗文が施されている。(305)は土師質の管状土鍤で、長さ6.2cm、最大径1.9cm、孔径8mm、重量27gである。(306)は土師質の管状土鍤で、長さ8.5cm、最大径3.4cm、孔径12mm、重量100gである。(307)は土師質の蛸壺の体部である。(308～328)は須恵器である。坏(308)は口径8.0cm、口縁部のたちあがりは短く内傾している。坏蓋(309)は口径10.4cm、坏(310)は口径12.2cm、体部は内湾しながらたちあがる。坏(313)は口径10.8cm、底部はヘラ切り未調整で、口縁端部はやや斜め上方にのびる。坏(314)の体部は外傾しながらたちあがり、口縁端部を外反させる。坏(315)は口径10.6cm、体部がややたちぎみで、口縁端部を丸くおさめ、底部は平底のヘラ切り未調整である。(316)は平らな底部にヘラ切り痕を残す口径14.1cmの坏である。(317・319)は体部が大きく内湾する坏である。(321)は、高坏の脚部である。(322～324)は坏蓋である。(322・323)は、口縁端部を下方に屈曲させかえりをもたない。(324)は口径10.8cmと比較的大きなものである。(325～328)は高台がつく坏である。(325)は口径9.4cm、体部は外傾しながらたちあがり底部に高台がつく。(327)の高台は体部と底部の境目付近につく。(328)は口径14.8cm、体部と底部の境は丸みを帯び、高台がやや外側に踏ん張る。(329～338)は土師器の甕であるが、全体を窓えるものは少ない。(339・340)は須恵器である。(329)の口径は23.2cm、口縁部が「く」の字に屈曲し、端部に面をもっている。体部外面には縱方向のハケメが施される。(330)は口縁部が短く外反する。(332)は胴径が口径より大きく、口縁端部を上方につまみあげ丸くおさめている。(334)の口径は25.4cm、口縁部が「く」の字に屈曲し、体部中央に穿孔してある甕である。(335)は外面のハケメの方向は一定でない。(336)は上半分を欠損した甕の胴部である。外面は縱方向のハケメが施され、底部は平底である。(338)は内面の口縁部に横方向のハケメが施されている。壺(339)の口縁部は短くほぼ直立、端部は外につまみあげている。甕(340)の口縁部は外反し、端部は外傾している。(341)は口径33.2cmの甕で、球形の体部をもち口縁部は斜め上方にのび端部はナデで丸くおさめている。外面はハケメ調整、内面はヘラミガキが認められる。(341)は浅い体部に大きく開く口縁部をもつ甕である。口縁部には面をもち、外面にハケメが施されている。(343)は口径51.8cmの瓶で、外面はハケメ調整、内面はヘラ削りが認められ、口縁端部は指ナデによる成形がなされている。(344)は移動式の竈の上部で外面は粗いハケメ、内面は指ナデ調整である。



第56図 SX34202出土遺物実測図（1）



第57図 SX34202出土遺物実測図（2）



第58図 SX34202出土遺物実測図(3)

(345)は支柱にあたり、指ナデ調整を施している。

遺構は、調査区の全域から検出されているが、遺構検出面が浅かったことによって埋設管などの掘形による搅乱が著しかった。

今回は部分的に確認したものも含めて、掘立柱建物5棟をはじめ、井戸1基、溝が数条およびピット多数が検出された。

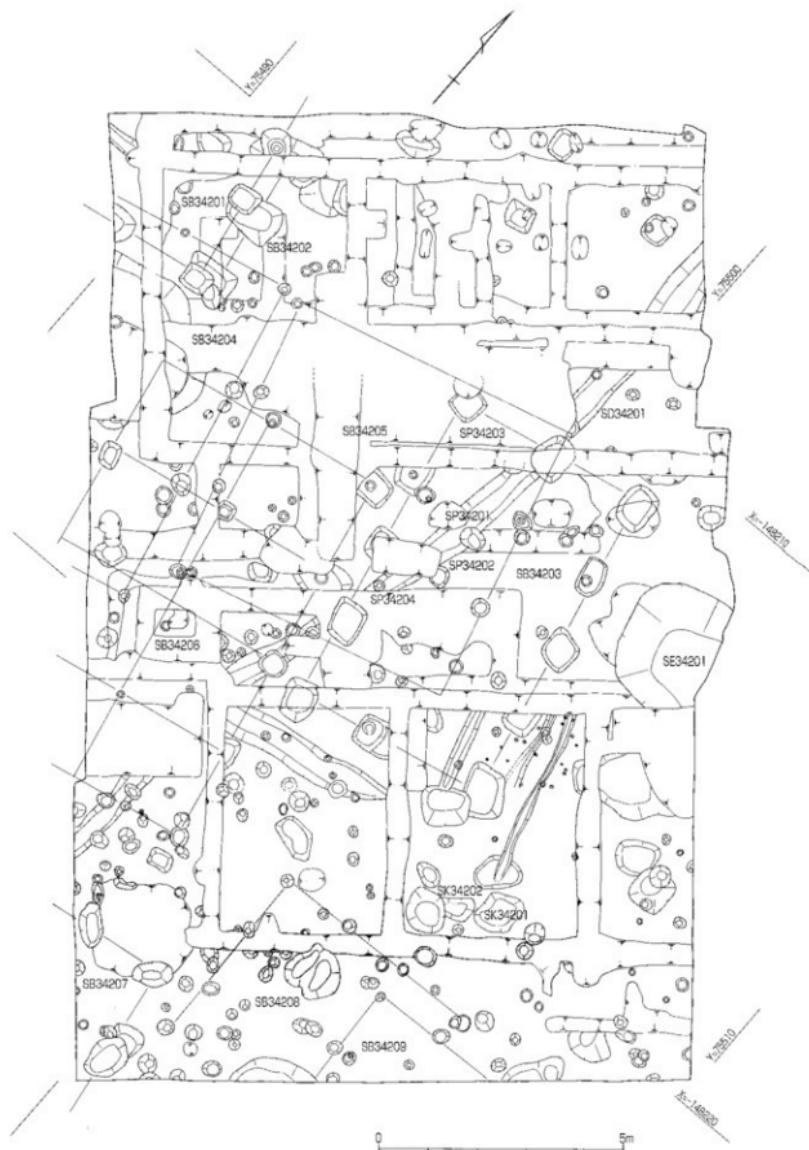
以下、検出された主な遺構について記述する。

SB34201

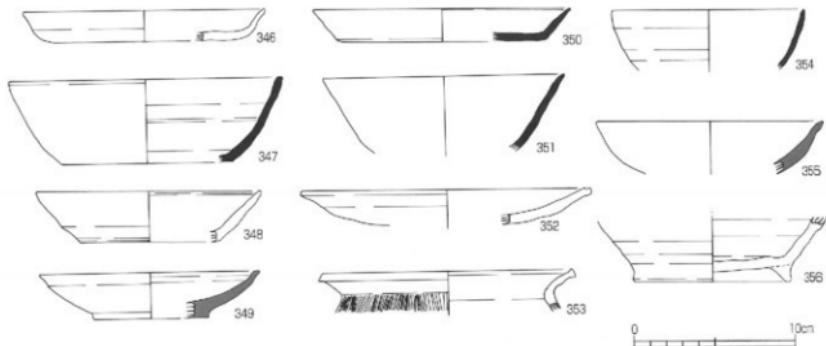
調査区の北部において検出した、1間分の柱穴で掘立柱建物の一部と考えられる。柱掘形は一辺30cmほどの隅丸方形で、深さは20cm~30cmである。建物は、調査区外西方へ広がるものと思われる。

(346~356)はSB34201から出土した遺物の中で、図化することができたものである。

(346、348、352、353、355、356)は土師器、(347、350、351、354)は須恵器、(349)は緑釉陶器、(355)は黒色土器で内面黒色のA類である。これら出土遺物は平安時代前半頃(9世紀後半)の時期が考えられる。

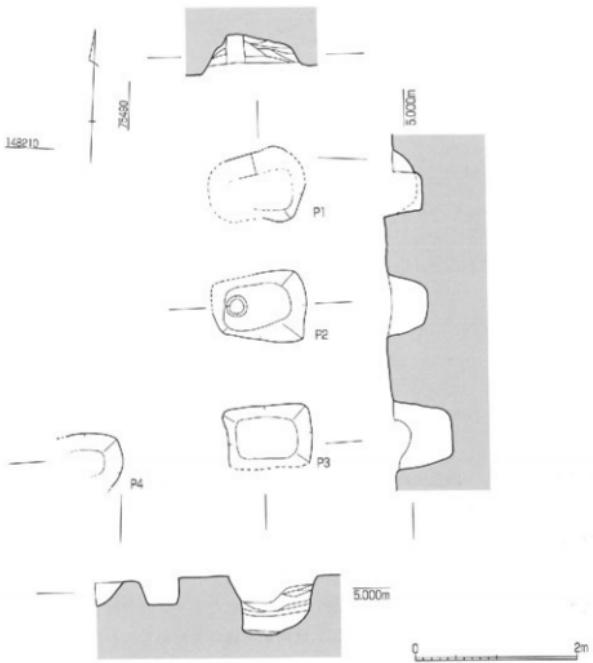


第59図 第1遺構面平面図



第60図 SB34201出土遺物実測図

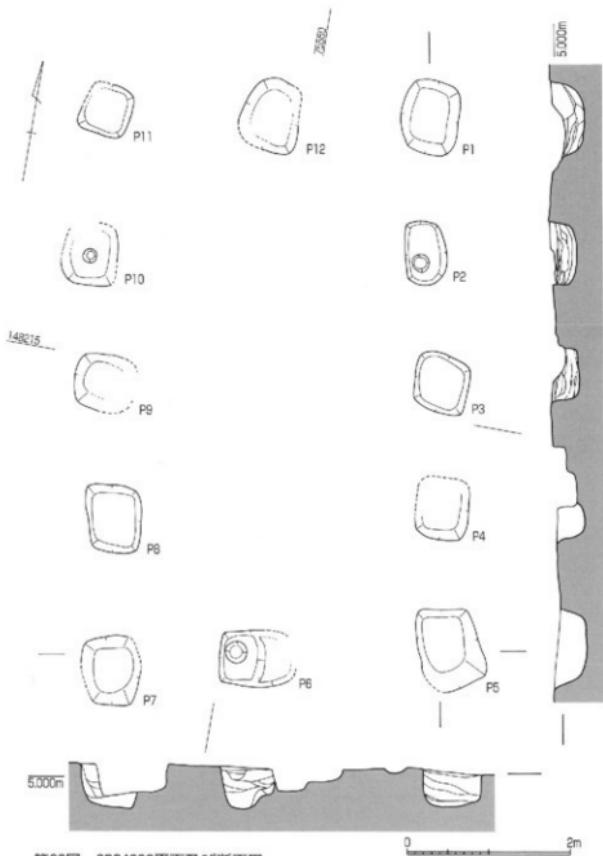
SB34202 SB34201とほぼ同じ位置に検出された 1×2 間以上の握立柱建物である。南東のコーナー部のみ確認した。柱掘形は、 80×100 cm前後の隅丸方形である。柱間は南北1.5m、東西2.0mあり、SB34201によって切られている。



第61図 SB34202平面及び断面図

SB34203

調査区の中央部において検出された 2×4 間の掘立柱建物である。柱掘形は一片 50×80 cmほどの隅丸方形で深さ $30 \sim 40$ cmを測る。柱間は東西 2.0 m、南北 1.8 mで、側柱のみで構成されている。



第62図 SB34203平面及び断面図

SB34204

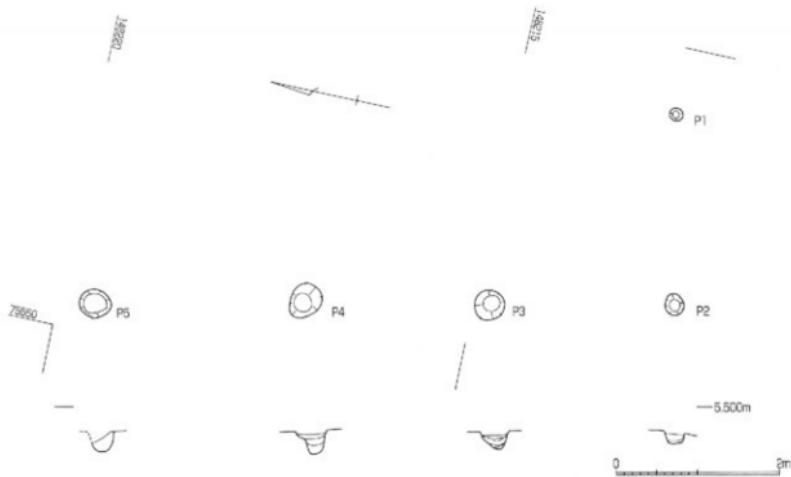
調査区の西部において検出された 2 以上 $\times 3$ 間の掘立柱建物である。柱掘形は直径 $20 \sim 40$ cmの円形である。柱間は 2.2 mで、調査区外の西方へ広がる。

SB34205

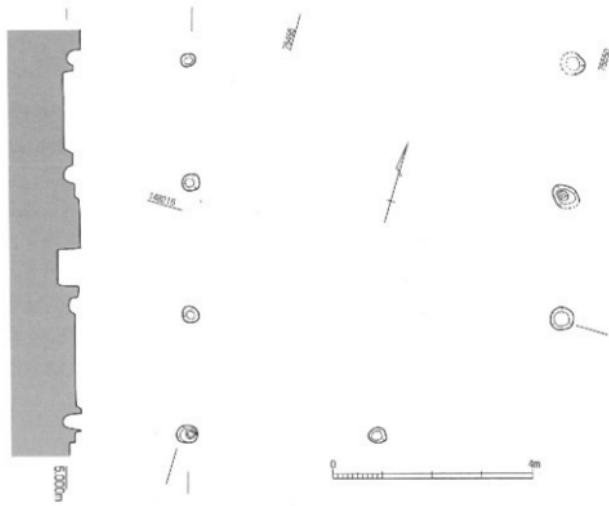
調査区の中央部において検出された 3×3 間の掘立柱建物である。柱掘形は直径 $20 \sim 35$ cmの円形で、側柱のみの構造である。

SB34206

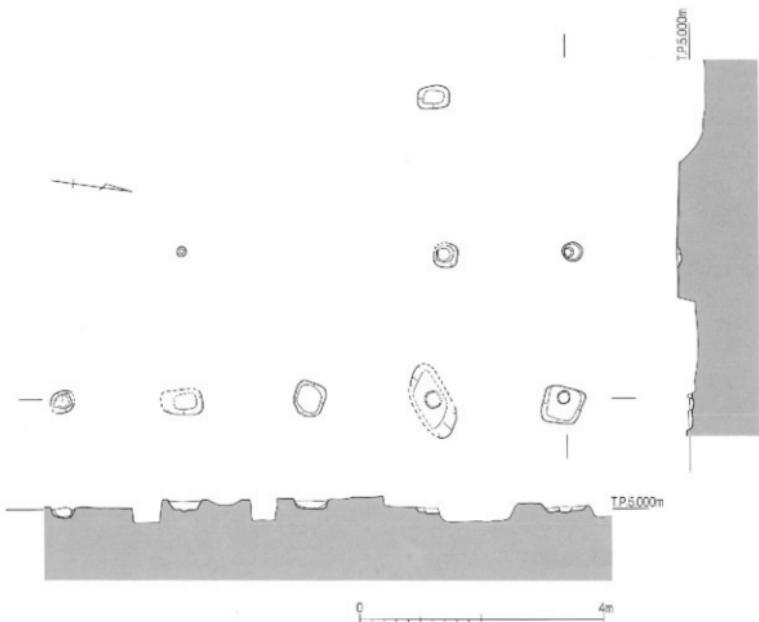
調査区の西部において検出された 2×4 間の掘立柱建物である。柱間と方向から1棟の建物としたが、柱掘形は円形と隅丸方形のものが混在しており、ピットの径は不揃いである。



第63図 SB34204平面及び断面図



第64図 SB34205平面及び断面図



第65図 SB34206平面及び断面図

SB34202~204 の出土遺物 (357~365) は掘立柱建物SB34202、203、204からの出土遺物の中で図化することのできたものである。(357~359、361、362、364、365) はSB34202、(360) はSB34203、(363) はSB34204からの出土である。

(357) はSP 5 から出土した土師器の皿である。口径は9.6cmである。

(358) はSP 6 から出土した黒色上器で、塊の底部と考えられる。内面黒色のA類で、内面にヘラミガキを施す。高台は断面三角形でやや外反する。底径は8.0cmである。

(359) はSP 5 から出土した黒色土器で、塊の底部と考えられる。内面黒色のA類で、内面に並行線状のヘラミガキが施されている。高台断面は三角形、底径は7.6cmである。

(361) はSP 6 から出土した土師器の皿である。口縁端部はやや玉縁状を呈する。口径は15.6cmである。

(362) はSP 6 から出土した黒色上器の塊で、内面黒色のA類である。口径は17.6cmで、内面にはヘラミガキが施されている。

(364) と (365) はSP 5 から出土した土師器である。

(364) は壊で、口縁端部はやや玉縁状を呈する。口径は13.8cmである。

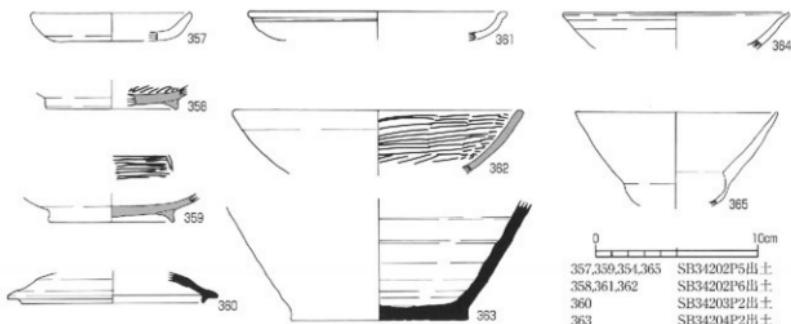
(365) は小型丸底鉢である。口径は12.6cmで、胎上は1mm以下の砂礫、雲母片を含む。古墳時代初頭のものと考えられ、混入品であろう。

これら出土遺物は平安時代前半頃（9世紀後半）の時期が考えられる。

(360)はSP 2から出土した須恵器の壺蓋で、かえりを持つ。口径は11.4cmである。飛鳥時代（7世紀半ば）のものと考えられる。

(363)はSP 2から出土した須恵器の鉢の底部と考えられる。底径は10.6cmである。

平安時代前半頃（9世紀後半）の時期が考えられる。



第66図 SB34202～34205出土遺物実測図

SD34201 調査区を南北に横切る溝である。削平のため非常に残りは悪い。調査区北部の残りの良い部分で幅90cm、深さ10cmを測る。

柱穴と考えられる遺構すべてに切られていることから、建物群に先行するものと考えられる。須恵器、土師器が出土している。

SP34201 調査区中央部付近で検出した直径20～25cmの楕円形のピットで、深さは31cmである。埋土中からは比較的まとまった量の遺物が出土した。
(366～370)は出土遺物の中で、図化することできたものである。(368)が黒色土器である以外はすべて土師器である。

(366)は壺で、口径は12.0cmである。

(367)は壺で、いわゆる「回転台上師器」と呼称されるものである、口径は14.0cmである。

(368)は内面黒色のA類の壺である。口径16.0cm。

(369)は壺で口径は12.6cmである。

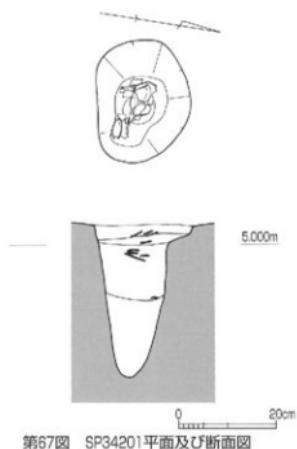
(370)は壺の底部と考えられる。底径は9.4cm。

これら出土遺物の時期は概ね平安時代中頃（9世紀後半～10世紀）と考えられる。

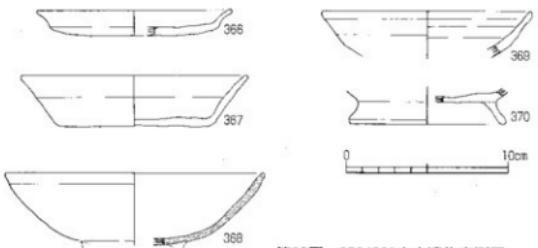
SP34202は調査区中央部付近で検出した直径20cmのピットである。

(371)と(372)は出土遺物の中で図化することできたものである。

(371)は黒色土器の壺で、内面黒色のA類である。体部の外側にはユビオサエが確認で



第67図 SP34201平面及び断面図



第68図 SP34201出土遺物実測図

きる。口径は15.6cmである。(372)は土師器の坏で、いわゆる「回転台土師器」と呼称されるものである。底部外面はヘラ切り後ナダ調整で、口径は12.8cmである。

両者の時期については平安時代中期（9世紀末～10世紀前半）と考えられる。



第69図 SP34202出土遺物実測図

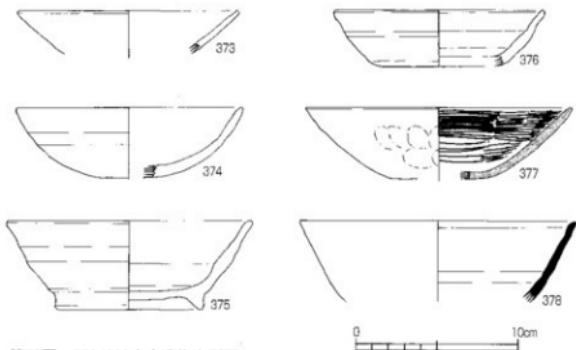
SP34203

SP34203は調査区中央部付近で検出した直径25cmのピットで、深さは15cmである。

(373～378)は出土遺物の中で図化することのできたものである。(373～376)が土師器、(377)は黒色上器、(378)は須恵器である。

(373、374)は塊である。口径は(373)が13.4cm、(374)が13.8cmである。(375)は塊である。貼り付け高台の底部から外方へ直線的に体部が立ち上がる。口径は15.0cmである(376)は坏で、「回転台土師器」である。口径は12.8cmである。(377)は塊で、内面黒色のA類である。内面にヘラミガキ、外面にユビオサエを施す、口径16.4cm。(378)は須恵器の坏である。口径は17.0cmである。

これら出土遺物の時期については、平安時代前半（9世紀後半）と考えられる。



第70図 SP34203出土遺物実測図

この他、ピットからの出土遺物で図示することができたのが、(379～386)である。

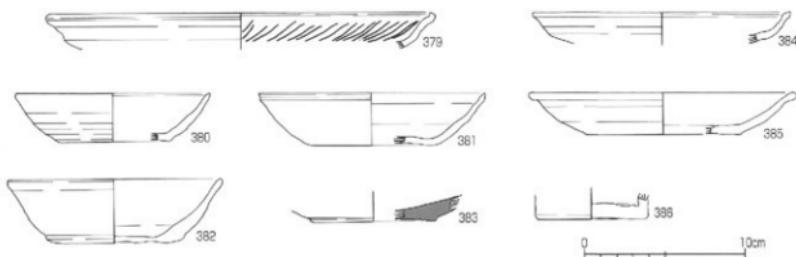
(379)は土師器の壺で、玉縁状の口縁部である。体部内面には暗文が施される。口径は24.0cmで、奈良時代前半（8世紀前半）のものと考えられる。

(380～382)でいわゆる「回転台土師器」と呼称されるものである。口径は(380)が11.8cm、(381)が14.0cm、(382)が13.0cmである。平安時代前半頃（9世紀後半）のものと考えられる。

(383)は縦軸陶器の壺の底部と考えられる。底径は7.4cm。(380～382)と同時期である。

(384、385)は土師器の皿である。口径は(384)が15.6cm、(385)が16.4cmである。共に平安時代中頃（9世紀末～10世紀初頭）のものと考えられる。

(386)は土師器の壺の底部と考えられ、底部外面は糸切りである。平安時代後半（11世紀）のものと考えられる。

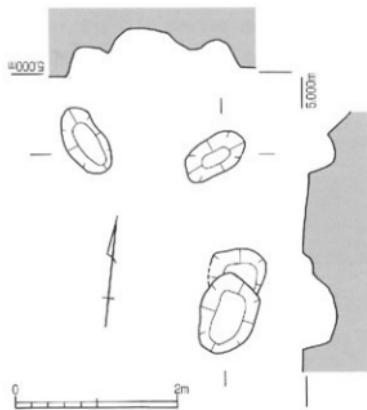


379 SP34204 382 SP34207 385 SP34210
380 SP34205 383 SP34208 386 SP34211
381 SP34206 384 SP34209 より出土 第71図 ピット出土遺物実測図

SB34207

調査区南端で検出した掘立柱

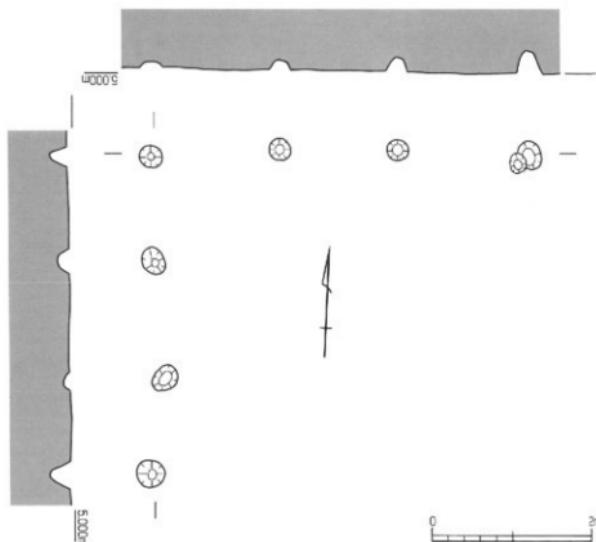
建物である。南方向に1間分、西方向に1間分しか確認できなかった。建物の南側と西側が調査区の外に広がるために正確な規模については不明である。柱の間隔は約2mを測る。柱穴の掘形は、一辺80～100cmの隅丸方形で、いずれの柱穴の深さは約40cm前後である。西側の柱掘形底には、根固めのための石が多く据えられていた。柱穴からの遺物の出土がなく、時期については特定できない。



第72図 SB34207平面及び断面図

SB34208

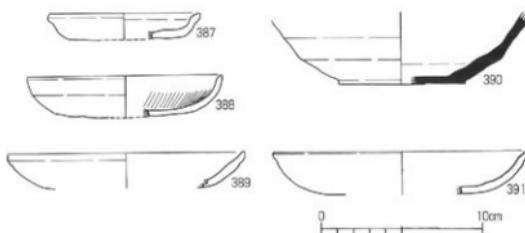
調査区の南端で検出した掘立柱建物である。東西方向3間以上、南北方向3間である。柱の間隔は東西方向が約1.5m、南北方向が約1.3mを測る。柱穴の掘形はいずれも円形で、直径20~30cm、深さ20~40cmを測る比較的浅い柱穴であり、後世に削平を受けたものと思われる。



第73図 SB34208平面及び断面図

出土遺物

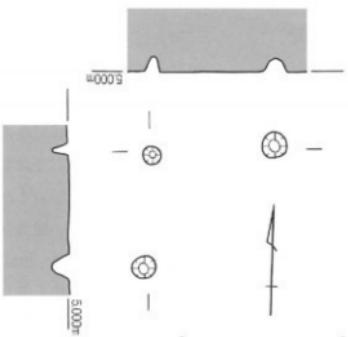
柱穴内からの図示可能な出土遺物として、P 3 掘形から土師器皿(488) (490)と須恵器塊(487)が出土している。(488)は口径が12.0cm、体部が上方に立ち上がり、内面には暗文が施されている。(490)は口径が15.6cm、口縁端部はつまみあげ外反している。(487)は底径が7.8cm、低い高台をもち、内湾しながら斜め上方にのびる口縁からなる。P 7 掘形からは土師器皿(486) (489)が出土している。(486)は口径が9.2cm、口縁端部は外反し丸くおさめている。(489)は口径が14.6cm、体部が上方に直線的に立ち上がっている。



第74図 SB34208出土遺物実測図

SB34209

調査区の南側で検出した掘立柱建物である。東方向に1間分、南方向に1間分しか確認できなかった。建物の東側と南側が調査区の外に広がるため正確な規模については不明である。柱の間隔は約1.5mを測る。柱穴の掘形は、いずれも円形で、直径20~30cm、深さ10~30cmである。柱穴からの遺物の出土はなかったため、時期については特定できない。



第75図 SB34209平面及び断面図

SK34201

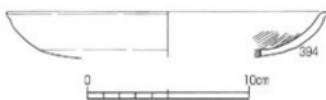
調査区の南側で検出した遺構でSX34202が埋まつた後の不定形の土坑である。長辺84cm、短辺70cm、深さ15cmである。

出土遺物

出土遺物は概して少なく、図示可能な出土遺物は須恵器壺(491)、土師器鉢(492)と土師器皿(493)がある。(491)は口径が10.6cm、内湾しながら立ち上がる口縁で、口縁端部はつまみあげ外反している。(492)は口縁に片口がつき、体部下方に粗い縱方向のハケメが、内面上方は横方向のハケメが施されている。(493)は口径が19.8cm、斜め上方にのびる口縁で、口縁端部はつまみあげ外反している。内面には暗文が施されている。

SK34202

調査区の南側で検出した不定形の土坑である。長辺60cm以上、短辺50cm、深さ20cmである。出土遺物は少なく、図示可能な出土遺物は僅かである。土師器壺(496)は口径が18.0cm、口縁端部を外傾させ、内底面にラセン暗文、口縁部内面に二段放射暗文を施している。(494・495)は高台がつく須恵器壺である。(494)は口径が16.6cm、体部は外傾しながらたちがり底部に高台がつく。

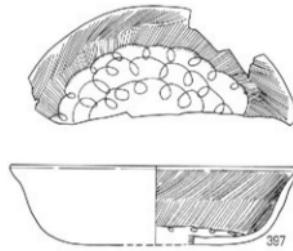


第76図 SK34201出土遺物実測図

第77図
SK34202
出土遺物実測図

ピット

一辺40cmの方形の比較的大きな掘形をもつ柱穴が何基か確認できたが、今回は建物としてまとまらなかった。その他20~30cm程度の円形のピットが検出しているが、散在する状況でまとまらない。



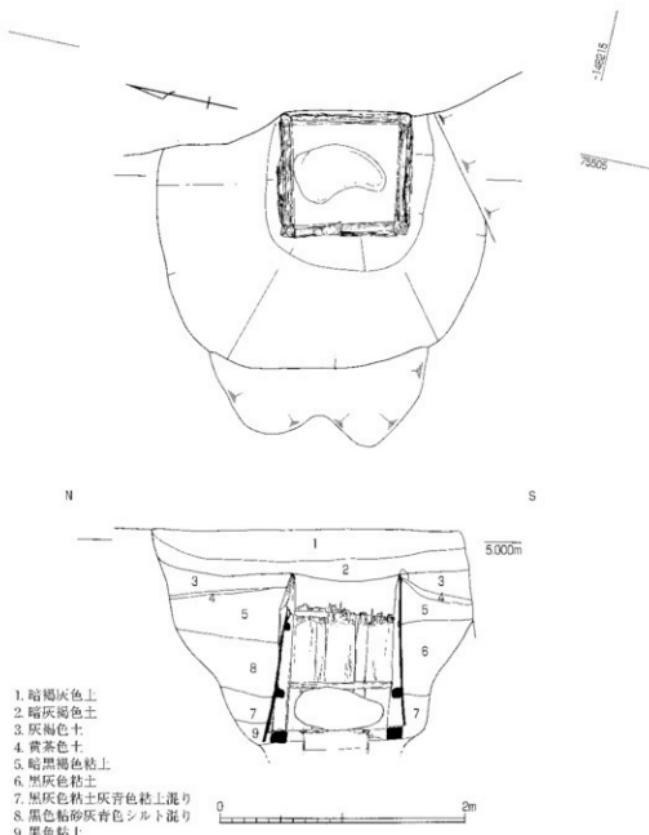
SE34101

調査区南東部隅において検出された直径2.7mのやや四角形に近い掘形の井戸である。

掘形の東半は調査区外へと続くため、全体の規模については不明である。また、南側は搅乱により切られている。

井戸内部には、板材を用いた井戸枠が遺存していた。

井戸枠の構造は、上下に分かれ、下部には曲物を使用し、その上部に長さ105cm前後の4本の角材(441~444)を組み合わせて井桁状に枠を組んでいる。この角材には2ヶ所の枘穴があることから、建築部材からの転用と考えられる。この枠上の四周の角に一辺11cm前後の4本の角材(398~401)を柱として立て、それぞれの一片につき、2本の横桟(434~440)を組み合わせて骨格を構築している。材の組み合わせは柱材に枘穴を開けて、横桟を差し込んで組み合わせている。この外側に板材(403~427)を張り合わせて井戸枠を構築してい



第78図 SE34101平面及び断面図

る。縦板組隅柱横桟留構造に分類される。

枠内の曲物上部には井戸廃絶時に廃棄されたと思われる、大きな自然石がみられた。尚、下部構造については調査途中に崩落したため、検出面から1.8m以下の詳細は不明である。

井戸枠に使用された木材は表面には手斧による調整痕が観察できる。

井桁状の枠や柱、横桟に用いられた角材の枘穴や、組み合わせのための両端部の加工は丁寧である。横桟(434～440)の両端部は組み合わせのために削られている。側板材(403～424)の厚みは2～5cmであるが、3～4cm前後のものが多い、上部は腐食しており、元来の長さについては不明である。これら木材については柱材以外も、比較的厚みのある木材であることから建築部材からの転用であると考えられる。

井戸枠の上部構造を構成する木材は、樹種同定の結果コウヤマキ、ヒノキ、モミ属が使用されていることが判明している。その構成を詳細にみると下部にモミ属の転用材が使用され、柱はほぼコウヤマキ、横桟はコウヤマキ及びヒノキ、側板は1点がモミ属である以外はすべてコウヤマキである。また、下部の曲物はヒノキである。

出土遺物は多くの遺物が出上した。井戸掘形内と井戸枠内出土の2つに分けられる。

井戸掘形内からの出土遺物の中で、陶化することができたのが(445～475)である。

皿には土師器(445、446、448～456)と須恵器(447)がある。

土師器の皿は、(445、448、451、454)のように口縁部を外反させ、口縁端部を内側に玉縁状に丸める「ての字状口縁」のもの、(450、453、455、456)のように糸切りの底部から直線的に外方へ体部が立ち上がるものなどがある。口径は8.6cm～10.4cmである。

須恵器の皿は底部は糸切りで、やや丸みをおびて立ち上がる体部で、口縁端部は丸く收める、口径は10.2cmである。

(457、458)は土師器の壺の底部である。糸切りの底部から、垂直に立ち上がる体部は大きく外方へ広がる。底径は(457)が5.4cm、(458)が7.0cmである。

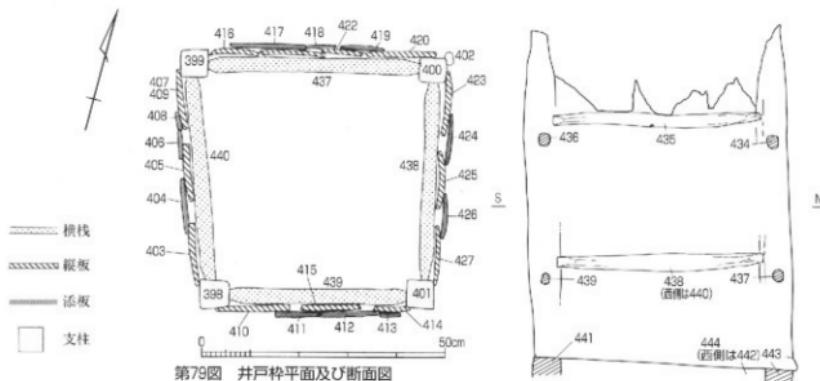
(459、463、464)は黒色土器の壺で、内面黒色のA類である。

(459)は口縁部をナデによりやや外反するように作り出している。内面にはミガキ調整が施される。口径は13.6cmである。(463)と(465)は底部で、貼り付け高台の断面は外方へ延びる三角形である。共に内面にはヘラミガキが施されている。底径は(463)が7.8cm、(465)が7.2cmである。

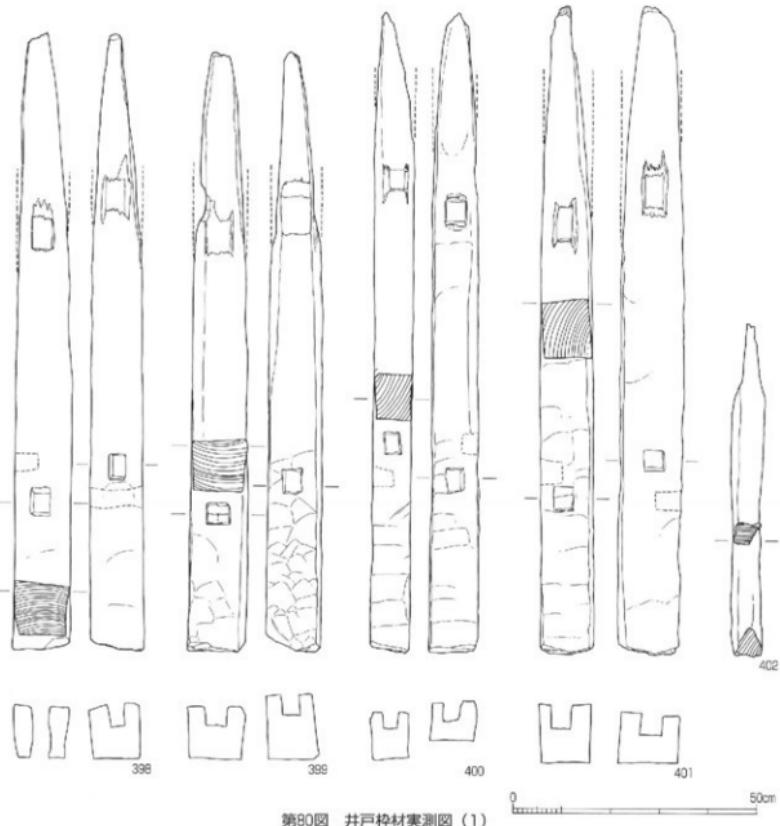
(460)は須恵器の壺である。糸切りの底部からやや内湾気味に体部が立ち上がり、口縁部はやや肥厚で、端部は丸く收める。底部外面に墨書きがある。口径は8.8cmである。

(461、465～468)は須恵器の壺である。

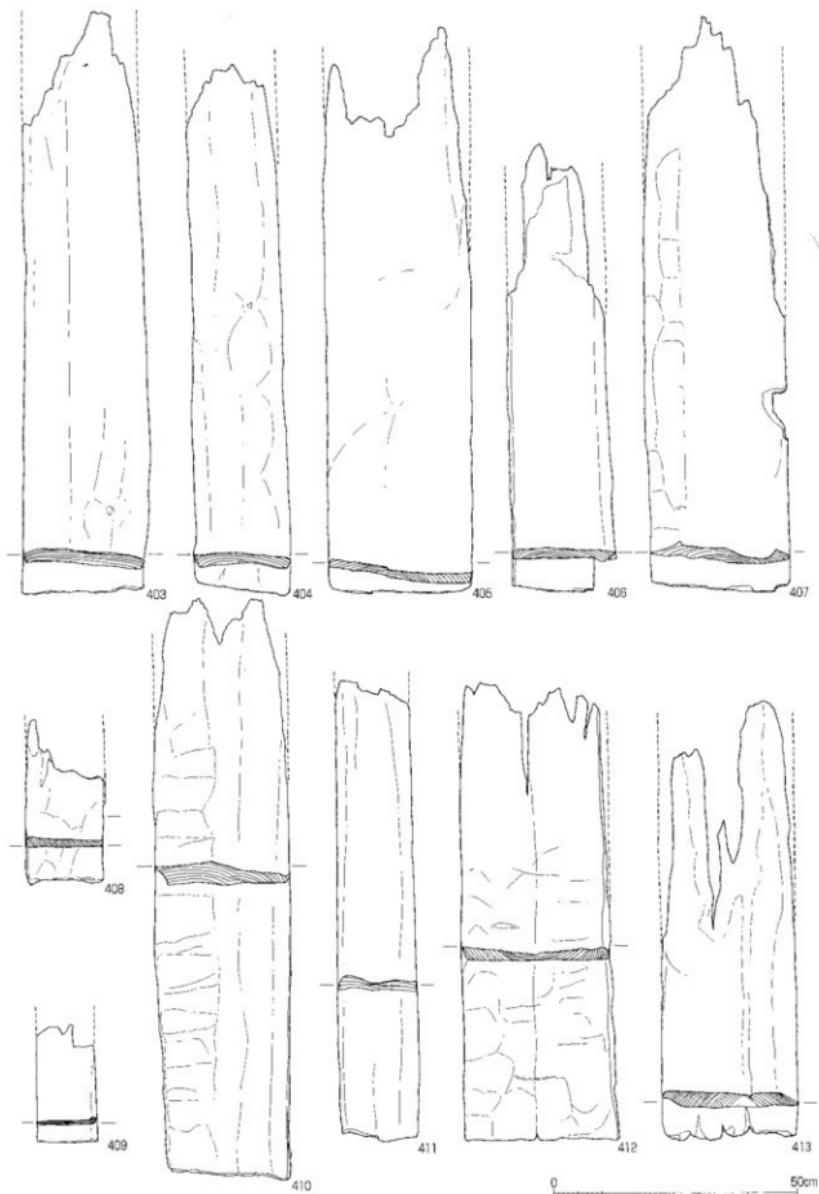
(461)は糸切りの底部からやや内湾気味に体部が立ち上がる、底部内面の見込み部はくぼむ。口径は10.8cmである。(465)は糸切りの底部から、わずかに内湾気味に体部が立ち上がる。口縁部は引き出すように作り出し、端部は丸く收める。見込み部のくぼみは小さい。口径は16.2cmである。(466)は糸切りの底部から直線的に外方へ立ち上がる体部で、口縁部は引き出すように作り出し、端部は丸く收める。底部外面に墨書きがある。口径は18.8cmである。(467)は底部からやや内湾気味に立ち上がる体部で、口縁端部は外反する。



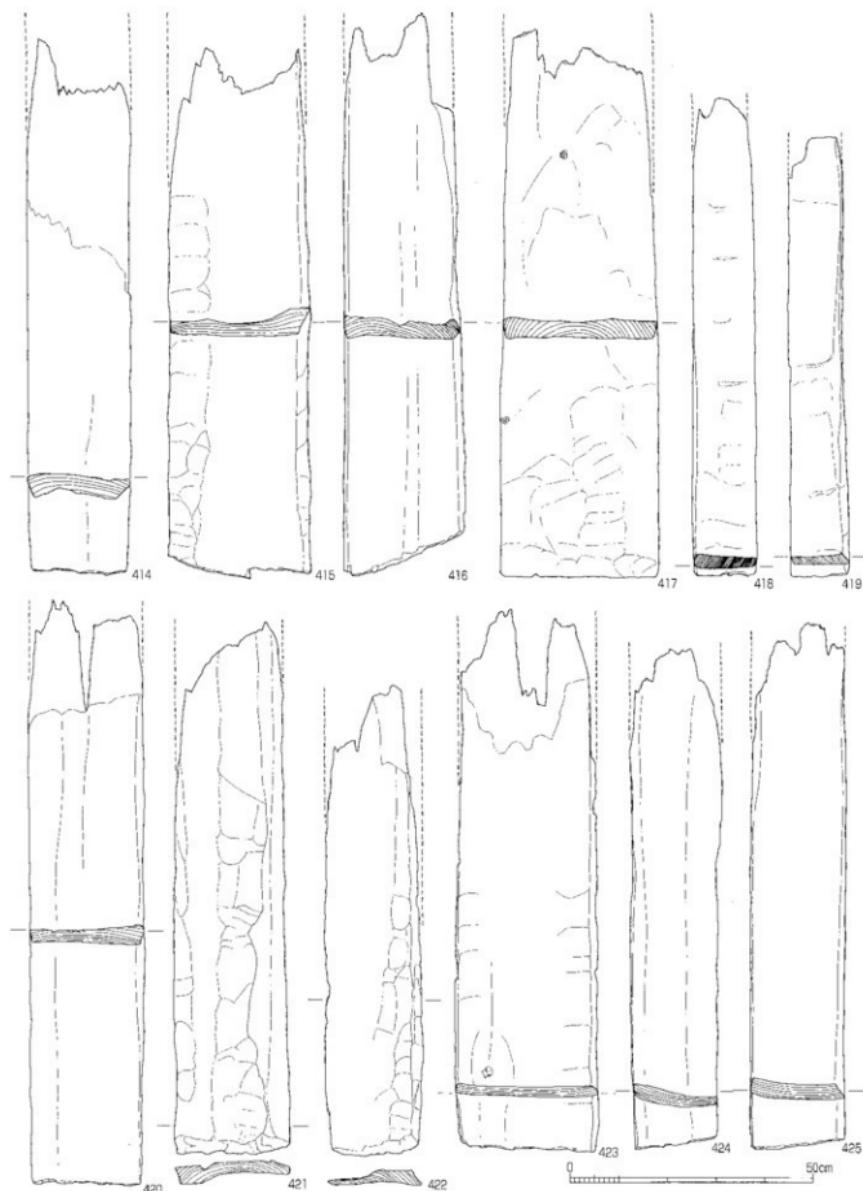
第79図 井戸枠平面及び断面図



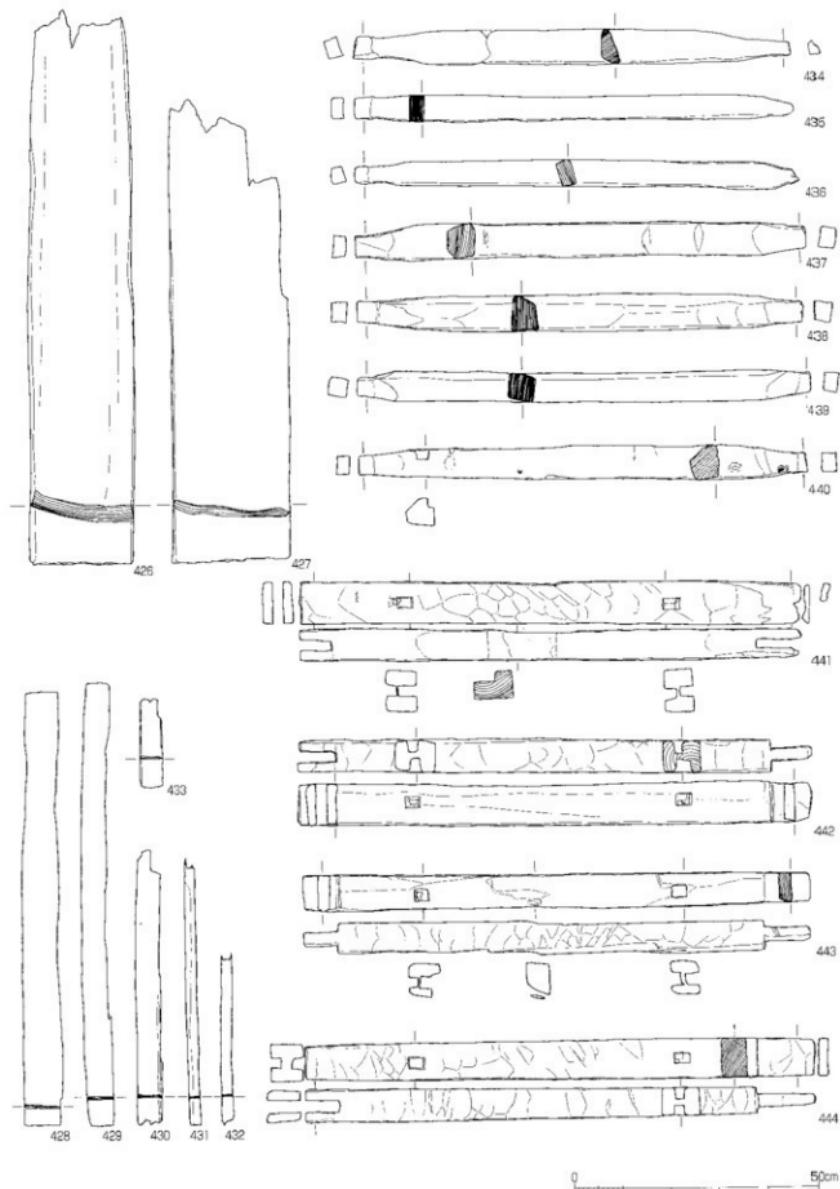
第80図 井戸枠材実測図(1)



第81図 井戸枠材実測図(2)



第82図 井戸枠材実測図 (3)



第83図 井戸枠材実測図 (4)

口径は15.4cmである。(468)は直線的に外方へ立ち上がる体部で、引き出すように作り出された口縁部である。口縁部はやや肥厚し、丸く収める。口径は16.8cmである。

(462)は土師器の壺で、いわゆる「回転台土師器」である。底部外面は糸切りで、口径は13.6cmである。

(469~471、474)は須恵質の縁軸陶器である。

(469)は底部のみであるが、体部の立ち上がりからII皿の可能性も考えられる。底径は4.4cm。(470)と(474)は共に塊の底部と考えられる。(478)の高台はケズリ出しである。底径は(470)が7.2cm、(474)が8.2cmである。(471)は塊で、口径は9.8cmである。

(472)と(473)は白磁である。(472)はII類の塊、(472)はIV類の塊に分類されるものと考えられる。(472)の口径は14.0cm、(473)は5.8cmである。⁽⁴⁾

(475)は土師器の壺である。直立する体部から、外反する口縁部をもつ。外面及び体部内面にはユビオサエ、口縁部内面にはハケメを施す、口径は37.6cmである。

この他、銀銭「寛平大宝」(初鋤890年)1点(508)、「富寿神宝」(初鋤818年)1点(507)、鉄製品(496、499、500)が出上した。

(476~493)は井戸枠内から出土の遺物の中で図化することのできたものである。

(476~481)は土師器の皿である。

(476、477)のように「ての字状口縁」のものや、(448)のように糸切りの底部のものがある。口径は8.6cm~9.8cmである。

(482、483)は須恵器の皿である。

底部は共に糸切りで、(482)はやや内湾気味に立ち上がる体部で、口径は7.2cm、(483)は直線的に外方へ立ち上がる体部で、口径は8.8cmである。

(484、486~488)は須恵器の塊である。口径は15.4cm~17.0cmである。

(485)は土師器の塊で、体部から上方に立ち上がる受口状の口縁である。口径は14.8cm。

(489)は須恵器の壺で、やや外方に踏ん張る高台をもち、体部は底部から直線的に外方へ立ち上がる。口径は17.8cmである。

(490)と(491)は白磁で、(490)はVI類の皿、(491)はII類の塊に分類されるものと考えられる。口径は(490)が10.8cm、(491)が14.8cmである。⁽⁵⁾

(492)は下駄で、全長14.4cm、幅8.8cm、厚さは1.6cmである。

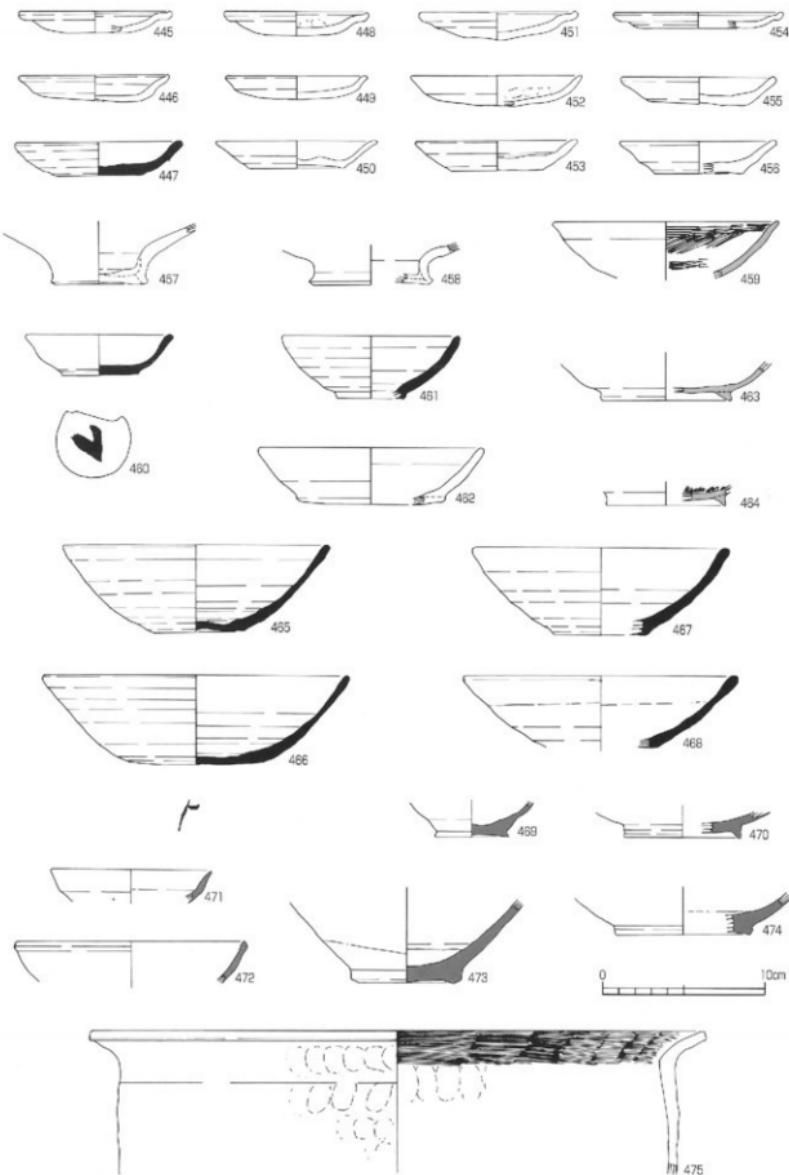
(493)は丸棒状木製品である。全長7.6cm、直徑3.8cmである。形状から陽物を表現しているとも推定され、井戸に関わる祭祀に用いられた可能性も考えられる。

(492)と(493)は、樹種同定によりコウヤマキ製であることが判明している。

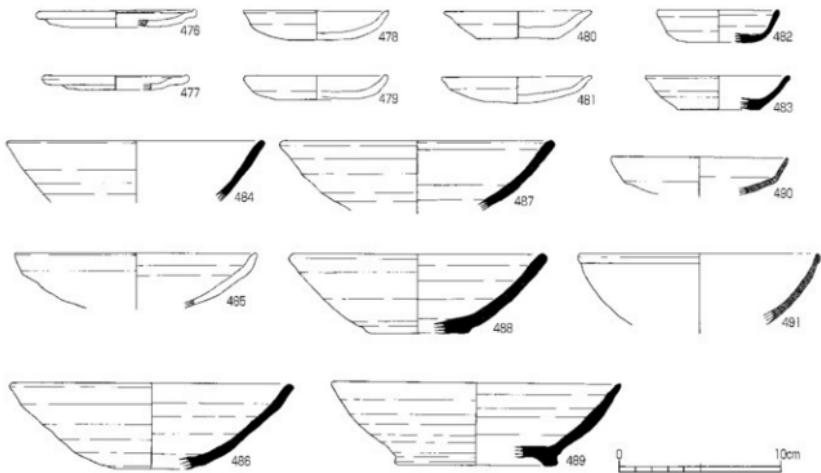
この他、銅銭(505、506)、金属製品、動物遺体が出土している。

これら出土遺物からSE34101の時期について考えてみると、まず掘形内の出土遺物の時期は、概ね平安時代初頭～鎌倉時代初頭（8世紀末～12世紀後半）にかけてのものと考えられる。井戸枠内からの出土遺物については概ね平安時代前半～鎌倉時代初頭（9世紀半ば～13世紀初頭）にかけての時期が考えられ、これから、SE34101は12世紀後半に掘削され、13世紀初頭までには廃絶したものと考えられる。

SE34101では、井戸枠が良好な状態で遺存していた。やや時期が遡るが、近隣地の調査



第84図 SE34101出土遺物実測図(1)



第85図 SE34101出土遺物実測図（2）

例では、長田区松野遺跡SE302、⁽²⁾
同二葉町遺跡SE302が類似例と
して挙げられるが。

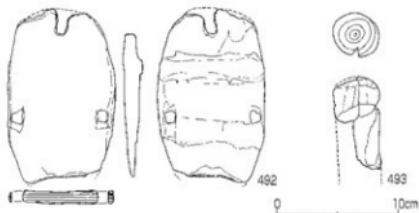
松野遺跡SE302例は、12世紀前
半に廃絶されたと考えられる井戸
で、ヒノキ、スギ、コウヤマ
キなど多種にわたる木材が使用
されている。二葉町遺跡SE302

例は11世紀末から使用され、12世紀前半には廃絶されたと考えられる井戸であるが、ここ
ではヒノキが占める割合が圧倒的に多く、スギ、ツガ属、シイ属、モミ属、コウヤマキが
少量使用されている。今回の調査例では、その大半がコウヤマキで占められている点が注
目される。現在、神戸市域における平安時代末～鎌倉時代初頭の建築材については明らか
ではないが、今後の検討の上で、貴重なデータと言えよう。

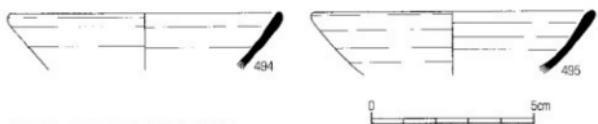
ピットからの 出土遺物

(494)と(495)はピットからの出土遺物の中で、図化することのできたものである。

(494)はSP34101からの出土遺物で、須恵器の塊である。口径は16.6cm。平安時代末か
ら鎌倉時代（12世紀後半）のものと考えられる。(495)はSP34102からの出土遺物で須恵
器の塊である。口径17.2cm、鎌倉時代（12世紀末～13世紀初頭）と考えられる。



第86図 SE34101出土土製品実測図



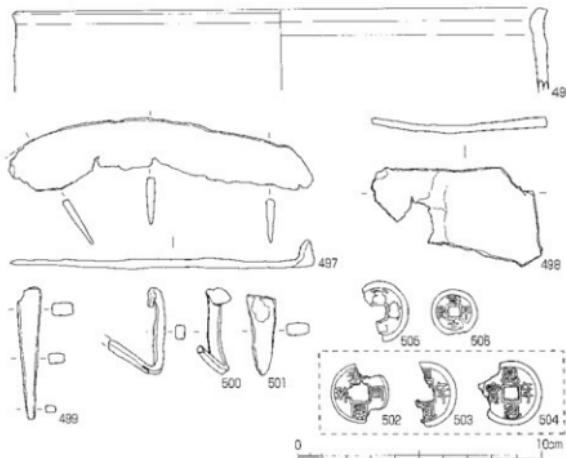
第87図 SP34101出土遺物実測図

金属製品

(505、506)はSE34101の掘堀より出土した銅鏡である。(506)は「寛平大宝(初鑄890)」である。法量は銭径1.9cm、内径1.5cm、銭厚1.8mm、残存量目2.2gを測る。(505)は「富寿神宝(初鑄818)」である。ほぼ左半分が欠損しており、銭径2.4cm、内径1.9cm、銭厚2.3mm、残存量目1.9gを測る。(498)はSP34212から出土の6.9×4.0cm、厚さ約0.4cmを測る板状鉄製品である。(497)はSB34201P2出土の鉄鎌で、柄を取り付ける折り返しの端部から12.6cmが残存する。幅は2.2cm以上で、厚さは3.0mmを測る。(496)は鉄鎌の口縁部片である。復元口径は22cm、器高は3.4cm~、器壁の厚さ4mmを測る。体部はやや内湾気味に、ほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部は厚さ6mmに肥厚させる。(499)は鉄釘の基部先端付近で、残存長5.4cm、横断面は上部で5×9cmの長方形を呈する。(500)はSE34201出土の頭巻釘で、平らに打ち延ばされた頭部は、打ち込まれた際に折れ曲がっている。また基部も中央付近で屈曲しており、打ち損じが原因と推測される。横断面は4×6mmの長方形を呈する。

(501)は鍛鉄製品の先端で、残存する長さ4.3cm~、残存幅1.2cm~、厚さ0.5cmであり、断面形は長方形を呈する。

(502~504)は出土遺物としての扱いは出来ないため、参考資料として掲載する。(502)は「和同開珎(初鑄708)」である。法量は銭径2.4cm、内径2.1cm、銭厚1.4mm、残存量目2.5gを測る。(503、504)は「萬年通宝(初鑄760)」である。(506)には蝕が顕著である。法量は銭径2.6cm、内径2.1cm、銭厚1.9mm、残存量目4.1g、(505)は銭径2.6cm、内径2.1cm、銭厚1.9mm、⁽⁶⁾残存量目2.8gを測る。上記の3点は、いずれも欠損品であり、実体顕微鏡による欠損部断面の観察では、高熱によって溶解した様子が、見て取れる。しかも表面の腐食層が断面では観察できないため、鑄込み時の失敗品でなく、2次的に熱を受けて溶解した可能性も考えられる。



第88図 第34~36次調査出土金属製品実測図

□内は参考資料

動物遺体

(写真図版
41-42-43)

(507)はSX34201より出土した、ウシの右上腕骨の遠位端残欠である。計測値はSD = 42.18mm～、Bd = 92.71mm～であり、この数値より体高は約120cm以上と推定される。

(508、509)はいずれもウシの右下顎第3後臼歯である。(508)の残存するエナメル質は高さ約10mmを測り、15歳以上の老年牛と推測される。(509)はエナメル質の残存高が30mm前後であり、12歳前後の個体と考え得る。(510)はウシの左中手骨の遠位端である。(511)はシカの右焼骨遠位端で、破断面が平面的であり、人為的に切断された痕跡であると考えられる。(512)はSP34204出土のウマの第2中手骨の近位端である。

(513)はSX34203出土のウマの左下顎臼歯であり、歯冠長24.8mmを測る。

SE34101からは数種の動物遺体が確認された。(514)はアカニシの殻と考えられる。(515)は種不詳の哺乳類遺体であり、骨表面に刃物による解体痕が観察できる。(516)は、ウシかウマの長骨端であると思われる。(517)はウマの左上顎臼歯であり、歯冠長 = 23.4mm、歯冠幅 = 24.4mm、エナメル高 = 24.6mmを測る。IIの値からは、13～16歳の老年馬のものであることが推定できる。(518)はシカの右脛骨の遠位端である。外側関節周辺部のみが出土しており、人為的に切断された可能性がある。

(519)はカメの各部位の骨であるが、上腕骨の大きさと数量から、4個体分が存在することがわかる。背甲の形状からはイシガメのみが観察できたが、数量的には4個体が完全に残存しておらず、別種が存在した可能性もある。

(520)は灰色泥砂に含まれていたウシの左上顎第2後臼歯である。咬耗がかなり進んでおり、エナメル質の残存高は20mmに満たない。おそらく15歳以上の老年牛であると推定される。

註

- (1) 橋本久和「畿内周辺の回転台土師器」『中世土器研究序論』真陽社 1992
- (2) LI野博史編『松野遺跡発掘調査報告書 第3～7次調査』神戸市教育委員会 2001
- (3) 川上厚志編『二葉町遺跡発掘調査報告書 第3・7・8・9・12次調査』神戸市教育委員会 2001
- (4) 横田賛次郎・森田勉両氏の分類による。横田賛次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」－形式分類と編年を中心として－『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館 1978
- (5) 前掲4
- (6) これら3点の遺物は調査区において発見されたものだが、発見時の状況から今回の発掘調査に由来するものとは考えがたい。当遺跡の年代や性格、及びこの遺物の重要性を考慮し、参考のため報告する。

参考文献

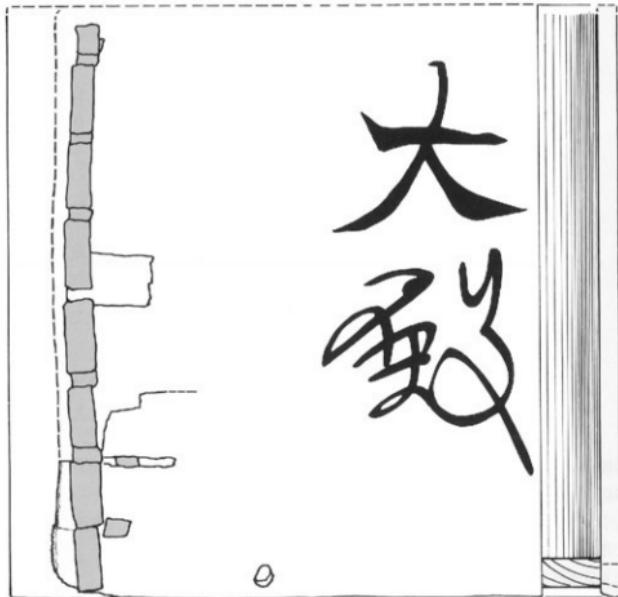
- 安田滋・富山直人・石島三和編『御蔵遺跡第4・6・14・32次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2001
 山本雅和『白水遺跡第4次埋蔵文化財発掘調査報告書』神戸市教育委員会 1999
 秋枝芳・山本博利他『木町遺跡』姫路市教育委員会 1984
 森田稔『東播系中世須恵器生産の成立と展開』－神出古窯址群を中心に－『神戸市立博物館研究紀要』3
 神戸市立博物館 1986
 古代の土器研究会編『古代の土器1 都城の土器集成』古代の土器研究会 1992
 古代の土器研究会編『古代の土器2 都城の土器集成II』古代の土器研究会 1993

第6節 14-9次調査出土の墨書のある曲物について

この曲物は平成11年度の14-9次調査で検出された井戸（SE201）より出土したものである。この井戸からは9世紀中頃前後の土器が出土しており、周辺の調査でも掘立柱建物を中心に、ピットや溝など同時代の遺構が検出されている。井戸は復元径約2.5m、検出面よりの深さ1.5mの掘形内に、横板4枚を井桁に5段組んだコウヤマキ製の枠材が残っていた。共伴する遺物には須恵器・土師器の他、土師質の管状土錘、亀甲文硯蓋の可能性の高い須恵器片、横櫛、内面漆塗りの曲物の底板などがある。

今回報告の曲物は、側板の一部が残存していたのみであり、正確な法量値は得られなかつた。現状での復元径は約12.8cm、推定器高約12cmを測る小形品であり、柄杓の可能性がある。継じ方は檜皮紐による2列継じで、前列は下部2段のみ残存して下縁内継じ、後列は下縁外8段継じである。⁽¹⁾ 墨書きはヒノキ製の側板の外面に施されており、肉眼および赤外線カメラによる材表面の調査で2文字が確認された。文字は器に対して正面に縦書きで、「大殿（おおとの）」と記される。「大」は縦3.7cm×横2.9cm以上で、崩さずにしっかりとした筆致である。一方「殿」は縦4.7cm×横4.4cm、大胆に崩された書体であり、こうした流れるような崩し方はむしろ中世によく見られる筆跡である。

「殿」は『広辞苑』によれば、「高貴な人の邸宅・やかた」など建造物を指す意と、「高



第69図 14-9次出土曲物実測図

貴な人を指し、敬っていう語」といった人物を指す意の2通りがある。また『古事記』『日本書紀』『万葉集』『風土記』といった文書資料に見られる「殿」は、神もしくは天皇にかかわりの深い建物に対して用いられ、特に「大殿（オホトノ）」については、天皇の居住する建物に限定して呼称される。文献上に出典する「殿」とは主として、高貴な人物の、⁽²⁾公私にわたる日常的な生活空間（排他的、独占的空間）を指すと考えられる。⁽³⁾

また出土遺物に見られる「大殿」に限った場合、用例には「大殿」「大殿侍」「大殿守」「大殿油」「太政大殿」などが挙げられる。「大殿侍」「大殿守」は宮中に仕える者の役職であり、「大殿油」は宮中や御殿で使用する燈火用の油を表現するものであると考えられ、この場合、「大殿」は建造物を意味する。また「太政大殿」は太政官僚に対する尊称であり、この場合は人物を意味する。地方出土のものについては、おそらく地方官衙などの正殿、または官人の居宅を構成する中心的な建物に対しての呼称であることが想像される。

律令期において、「大殿」の墨書きがある出土遺物には、木簡、墨書き土器などがある。木簡では平城京跡13点（内、平城宮跡3点）、山口県長登銅山跡3点、藤原宮跡、長岡京跡、滋賀県宮町遺跡各1点、一方墨書き土器については、滋賀県孤塚遺跡（官人居宅推定）⁽⁴⁾と福岡県都地遺跡（製鉄関連官衙推定）⁽⁵⁾にそれぞれ1点が知られる。また「大殿」ではないが、兵庫県内では佐用郡佐用町の長尾・沖田遺跡の道路遺構側溝内より、「中殿」とある墨書き土器が出土している。⁽⁶⁾以上に見られるように、「大殿」出土遺跡は多くが当時の中央政府に関連しており、地方官衙においてはごく少数である。また文字の書かれている遺物については、大きく分けて木簡のような文書関連遺物と、土器および曲物（現在確認されているのは本例のみ）のような器物の2通りが存在している。

御蔵遺跡出土の墨書き曲物は日常生活に密着した器物である。したがって政府に常備されたものではなかったと考えられ、いずれかの居住空間において使用されていた可能性が高い。また曲物が出土したSE201の井戸枠は一辺約85cmを測り、官衙施設の井戸としては若干小振りであることもこれを補足するものといえる。

これらの状況から、墨書き曲物にある「大殿」の意味としては、地方官衙に付随する厨の中心的な建物、もしくは官人の邸宅における中心的な建物を表現していると考えるのが妥当であり、その建物において日用品として使用されていた道具であったことが想像されよう。今後は御蔵遺跡における「大殿」そのものと、それを中心として構成された厨もしくは邸宅、ひいては官衙施設の実体究明が課題となるであろう。

なお、本稿作成に当たっては、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所 山中敏史氏、同 波辺晃弘氏に御教示をいただいた。記して感謝を申し上げます。

註

- (1) 曲物の縦じかたの呼称等は、奈良文化財研究所編『木器集成図録』近畿古代編1985を参考にした。
- (2) 岩波書店『広辞苑』第2版 1969 新村 出編
- (3) 鶴森浩幸「建物「殿」についてのノート」「続日本紀の時代」1994 続日本紀研究会編
- (4) 奈良文化財研究所木簡データベースにより検索した。
- (5) 財團法人栗東町文化体育振興事業団「孤塚遺跡」「1990年度年報Ⅱ」1992
- (6) 福岡市教育委員会「都地遺跡（4）」1995
- (7) 兵庫県教育委員会「長尾・沖田遺跡（1）」1991

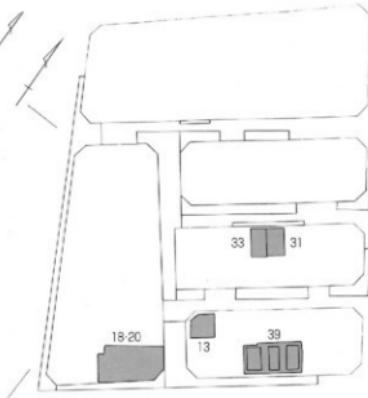
第4章 6丁目北地区の調査

第1節 調査区の設定

6丁目北地区については、区画整理の進展とともに、3ヵ年の間に、調査の申請順に6件の調査を実施している。

この調査において、調査の事業主体ごとに調査次数を設定している。今回の報告では、基本的に隣接している調査に関しては、1調査区として掲載することとし、地区名には、調査次数を列挙することとした。

なお、土地区画整理事業にともなう発掘調査報告書において、調査次数の変更が行われており、これと整合性を持たすために、今回も調査次数の変更作業を行っている。以下に調査次数の変更について、対応を示す。



第90図 6丁目北地区調査区位置図

本報告調査次数	旧調査次数	年報告掲載次数
13次	18次	18次
18次	24次	24次
20次	24-2次	24-2次
31次	36次	36次
33次	33次	33次
39次	39次	39次

第2節 調査の概要

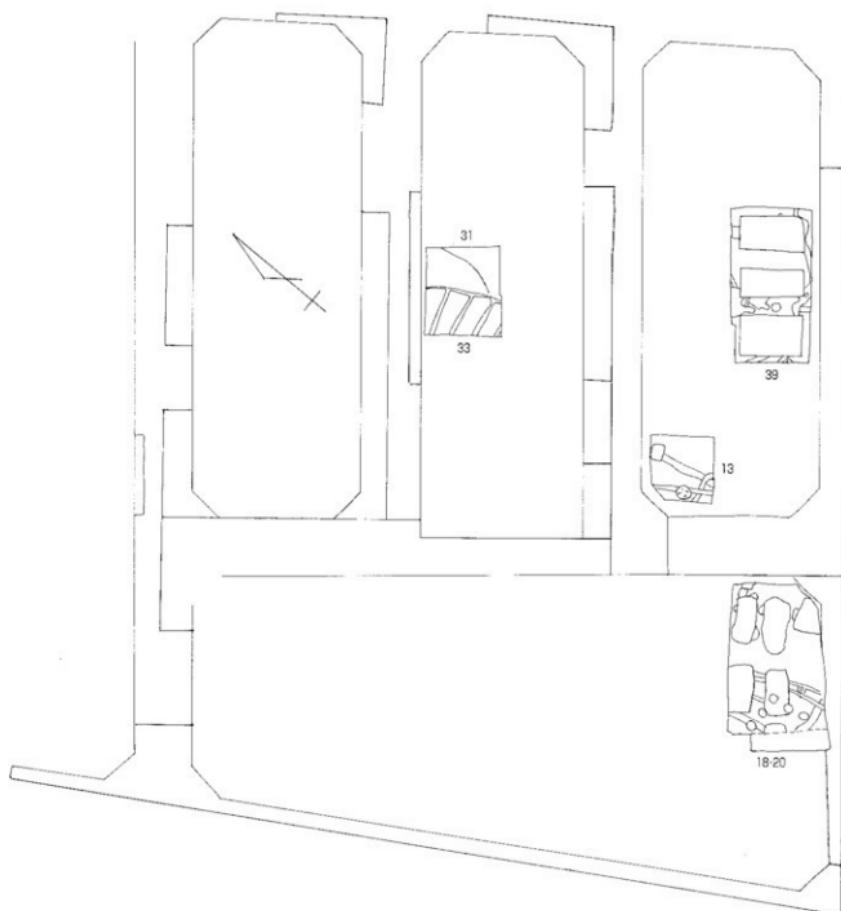
御蔵6丁目地区は、沖積地に形成された微高地と後背湿地が混在する範囲に位置する。

地勢は北から南に緩やかに下がる斜面地であり、御蔵5丁目との境付近において、1mほどの急激な段差が生じている。御蔵6丁目北地区における主な遺構としては、飛鳥時代から平安時代にかけての掘立柱建物がある。この他に、奈良時代から平安時代にかけての遺物が出土しており、良好な資料を提供している。

なお、大別すると下記のような基本層序となる。

1. 近現代の盛土層
2. 淡黄灰色細砂層（中世後期～近世の旧耕土層）
3. 灰色シルト層（奈良時代～平安時代の遺物包含層）
4. 黒褐色シルト層（奈良時代～平安時代の遺構面・弥生時代後期末の遺物包含層）
5. 乳褐色粘土～暗褐色粗砂層（第2遺構面）

全体遺構図



第91図 6丁目北地区遺構集成図

第3節 第13次調査

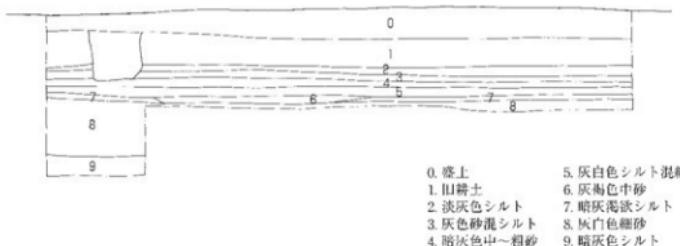
はじめに

今回の調査対象地は、土地区画整理事業後の宅地となる場所で、区画街路部分の第6-6次調査地点（6丁目北地区第2調査区）の東に隣接する。

主に検出した遺構は、土坑1基（SK13201）、井戸1基（SE13101）、溝3条（SD13301～SD13303）である。SE13101以外は同一面での検出であった。井戸の検出作業の後、全体を掘り下げ、調査としては、第1遺構面と第2遺構面を同時に調査を実施している。

層序

調査における基本層序は、上層より現代盛土、旧耕土で、淡灰色シルト、その下は包含層である灰色砂混シルトで、地表下約0.5m～0.6m（標高約6.20m～6.40m）で、奈良時代から平安時代の遺物を多量に含む遺物包含層（暗灰色中～粗砂）に至る。中世の遺構面は暗灰色中～粗砂の上面である。その下層が、灰白色シルト混細砂層（古墳時代から奈良時代の包含層）で、この層の下面で、庄内期から奈良時代の遺構を検出した。



第92図 第13次調査土層断面図

第2遺構面

第2遺構面では、庄内並行行の溝と奈良時代の土坑を同時に検出している。

SD13301

北西から南東に走る幅50cm、深さ20cmの溝である。SE13101に切られており、SD13303を切っている。庄内期の溝と考えられる。

SD13302

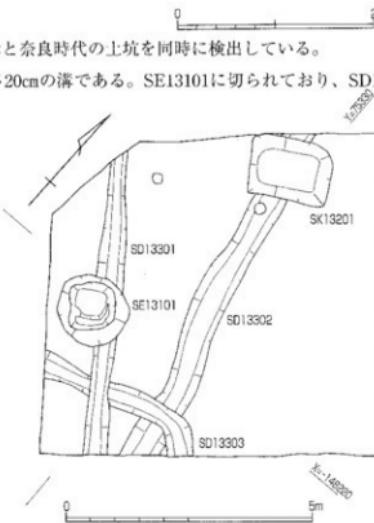
北から南に走る幅80cm、深さ20cmの溝である。SD13303に切られている。庄内期の溝と考えられる。

SD13301

西から東に走る幅50cm、深さ20cmの溝である。SD13101に切られており、SD13302を切っている。庄内期の溝と考えられる。

SK13201

調査区北に位置する土坑である。土坑の規模は、長辺1.6m、短辺1.2m、深さ0.7mを測る。土坑内の埋土は、すべてブロック状になっており、人為的に埋められたものと考えられる。



第93図 第13次調査遺構平面図

えられる。上坑内部の上層からは馬の歯が出土している。写真図版52(521、522)はウマの右上顎臼歯である。計測値は、(521)が歯冠長 = 27.6mm、歯冠幅 = 25.6mm～、エナメル高 = 54.5mm、(522)が歯冠長 = 28.7mm、歯冠幅 = 25.6mm、エナメル高 = 52.8mmを測る。Hの値より、年齢は両方共およそ5～7歳と推定される。(523)はウマの左下顎臼歯であり、歯冠長 = 28.7mm、歯冠幅 = 14.7mm～を測る。この遺構からわずかではあるが、土器が出土している。

出土遺物

(524)は、口径14.6cmを測る上師器の壺である。

(525)は、須恵器の蓋である。

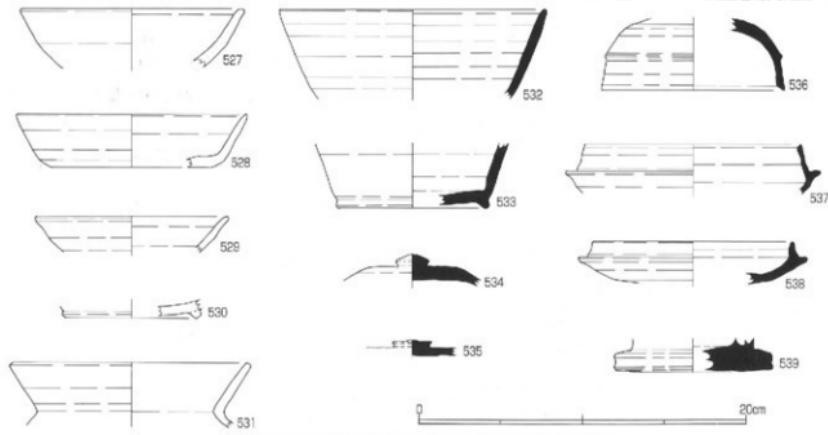
(526)は、須恵器の蓋である。いずれも細片である。

この遺構の時期は、平安時代と考えられる。

包含層の土器

灰白色シルト混細砂層より出土したのは、図96、

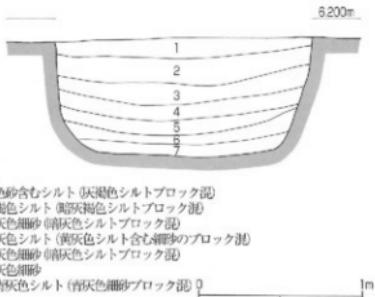
(527～540)である。



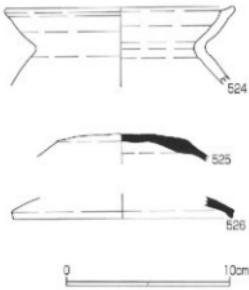
第96図 古墳時代から奈良時代の包含層出土遺物実測図

(527)は、口径14.0cmを測る上師器壺である。外上方にのびる口縁部をもち外面に2段ナデを施している。

(528)は、口径14.4cmを測る土師器壺である。外上方にのびる口縁部をもち外面に2段ナデを施している。(529)は、口径12.0cmを測る上師器壺である。外上方にのびる口縁部



第94図 SK13201土層断面図



第95図 SK13201出土遺物実測図

ち外面にナデを施している。

(530)は、底径4.6cmを測る土師器坏である。底部は糸切り痕が認められ、高台は、貼り付けによるものである。

(531)は、口径15cmを測る土師器壺である。

(532)は、口径16.6cmを測る須恵器坏である。平坦な底部と斜め上にまっすぐ伸びる口縁部からなる。

(533)は、底径9.6cmを測る須恵器坏である。平坦な底部と斜め上にまっすぐ伸びる口縁部からなる。低部外面には高台がつくものである。高台は、外側に張り、断面形が角張っている。

(534・535)は、摘をもつ須恵器蓋である。

(536)は、口径11.4cmを測る須恵器坏蓋である。やや丸みを帯びた天井部をもち、ハの字上に開く口縁部をもつ。端部は内傾する。天井部と口縁部の境の稜はやや丸く、天井部の回転ヘラケズリの範囲は1/2程度である。

(537)は、口径13.4cmを測る須恵器坏身である。立ち上がり高は1.5cm、口縁部は内傾する。

(538)は、口径12.6cmを測る須恵器坏身である。立ち上がり高は1cm、口縁部は丸く治める。

(539)は、底径9.8cmを測るすり鉢である。低部外面には、4条/cmの平行タタキ目痕を残す。

奈良時代の土器を多く含む層の中から出土したのは(540～546)である。

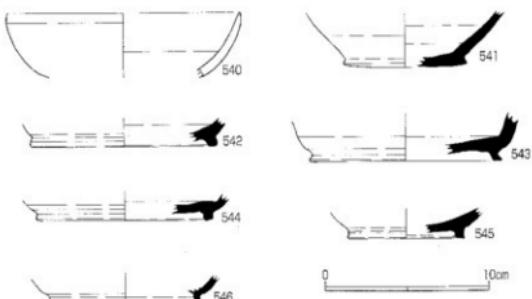
(540)は、口径14.6cmを測る土師器碗で、やや内湾しながら外上方にのびる口縁部をもつ。

(542)は、底径11.6cm、を測る須恵器坏である。平坦な底部と斜め上にまっすぐ伸びる口縁部からなる。低部外面には高台がつくものである。高台は、断面形が角張っている。

(543)は、底径12.0cm、を測る須恵器坏である。平坦な底部と斜め上にまっすぐ伸びる口縁部からなる。低部外面には高台がつくものである。高台は、断面形が角張っている。

(544)は、底径11.0cm、を測る須恵器坏である。平坦な底部と斜め上にまっすぐ伸びる口縁部からなる。低部外面には高台がつくものである。高台は、断面形が角張っている。

(545)は、底径7.2cm、を測る須恵器坏である。半坦な底部と斜め上にまっすぐ伸びる口縁部からなる。低部外面には高台がつくものである。高台は、断面形が角張っている。



第97図 奈良時代～平安時代の包含層出土遺物実測図

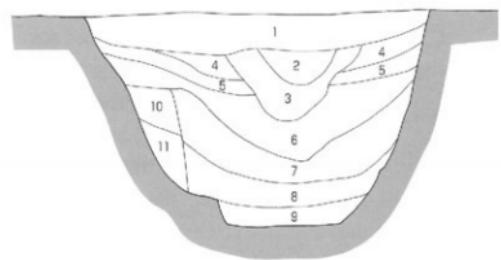
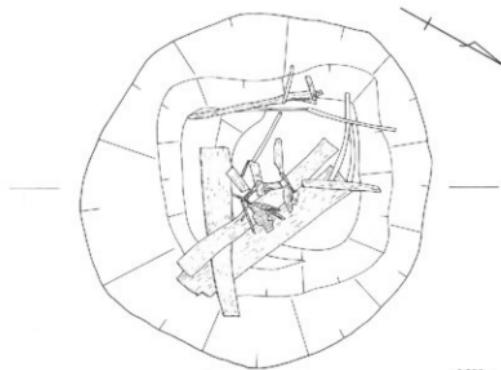
(546)は、底径9.4cm、を測る須恵器坏である。平坦な底部と斜め上にまっすぐ伸びる口縁部からなる。低部外面には高台がつくものである。高台は、断面形が角張っている。

(541)は、底径7.6cmを測る須恵器壺である。低い高台と外上方に斜めにのびる口縁部とからなる。

SE13101

調査区西に位置する井戸である。井戸枠等は、ほとんどが抜き取られており、一部板材等が出土しているが、原位置を留めてはいない。埋土および、底部の平面観察から、本来は1辺0.85mの方形の井戸であったと考えられる。掘形の直径は1.5mを測る。井戸内部から農具の柄等の木製品が出土している。

また、出土した木製品の中に、曲物が含まれていたことから、井戸の下部には本来は曲物が据えられていたものと考えられる。



- | | |
|-----------------|------------------|
| 1.青灰色シルト | 7.灰褐色シルト |
| 2.淡青灰色砂混シルト | 8.淡青灰色シルト |
| 3.灰色シルト混細砂 | 9.淡青灰色シルト混細砂 |
| 4.淡緑灰色シルト | 10.暗灰色細砂混シルト |
| 5.暗灰色シルト混細砂 | 11.暗緑灰色細砂（シルト含む） |
| 6.暗褐色シルト（シルト含む） | |

第98図 SE13101平面及び断面図

井戸埋土上層からの出土遺物のなかに、口縁端部が三角形となる外面1段などの土師皿が出土しており、12世紀後半には埋没していたと考えられる。

出土遺物

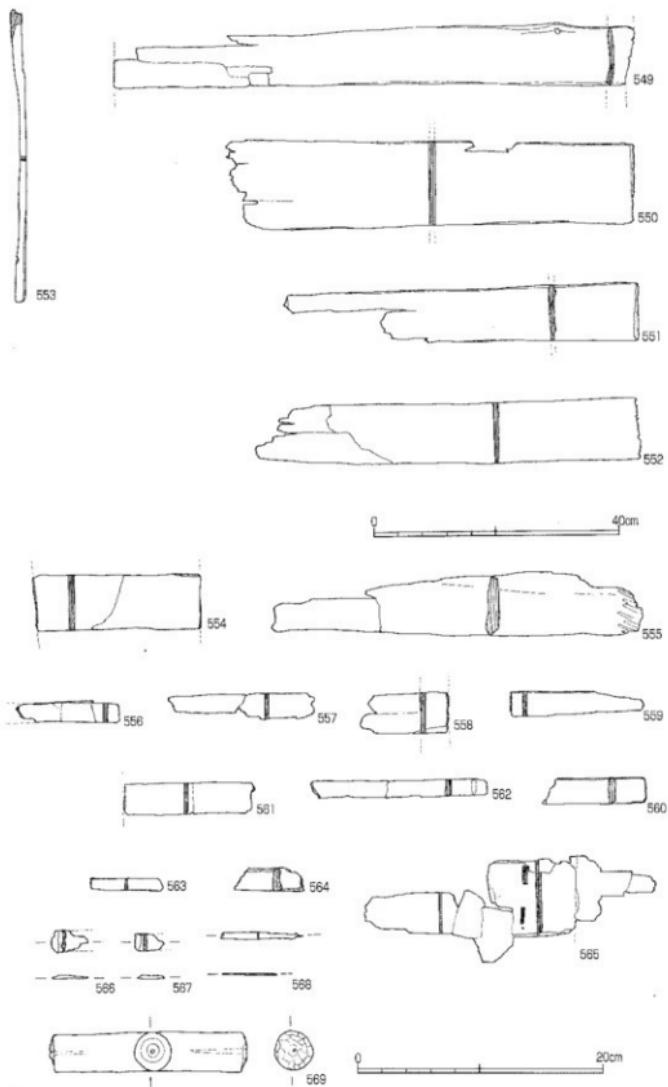
(542)は、口径14.6cmを測る土師器杯である。

外上方に伸びる口縁部と断面三角形の端部を持つ。端部外面を一段ナデで仕上げる。

(543)は、口径16.0cmを測る須恵器杯である。外上方に伸びる口縁部を持ち、端部はまるく治める。



第99図 SE13101出土遺物実測図



第100図 SE13101井戸枠材及び出土木製品実測図

木製品 厚さ1.2cmから0.8cmを測る板材である。最大のもので、長さ85.7cmを測る。これらの板材は、ほとんどが井戸の部材の一部と考えられる。

(569)は、長さ50.4cmを測る棒状のものである。井戸枠材の一部と考えられる。

(549～552)は、厚さ0.3cmから0.5cmの板材である。用途は不明である。

(565)は、曲物の一部である。規模は不明である。皮織じの部分が遺存しているが、部分であるため、縫じ方は不明である。

(563～568)は、柄の削片である。

(553)は、柄である。周辺に削片が散乱していたことから、ここで製作されたか、修理されたものである可能性が高い。

中世包含層 (570)は、口径8.0cmを測る土師器皿である。

(571)は、口径8.4cmを測る上師器皿である。口縁部には一段ナデが施されている。

(572)は、底径5.6cmを測る上師器塊である。底部外間に系切り痕が残る。

(573)は、底径6.0cmを測る上師器塊である。底部外間に系切り痕が残る。

(574)は、口径15.0cmを測る須恵器塊である。外上方にのびる口縁部をもち、端部は丸く治める。

(575)は、口径15.5cmを測る須恵器塊である。外上方にのびる口縁部をもち、端部は丸く治める。

(576)は、口径15.0cmを測る須恵器塊である。外上方にのびる口縁部をもつ。

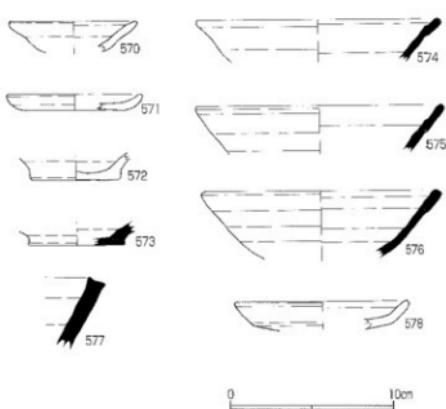
(577)は、端部が面をもち、やや肥厚する捏鉢である。

(578)は、口径11.0cmを測る土師器皿である。口縁部には一段ナデが施されている。

まとめ

今回の調査地の北側では、11世紀後半を中心とした時期に墓域が形成されるが、周辺の調査とあわせて考えれば、少なくとも今回の調査地まではのびないであろうと考えられる。また、SE13101が、12世紀後半以降に埋没したことを考えれば、墓地形成後も周辺には集落が形成されていた可能性が窺われる。

しかしながら、周辺の調査状況によると、その大半が水田などの耕作地へと変化した様子が窺われるようであり、集落規模自体は縮小の傾向にあったと考えられる。



第101図 中世包含層出土遺物実測図

第4節 第18・20次調査

はじめに 当調査は、個人による店舗付き住宅の再建工事が行われるのに先立ち、工事に伴い影響を及ぼす範囲を対象として発掘調査を実施した。区画整理事業に伴い周囲の道路の発掘調査がすでに終了していたため、試掘調査は行わず西側の道路に面した一部分を埋設管工事に伴い先行して行い、後に建物全体を対象とした2回に分けた調査となった。

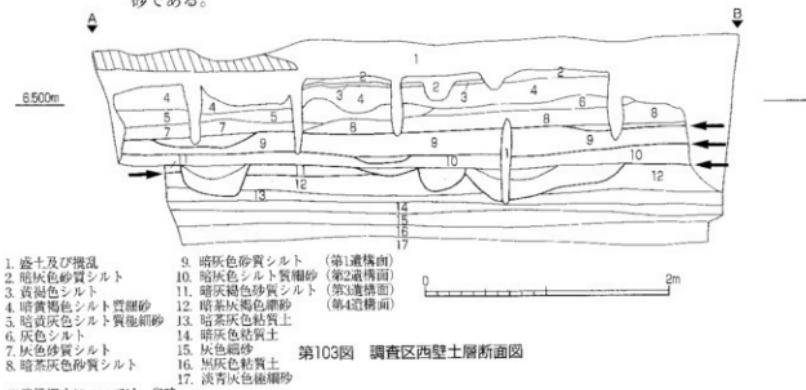
基本層序

調査地は、現在把握されている御藏遺跡の範囲のほぼ中央部分に位置しており、区画整理に伴う調査では平安時代を中心として、弥生時代後期（庄内併行期）から中世の遺構を検出している。

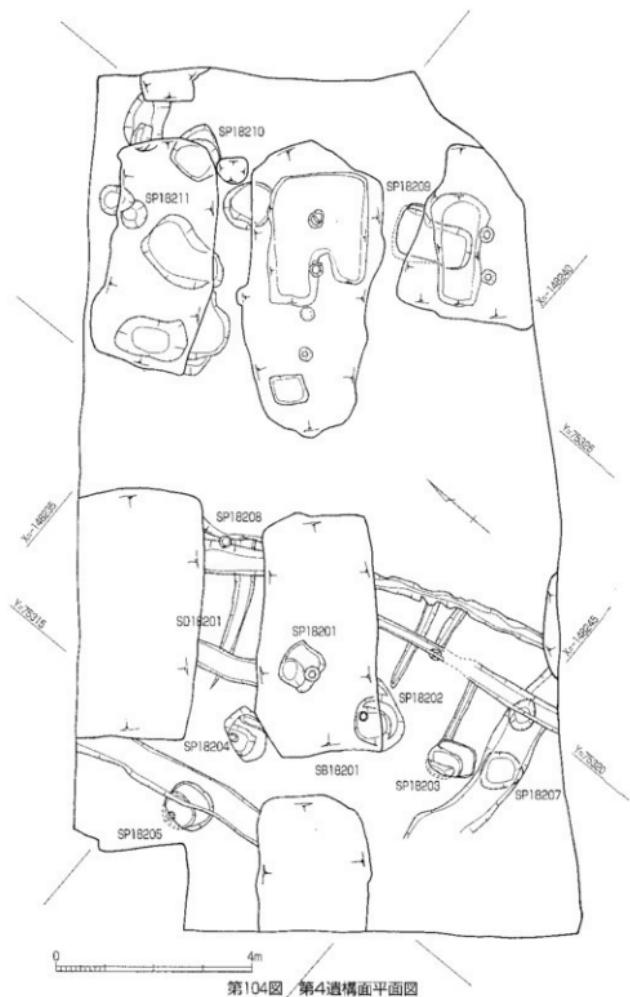
調査地は北から南に向かって緩く傾斜する緩斜面地で、刈藻川により形成された扇状地もしくは扇状地内の微高地に位置するものと推定されるが、市街化が著しく、表面上での地形観察は困難である。

調査地区内は各所に從前建物の基礎による搅乱を受けていたものの、4面の造構面を確認することができた。

搅乱の比較的少ない調査区西壁の断面図を基準として観察を行う。数面の旧耕土層の下に、第1造構面の遺物包含層である暗茶灰色砂質シルト、その下に第1造構面を構成し、第2造構面の遺物包含層である暗灰色砂質シルトがあり、その下に第2造構面を構成し、第3造構面の遺物包含層である暗灰色シルト質細砂、その下に第3造構面を構成し、第4造構面の遺物包含層である暗灰褐色砂質シルトの層序となっている。第3造構面と第4造構面はところにより同一に検出されており、共通する面を構成する層は、暗茶灰褐色細砂である。



第4遺構面



第104図 第4遺構面平面図

基本層序で前述したとおり、第3遺構面と第4遺構面が同一面で検出される部分があるため、遺構内出土の遺物と、深い攪乱の底に残存する遺構や規模形状から第4遺構面の遺構の抽出を行った。第4遺構面（飛鳥時代）ではピット18基、溝10条を検出した。

SB18201

西端で検出したL字に並ぶ柱穴で西半が調査区外に続くものと考えられることから2間×2間以上の掘立柱建物と推定される。掘形の平面形は方形もしくは隅円方形で、一辺が1m前後、深さが70cm前後の規模である。掘形の底には柱の沈み込みと思われる直径20cmの窪みがあり、それぞれ掘形の一辺に沿うように検出されており、窪みを線で結ぶときれいに直線に並ぶことがわかる。SP18203やSP18205は掘形の西壁が抉れており、断面観察

から柱痕が見られないことから柱を抜き取った際に抉れた可能性がある。

東端にも、大型の柱穴が複数検出されたが、明確に建物を構成するようには並ばなかった。柱穴の規模は、SB18201を構成する柱穴と同等もしくはそれ以上のものである。SP18210とSP18211からは掘形の底に礎板が出土している。SP18210から出土したものはモミ属で長辺25.5cm、短辺14.8cm、厚み2.6cmのものである。SP18211から出土したものはコウヤマキで長辺34.6cm、短辺10.8cm、厚み6.6cmのものである。柱材の痕跡は検出されなかつたが、礎板が出土したことから、建物に伴う柱穴と判断される。特にSP18209は掘形の平面が長方形で、長辺160cm、短辺110cm、深さ90cmの大きなものであるが、対となる柱穴が調査区内では検出されないことから、南側に建物が存在するものと思われる。

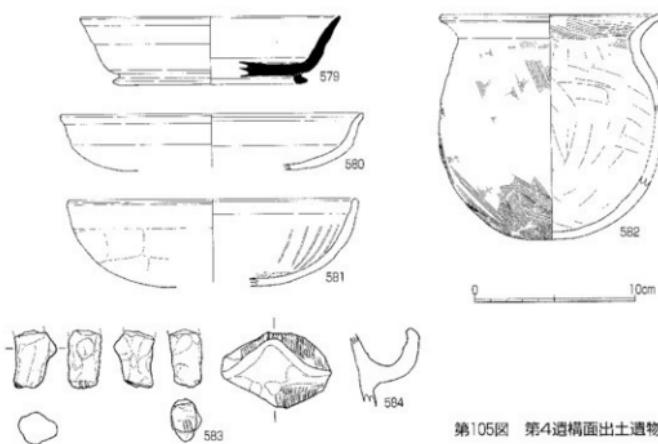
出土遺物

SP18210から出土した(584)は土師器壺の把手部分である。弧を描いてやや外方へ立ち上がる。壺の体部にはハケメが確認される。7世紀後半（飛鳥時代後半）のものと考えられる。(583)は土製品である。現存長は5.5cmで径は最大で2.4cmである。獸足状の形態をしており、上部に闊節状の表現、下部には沈線による爪状の表現がみられる。

その他の遺物については、第4遺構面検出時の出土遺物の中で図示できたものである。数値はいずれも復元による。(579)は須恵器、(580～582)は土師器である。

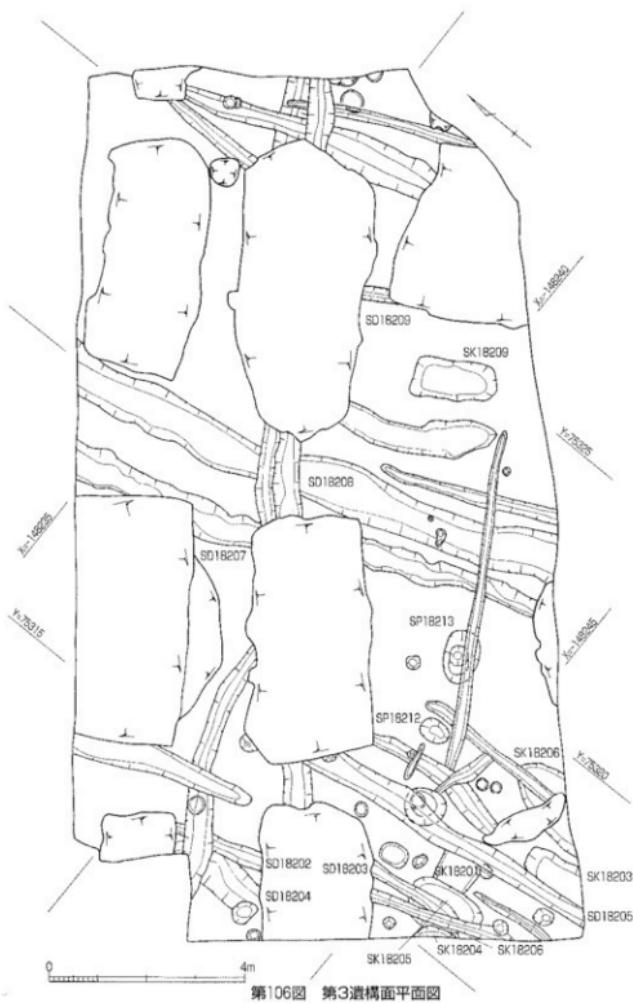
(579)は壺Bの身である。外反する高台で、体部は直線的に立ち上がる。口径は16.3cmである。(580)と(581)は壺である。(580)はやや直立気味に立ち上がった体部が、口縁部で外反する。口径は、18.8cmである。(581)は丸みをもって立ち上がる体部で、口縁部はナデにより作り出し、端部は丸く收める。内面はヘラミガキによる調整で、暗文を施す。口径は18.0cmである。(582)は小型の壺で、球状の丸い体部に、頸部から外反する口縁部をもつ。内面の頸部から上部がハケメ調整で、頸部から下はヘラケズリである。外面はハケメ調整を施す。外面の一部には煤が付着している。口径は13.6cmである。⁽¹⁾

これらの遺物は、飛鳥III期～IV期に比定されるものと思われ、7世紀中頃から後葉にかけての時期が考えられる。



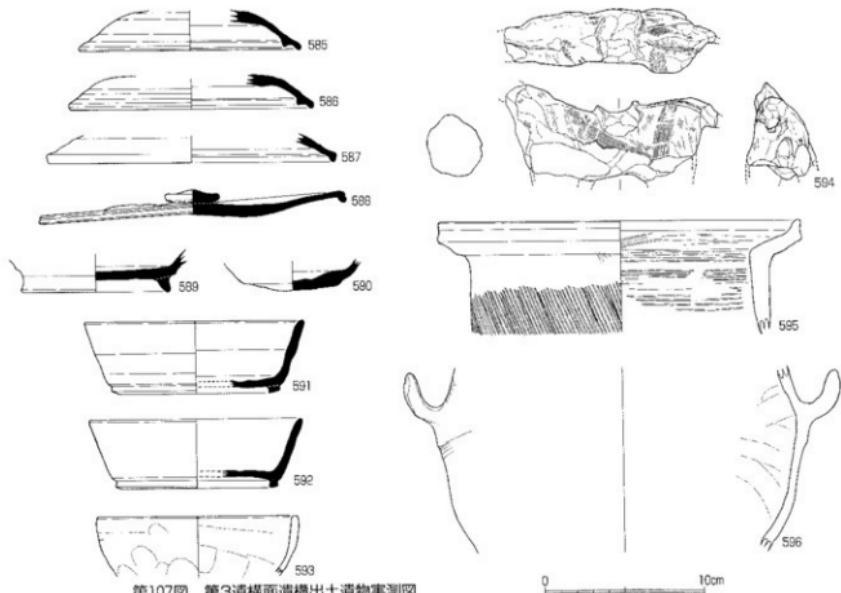
第105図 第4遺構面出土遺物実測図

第3遺構面



第106図 第3遺構面平面図

溝とピット多数を検出した。溝は、鋸溝が殆どである。SD18207とSD18208は、幅50~100cm、深さ15~30cmの規模のものであり、奈良時代の遺物が多数出土した。遺物の量や規模から見て、耕作やただの排水用だけではなく住居を画するような溝と考えられる。SD18209は、幅30cm、深さ5cmの南北方向の小規模なものであるが、溝の底から土馬が出土した。ピットは、直径20cm前後のものが散在している。SP18212、SP18213、SP18214は直径90~120cm、深さ30~50cmの規模が大きく、3基が東西に並んで検出されたが、対となるものが搅乱等で確認されず、建物に伴う柱穴であるかは不明である。



第107図 第3遺構面遺構出土遺物実測図

出土遺物

第3遺構面の溝からの出土遺物の中で、図示できたのが、図107である。(592)がSD18205、(592)がSD18206、(590)と(594)がSD18207、(585)はSD18208、(594)はSD18209からの出土で、その他のは鍛溝からの出土遺物である。数値はいずれも復元による。

(585～592)は須恵器である。(585～587)は壺Bの蓋、(589～592)は身、(590)は壺Aである。(585～587)は丸い笠状で、(585)と(586)は内面に「かえり」をもつ。(588)は扁平な宝珠つまみをもつ。内面に、4条のヘラ描きによる線刻がある。口径は(585)は13.6cm、(586)は15.0cm、(587)が17.7cm、(588)は19.0cmである。(589)は外方へ直線的に伸びる、やや退化した高台をもつ。(592)はやや内傾する高台に、外方に向けて斜面をもつ接地面である。体部は直線的に外方へ立ち上がる。(589)の底径は9.1cm、(592)の口径は13.2cm、底径は10.0cmである。(590)の底部は回転ヘラ切りで、底径は6.0cmである。

(593)は土師器の塊である。丸みをおびて立ち上がる体部で、内面はハケメ調整で、外面には口縁部付近がハケメ調整で、それより下にはユビオサエが確認できる。口径は12.4cmである。(594)は土馬である。頭部と脚部を欠損する。現存長は11.2cm、胴部での径は3.4cmである。手づくねで鞍を表現し、ユビナデで整形している。ヘラ描きで後繋を表現し、体部にはハケメによる表現も見られる。写実的な表現である。土馬は神戸市内では住吉宮町遺跡、二宮遺跡、上沢遺跡、寒風遺跡などで出土しているが、いずれも古代山陽道沿線から出土している点が注目される。(595)は甕で、平安時代前半のものである。混入品の可能性も考えられる。(596)は甕で、把手が付く、飛鳥時代のものと考えられる。

SK18201

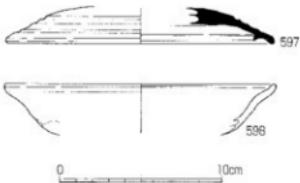
調査区の西端部南側で検出した、土坑である。幅約80cmを検出したが、南側の一部をSD18206に切られ、西側はSK18205によって切られている。埋土は暗灰色砂質シルトで、奈良時代の須恵器、土師器が出土した。

出土遺物のうち、図示することができるのが(597)と(598)である。

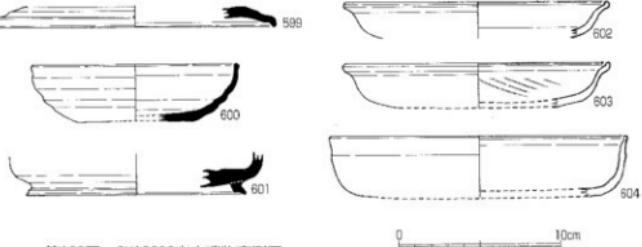
(597)は須恵器の壺蓋、(597)は土師器の壺である。

(597)は壺Bの蓋で、頂部の丸い、笠状を呈する。口縁部内面には「かえり」が付く、口径は16.0cmである。(598)は口縁端部をつまみ上げている。口径は16.5cmである。

出土遺物からSK18201は奈良時代初頭（8世紀初め）の時期が考えられる。



第108図 SK18201出土遺物実測図



第109図 SK18203出土遺物実測図

SK18203

調査区南角付近で検出した土坑である。西側をSD18206に切られ、南側を搅乱を受けているため全体の規模は不明である。深さは検出面から20cmである。埋土は2層に分かれ、上から順に暗灰褐色砂質シルト、暗灰色砂質シルトである。

出土遺物で、図示できたのが図109である。(599～601)が須恵器、(602～604)は土師器である。

(599)は壺Bの蓋で、口径は17.2cmである。(600)は壺Aである。底部から内湾しながら立ち上がる体部で、口縁部は垂直に立ち上がる。口径は12.3cm、底径は7.0cmである。(601)は壺Bの身である。外方へ踏ん張った高台をもつ。接地面は内湾する。底径は13.4cmである。

(602、603)は壺C、(604)は壺Aである。(602)と(603)は、共に強いナデにより、口縁部を引き出し、端部は玉縁状を呈する。口径は(602)が16.0cm、(603)は16.2cmである。(604)は底部から弧を描いて、直立的に立ち上がる。口縁端部は玉縁状を呈する。

出土遺物からSK18203の時期は、奈良時代前半（8世紀前半）と考えられる。

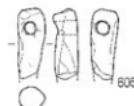
SK18205

楕円形の土坑で長径138cm、短径105cm、深さ9cmの規模である。埋土は暗灰褐色砂質シルトで、骨片と土師器の小片が出土している。骨は、ウマの左第3中足骨近位端から骨幹中央部にかけての残欠で、Bp = 40mm～を測る。

SK18209

調査区の南東で検出された短辺80cm、長辺194cm、深さ3~7cmの長方形の浅い土坑である。

(605)は、有孔土錐で下半を欠落する。現存長は4.4cm、径は1.9cmである。土師質で、表面は丁寧なユビナデで仕上げられている。穿孔部付近には、使用によるものと考えられる擦痕が認められる。



第110図 SK18209出土有孔土錐実測図

ピット

建物を構成するもの以外のピットからも、わずかに遺物が出土した。(606)と(607)はこれらピットからの出土遺物の中で図示できたものである。

(606)はSP18213から出土した須恵器の坏Bの蓋である。頂部が笠状に丸いタイプで、口径は17.2cmである。



(607)はSP18212から出土した須恵器の坏身である。体部は直線的に外方へ立ち上がる。口径は17.2cmである。



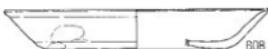
これら出土遺物は共に奈良時代初頭（8世紀前半）のものと考えられる。

第111図 第3遺構面ピット出土遺物実測図

包含層から

第3遺構面の遺物包含層である暗灰色シルト質細砂層から出土した遺物の中から図示できたのが、図112である。数値はいずれも復元によるものである。

(608)は土師器の皿である。体部は底部から直線的に外方へ延びる。ユビオサエがわずかに確認できる。口径は16.4cm、底径は11.2cmである。



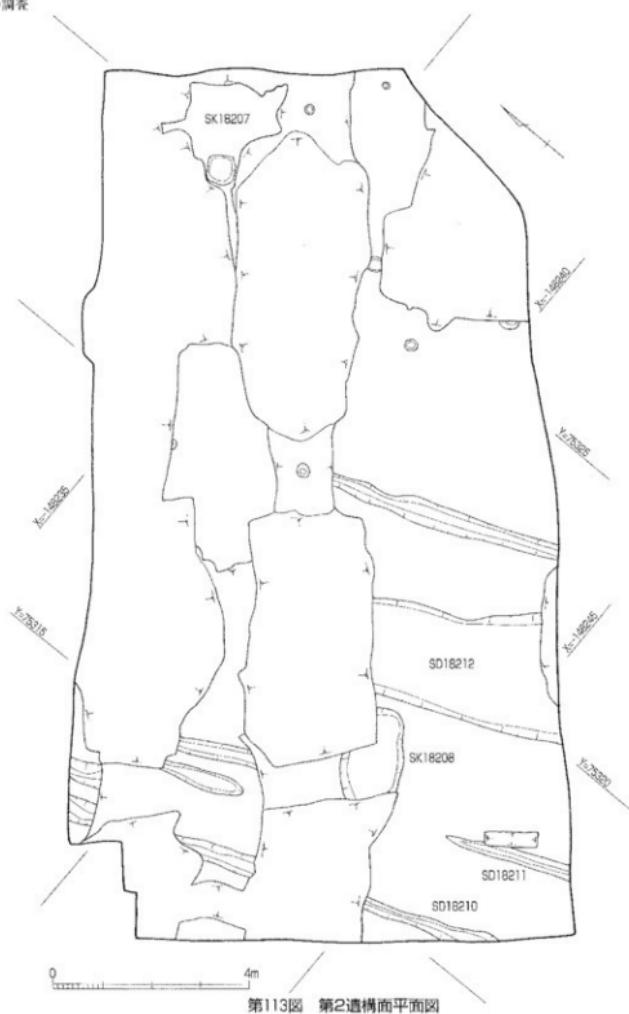
奈良時代末（8世紀後半）のものと考えられる。

(609)は須恵器の坏Bである。体部は底部から直線的に立ち上がる。高台はやや外反しながら、直線的に外方へと延びる。口径は14.8cm、底径は10.8cm。奈良時代末～平安時代初頭（8世紀末）のものと考えられる。



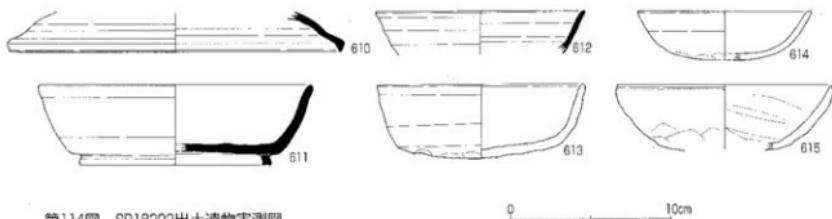
第112図 第3遺構面包含層出土遺物実測図

第2遺構面



第113図 第2遺構面平面図

溝6条とピット6基、上坑2基を検出した。溝は幅50cm前後で深さ5cmの規模であり、耕作に伴う溝と考えられる。SD18212は幅2m、深さ15cmの規模のもので、区画を意識した水路状の遺構と考えられる。ピットは、直徑20cm前後の規模のものが散在して検出された。建物などは検出されなかった。SK18207は直徑55cm、深さ30cmの規模で、SK18208は長辺180cm以上、短辺120cm、深さ16cmの遺構である。この時期には、居住地としてではなく耕作地として利用されていたと考えられる。遺構内からは、奈良時代から平安時代にかけての遺物が出土した。



第114図 SD18202出土遺物実測図

SD18212

調査区のはば中央で検出された溝である。規模は、幅2m、深さ南端で15cmを測り、断面V字状の緩やかな深いものである。溝の方向は南北方向で南流していたと考えられる。北半についていは、全体が削平を受けていたため検出できなかった。他の溝と異なり、溝の規模が、特に幅が広いことから、何らかの区画を画すことと、給排水に利用する幹線的な水路状の利用が考えられる。

SD18212からの出土遺物の中で、図示することができたのが図114である。(610～612)が須恵器、(613～615)が土師器である。

(610～612)はいずれも壺で、(610)が壺Bの蓋、(611)と(612)は身である。(610)は頂部が笠状に丸いタイプで、口径は20.5cmである。(611)は壺Bで、底部からやや内湾しながら外方へ立ち上がる体部、高台は外方へとふんばる。接地面は内湾し、窪む。口径17.0cm、底径は11.8cmである。(612)は口縁部付近のみで、底部は欠損する。体部は直線的に外方へ立ち上がる。口径は13.0cmである。

(613～615)は土師器で、(613)は壺、(614)と(615)は碗である。

(613)の口径は13.0cmで、摩滅により調整痕は判然としないが、底部付近にはわずかにユビオサエが確認される。(614)はやや小型のタイプで、口径は10.8cmで、底部付近にわずかにユビオサエが確認される。(615)は口径13.4cm、外面は摩滅が著しく、下半にわずかにユビオサエが確認されるのみで、内面はハケメ調整である。

これら出土遺物は概ね平城I期に比定され、出土遺物からSD18212の時期は8世紀初め頃と考えられる。

ピット

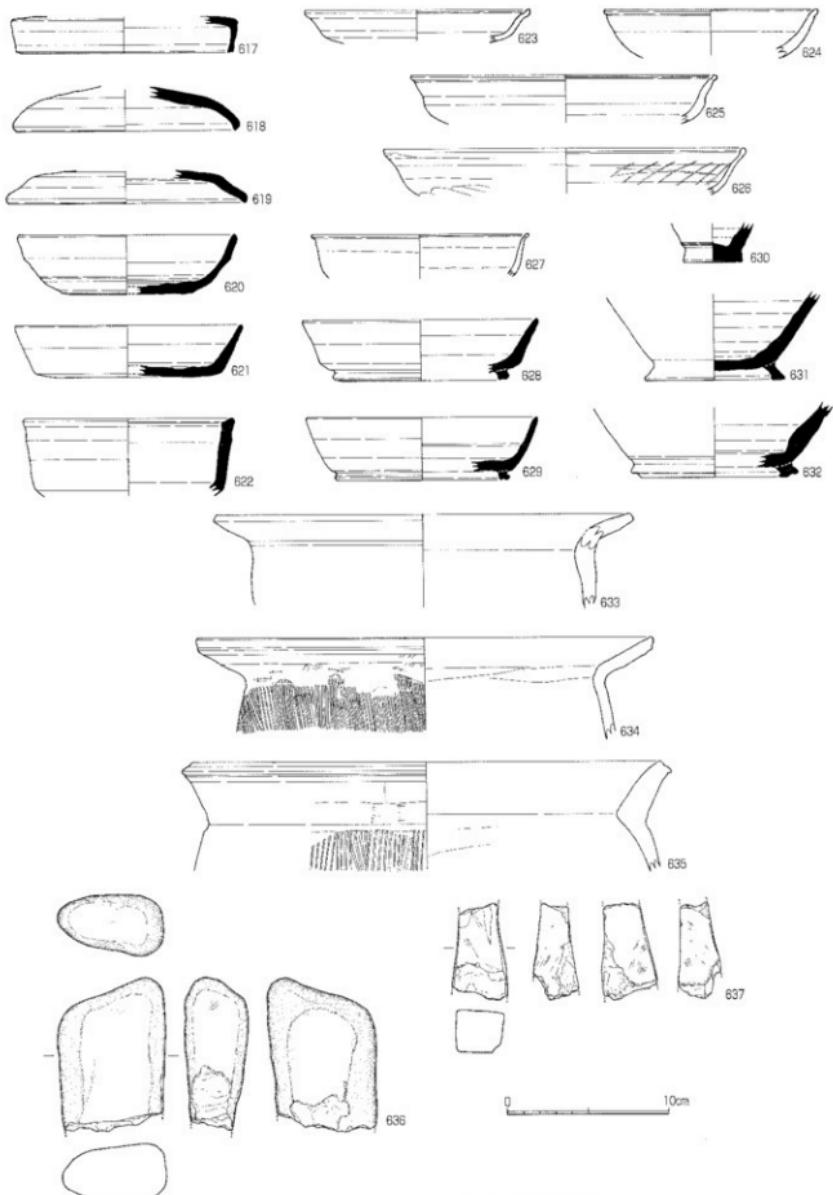
第2遺構面からは6基のピットを検出したが、いずれも建物等を構成するものであるかは、確認することはできなかった。これらのピット内からの出土遺物はいずれも微細な小破片であった。この中で図示できたのが図(115)である。

(616)は須恵器の壺の蓋である。口縁部付近のみの残存である。口縁端部上面は強いナデにより口縁部を作り出している。口径の復元による数値は14.4cmである。平安時代初頭(8世紀末葉～9世紀前葉)頃のものである。



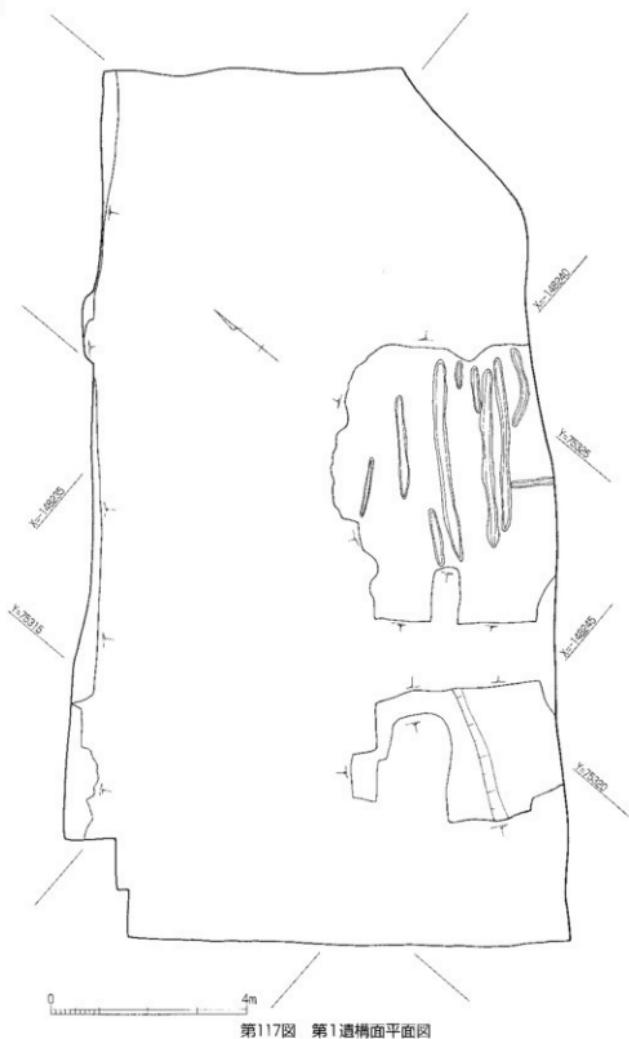
第115図 第2遺構面ピット出土遺物実測図

- 包含層出土遺物** 遺物包含層である暗灰色砂質シルト層からは、比較的まとまった量の遺物が出土した。(617~621、628、629、630~632)は須恵器、(623~627)及び(633~635)は土師器である。(617)は壺Aの蓋である。口径は13.0cmである。
- (618)と(619)は壺Bの蓋である。頂部が笠状に丸くなるタイプである。口径は(618)が13.6cm、(619)が14.8cmである。
- (620)と(621)は壺Aである。(620)は底部から丸みをもって立ち上がるタイプで、口径は13.5cm、底径は7.6cm。(621)は体部が底部から直線的に外方へ立ち上がるタイプ、口径は14.0cm、底径は11.4cmである。
- (622)は壺Aに分類されるもので直立に近く立ち上がる体部で、口縁部はナデにより、内傾する斜面を有する。口径は12.8cmである。
- (628)と(629)は壺Bである。共に外方へふんばる高台で、接地面は内湾して窪む。(628)は底部からやや外半気味に外方へ体部が立ち上がる。口径は14.6cm、底径は10.8cm。(629)は底部から内湾気味に外方へ体部が立ち上がる。口径は14.4cm、底径は10.6cm。
- (630~632)は壺の底部である。(630)は小型の壺で、底部は回転糸切りである。外面の一部に自然釉が付着する。底径は3.7cm。(631)は高台が内湾しながら外方へ大きくふんばる。底径は8.8cm。(632)の高台はやや内湾気味で、接地面は内湾してくぼむ。底径は10.5cm。
- (623、624、625)は壺である。(623)は外半する体部に、口縁下部に沈線を施し、やや玉縁状の口縁部を作り出している。口径は14.0cmである。(624)は板ナデにより体部を整形し、口縁部内面に沈線を施すことにより玉縁状の口縁部を作り出す。口径は19.0cmである。(625)は直立的に立ち上がる体部に玉縁状の口縁部を有する。口径は13.5cm。
- (626)は皿である。体部は外方へ引き出すように整形され、口縁部は玉縁状である。体部外面下部には、わずかにケズリが確認できる。内面には暗文が施される。口径は22.5cm。
- (624)は壺である。丸みを持って外方へ立ち上がる体部で、口縁部はわずかに玉縁状である。口径は13.3cmである。
- (633~635)は甕である。(633)は直立的に立ち上がる体部から外反気味に口縁部が外方へ張り出す。摩滅により調整は明らかではない。口径は15.8cm。(634)はわずかにふくらみをもつ体部から内湾気味に口縁部が外方へと張り出す。体部外面には、1.5cm幅程の工具により縦方向にハケメが施されている。口径は28.3cmである。(635)は頸部から直線的に口縁部が外方へ立ち上がる。体部外面には1.5cm幅程の工具による縦方向のハケメが施されている。口径は29.0cmである。
- (636)と(637)は砾石である。(636)は下半を欠損する。現存長は最大で9.5cmである。4面を擦面として使用している。花崗岩と考えられる。(637)は上部と下部を欠損する。断面四角形の柱状の形状で、現存長は6.0cmである。四面全てを擦面として使用している。凝灰岩と考えられる。
- これら第3号構造の遺物包含層である暗灰色砂質シルト層からの出土遺物は、概ね平安1期から3期に比定されると考えられるものが主体を占め、(630、631)の様に平安京1期に比定されると考えられるものも含まれる。時期については奈良時代初頭（8世紀前半）～平安時代初頭（8世紀後葉～9世紀前葉）のものと考えられる。



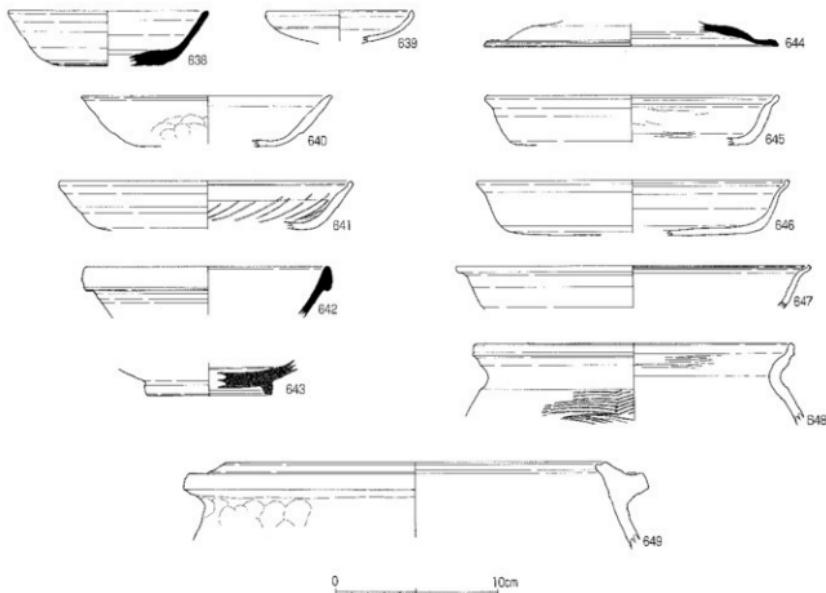
第116図 第2遺構面包含層出土遺物実測図

第1遺構面



第117図 第1遺構面平面図

從前建物のコンクリート基礎及び整地によりほとんどが削平を受けていたが、調査地の南西側にのみ削平を免れた面が検出された。旧耕上面で鋤溝が複数検出された。鋤溝は、調査区の長軸方向にほとんどが並んでおり、1条だけがこれに直行する方向である。規模は、幅20~30cm、深さが2~5cmの極浅く残存していた。南西側には検出面から15~20cmの段差を検出した。全体の形状が擾乱や調査区の外に拡がっているため、用途は不明であるが、耕作地としての水利による耕作面の段差であると考えられる。



第118図 第1遺構面包含層出土遺物実測図

**遺物包含層
出土遺物**

第1遺構面の遺物包含層である灰色砂質シルトからは、比較的まとまった量の遺物が出土した。図118は、出土遺物の中で図示できたものである。数値はいずれも復元による。

(638)と(644)は須恵器である。(638)は壺Aで口径は12.4cm、底径は6.0cm。(644)は壺Bの蓋で、口径は18.4cm。共に平安時代前半（平安京Ⅰ期、9世紀前半）と考えられる。

(639～641)および(645～649)は土師器である。(640)は壺である。体部外面にわずかにユビオサエが確認できる。口径は15.6cm、底径は8.8cm。(645～647)は壺A、(639、641)は皿である。(641)は口径と立ち上がりから皿と考えた。底部から直立気味に立ち上がり、口縁端部は内面に施された沈線により玉縁状を呈している。(641)は内面に暗文が施されている。(645)の口径は18.0cm、底部は11.8cm。(646)は口径18.2cm、底径は14.4cm。(647)は19.4cm、底径は14.0cm。641は22.0cm。概ね平城Ⅱ期～Ⅲ期に比定される。

(648)は壺である。受け口状の口縁部で、強いナデにより頸部を作り出している。体部外面は1.3cm幅程の工具によりハケメ調整である。鎌倉時代（13世紀）と考えられる。

(649)は羽釜である。口径は23.7cm。鎌倉時代（13世紀）のものと考えられる。

(642)は白磁の碗である。IV類に分類されるもので、玉縁状の口縁部で、口径は15.0cm。鎌倉時代前半（12世紀末～13世紀初頭）のものと考えられる。

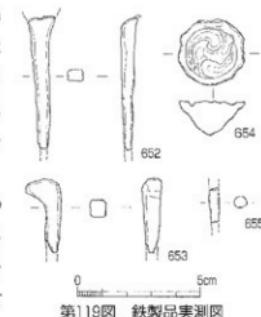
(643)は緑釉陶器の壺の底部になると考えられる。胎土は須恵質で、高台は貼り付けの輪高台である。高台内面及び底部にも施釉が認められる。釉は淡緑灰色である。平安時代後期のものと考えられる。

動物遺体

写真図版56(650)は第3遺構面のSK18205から出土した。ウマの左第3中足骨近位端から骨幹中央部にかけての残欠で、残存40mmを測る。651は、ウマの右下顎臼歯で、歯冠長=29.2mm、歯冠幅=17.7mm、エナメル高=67.4mmを測る。Hの値より推定される年齢は3~5歳である。

鉄製品

(652)は櫛乱掘削時に出土した鉄釘である。長さ5.4cm~、頭幅1.1cm~、残存重量3.1gを測り、基部中央付近の横断面は0.7×0.5cmの長方形を呈する。頭部は端部を欠損しているために先端の形状は不明であるが、平らに打ち延ばされた様子が観察できる。(653)は暗灰色シルト質細砂より出土した鉄製折り曲げ釘で、残存長3.0cm、残存重量2.6gを測り、基部上端の横断面は6×6mmの正方形を呈する。(655)は鉄釘基部の残欠であり、長さ1.4cm、重量0.4gのみ残存する。横断面は約0.4cmの径を測る。半坦面をもつ歪な円形であるが、先端側に立って長方形を呈しており、本来は長方形断面の釘であったようである。(654)は鑄物製貝殻である。摩滅と腐食により頂角が鈍化しているものの、本来平面形は径約2.8cmの正八角形であったと考えられる。高さは1.4cm、重量は20.4gである。上部平坦面には巴文が見られる。鑄物製の貝殻は明治末期以降に流行するため、擾乱による混入と考えられる。



第119図 鉄製品実測図

註

- (1) 飛鳥期から平安期の出土遺物の時期、型式分類については古代の土器研究会編『古代の土器1 都城の土器集成』古代の土器研究会 1992 及び古代の土器研究会編『古代の土器2 都城の土器集成II』古代の土器研究会 1993 の編年観、型式分類に基づく。
- (2) 菊池逸夫・神野信「住吉宮町遺跡第23次調査」『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1999
- (3) 谷正俊「二宮遺跡 第1次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2001
- (4) 萩木巖・柏原正民・兼安保明・弘田和司「上沢遺跡 第3次調査」前掲*
- (5) 萩木巖・奈良康正「上沢遺跡 第16次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2000
- (6) 宮本郁雄・中村大介編「古代のメインロード~山陽道沿線物語~」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館 1978

参考文献

- 安田滋・富山直人・石島三和編「御歳遺跡第4・6・14・32次発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2001
 安田滋・池田毅・阿部功・中居さやか「御歳遺跡第17・38次発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2001
 川上厚志編「二葉町遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2001
 山下史郎編「大出町遺跡」兵庫県教育委員会 1993
 兵江秀典「奈良時代の土器」「丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書」兵庫県教育委員会 1985
 山本雅和編「深江北町遺跡第9次埋蔵文化財発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2002
 山本雅和「SD01出土の土師器について」「日輪寺遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2001
 中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 1995

第5節 第31・33次調査

遺構面 6枚の遺構面が確認された。それぞれの標高は以下の通りである。ただし工事影響範囲までの調査であるため、第31次調査では第5遺構面以下の調査は行っていない。

地表	(1a層上面)	: 約7.3m
第1 遺構面	(4a層下面)	: 約6.5～約6.7m
第2 遺構面	(4b層下面)	: 約6.4～約6.5m
第3 遺構面	(7a層上面)	: 約6.3m～約6.4m
第4 遺構面	(7a-2層下面)	: 約6.2m
第5 遺構面	(8a層上面)	: 約5.7m
第6 遺構面	(9a層上面)	: 約5.0m～約5.2m

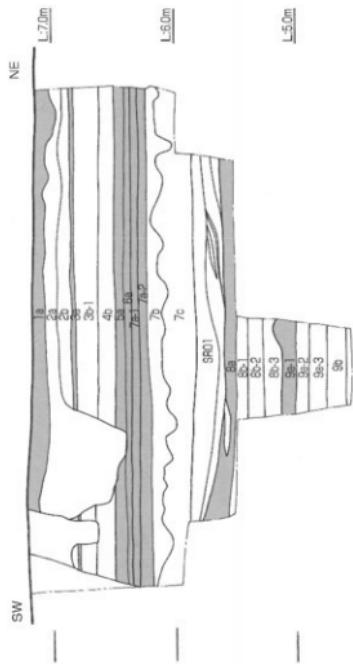
第6遺構面 厚く堆積した洪れ砂 8b 層の下面で確認された水田。3枚の水田が確認された。北の水面の標高が5.2m、中の水面の標高が5.1m、南の水面の標高が5.0mである。畦は幅約15～20cm・高さ6～7cmを測る。水田面は凸凹が顕著である。この状態から洪水によって水田が埋没したのは、田植え以前、田起こしの時期であったと推測される。

上層の第5遺構面が古墳時代前期であることから、この面がそれ以前の遺構面になることは確認できるが、水田を覆う洪れ砂および水田耕土からの遺物の出土がなかったため、この遺構面の時期について判断できない。

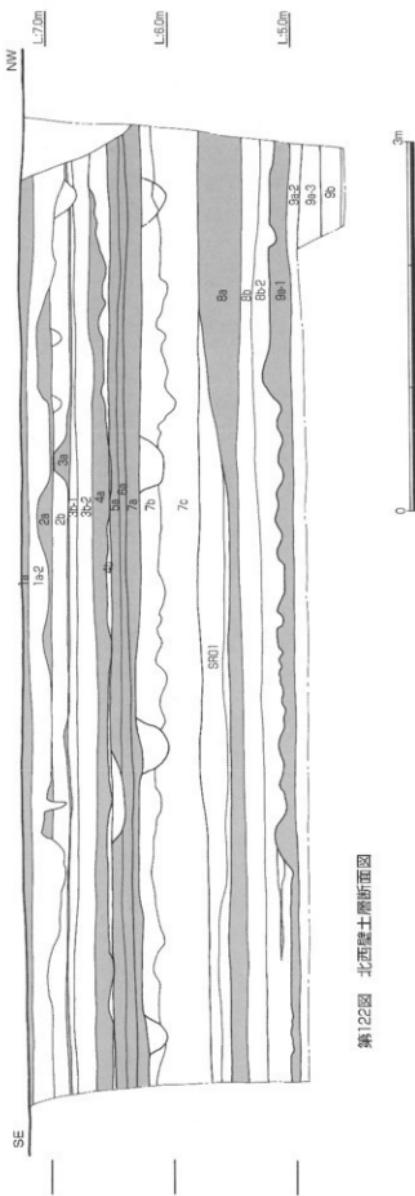


左 第120図 第6遺構面平面図
右 摂写真3 第6遺構面調査作業風景

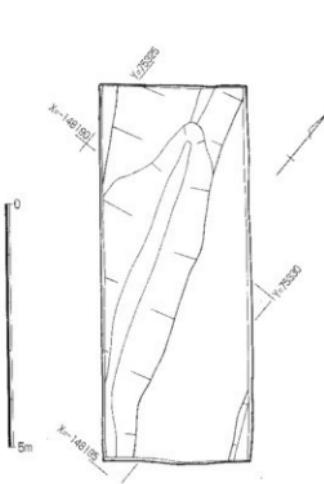
第5遺構面 自然流路状の凹みが確認された。この遺構面の表土層である8a層からは土器の小片がわずかに出土しただけである。この面を厚く洪れ砂(7c層)が覆っており、ここから古式土師器が出土している。出土遺物からこの遺構面は古墳時代前期のものと推測される。



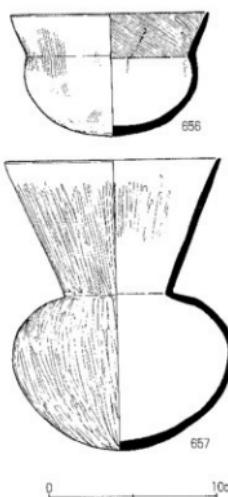
第121図 南西壁土層断面図



第122図 北西壁土層断面図



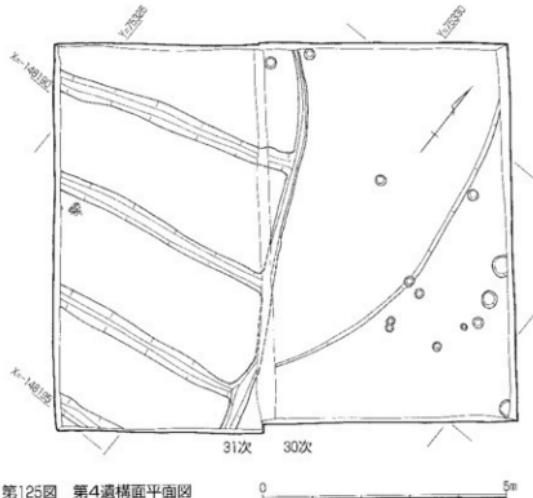
第123図 第5遺構面平面図



第124図 第5遺構面自然流路出土遺物実測図

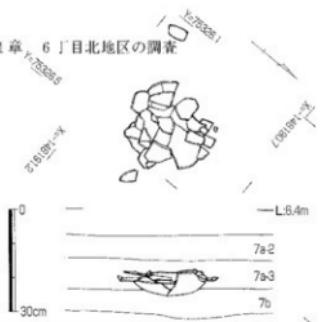
第4遺構面

7a 層下位で、畠地に関連するものと推測される区画溝が検出された。幅約40cm・深さ約15cmの東西方向の溝が2.0~2.1m間隔でならび、これらに直交してその東端を区画する幅約20cm・深さ約5cmの南北溝がある。この南北溝の東に区画溝は存在しないが、遺構面が弧状に段違いとなり、東側が10cmほど高くなっている。このほか柱穴11基が検出されたが出土遺物はなかった。この遺構面に対応する耕上である7a層からは、正位に据えられた

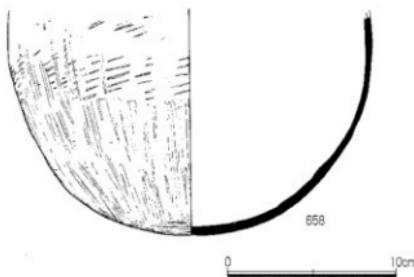


第125図 第4遺構面平面図

第4章 6丁目北地区の調査



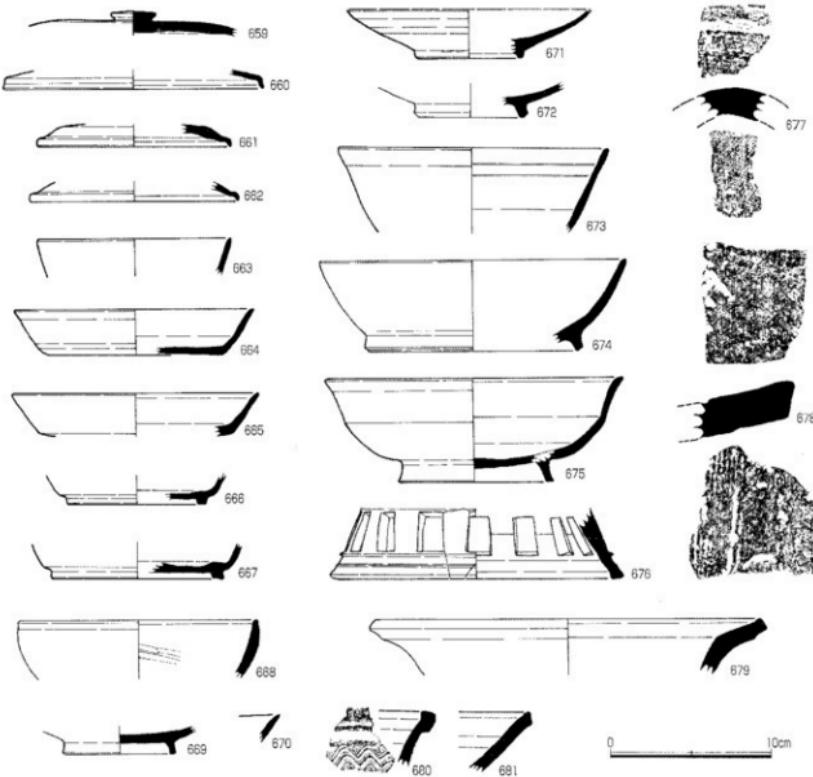
第126図 7a層遺物出土状況



第127図 7a層出土遺物実測図

状態で古式土師器 1 個体が出土しており、第 4 遺構面は面は古墳時代前期のものであると判断される。

第3遺構面



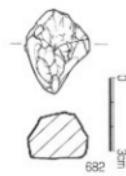
659~667・673~676・679~681：須恵器、668：土師器、669・670：緑釉陶器、671・672：灰釉陶器、677・678：瓦
659・660・663~676・679・680：7a層、661・662・677・678・681：5a層

第128図 第3遺構面出土遺物実測図

6a層下面=7a層上面で多数の遺物が面的な広がりをもって出土した。この面では遺構等は確認されないが、遺物の出土状況から7a層上面は遺構面として判断される。

この遺物集中地点では、火を焚いた痕跡と考えられる炭粒子が多く確認され、須恵器円面鏡・同稜鏡・土師器・綠釉陶器・灰釉陶器・瑪瑙火打ち石・馬齒なども出土している。出土遺物から、この面は奈良時代から平安時代前半のものと推定される。

第129図 第3遺構面出土火打ち石実測図

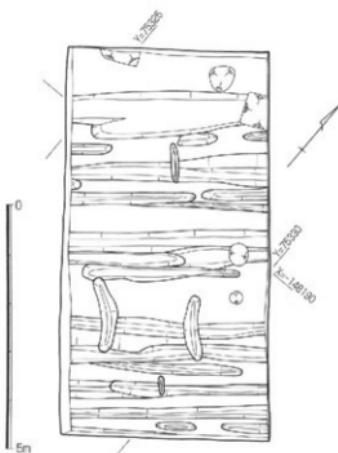


第2遺構面

第1遺構面の下数センチにある遺構面。平面的に検出することはできなかったが、31次調査・33次調査ともに南西壁の観察でこの面から切り込まれる遺構が確認された。壁面で確認された遺構は幅約70cm・深さ約10cmの溝で、この遺構が直線的に伸びているものであれば、その方向は計算上北から東へおよそ46°振った方向となり、北から東へ50°振る条里方向に合致する可能性がある。

第1遺構面

4a層下面で条里方向の耕作痕（鎌溝）多数とこれに直交するもの若干が検出された。これに対応する耕土である4a層からは14世紀末から15世紀初めを上限とする中世の上器片・中国銭（開元通宝）等の遺物が出土している。



第130図 第1遺構面平面図



挿図写真4 第1遺構面調査作業風景

鉄製品

(683・684)は3b層出土の鉄釘である。

(683)は長さ3.9cm～、頭幅1.1cm～、基部中央の横断面は0.8×0.6cmの長方形を呈する。頭部は薄く打ち延ばされ、打ち込む際に折れ曲がっている。頭部先端は欠損するが、頭巻釘の可能性もある。

(684)は全長3.5cm、頭幅0.5cm、基部中央の横断面は0.4×0.3cmの長方形を呈する。頭部先端は欠損するが、扁平な作りと届曲の様子から、頭巻釘と考えられる。

(685)は3b層出土、北宋銭の「元豊通宝(初鑄1078)」である。法量は銭径2.5cm、内径2.0cm、銭厚1.3mm、残存量0.29gを測る。

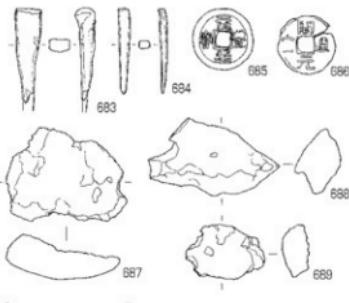
(686)は渡来銭の「開元通宝(初鑄621)」である。法量は銭径2.4cm～、内径2.1cm、銭厚1.0mm～、残存量0.18gを測る。

鉛滓

(687・688・689)は鉛滓である。(687)は1～3a層出土の楕形滓片である。表面には褐色の酸化鉄が析出している。比重は3.07を測る。(688)は、6a層出土の鉛滓片である。底面は楕形を呈し、砂粒が溶着する。上面はオリーブ色の流動滓が存在し、表面には褐色の酸化鉄が析出している。比重は1.7を測る。(689)は、6a層出土の鉛滓片で、底面は楕形を呈する。土壤由来の灰色の滓表面に褐色の酸化鉄が付着している。比重は1.67である。実体顕微鏡による破断面の観察では、上記3点共にヴィスタイト結晶組織を確認した。そのためこれらの滓は、鉄生産に由来するものと考えられる。

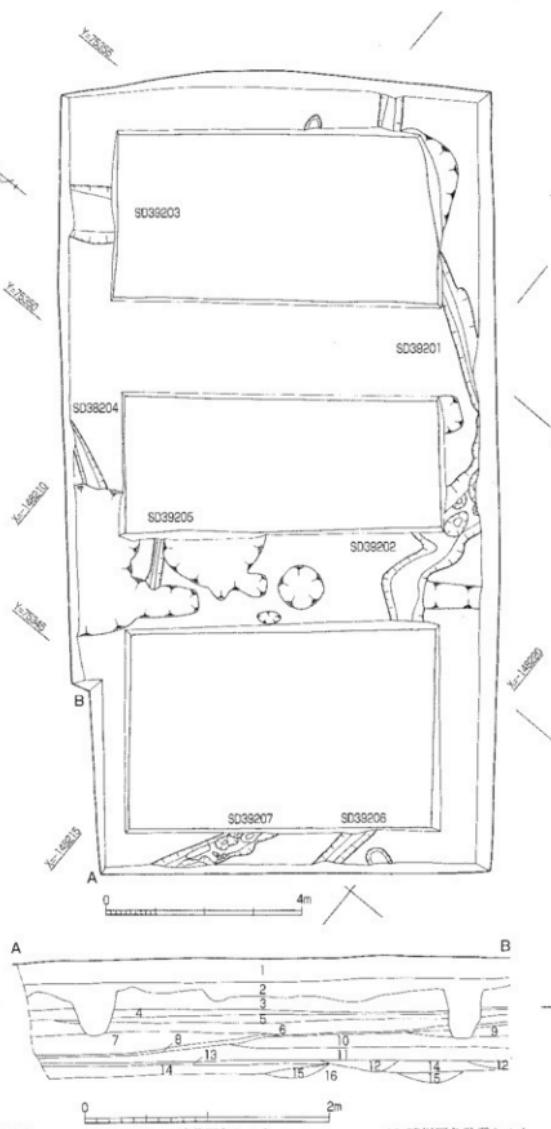
まとめ

律令期の遺構面である第3遺構面では、焚き火跡以外顯著な遺構は確認されなかつたが、硯・綠釉陶器・灰釉陶器などが出土しており、上層の包含層からの出土ながら瓦も存在する。近辺にこの時期の遺構が存在するものと推測されよう。火を焚いた痕跡・馬歯などの出土はどういった行為の痕跡であるのか興味をひかれる。他の遺構面の多くでは水田・畠が確認され、長くこの地が耕作地として土地利用されてきたことを示している。この中で第6遺構面、弥生時代の水田の存在はこれまでの調査では確認されておらず、御蔵遺跡の歴史を一枚さかのぼらせることになった。ごくせまい範囲の調査であるため水田の規模等は確認できなかつたが、確認された水田は南のものほど低くなる棚田状のものである。この水田造成当時の地形は現状のような全くの平地ではなく、谷などのある傾斜地であり、そこに土地の傾斜にあわせた小区画水田が造られたと推測されよう。



第131図 鉄製品実測図

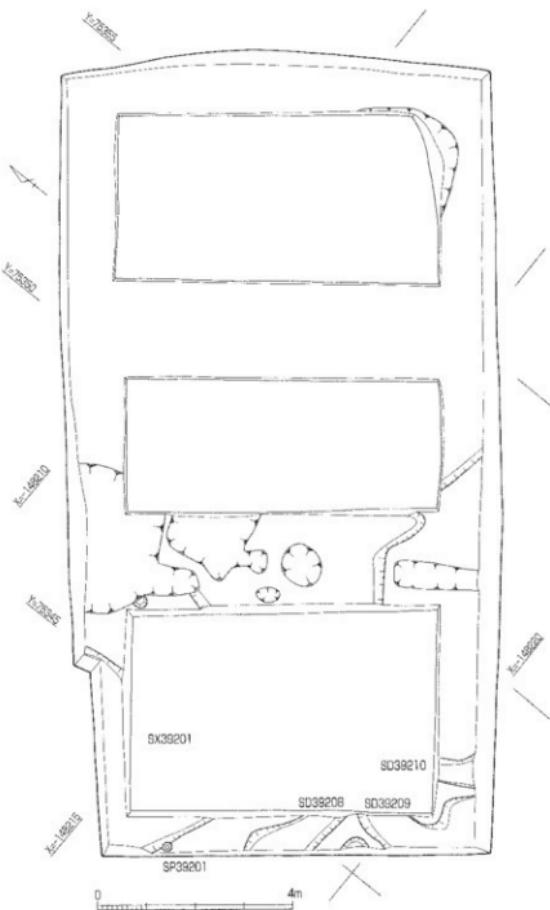
第6節 第39次調查



1. 黃地土	8. 暗黃灰色シルト	12. 暗褐色灰色質賀シルト
2. 飯土	9. 淡黃灰色シルト	13. 暗褐色シルト
3. 灰色質賀シルト	10. 黄灰色軟質土	14. 淡茶灰色シルト
4. 茶褐色シルト質細砂	(中世、遺物包含層)	(令和時代遺物包含層)
5. 淡灰黃色シルト質細砂	11. 黄褐色軟質シルト	15. 暗褐色灰土質細砂
6. 暗紅色砂質シルト	(奈良~平安時代、遺物包含層)	16. 淡茶灰色シルト質細砂
7. 淡黃色シルト		

第132図 遺構平面図及び断面図

はじめに	第39次調査は、店舗建設に伴うものである。建築計画に基づき、建物基礎による掘削の影響を受ける範囲について、発掘調査を実施した。
基本層序	調査地の基本層序は、近代から現代にかけての整地、盛土層の下層は旧耕土及び床土層である。その下層が上から順に中世の遺物包含層である灰黄色粘質土（10層）、第1造構面及び奈良～平安時代の遺物包含層である灰褐色砂質シルト（11層）、第2造構面及び奈良時代の遺物包含層である暗茶褐色シルト（13層）であり、この下層が第3造構面を構成する淡茶灰色シルト質極細砂（16層）である。
第3造構面	尚、これより下層は工事影響深度よりも下となるため、調査はこれまでである。
SD39201	第3造構面では、ほぼ調査区の全体で造構が確認され、溝7条、ピット2基を検出した。調査区の南半東側で検出した幅50cm前後、検出面からの深さ14cmの南西から北東方向の溝である。両端は調査区外へと続く。埋土は暗灰褐色粘質土である。
SD39202	調査区の南半中央で検出した幅65～120cm、検出面からの深さ7～45cmのはば東西方向の溝である。両端は調査区外へと続く。埋土は暗灰褐色砂質シルトである。
SD39203	調査区の北東角付近で検出した幅120cm前後、検出面からの深さ7～13cmの北西から南東方向のみぞである。北側は調査区外へと続く。埋土は暗灰褐色粘質土である。
SD39204	調査区の北半中央で検出した幅40cm前後、検出面からの深さ5～10cmの南西から北東方向の溝である。西側を搅乱によって切られている。埋土は暗灰褐色粘質土である。
SD39205	調査区の北半中央で検出した幅30cm、検出面からの深さ4～17cmの南西から北東方向の溝である。東側は調査区外へと続き、西側と南側の一部が搅乱により切られている。
SD39206	調査区の西端部やや南で検出した幅45cm、検出面からの深さ9cmの東西方向の溝である。両端は調査区外へと続く。埋土は暗灰褐色砂質シルトで、微細な土師器の小片が出土した。
SD39207	調査区西端部北側で検出した幅50cm前後、検出面からの深さ10cmの東西方向の溝である。掘形内は不安定な窪み状を呈しており、深さは一定ではない。溝状ではあるが、牛などの踏み込みによるものとも考えられる。埋土は暗灰褐色粘質土である。
ピット	2基のピットを検出したが、建物等を構成するものであるかは不明である。出土遺物はなかった。
第2造構面	今回の調査で確認されたこれらの造構は、出土遺物がほとんどなかったため、詳細な時期は不明であるが、近隣の調査データから概ね奈良時代であると考えられる。
SD39208	第2造構面では、東半部は湿地状の状況を呈しており、造構が検出されたのは西半部のみであった。溝3条、土坑1基、ピット2基、落ち込み状造構2基を検出した。
SD39209	調査区西端部北側で検出した幅60cm前後、検出面からの深さ6～8cmの東西方向の溝である。両端は調査区外へと続く。埋土は暗茶褐色シルトで、微細な土師器の小片が出土している。
SD39210	調査区南西角で検出した幅88cm以上、検出面からの深さ8～12cmの西に振る南北方向の溝である。両端は調査区外へと続く。埋土は暗茶褐色砂質シルトで、微細な土師器の小片が出土している。
	調査区南西角やや東で検出した幅65cm前後、検出面からの深さ6～8cmの北西から南北方向の溝である。両端は調査区外へと続く。埋土は暗褐色砂質シルトである。



第133図 奈良～平安時代遺構平面図

SK39201

調査区西端部やや南で検出した径54cm、検出面からの深さ7cmの落ち込み上の土坑である。西側は調査区外へ続く。埋土は暗褐色灰色砂質シルトで、上師器の小片が出土した。

ピット

2基のピットを検出したが、建物等を構成するものであるかは不明である。調査区西端北で検出したSP39201から微細な土師器の小片が出土している。

SX39201

調査区北西角付近で検出した幅420cm前後、検出面からの深さ6cmの落ち込み状造構である。全体の規模は、調査区外へ広がるため不明である。埋土は暗褐色灰色砂質シルトで、奈良時代のものと考えられる上師器が出土している。

出土遺物

遺物包含層も含めて、出土した遺物の大半は小破片であった。このため、造構からの出土遺物は図化することはできなかった。(690~709)は遺物包含層からの出土遺物の中で図化できたものである。数値についてはいずれも復元によるものである。

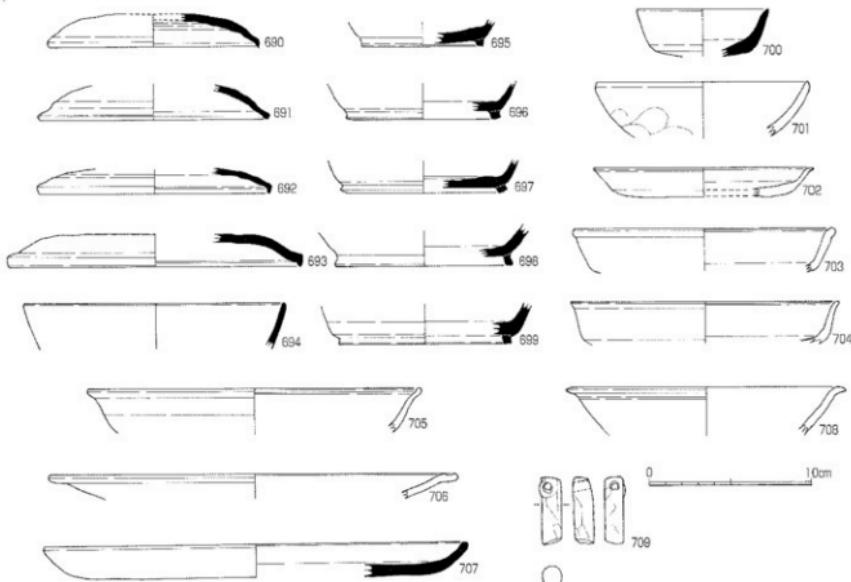
(690~693)は須恵器の坏蓋で、(690~692)は口径14.0cm~14.2cm、(693)は18.0cmである。

(690)と(691)は頂部の丸い笠状のB形態で、半城京編年のI~II期に並行するものと考えられるが、地域によってはII期までB形態の生産が指摘されており⁽¹⁾。概ね、奈良時代前半（8世紀前半）のものと考えたい。

(694~700)は坏身である。(700)は坏A、(695~699)は坏Bである。(700)は底部から体部の変換点上部にケズリを施し、やや内湾気味に立ち上がる体部をもつ。口縁内面はそれまでの立ち上がりから外方へ聞く。口径は8.0cmである。高台は(695)がやや内傾する接地面である他は、ほぼ四角形に近い断面形である。(696、697)は外方へ向かって外反し、(698、699)の接地面内面は内湾して窪む。底径は(695)が最小で7.6cm、(699)が最大で11cmである。蓋と同時期と考えられる。

(701~706)は土器器である。(702、706)が皿、(701、703~705)は坏である。(701)は口径13.0cmで、口縁端部はケズリにより仕上げている。摩滅により調整痕の観察は困難だが、わずかにユビオサエとナデが確認できる。奈良時代末~平安時代初頭（8世紀後半）のものと考えられる。

(702)は口径13.6cmで、底部からナデにより緩く外反する。平安時代（10世紀代）のものと考えられる。(706)は広く外反する口縁部で、端部は内面の沈線によりやや玉縁状に



第134図 第2造構面包含層出土遺物実測図

造り出されている。(703、704)は底部から明瞭に屈曲して体部が立ち上がる。(703)の口縁端部はやや丸く取め、内面が沈線状に窪む。(704)は端部を丸く收めず、外方へつまむように整形している。口径は(705)が16.2cm、(706)は16.6cmである。(705)は体部が湾曲しながら立ち上がるタイプで、口縁端部は玉縁状を呈している。(703~705)の环は共に、奈良時代中頃(8世紀半ば)のものと考えられる。

(707)は須恵器の皿である。口径は26.0cmで、体部は底部からやや内湾しながら緩く立ち上がり、口縁端部は丸く取める。奈良時代前半(8世紀前半)のものと考えられる。

(708)は灰釉陶器の塊である。やや内湾気味に立ち上がる体部から、大きく外反する口縁部をもつ。口縁部の外面下部にはケズリによる緩い段がつく。口径は17.2cmである。平安時代前半(9世紀半ば)のものと考えられる。

(709)は土師質の有孔土錘である。一部を欠損する。穿孔部分付近の片面は平坦面を持つ。ユビナデにより丁寧に仕上げている。現存長4.15m、径1.25cmである。

第1造構面

第1造構面では、造構を検出することはできなかった。畔等を確認することはできなかったが、土壤、土層断面の観察、近隣地の調査データから水田面であると推定される。

遺物包含層である灰黄色粘質土からは奈良時代~中世にかけての遺物が出土した。

出土遺物

これらの出土遺物の中で図示できたのが、(710~720)である。尚、いずれも小破片であり、数値はいずれも復元によるものである。

(710)は灰釉陶器で、皿であると考えられる。胎土は須恵質で、口縁部はナデにより外反しながら開く。口径は9.8cmである。平安時代前半(9世紀後葉)のものと考えられる。

(711)は黒色土器の碗で、内面が黒色のA類である。口径は15.0cm、内面にヘラミガキを施す。奈良時代末~平安時代初頭(9世紀初頭)のものと考えられる。

(712)は青磁の碗の底部と考えられる。

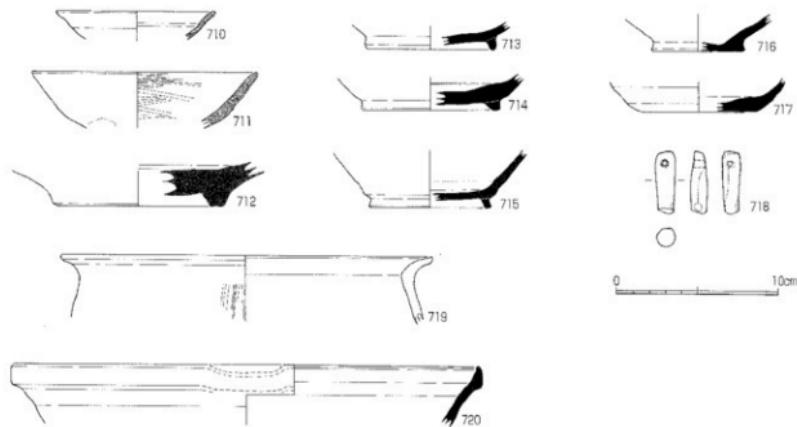
(713~717)はいずれも須恵器の坏身で、坏Bに分類されるものである。

(713、714)はやや退化した高台をもつ、底径は(706)で8.0cm、(707)が8.6cmである。平安時代前半(9世紀後葉)のものと考えられる。(715)はやや内湾しながらふんばる高台をもつ。体部は底部から直線的に外方へのびる。底径は7.6cm、奈良時代(8世紀半ば)のものと考えられる。(716、717)は須恵器の塊である。(716)はヘラ切りの底部から外方へ体部がのびるタイプで、見込み部に窪みをもつ。底径は5.6cm、平安時代前半(10世紀後半)のものと考えられる。(717)は底径7.0cm、平安時代末~鎌倉時代初頭(12世紀後半)のものと考えられる。

(718)は土師質の有孔土錘である。一部を欠損する。ユビナデにより丁寧に仕上げている。現存長3.8cm、径1.05cmである。

(719)は土師器の壺である。口径は22.8cm、頭部より外反しながら外方へのびる口縁部を有し、内面内側にナデ、外面はハケメによる調整を施す、平安時代前半(10世紀代)のものと考えられる。

(720)は須恵器の鉢である。小破片であるが、形態から片口鉢になるものと考えられる。口径は28.8cmで、直線的に立ち上がる体部からやや内湾気味に立ち上がる口縁部をもつ。鎌倉時代中頃(13世紀半ば)のものと考えられる。



第135図 第1遺構面出土遺物実測図

小 結

今回の調査では、3面の遺構面を検出したが、第2遺構面と第3遺構面で遺構が検出された。第3遺構面では、調査区のはば全域で遺構を検出した。検出した遺構は溝7条、ピット2基である。

検出した溝は、近隣地の調査においても確認されている、ほぼ東西南北の方向のものであるが、東半は同一ではなかった。この点については、西側の土壤が比較的安定しており、これまでの調査からも、当調査区の西側一帯において、飛鳥～奈良時代にかけての遺構が存在する事が確認されている。⁽¹²⁾ 当調査区の東側については、扇状地間の低地で、湿地状の様相を呈していたものと推定される。

第2遺構面では、遺構の検出は西半のみであり、平安時代以降はすでに、土地利用も行われておらず。湿地もしくは沼のような状況であったと考えられる。

中世の段階では、当調査区の西側一帯では、12世紀代の木棺墓群が検出されているが、⁽³⁾ 今回の調査では、遺構の存在を確認することはできなかった。畦畔等は検出されなかったが、土壤などから、水田として利用されていたものと考えられる。

註

(1) 鎌江秀典「奈良時代の土器」『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会 1985

(2) 富山直人編「6丁目北地区的調査」「御藏遺跡第1・6・14・32次発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2001

(3) 前掲書2

参考文献

古代の土器研究会編『古代の土器』都城の土器集成』古代の土器研究会 1992

古代の土器研究会編『古代の土器2 都城の土器集成』古代の土器研究会 1993

森内秀造・山上雅弘編『大田町遺跡』兵庫県教育委員会 1993

第5章 6丁目南地区の調査

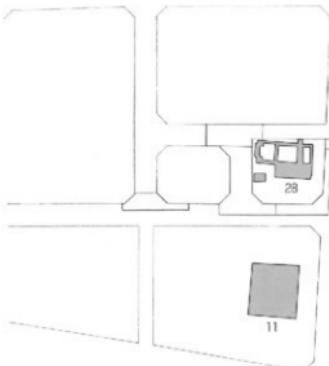
第1節 調査区の設定

6丁目南地区については、区画整理の進展とともに、3カ年の間に、調査の申請順に2件の調査を実施している。この調査において、調査の事業主体ごとに調査次数を設定している。今回の報告では、基本的に隣接している調査に関しては、1調査区として掲載することとし、地区名には、調査次数を列挙することとした。

なお、土地区画整理事業にともなう発掘調査報告書において、調査次数の変更が行われており、これと整合性を持たすために、今回も調査次数の変更作業を行っている。

以下に調査次数の変更について、対応を示す。

本報告調査次数	旧調査次数	年報告掲載次数
11次	14次	14次
28次	33次	33次



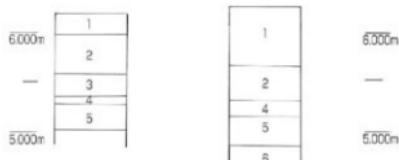
第136図 6丁目南地区調査区位置図

第2節 調査の概要

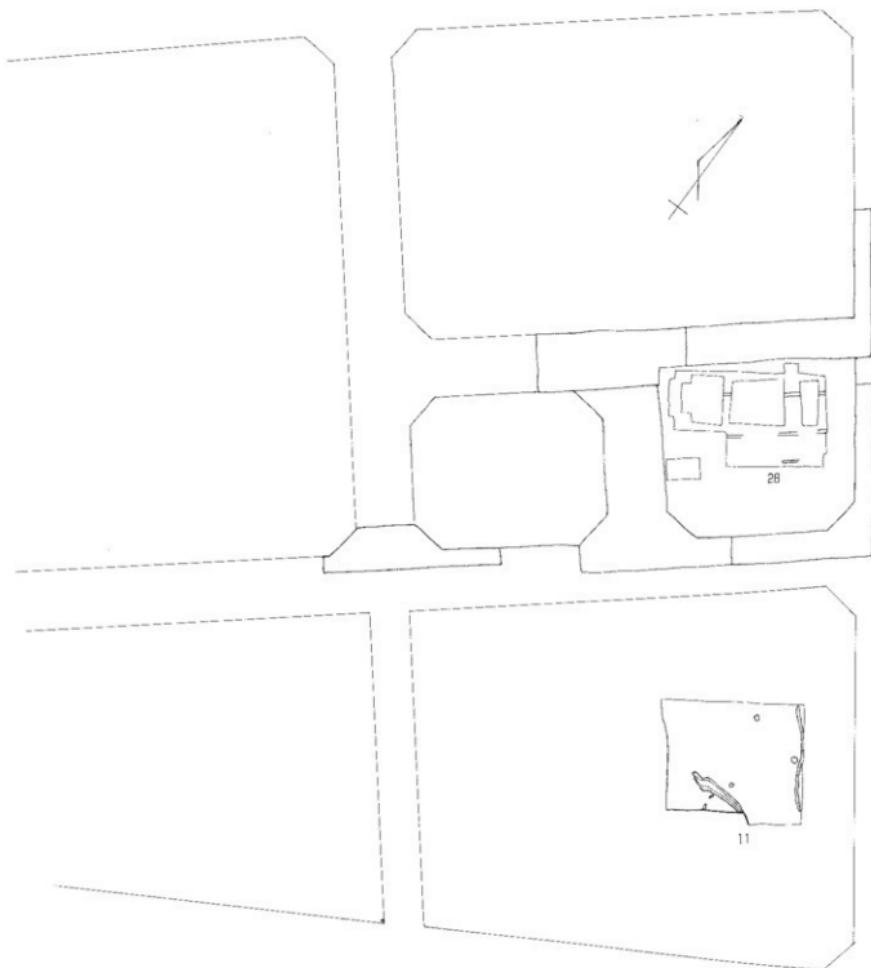
御歳6丁目地区は、沖積地に形成された微高地と後背湿地が混在する範囲に位置する。地勢は北から南に緩やかに下がる斜面地であり、御歳5丁目との境付近において、1mほどの急激な段差が生じている。御歳6丁目南地区における主な遺構としては、水田がある。なお、大別すると下記のような基

本層序となる。

1. 近現代の盛土層
2. 近現代耕土（灰色シルト）
3. 淡黄灰色細砂層
(中世後期～近世の旧耕土層)
4. 灰色シルト層
(奈良時代～平安時代遺物包含層)
5. 黄褐色粗砂～シルト層
(弥生時代後期末の洪水砂)
6. 褐灰色粘質シルト層
(庄内水田面)



第137図 6丁目南地区土層模式図



第138図 6丁目南地区遺構集成図

第3節 第11次調査

概要

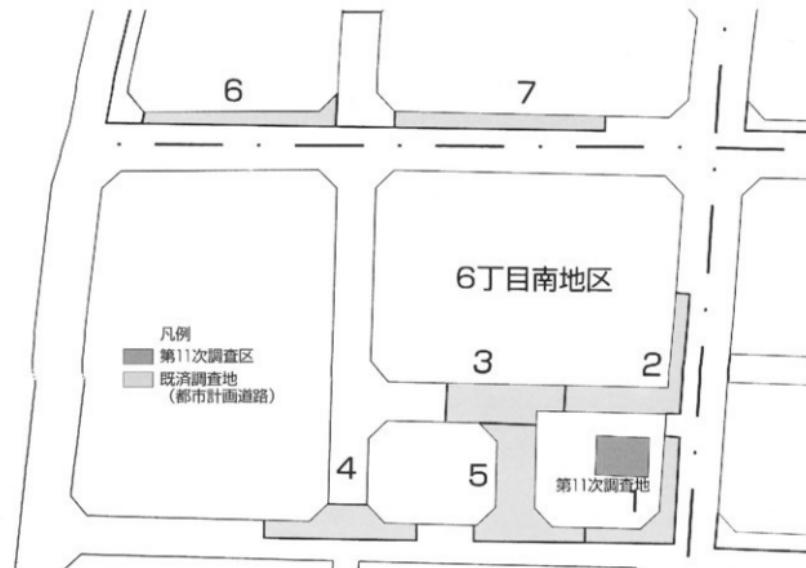
第11次調査は、御藏通6丁目18-1において、平成10年11月9日から、11月24日まで行った。調査は社屋の建設に伴うもので、対象となったのは工事範囲約170m²である。

基本層序

調査範囲内の基本層序は、上層から現代盛土、旧耕土をへて、古墳時代中期の土器を含む包含層が堆積し、標高3.80mまで掘り下げた地点で、遺構面となる層にたどり着く（第139図参照）。確認された遺構は、溝が2条、土坑が1基、ピットが4期である。これらの遺構からは、ごくわずかな遺物しか出土せず、時期を判定するのに苦慮した。

遺構面の層の直上に堆積している層は包含層であると理解しているが、この層からは中世、奈良時代、古墳時代と、幅広い時期の土器が混じった状態で出土する。そのため、遺構面の層の時期を判定する材料とはならなかった。ただし、この層自身は間違いなく中世以降に堆積したものである。

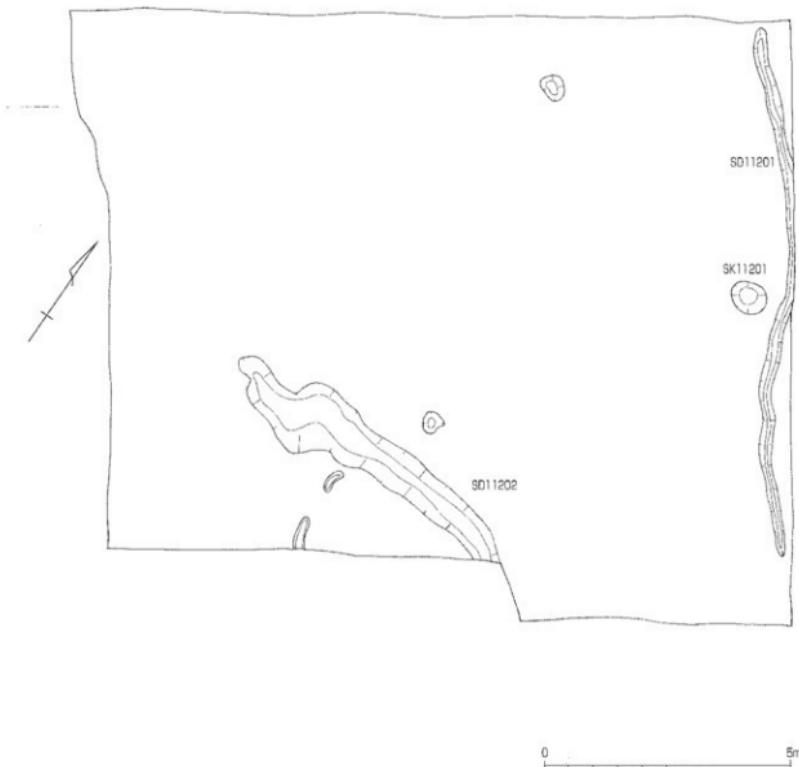
今回の調査地では、標高3.8m地点に1面しか遺構の残された層を確認できなかつたが、周辺地区での過去の調査結果や、当地区の試掘時のデータからみて、今回の調査で確認した遺構面の下層に、さらに古い時代の遺構面（庄内式期の水田）が存在する可能性が高いと考えられる。また、今回の調査範囲では、確認された遺構の層および直上の包含層より上位には、中世以降の耕作上層が現在の地表面近くまで堆積していたが、これは、本来は他の既済の周辺調査地と同様中世や奈良時代の遺構面が、今回確認した遺構面より上に存在していたが、中世以降の田園の耕作作業によって失われたものであると考えられる。



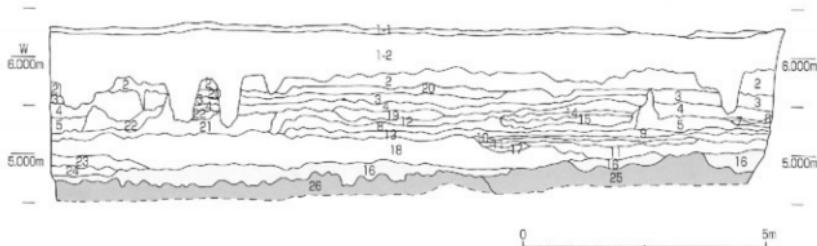
第139図 第11次調査区位置図

調査区内の周辺地域の既済の調査結果では、6丁目南地区一帯は、標高5.50mから5.00mの範囲で、庄内式期に堆積した洪水性の砂層が普遍的に観察されているが、今回はこの洪水砂層も確認されなかった。これも中世以降の田圃の耕作作業によって失われたものであると考えられる。また、周辺地域の既済の調査範囲では、例外なく標高5.0m以上の地点で庄内式期の水田層に達していることから見て、今回の調査地は、周辺地域よりも低く下がる地形となっていると考えられる。

造横面以下の層については、今回工事影響深度外のため調査されなかつたが、試掘調査の結果や周辺の既済の調査結果から、標高3.8mより下層に庄内式期の水田層が存在する可能性が高く、一部サブトレーンで確認した黒色粘土層がそれであると考えている。

第140図 第11次調査区平面図 ($S=1/100$)

また、遺構面を形成する層は調査区のうち東半分にのみ堆積しており、調査区の西半分は、淡黄灰色粘土が代わりに堆積している。遺構は主に調査区の東側で検出され、西側ほど遺構の密度は希薄となる。遺構面直上に堆積する包含層の堆積も調査区の東側のみで確認され、西側には堆積していなかった。調査区の西半と東半では遺物の出土量にも差があり、東側に偏っていた。堆積層の観察作業の結果、淡黄灰色粘土層は遺構面の層に削られていることがわかったが、このことから遺構面の層は、淡黄灰色粘土層よりあとから堆積したものであることがわかる。つまり、遺構面の層は、本来今回の調査地以西に広がっていたが後世失われたのではなく、もともと今回の調査地付近が堆積範囲の西限にあたる可能性が高い。



1. 現代盛土
2. 黒灰色粘土（現代耕土）
3. 青灰色粘土
4. 暗灰青色粘土
5. 青灰色粘土
6. 灰青茶色粘土
7. 淡灰黄色粘土
8. 明灰褐色粘土
9. 灰色粘土
10. 灰黄色粘土
11. 暗灰色粘土
12. 淡青色シルト質粘土
13. 淡黄灰色シルト質粘土
14. 青色シルト質粘土
15. 黄灰色粘土
16. 黑灰色粘質シルト
17. 淡灰黄色シルト質粘土
18. 青色粘土
19. 明灰黄色粘土
20. 灰色粘質シルト
21. 暗灰青色粘土
22. 暗青色粘土
23. 淡青色粘土
24. 暗灰青色粘土（2~24. 旧耕作土）
25. 青灰色砂質粘土
26. 淡青灰色粘土（25. 26. 遺構面基盤層）

141図 調査区土層堆積状況模式図

奈良時代～古墳時代の遺構

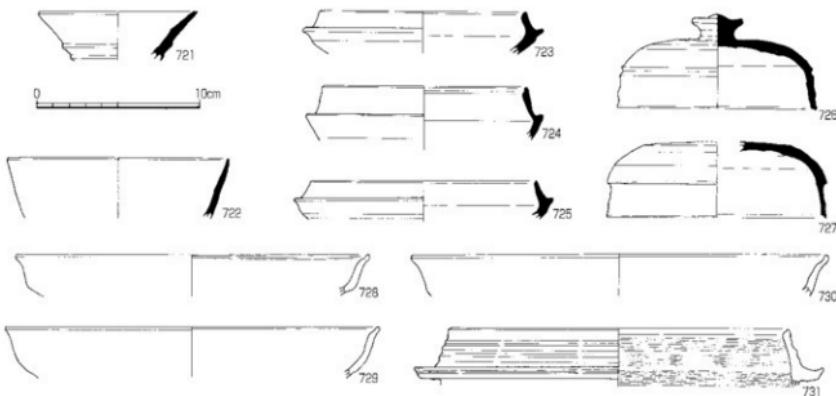
検出した遺構は、溝2条、土坑1基およびピット4基である。

- SD01 調査区の東端で検出した、幅20cm、深さ20cmの南東から北西に走る溝である。埋土は包含層と同質の黒灰色粘質シルト單層である。古墳時代中期の土器片が1点出土している。
- SD02 調査区の南側で検出した、幅80cm、深さ10cmの東西に走る溝である。SD11202が細く深いのに比べ、浅く平面形も不規則である。溝ではなく、単なる窪みの可能性もある。埋土は單層で、遺物は出土しなかった。
- SK01 調査区の東端、SD11201の直近の西側で検出した。径65cm、深さ40cmだが、断面形はフラスコ状に、下ほど広い。埋土は黒色粘土で炭を多く含んでいる。検出面直上で、奈良時代の土器片が遺構にはりつくようにして出土したが、後世の混入の可能性もある。この破片以外遺物は皆無のため、遺構の時期は不明だが、埋土の質が他と異なるため、他より新しい時期の可能性がある。

出土遺物

今回の調査地からは、包含層、遺構面いずれもごくわずかの遺物しか出土しなかった。遺構からは、数点の小片が出土しただけで時期の判定できるものはまれである。図化できるほどのものは皆無だった。包含層からは、時期のわかるものも何点か出土しているがわずかで、図化作業に耐え得るものは数点である。それらは図化し、掲載した。包含層以上に堆積していた旧耕作土からの遺物も、小片が中心だったが、図化作業に耐え得るものについては、図化した。旧耕作土から、また包含層からは、中世、奈良時代、古墳時代と、幅広い時期の土器が混じった状態で出土したことから、遺構面直上に堆積している遺物包含層は、中世以降に堆積したもの、その上位に堆積している旧耕作土はさらに新しい時期のものであることがわかる。

第142図に示した出土遺物のうち、(721)および(723~727)については、古墳時代のものである。(728~730)は奈良時代のものと、(722)と(731)は中世のものである。



1～7は須恵器。8～11は土師器。2、3、8、11は旧耕作土内出土。それ以外は包含層内出土。

第142図 第11次調査区出土遺物実測図

まとめ

今回の調査範囲は、遺構が比較的希薄な地区であった。検出した遺構は出土遺物から、古墳時代中期の可能性が高いが、一部奈良時代のものである可能性もある。

これまで御蔵遺跡は、奈良時代から古墳時代後期（庄内式期）を中心に（時に中世も）した遺構が多く確認されてきたが、今回その時期に該当する遺構面は確認できなかった。

特に、6丁目南地区で広く確認されている庄内式期の洪水砂が失われていたことが、本調査区のひとつの特徴となる。先に述べたように、6丁目南地区一帯の他の既済調査範囲では、例外なく標高5.0m以上の地点で庄内式期の水田層に達していることから見て、今回の調査地は、周辺地域よりも低く下がる地形となっていると考えられる。このことから遺跡全体の地形が、庄内式期当時西北に向かって下がっていく可能性があると考えているが、具体的に当時の水田層まで調査が及ばなかったため、仮説にとどまる。

第4節 第28次調査

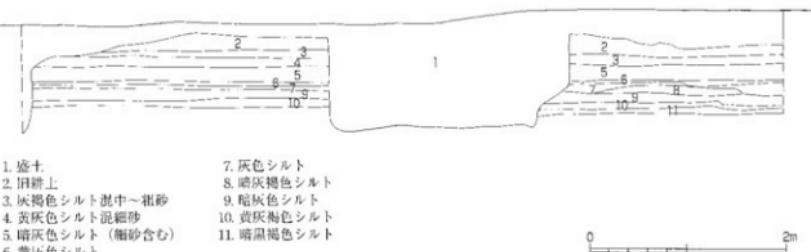
今回の調査対象地は、土地区画整理事業後の宅地となる場所で、区画街路部分の第14～20次調査地点（6丁目南地区第1調査区）の西に隣接する。

主に検出した遺構は、溝3条（SD28101～SD28103）である。調査としては、第1遺構面と第2遺構面を同時に調査を実施している。

層序

調査における基本層序は、上層より現代盛土、旧耕土で、灰褐色シルト混中～粗砂、黃灰色シルト混細砂、暗灰色シルト（細砂含む）、黃灰色シルト、灰色シルトである。地表下約0.8m～0.9m（標高約5.50m～5.60m）で、奈良時代から平安時代の遺物を多量に含む遺物包含層（暗灰褐色シルト層）に至る。中世の遺構面は暗灰褐色シルト層の上面である。この層の下層に暗灰色シルト、黃灰褐色シルト、暗黒褐色シルトとなる。暗黒褐色シルト上面が庄内期の遺構面となるが、今回の調査では遺構は確認できていない。

640m



第143図 第28次調査土層断面図

遺構

SD28101

この遺構面では、溝を3条検出した。幅20cm～40cmで、深さは10cm前後のものである。

方向はN-38°Eを中心として、一定の方向にならんで掘られている。そのうち、SD28101とSD28102の間には若干の盛土状のものが断面観察によって確認しており、大畦畔または、道路状遺構の側溝である可能性がある。

なお、SD28102からは若干の出土遺物があり、これらから、この溝の時期は、13世紀前半代と考えられる。

包含層出土遺物

(732)は、口径15.6cmを測る土師器坏である。外上方にのびる口縁部とやや内湾気味に立ち上がる口



内外面共に

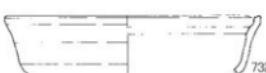
ナデを施す。

(733)は、

底径13.2cm

を測る須恵

器坏である。



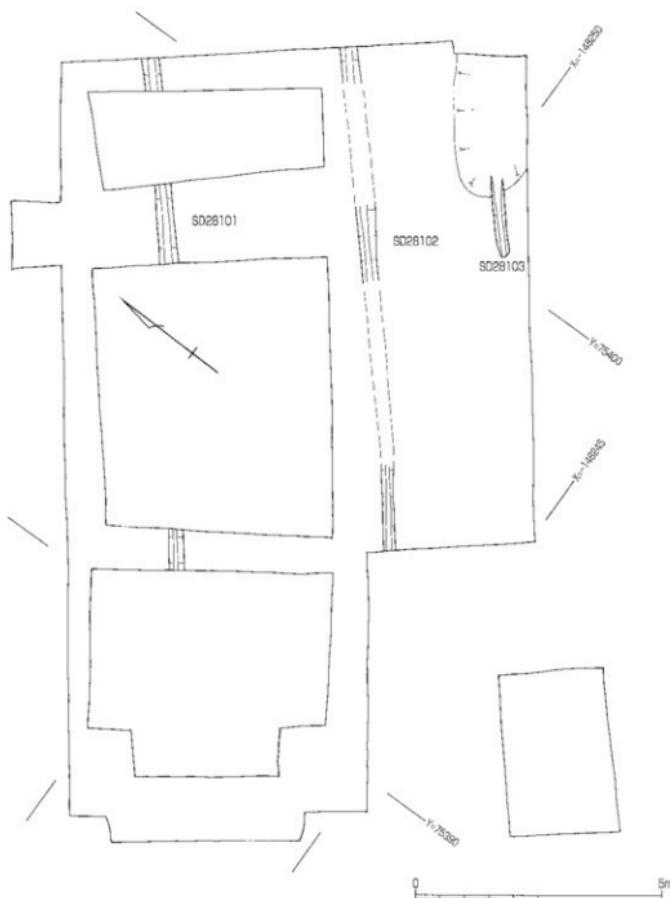
0 20cm

第144図 包含層出土遺物実測図

底部外面にはハラケズリが施されており、高台がつくものである。高台は、外側に張り、断面形が角張っている。(734)は、口径13.4cm、器高3.4cm、底径9.4cmを測る須恵器壺である。平らな底部と斜めにまっすぐ伸びる口縁部とからなる。底部外面は糸切りである。(735)は、口径14.0cmを測る須恵器壺蓋である。(736)は、土師器壺である。

まとめ

水田関連の遺構を検出した。これらの方方向性がN-128°Eを中心として存在しており、この方位は明治時代の地図にみられる条坊とほぼ一致している。このことからこれらの方向性は13世紀前半まで遡る可能性がある。



第145図 遺構平面図

第6章 御蔵遺跡から出土した木製品等の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

御蔵遺跡では、奈良時代～鎌倉時代の集落址を中心とした遺構が検出された。このうち、掘立柱建物跡の柱穴では、柱材の一部や礎板が残存しているものが認められた。また、井戸跡からは、木製品や木製品加工時の削片などが出土している。

今回の分析調査では、これらの木製品等について樹種同定を行い、用材に関する資料を得る。

1. 試料

試料は、18-2次、34次、35次、36-1次調査で出土した建築部材や木製品等55点である。各試料の詳細は、樹種同定結果とともに表11に記した。

2. 方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接縫断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

3. 結果

樹種同定結果を表1に示す。針葉樹3種類（モミ属・コウヤマキ・ヒノキ）、広葉樹1種類（ヤブツバキ）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・モミ属 (*Abies*) マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は粗く、じゅず状末端壁が認められる。分野壁孔はスギ型で1～4個。放射組織は単列、1～20細胞高。

・コウヤマキ (*Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Sieb. et Zucc.) コウヤマキ科コウヤマキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔は窓状となる。放射組織は単列、1～5細胞高。

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・ヤブツバキ (*Camellia japonica* L.) ツバキ科ツバキ属

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形～角張った梢円形、単独および2～3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性II～I型、1～2細胞幅、1～20細胞高で、時に上下に連結する。柔細胞は時に結晶を含む。

表11 御藏遺跡の樹種同定結果

調査次	遺物番号	遺物名	造構・層位	時期	樹種	本報品登録番号
第20次		檜板	SP18211	飛鳥時代	コウヤマキ	6726
		檜板	SP18210	飛鳥時代	モミ属	6727
	398	井戸枠柱A - 南	SE34101	11世紀～12世紀	コウヤマキ	7704
	399	井戸枠柱B - 北	SE34101	11世紀～12世紀	コウヤマキ	7705
	400	井戸枠柱C - 北	SE34101	11世紀～12世紀	コウヤマキ	7706
	401	井戸枠柱D - 南	SE34101	11世紀～12世紀	コウヤマキ	7707
	402	井戸枠柱Cの副柱 - 北	SE34101	11世紀～12世紀	ヒノキ	7708
	436	横棟	SE34101	11世紀～12世紀	ヒノキ	7904
	437	横棟	SE34101	11世紀～12世紀	コウヤマキ	7902
	438	横棟	SE34101	11世紀～12世紀	コウヤマキ	7903
	439	横棟	SE34101	11世紀～12世紀	コウヤマキ	7908
	440	横棟	SE34101	11世紀～12世紀	コウヤマキ	7909
	441	横棟	SE34101	11世紀～12世紀	ヒノキ	7906
	442	横棟	SE34101	11世紀～12世紀	ヒノキ	7907
	443	横棟	SE34101	11世紀～12世紀	ヒノキ	7710
	403	井戸枠西側板	SE34101	11世紀～12世紀	コウヤマキ	7711
	404	井戸枠西側板	SE34101	11世紀～12世紀	コウヤマキ	7712
	405	井戸枠西側板	SE34101	11世紀～12世紀	コウヤマキ	7713
	406	井戸枠西側板	SE34101	11世紀～12世紀	コウヤマキ	7714
	408	井戸枠西側板	SE34101	11世紀～12世紀	コウヤマキ	7715
	407	井戸枠西側板	SE34101	11世紀～12世紀	コウヤマキ	7716
	409	井戸枠西側板	SE34101	11世紀～12世紀	モミ属	7717
	410	井戸枠南側板	SE34101	11世紀～12世紀	コウヤマキ	7718
	411	井戸枠南側板	SE34101	11世紀～12世紀	コウヤマキ	7719
	412	井戸枠南側板	SE34101	11世紀～12世紀	コウヤマキ	7720
	413	井戸枠南側板	SE34101	11世紀～12世紀	コウヤマキ	7721
	414	井戸枠南側板	SE34101	11世紀～12世紀	コウヤマキ	7722
	415	井戸枠南側板	SE34101	11世紀～12世紀	コウヤマキ	7723
	416	井戸枠南北側板	SE34101	11世紀～12世紀	コウヤマキ	7724
	417	井戸枠南北側板	SE34101	11世紀～12世紀	コウヤマキ	7725
	418	井戸枠南北側板	SE34101	11世紀～12世紀	コウヤマキ	7726
	419	井戸枠南北側板	SE34101	11世紀～12世紀	コウヤマキ	7727
	420	井戸枠南北側板	SE34101	11世紀～12世紀	コウヤマキ	7728
	421	井戸枠南北側板	SE34101	11世紀～12世紀	コウヤマキ	7729
	422	井戸枠南北側板	SE34101	11世紀～12世紀	コウヤマキ	7730
	423	井戸枠東側板	SE34101	11世紀～12世紀	コウヤマキ	7731
	424	井戸枠東側板	SE34101	11世紀～12世紀	コウヤマキ	7732
	425	井戸枠東側板	SE34101	11世紀～12世紀	コウヤマキ	7733
	426	井戸枠東側板	SE34101	11世紀～12世紀	コウヤマキ	7734
	427	井戸枠東側板	SE34101	11世紀～12世紀	コウヤマキ	7735
	428	板材	SE34101	11世紀～12世紀	モミ属	7736
	429	板材	SE34101	11世紀～12世紀	モミ属	7737
	430	板材	SE34101	11世紀～12世紀	モミ属	7738
	431	板材	SE34101	11世紀～12世紀	モミ属	7739
	432	板材	SE34101	11世紀～12世紀	モミ属	7740
		曲げ物木体	SE34101	11世紀～12世紀	ヒノキ	7741
		曲げ物帝帯	SE34101	11世紀～12世紀	ヒノキ	7742
	493	丸棒状木製品	SE34101	11世紀～12世紀	ヤブツバキ	7743
	492	下駄	SE34101棒内	11世紀～12世紀	コウヤマキ	7748
		角材	SE34101棒内	11世紀～12世紀	コウヤマキ	7747

4. 考察

今回同定調査を行った55点と、これまでに御藏跡出土木製品で樹種が明らかになつてゐる建築部材や木製品等合わせて213点は、1点を除く212点が20種類に同定された。これらの試料は、古墳時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、近世以降等に大別される。各時代別・用途別の種類構成を表12に示す。

各時代・時期を通して針葉樹の利用が多く、試料総数213点中185点を占める。針葉樹の中では、コウヤマキが最も多く見られ、そのほかモミ属、ヒノキなどが比較的多い。一方、広葉樹では、クスノキ（8点）とアカガシ亜属（5点）がやや多く見られるが、その他の種類はいずれも1～3点の出土であった。この種類構成は、播磨・揖津地域でこれまでに行われた樹種同定結果（中村、2001）とも一致している。とくに、コウヤマキは、播磨・揖津地域では多数出土しているが、但馬・丹波地域ではほとんど出土していない。

表12 時代別・用途別種類構成

時期・遺物名	種類構成割合																			
	セミ	ツガ	スギ	コウヤマキ	ヒノキ	サワラ	ヒノキ有	カヤ	針葉樹	アカガシ亜属	ツブライ	スダジイ	クヌキ科	ヤツツバキ	サカキ	ヒスノキ	イソノキ	アシサイ属	ガニデ属	合計
古墳時代																				1
初																				1
6世紀																				1
木片																				1
柱裏																				2
板																				2
枕																				4
奈良時代																				1
壁板																				1
柱板																				3
曲物井戸枠																				1
柱板																				3
奈良時代～平安時代																				1
壁板？																				2
板材																				6
井戸枠																				26
杭																				1
檻																				1
白物																				3
衝物底板																				2
丸木材																				2
板材																				7
井戸枠																				3
9世紀前半																				9
10世紀																				2
9世紀後半																				1
10世紀																				1
平安時代																				1
板材																				6
井戸枠																				25
井戸枠性																				4
11世紀～12世紀																				1
角筋																				1
下弦																				1
曲げ物骨板																				1
曲げ物本体																				1
丸棒状木製品																				1
檻																				12
板																				26
井戸枠																				4
角筋																				11
12世紀																				2
板材加工丸棒																				1
板材																				1
曲物																				1
曲物偏板																				2
板材																				2
木片(炭化)																				1
13世紀～14世紀初																				7
檻板																				10
柄																				1
刀子削片																				2
手斧削片																				2
曲物																				1
檻板																				4
板状井戸枠																				1
時間不詳																				1
合	5	46	14	1	76	37	3	1	1	1	5	1	2	8	1	3	2	3	1	213

古墳時代～平安時代では、柱根、井戸材（井戸枠・隅柱）、杭等の建築・土木材や、櫛、下駄、曲物等の生活用品等がある。これらの木製品等には、コウヤマキとモミ属が多く利用されている。コウヤマキは、井戸枠や井戸隅柱、柱根、礎板等に多い。一方、モミ属は、板材や角材に多く見られ、コウヤマキとモミ属とで用途が異なっていたように見える。また、時代・時期別に見ると、コウヤマキは9世紀前半と11～12世紀の試料に多く見られる。モミ属は、11～12世紀と12世紀の試料に多く見られ、両種類の使用時期にも若干の違いがあるようみえるが、礎板や井戸枠などでは、コウヤマキとモミ属が共に利用されている結果も見られることから、今回の結果のみでは両種の利用状況の差異は明確ではない。

古墳時代～平安時代では、井戸材が多く見られ、コウヤマキが多い。同様の事例は、長田区二葉町遺跡でも報告されている（松葉、2001a）。また、加古川市美乃利遺跡の調査例では、井戸の縦板にはスギとヒノキ、横棟は全てヒノキ、隅柱はヒノキとコウヤマキで、部位によって種類構成が異なることが指摘されている（伊東、1997）。今回の結果では、第34・35・36-1次のSE01（11～12世紀）の井戸枠に、コウヤマキに混じってモミ属が認められるが、隅柱は全てコウヤマキであった。また、第20-9次調査区のSE01（9世紀前半）でも、井戸枠にコウヤマキに混じってヒノキやモミ属が認められる。これらの結果から、本遺跡でも井戸の部位によって用材が異なっていた可能性がある。しかし、全体的にコウヤマキの占める比率が高いこと、井戸枠以外の部位の試料が少ないと等から、用材の差異は明確ではない。

第20-10次調査区のSKZ01（10世紀）から出土した井戸枠は、3点とも常緑広葉樹のクスノキに同定され、他調査区とは用材が異なる。同様の事例は、長田区松野遺跡第3～7次の12世紀前半～13世紀前半の井戸枠でも報告されている（松葉、2001b）。このことから、針葉樹のコウヤマキ、ヒノキ、モミ属などと共に井戸枠材として利用されていたことが推定される。井戸材に多く見られるコウヤマキとヒノキは、耐水性・防虫性に優れた材質を有し（平井、1980a、1980b）、井戸材として適材と考えられる。クスノキも樟腦を含み、耐湿性・防虫性に優れていることから（平井、1980c）、井戸材として利用されたと考えられる。しかし、針葉樹類を主とした井戸とクスノキを主とした井戸の用材の違いがどのような背景によるものか、詳細は不明である。

古墳時代～平安時代の柱根（柱痕）や礎板には、コウヤマキが多く利用されている。同様の事例は、西区白水遺跡第4次でも認められているが、播磨・揖津地域の同時期の全体的な傾向としては、ヒノキを利用した事例が多く、コウヤマキの事例は知られていない（植田、1999；中村、2001）。ただし、奈良県の平城宮跡から出土した柱材には、ヒノキと共にコウヤマキも認められており、ヒノキと同様に利用されていたことがうかがえる（伊東・島地、1979；島地ほか、1980）。いずれも井戸材と同様に、耐水性・防虫性・強度等が考慮された用材選択と考えられる。本遺跡でコウヤマキが多い背景については、現時点では資料が少ないため詳細が不明である。今後、周辺地域での類例の蓄積を待って検討したい。

曲物（曲げ物）は、底板と考えられる試料にヤブツバキが1点認められた以外は、全てヒノキ属（ヒノキ・サワラ）であった。兵庫県内では、地域によってスギとヒノキの利用

量に違いがあるが、曲物についてはいずれの地域でもヒノキが多く利用されており（中村、2001）、今回の結果とも一致する。ヒノキ材の加工性や耐水性等が選択された背景に考えられる。一方、曲物の部材に広葉樹材が認められた例は、静岡県伊場遺跡や福島県御山千軒遺跡でケヤキやヤマグワが報告されているが、試料数は少ない（島地・伊東、1988；伊東、1990）。また、群馬県梅ノ木遺跡では、祭祀に関連すると考えられる曲物の側板・底板に樹皮が同定された例がある（パリノ・サーヴェイ株式会社、1999）。これらの結果をみると、今回のヤブツバキの出土例は、全国的に珍しい例といえる。しかし、針葉樹以外の利用例については、まだ類例が少ないため、どのような状況で利用されているのか、詳細は不明である。

櫛は、常緑広葉樹のイスノキであった。兵庫県内では、これまでにも本製の櫛について樹種同定が行われた例がある（中村、2001）。その結果では、豊櫛にアケビ属、イネ科・カヤツリグサ科、横櫛にイスノキが認められており、今回の結果とも調和的である。民俗事例では、地域によって櫛の用材が多少異なるようであるが、大阪ではツゲ、ナツメ、イスノキが良材として挙げられている（農商務省山林局、1912）。いずれの種類も、重硬で緻密な材質を有し、細かな加工に適していることから利用されたと考えられる。遺跡からの出土例では、ツゲ、イスノキ、モッコク、ユズリハ属等が出土しており、とくにイスノキの例が最も多く見られる（島地・伊東、1988；伊東、1990）。逆に、イスノキの出土例をみると、九州地方では錐彫刻・矧物・柱などに認められた例があるが、近畿地方ではその多くが櫛であり、櫛以外の利用例は少ない（山田、1993）。これらの事例を考慮すると、イスノキが選択的に櫛の材として利用されていたことが推定される。

杭は、針葉樹のモミ属、ツガ属、コウヤマキ、広葉樹のアカガシ属、クスノキ科、カエデ属が認められた。このうち、第20-9次調査区（9世紀前半）では、9点の杭がコウヤマキを中心5種類に同定されている。この結果や、これまでの調査例でも多くの種類が杭に認められていること（島地・伊東、1988；伊東、1990）を考慮すると、杭材は遺跡周辺で入手可能な木材を樹種に関係なく利用していたことが推定される。また、針葉樹材については、いずれも他の製品に確認されていることから、伐採時に払った枝、加工時の余材、廃材の転用などが杭に利用されている可能性もある。

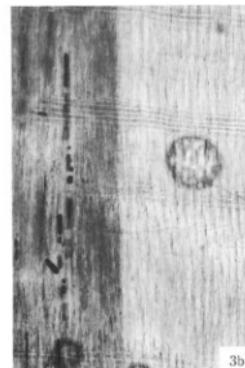
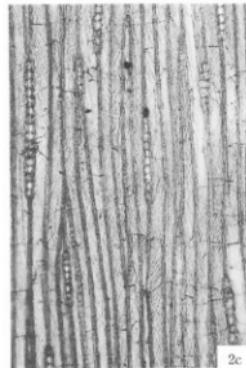
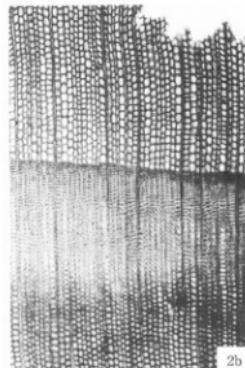
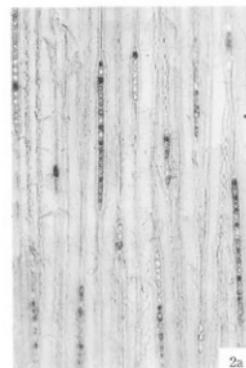
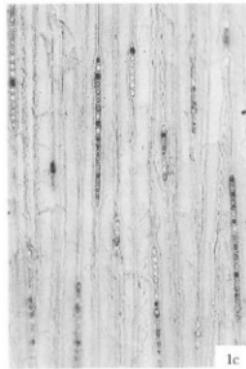
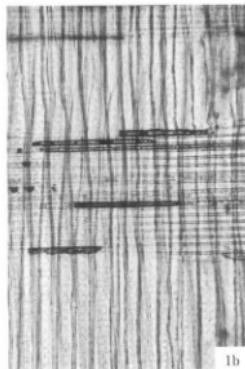
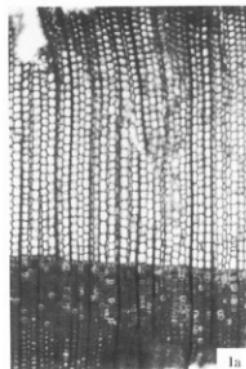
コウヤマキは、福島県から九州までの山地に自生地が点在し、本地域にも数少ない自生地の一つがある（倉田、1971）。コウヤマキは、近畿地方では過去に多くの遺跡から出土例がある。とくに、古墳の木棺材としての出土例は、日本書紀の記述に一致する結果として知られている（島地・伊東、1988）。神戸市でも西区玉津田中遺跡の弥生時代中期の木棺や、出合遺跡の弥生時代の木棺がコウヤマキに同定されている（島地、1996；藤根・吉川、1994）。また、東灘区北青木遺跡第3次調査の自然木や兵庫区大開遺跡の種実遺体には、コウヤマキが認められている（南本、1993；藤根、1999）。これらのことから、現在よりも広い範囲に自生しており、木材の入手も容易であったことが推定される。

鎌倉時代以後の試料は、点数が少ない。しかし、板材のモミ属、曲物のヒノキ、柱根や井戸棒のコウヤマキなど、古代までの用材と共通する結果が見られる。これらの用途では、古代と同様の用材が行われていた可能性がある。

引用文献

- 藤根 久 (1999) 北青木遺跡出土の樹種同定, 「北青木遺跡発掘調査報告書－第3次調査－」, p.81-101, 神戸市教育委員会.
- 藤根 久・吉川昌伸 (1994) 出合遺跡出土木製品の樹種同定, 「出合遺跡 第27次発掘調査報告書」, p.57-75, 神戸市教育委員会.
- 平井信二 (1980a) 木の事典 第5巻, かなえ書房.
- 平井信二 (1980b) 木の事典 第6巻, かなえ書房.
- 平井信二 (1980c) 木の事典 第4巻, かなえ書房.
- 伊東隆夫 (1990) 日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途II, 木材研究・資料, 26, p.91-189, 京都大学木材研究所.
- 伊東隆夫 (1997) 美乃利遺跡から出土した木製品の樹種, 「兵庫県文化財調査報告第165号 兵庫県加古川市美乃利遺跡－一級河川別府川河川改良事業に伴う発掘調査報告書－」, p.239-344, 兵庫県教育委員会.
- 伊東隆夫・島地 謙 (1979) 古代における建造物柱材の使用樹種, 木材研究・資料, 第14号, p.49-76.
- 倉田 悟 (1971) 原色日本林業樹木図鑑 第1巻(改訂版), 331p., 地球出版株式会社.
- 松葉礼子 (2001a) 二葉町遺跡出土木製品の樹種同定, 「松野遺跡発掘調査報告書 第3・5・8・9・12次調査－新長山駅南第2地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴う－」, p.141-166, 神戸市教育委員会.
- 松葉礼子 (2001b) 松野遺跡出土木製品(古墳時代後期初頭～鎌倉時代)の樹種同定, 「松野遺跡発掘調査報告書第3～7次調査－新長山駅南第2地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴う－」, p.175-186, 神戸市教育委員会.
- 南木曉彦 (1993) 大閣遺跡の大型植物化石と古植生, 「神戸市兵庫区 大閣遺跡 発掘調査報告書」, p.250-260, 神戸市教育委員会・(財)神戸市スポーツ教育公社.
- 中村 弘 (2001) 兵庫県における樹種同定資料について, 兵庫県埋蔵文化財研究紀要, 創刊号, p.103-121, 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所.
- 農商務省山林局編 (1912) 木材ノ工藝の利用, 1308p., 大日本山林會.
- ハリノ・サーヴェイ株式会社 (1999) 松ノ木遺跡・梅ノ木遺跡から出土した木製品および極楽遺体の種類, 「新田町文化財調査報告第18集 松ノ木・梅ノ木・振矢遺跡－新田商業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」, p.177-184, 群馬県新田町教育委員会.
- 島地 謙 (1996) 玉津沖中遺跡出土木製品の樹種, 兵庫県文化財調査報告第135-6号「神戸市西区 玉津田中遺跡－第6分層(総括編)－－田中特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－」, p.15-49, 兵庫県教育委員会.
- 島地 謙・伊東隆夫編 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧, 296p., 雄山閣.
- 島地 謙・伊東隆夫・林 昭三 (1980) 古代における宮殿・官衙の使用樹種, 古文化財編集委員会編「考古学・美術史の自然科学研究」, p.249-260, 日本書學振興会.
- 植田弥生 (1999) 白水遺跡第4次調査から出土した木製品の樹種「白水遺跡 第4次－神戸国際港都建設事業神戸市白水特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」, p.66-72, 神戸市教育委員会.
- 山田昌久 (1993) 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史, 植生史 研究, 特別第1号, 242p.

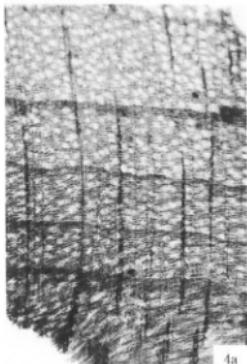
挿図写真5 木材 (1)



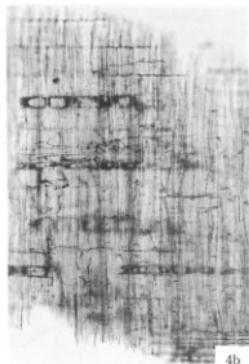
1. モミ属 (遺物番号429)
2. コウヤマキ (遺物番号404)
3. ヒノキ (遺物番号441)
a : 木口, b : 横目, c : 板目

— 200 μm : a
— 200 μm : b, c

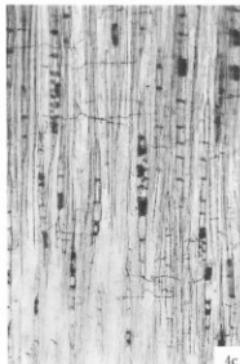
挿図写真6 木材 (2)



4a



4b



4c

4. ヤブツバキ (遺物番号493)
a : 木口, b : 横目, c : 板目

■ 200 μm : a

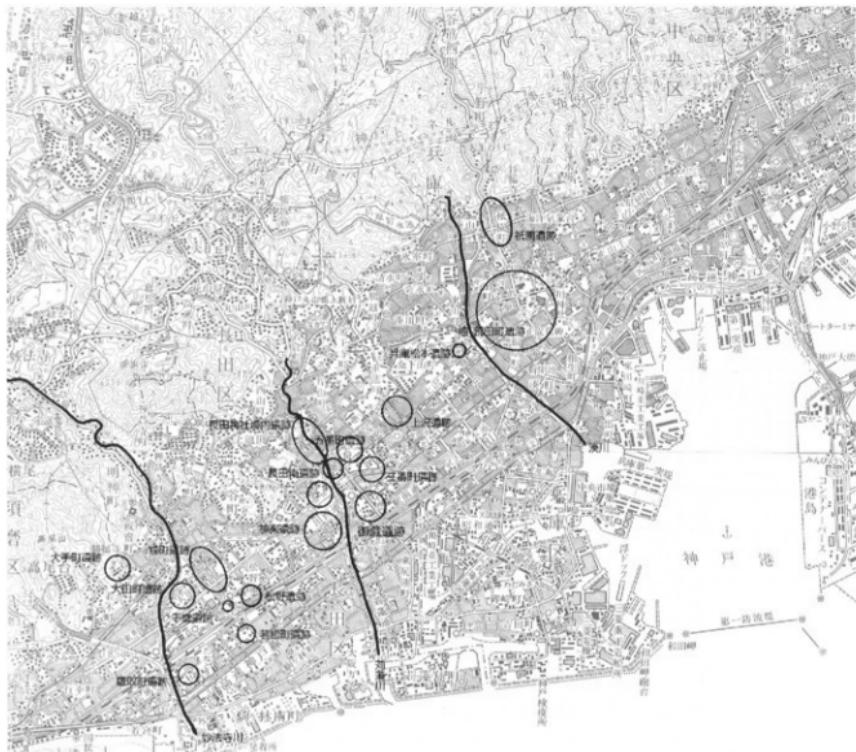
■ 200 μm : b,c

第7章 まとめ

第1節 六甲山南麓地域西部における弥生時代後期～古墳時代前期の集落形成と動態

神戸市域の沿海部（大阪湾岸）にあたる地域は、北側に展開する六甲山系と南側の海岸部が接近しており、集落遺跡も山麓部の傾斜地に形成されることが多い。御藏遺跡の所在する長田区の沿海部は、大半を傾斜地で占められる神戸市域沿海部の中でも沖積平野の発達がよく、兵庫区の湊川流域から須磨区の妙法寺川流域にかけての地域にこの沖積平野がひろがっている。ここでは、この沖積平野に立地する弥生時代後期終末～古墳時代初頭の所謂庄内式併行期に属する集落遺跡を中心に、その動向などを検証してみたい。

弥生時代中期の集落形態を凡そ全国的に概観してみると、拠点集落とそれに付随する集落が存在し、母村と子村という集落関係をとっているのが一般的である。このような事象を同地域にあてはめた場合、弥生時代後期の1つ前の時代にあたる弥生時代中期後半（畿内第Ⅳ様式併行期）における拠点集落と考えられるのは、楠・荒田町遺跡と戎町遺跡であろう。



第146図 湊川～妙法寺川流域の古墳時代初頭の集落遺跡

	弥生後期後半	庄内 I	庄内 II	庄内 III	庄内 IV	庄内 V・布留 I	布留 II	布留 III
(湊川流域)								
楠・荒田町								
祇園								
兵庫松本								
(刈藻川流域)								
上沢								
長田神社境内								
長田南								
御船								
御藏								
神楽								
五番町								
三番町								
(妙法寺川流域)								
戎町								
大手町								
松野町								
若松町								
千歳町								
鷹取町								
大田町								

表13 湊川～妙法寺川流域の集落変遷

弥生時代後期の後半期に入ると、この沖積平野にも集落が増加する。楠・荒田町遺跡と戎町遺跡も継続的に集落は営まれるが、規模はかなり縮小し、拠点的要素は他集落に移行する。特に、楠・荒田町遺跡についてはほとんど消滅に近いぐらいの規模となる。神戸市域の兵庫区から須磨区にかけての沖積平野部というごく限定された地域ではあるが、以下、湊川、刈藻川、妙法寺川の各流域を基準にして、詳細な考察を加えてみたい。

まず流域ごとに見てみると湊川流域では、祇園遺跡、楠・荒田町遺跡、兵庫松本遺跡、⁽⁵⁾ 刈藻川流域では、上沢遺跡、⁽⁶⁾ 長田神社境内遺跡、長田南遺跡、⁽⁸⁾ 御藏遺跡、⁽⁹⁾ 御船遺跡、⁽¹⁰⁾ 神楽遺跡、⁽¹¹⁾ 妙法寺川流域では松野遺跡、⁽¹²⁾ 戎町遺跡、大田町遺跡、⁽¹³⁾ 千歳遺跡、⁽¹⁴⁾ 若松町遺跡、⁽¹⁵⁾ 鷹取町遺跡、⁽¹⁶⁾ 大手町遺跡などを挙げることができる。⁽¹⁷⁾ (第146図参照)

次に、時期別に概観してみる。時期区分については、摂津地域あるいは近接する河内地域の編年区分に基づいて設定した。同地域においては、弥生時代後期前半（畿内第V様式前半期）に属する集落が見あたらず、中期より継続する集落も一時的な断絶期にあたるようで、弥生時代後期～古墳時代前期を一つの大きな時代区分と考えた場合、後期後半がその初期にあたり、以下、後期後半を最初に布留Ⅲ期（布留式併行期中葉）にいたる8期に細区分して考察を進めてみたい。なお、集落遺跡の消長については、表13に示すとおりである。

後期後半において集落が形成される主要遺跡は、濁川流域では祇園遺跡、菟藻川流域では長田神社境内遺跡、妙法寺川流域では戎町遺跡、濁川と菟藻川のほぼ中間に位置する上沢遺跡で、主として庄内Ⅰ、Ⅱ期にかけて盛行する傾向にある。また、妙法寺川流域ではやや遅れて（庄内Ⅰ期頃）に大手町遺跡が出現し、Ⅱ期にかけて盛行する。その後、庄内Ⅲ、Ⅳ期あるいは布留Ⅰ期（庄内Ⅴ期）あたりで盛行する集落としては、濁川流域では兵庫松本遺跡、菟藻川流域では御藏遺跡、妙法寺川流域では戎町遺跡などが挙げられる。流域ごとの動向をみてみると、濁川流域では祇園遺跡→兵庫松本遺跡、菟藻川流域では長田神社境内遺跡→御藏遺跡といった形で、時期が下るにつれて主要度が移行するようであるが、妙法寺川流域では戎町遺跡や対岸の大手町遺跡が主導的立場にあるものの、千歳遺跡、若松町遺跡、大田町遺跡においても集落がやや増大するため、主要度がやや分散化する傾向にあるように解釈できる。また、上沢遺跡については、盛行が継続はするものの、やや縮小傾向にある。

布留Ⅰ期（庄内Ⅴ期）以降については様相が一変する。兵庫松本遺跡、御藏遺跡、上沢遺跡、大手町遺跡が布留Ⅱ期に入ると急激に集落規模が縮小し、尻町遺跡も集落は継続するが、規模はさらに縮小傾向にある。この湊川～妙法寺川流域地域においては、布留Ⅱ期以降に該当する集落は概ね縮小（減少）傾向にあり、後期後半から庄内期にかけての流域ごとの集落の推移がこの時期以降は追跡にくくなる。この時期に初現する集落は、刈藻

- 幼生中期に盛行する集落
 - 庄内Ⅰ・Ⅱに盛行する集落
 - 庄内Ⅲ・Ⅳに盛行する集落
 - 布留期に盛行する集落



第147図 湊川～妙法寺川流域の古墳時代前期の集落の動向

川流域の五番町遺跡が挙げられるが、明確な造構等も検出されていないため、検討の対象にはしにくいものの、隣接する三番町遺跡の出土遺物が布留Ⅲ期以降に該当することから、御蔵遺跡→五番町遺跡→三番町遺跡といった推移を想定できなくもない。しかし、如何せん資料不足は否めない。それに対して、妙法寺川流域では千歳遺跡、若松町遺跡、大田町遺跡において継続的に集落が営まれ、それぞれの規模はさほど大きくはないものの、布留Ⅱ期以降に該当する遺跡がこの区域に集中するのが特徴的であり、集落がほとんど消滅する湊川流域や、先述の状況のような刈藻川流域とは大きく異なる点である。

以上のような事象から概観すると、後期後半から庄内期にかけての時期に各流域において盛行がみられた集落が、布留Ⅱ期以降においては、妙法寺川流域においてわずかに集中する区域を有するが、この湊川～妙法寺川流域地域そのものが周辺他地域と比較して衰退傾向にあることが概ね確認できた。しかしながら、そういう動向を決定づける要素は、現在のところ抽出しにくく、また、未だ集落遺跡の中で調査を実施していない箇所も多いことから、ここでは第147図に示すような動向形態を消極的ながら思慮しておきたい。

第2節 御蔵遺跡出土の弥生時代後期～古墳時代前期の土器について

造構毎の資料　御蔵遺跡は平成12年度までに43次にわたって調査が実施されており、同時期に属する土器類の出土は多い。ここでは同時期の土器資料の整理を行う目的で、今回報告する資料と過去の調査資料を用いて、造構あるいは土器群出土の遺物を中心に概観を述べることとする。

まず、土器資料として主要と考えられる造構や土器群をピックアップして、その内容を概説し、特徴などを述べてみたい。

SX12302　　調査区南半部で確認した東西 3.55m以上、南北 2.2m以上、最大深さ0.25mの不整形の落ち込みで、埋土は暗乳色細緻砂質シルトである。

この造構から出土している遺物は、壺を中心であるが、壺・鉢・高杯・器台と器種がそろっている。壺の特徴としては、球形となる体部をもつものが含まれており、壺の口縁端部をつまみ上げる傾向が認められるなど新しい要素を含んでいる。この土器群の中でも土器(114)が最新しい時期を示す土器のひとつと考えられる。この土器群の時期的位置づけであるが、造構の性格からみて、一括資料とはいえ、ある程度時期幅を持つものと考えられ、おそらく庄内式期Ⅳから庄内式期Ⅴを中心とした土器群であると考えられる。

第5次調査　　この造構は、浅い包含層状の堆積土内に多量に土器が含まれていたものである。

土器群　　壺は、球形の体部を持つものが出土している他、壺は口縁端部をつまみ上げる傾向が強く、体部は丸みを帯びており、底部は丸底に近い小さな平底のものが大半を占める。小型器台の存在など全体的に新しい要素が認められ、時期としては、ややSX12302の土器群より後出するものである。

なお、この造構内出土の土器において、特徴のある土器について一部ふれておきたい。(70)は有段の高杯である。(18・19)は河内型庄内壺と考えられるものである。(47～51)の壺は、いわゆる攝磨型ないしは人和型庄内壺に属するとみられるものである。目視に

よる胎上観察からみて、在地産でない可能性も残されている。特に(47)は残存状況も良く、その特徴から庄内式期最終末から布留式期にかけてのものと考えられ、時期がある程度決定できるほか、周辺地域との時期の比定において鍵になるものと思われる。

- 第19次調査** 第19次調査の包含層内から多量の土器が出土している。この土器群は、小型丸底壺の出現など、新しい要素を含むものである。庄内式期最終末から布留式期にかけての土器様相を示しており、時期軸が考えられるが、全体的に古い要素を残しているものの庄内式期というよりは、ほぼ布留式期にはいる時期の土器群と考えられる。土器群としては、5次調査の土器溜出土の土器群に後出するものであろう。

なお、この土器群内には、いくつかの特徴のある土器が含まれている。(195、196)は二重口縁壺の口縁部で、(196)は加飾のないシンプルなタイプであるが、(195)は口縁部上位に円形浮文と2段の波状文が施される。この他、(189、190)は胎土に角閃石を含み、色調もチョコレート色を呈することから、河内型庄内窯と考えられる。この土器に関しては、ほぼ同地域からの搬入品と断定できるものである。

- 御蔵5丁目** この土器溜は、都市計画局の道路建設にともなう調査によって出土したもので、すでに報告されているものである。この土器群は、時期的には、庄内式期最終末～布留式期にかけての時期と考えられ、第19次調査遺物群と相前後する時期のものである。

この土器溜からは、様々な土器が出土している。直口壺が搬入品である可能性が高い他、「生駒西麓産」の特徴を持つ壺や、胎土から山陰方面からの搬入品とみられる2重口縁壺や鉢があり、壺などに他地域の影響の跡が伺えるなど、多方面との交流の跡が伺えるのである。

- 第21次調査** 第21次調査土器溜出土の土器群は、壺や壺の外側の調整がほとんどハケ目調整へと変化している。

この土器群において特徴的な部分を再度挙げれば、(232、238～244、245)のように胎土中に角閃石や雲母を含む、いわゆる「生駒西麓産」の河内系の窯が存在し、これらは(245)のように細かな右上がりタタキを外側調整に施す庄内式のものから、(238～242)のように、外側がハケ目調整で内面にヘラケズリを施し、口縁部が内溝し、口縁部と体部の接点にナデにより成形される布留式影響の庄内窯として捉えられる一群や、(232)のように布留式に含まれる特徴をもつものまでが存在する。

また、矢羽根状のタタキを持つ窯(231)も出土している。

- SX301** この遺構から出土した遺物はすでに報告されているものである。土器の特徴から、21次調査出土の土器群と時期的にはほぼ一致するものである。この遺構からは、混入と考えられるものの、「生駒西麓産」の窯や讃岐地域からの影響を受けたと思われる2重口縁壺等が出土している。

以上、庄内式期から布留式期にかけての御蔵遺跡出土の土器について概観した。御蔵跡では、弥生V様式の土器は出土するものの、その量は散在的で、まとめて出土するようになるのは、庄内式期以降である。その庄内期の土器の変遷については、傾向としては、SX12302→第5次調査土器溜→第19次調査遺物群→第21次調査遺物群の順に暫時変化といったようである。この土器の変化において、注目すべき点は、次の2点である。

まず第1点目は、全体としてV様式傾向の変が布留式期に入るまで数多くのことである。この傾向は、神戸（東部）グループとある程度共通しているとみられるが、この5様式傾向の変の土器様相が若干神戸（東部）グループと神戸（西部）グループでは違う可能性を指摘しておきたい。

第2点としては、今回の御藏遺跡の上器の特徴として、搬入土器が目につくことである。上器の量としてはさほどでもないが、多方面からの搬入や影響が認められるのである。SX12302自体の土器の量が少ないと認められることはないが、見通しとして述べるならば、御藏遺跡において他地域との交流というか土器の搬入や他地域の土器の影響が認められるのは、布留式期に入ってからの可能性が高いものと考えられるのである。少なくとも庄内式期V以降のことと考えられるのである。こういった傾向が神戸（西部）グループにおける特徴といえるのか、また、神戸（東部）グループとの傾向に差があるかとかについて今後の課題としておきたい。

注

- (1) 丸山 肇 1980『楠・荒田町遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 丸山 肇 1990『楠・荒田町遺跡Ⅲ』神戸市教育委員会
- (2) 山本雅和 1989『戎町遺跡第1次調査概報』神戸市教育委員会
- 山本雅和・阿部敬生 1992『戎町遺跡第4次調査』『戎町遺跡第5次調査』『平成元年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- (3) 前田佳久 2001『大阪湾北岸地域の弥生集落－神戸市域を中心にして－』『みずほ第35号』大和弥生文化の会
弥生時代後期～庄内併行期に湊川流域、刈藻川流域に新たにいくつかの集落が成立することが、指摘されている。
- (4) 西岡誠司 2002『祇園遺跡第8次調査』『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- (5) 松林宏美 2001『兵庫松本遺跡第1次調査』『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- (6) 阿部敬生 1995『上沢遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 舟木 嶽・三輪晃三 2000『上沢遺跡第8次調査』『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 池田 繁・井尻 格 2000『上沢遺跡第9次調査』『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- (7) 黒田恭正 1990『長田神社境内遺跡発掘調査概報』神戸市教育委員会
- 藤井太郎・丸杉俊一郎 2000『長田神社境内遺跡第10次調査』『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 山本雅和・中居さやか 2002『長田神社境内遺跡第13次調査』『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- (8) 池田 繁 2000『長田南遺跡第1次調査』『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 宮山直人 2002『長田南遺跡第3次調査』『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- (9) 安田 滋・宮山直人・石島三和 2001『御藏遺跡第4・6・14・32次発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- (10) 池田 繁 2000『御船遺跡第2次調査』『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 西岡誠司・藤井太郎 2001『御船遺跡第4次調査』『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- (11) 菅本宏明 1981『神楽遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 前田佳久・川上厚志 1994『神楽遺跡第7次調査』『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- (12) 千種 浩 1983『松野遺跡発掘調査概報』神戸市教育委員会
- (13) 藤井太郎 2001『大田町遺跡第12次調査』『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- (14) 山口英正 2000『千歳遺跡第1次調査』『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 関野 繁 2001『千歳遺跡第3次調査』『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会

- (15) 山田清朝 2000『若松町遺跡』神戸市教育委員会
口野博史 2001「若松町遺跡第2次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- (16) 大平 茂 1991『腐取町遺跡』兵庫県教育委員会
- (17) 山本雅和 1998「大手町遺跡第1次調査」『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
中谷 正 2002「大手町遺跡第5次調査」『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- (18) 森岡秀人・中井秀樹・濱野俊一 1996「庄内式併行土器の様相をめぐる揖津地域の動向」『庄内式土器研究XII』庄内式土器研究会
森岡秀人 1999「揖津における土器交流拠点の性格」『庄内式土器研究XXI』庄内式土器研究会
庄内式併行期の編年的考察を進める中で、古い順に、庄内Ⅰ以前、庄内式期Ⅰ、庄内式期Ⅱ、庄内式期Ⅲ、庄内式期Ⅳ、庄内式期Ⅴ（布留式期Ⅰ）、布留式期Ⅱの7期の時期設定を行っている。
- (19) 米田敏幸 1997「庄内式土器研究の課題と展望」『庄内式土器研究XIV』庄内式土器研究会
古墳時代前期の時期区分を古い順に、庄内式期Ⅰ～庄内式期Ⅴ、それに続く布留式併行期を布留式期Ⅰ～布留式期Ⅴとしており、庄内式期Ⅴと布留式期Ⅰを同時期に設定している。
- (20) 揖津地域と河内地域の土器編年における時期区分の整合性がやや不明確ではあるが、概ねの目安として、両者の区分に基づいて、古い順に、弥生後期後半、庄内Ⅰ、庄内Ⅱ、庄内Ⅲ、庄内Ⅳ、庄内Ⅴ（布留Ⅰ）、布留Ⅱ、布留Ⅲの8期を設定した。
- (21) 阿部敬生 2002「五番町遺跡第7次調査」『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- (22) 黒田恭正 1994「三番町遺跡第3次調査」『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会

第2節の引用参考文献

- 森岡秀人 1999「揖津における土器交流地点の性格」庄内式土器研究XXI 庄内式土器研究会
森岡秀人・中井秀樹・濱野俊一 1996「揖津地域」『庄内式土器研究XII』庄内式土器研究会
土器観察に関しては、財團法人大阪府文化財調査研究センター 市村慎太郎氏のご教示を得た。

図 版



調査地周辺の状況（平成10年撮影）東から



調査地周辺の状況（平成10年撮影）西から

図版2

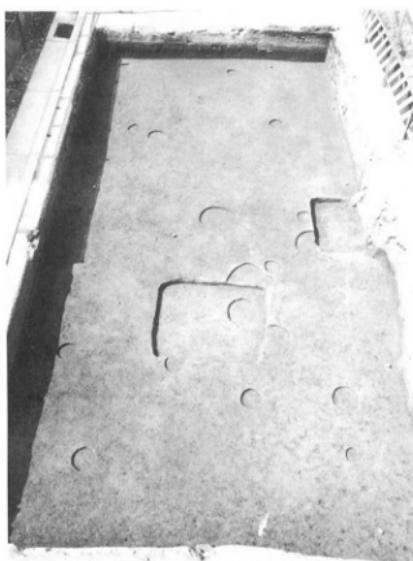
第5・7次調査



第5次調査区全景（南東から）



5905201・05202 全景（南から）



第7次調査区全景（南東から）